

幻想郷戦記ヴァルバ トーゼ

ととごん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひよんなことから幻想入りしたヴァルバトローゼがどうにか帰る手段を探して頑張る話。恋愛要素はありません。完結済み。

目次

第零話 Stage 0

消失 | 1

Phantasm | 14

第一話 化外の里

Stage 1 霧中の未知 | 24

Stage 2 滝下の昂揚 | 43

Stage 3 無為の光明 | 62

Stage 4 伽藍の弾幕 | 76

Stage 5 悪魔の帰郷 | 90

第二話 二つの世界の吸血鬼

Stage 1 突撃、隣の吸血鬼

115

Stage 2 フォーリンダウン

ファンタジア | 140

Stage 3 氷とイワシと約束と

164

Stage 4 虹彩華拳 | 182

Stage 5 紅い闇の底で | 204

第三話 歩み止まりて

Stage 1 プリニーぷりちー

227

Stage 2 チカラの秘密 | 243

Stage 3 トリプル・レッド

259

Stage 4 マジカルスターシーフ

383	Stage 2	真紅の幕は上がる	
	Stage 1	満月の夜に	371
	第五話	紅き深淵の最果てで	
	Stage 5	一つの閉幕	357
	Stage 4	異主共演	343
	Stage 3	古のさかしま	330
317	Stage 2	移ろいゆく事態	
	Stage 1	紅白と黒白	305
	第四話	初夏の宴	
	Stage 5	万覆の気配	291
			275

	Stage 3	騒々しい間奏曲	
	402		
	Stage 4	鮮血の上に立ちて	
	415		
	Stage 5	破壊と暴虐と	435
	Stage 6	恐怖を知ったその先に	
			446
	最終話	エンディング	
	最初の、最後の		461
	Extra		471

第零話 S t a g e 0

消失

黒雲渦巻く空。溶岩の海。荒廃した大地。

魔界。ここは人ではなく悪魔の世界。

幾層にも連なるこの世界の最下層には地獄がある。

その一角に、一人の男がいた。

周りには誰もいない。それは地獄という場所柄ゆえか、それとも――

「……………そつー！」

彼の放つ不機嫌そうな気配からか。

その感情は到底内心で処理しきれるものではないらしく、彼の両手は強く握られている。

悪態をついているのは銀髪の人狼族、フェンリツヒ。

彼は荒れている原因はその右手の中にある。

彼に八つ当たりされくしゃくしゃに歪んだ新聞が、それでも事実だけは歪ませずに示していた。

魔界政腐情報局発行『地獄新聞』。

その一面の見出しには、ある男の顔写真とでかでかとしたアオリが書かれていた。
『行方不明のヴァルバトーゼ、未だ見つからず』

——ことは、一週間前に遡る。

「プリニー心得そのー！」

「語尾には必ず『ツス』をつけることツス！」

一人の男が声を張り上げ、数多のペンギンのような存在がそれに応える。

一見奇妙な光景に思えるが、これこそがこの日常であった。

地獄のプリニー教習所。

罪を犯して地獄へ堕ちた人間の魂を加工した存在、すなわちプリニーたちを教育する場所なのだ。

指導している男はプリニー教育係である吸血鬼、ヴァルバトーゼ。

彼は黒衣をはためかせ、額の汗を拭いもせず、指導を続けていた。

そして数多くあるプリニー心得の復唱がミスなく終わったことを確認すると、少しだ

け表情をほころばせて口を開く。

「よろしい、完璧だ。だが気を抜くなよプリニーども。魔界へと出荷されるその日まで今まで以上に過酷な教育があるということを肝に銘じておけ！」

「はいッス！」

「では食事の時間だ。養殖モノのイワシではあるが食堂にたつぷり用意してある。余すことなく貪り食って来るがいい！」

「わーいッス！」

歓声があがり、プリニーたちの姿が食堂へと消えていく。

それを確認して小さく息をついたヴァルバトーゼの脇に、一つの影が現れた。

銀色の長髪が眼を惹く長身の男。

「閣下」

「フェンリツヒか」

彼こそがヴァルバトーゼ唯一にして絶対のシモベ、フェンリツヒ。

彼は懐から一尾のイワシ取り出し、ヴァルバトーゼへと差し出した。

「こちらを」

「流石はフェンリツヒ。気が利くな」

ヴァルバトーゼが受け取り、食べ始めたのをみてフェンリツヒはにやりと口元を歪め

る。

同時に齧り付いていたヴァルバトーゼの動きも止まった。

「こ、これは……！ この引き締まった身、されどしつかりとついている脂、そして新鮮な味わい——これは天然モノ、それも今日水揚げされたばかりのイワシかつ！」

「さすがは閣下、ご明察の通りです。喜んで頂けたようで何より」

喜色を浮かべて咀嚼を再開したヴァルバトーゼに、フェンリツヒは恭しく頭を下げ
る。

だが彼の思考は全く別のことに向けられていた。

勿論イワシを主に供給するのは重要な任である。だが今回は別の用件——それも特別重要なものが存在した。

「……ふう、美味であった」

ゆえに彼は、頭を残して綺麗に食べたヴァルバトーゼに一つの話を切り出した。

あたかも、世間話のように。

「——あれから一月、早いものですね」

「そうだな」

それはおよそ二ヶ月ほど前。

魔界政府は何の前触れも告知もなしに、プリニーの大量処分を行おうとしていた。

今と同じくプリニー教育係であったヴァルバトーゼは、教え子たちがそれに巻き込まれたことでその事実を知る。

道理の通らぬ魔界政府の横暴に、ヴァルバトーゼは真つ向から立ち向かった。

結果、道半ばで得た頼もしい仲間たちとともに魔界大統領をも打ち破ることに成功する。

だがそこで、彼は魔界が抱えていた重大な問題を知ることとなる。

人間どもの跳梁。供給される恐れエネルギーの減少。そして——裏で全てを繰る断罪者を名乗る人間の存在。

悪魔と人間全てを滅ぼすことが目的だという彼の執念と計画は、事実凄まじいものであった。

人造悪魔、月墜とし、そして惑星破壊プログラムである恐怖の大王の起動——誇張なしに世界レベルの危機と脅威がヴァルバトーゼたちを襲ったのである。

それでも彼らは膝を折ることなく、その全てを砕き抜いた。

しかし事の根源は断罪者によるものではなく、ゆえ彼らはそれを改善すべく日夜奮闘しているのである。

例えば——

「悪魔たちも少しずつ人間界で暗躍するようになってきたようです」

「ほう」

「なので徐々に恐れエネルギーの供給も回復していくでしょう」

減少した恐れエネルギーの回復。

恐れエネルギーとは悪魔のチカラの源である。その発生源は人間の恐怖。

しかし現代。人間界は著しい科学の発展を迎えた。

世界の仕組みが明るみになるにつれ、人は悪魔への恐怖を薄めていく。

それどころか——そんなものはない、と結論付けるようになっていったのだ。

結論から言えば否であるのだが、しかしその思想の蔓延は皮肉にも悪魔たちへ甚大な効力を発揮した。

さらにそこに付け込むように断罪者が現れ、ゆえにこそ魔界政腐は彼の傀儡政拳へと甘んじることとなったのだ。

「ですが、恐らく閣下には殆ど影響はでないかと思われます」

「ふむ？ 何故だ」

「理由は大きく二つあります。一つはあの戦いが人間界及び魔界に中継されたため、閣下のイメージが恐怖の存在というよりは英雄に近いものへとなってしまったこと」

断罪者による滅亡計画の一つ、月墜とし。

それを防ぐために天界のある天使長が協力してくれることとなったのだが、かの計画

を防ぐために必要なもの——畏れエネルギーと対をなす天使たちのチカラの源である、敬いエネルギーが不足していたのだ。

ヴァルバトーゼはそれをどうにかするため、悪魔でありながら神に祈ろうとするなど考えられる限りの手段を用いてどうにかしようと試みた。

結論から言えばそれ自体は失敗に終わったのだが、その光景は人間界及び魔界へと中継されていたのである。その結果、彼に魅せられた多くの存在が敬いエネルギーを発することで状況が打開されたのだ。

しかしそれによって『人間を恐怖によって戒める闇の使者』であったヴァルバトーゼのイメージが世界共通認識で崩壊することとなる。

そのため、現在のヴァルバトーゼは全くといっていいほど畏れエネルギーの影響をうけていない。

だがそれはもう一つの理由が前提として存在する。

「もう一つは、やはり以前のおチカラを失っているからでしょう。かつて人間たちの恐怖の象徴であった暴君の称号も、あのチカラと共に失われていますからね」

かつてヴァルバトーゼは魔界の中でも指折りの実力者であった。

血染めの恐怖王、鮮血の絶対悪、破壊と暴虐の帝王、そして暴君ヴァルバトーゼと呼ばれ恐れられた絶対者だったのである。

しかし四百年前、一人の人間と出会ったことによりヴァルバトーゼの運命が大きく変わることとなった。

その人間はヴァルバトーゼを恐れなかった。それどころかその人間はこう言った。

『人間の血を吸わないと生きられないなんて、可哀想ですわね。わたくしの血を吸うのでしたら、どうぞ。でも、これだけは約束して下さい。これを最後に他の人の血を吸わないで』

しかし自身を恐れていない人間から血を吸うなど己のプライドが許さない。

ヴァルバトーゼはそう答え、さらにこう付け加えた。

『キサマを恐怖のドン底に陥れてから血を吸ってやろうではないか』

『じゃあ約束です。わたくしを怖がらせるまで、誰の血も吸わないでくださいね？』

『よかろう！ 約束してやるとも！ キサマを恐怖に陥れるなど容易きことだからな！』

それはただの口約束。

だが誇り高き悪魔であるヴァルバトーゼにとって、例え口約束であろうとも一度交わした約束は破らないという誓いがあった。

しかし人間界は戦乱の世の中。その時代における人間の命は極めて軽い。

ゆえに自分が死なないように祈っていて下さいねという人間に対して、ヴァルバトー

ゼはもう一つの言葉を口にした。

キサマが恐怖に怯えるその日まで、死なぬように見張っておくと。

しかしそれから三日後、その人間はあろうことか人間同士の争いに巻き込まれて瀕死の重傷を負う。

遅れて駆けつけたヴァルバトーゼにその人間は自身は永くないとし、己の血を吸うように言った。

これをヴァルバトーゼは約束を果たしていないとして拒絶。

結局、その人間が息を引き取るまでヴァルバトーゼはその人間の血を吸うことはなかった。

そしてその日以来、今日に至るまでヴァルバトーゼは誰の血も吸ってはいない。約束ゆえに、彼は己が種族の業すらも押さえつけた。

だが血を吸わぬ吸血鬼はもはや吸血鬼にあらず。

ヴァルバトーゼは吸血鬼としての魔力を全て失い、魔界の最下層——地獄へと追いやられることとなったのである。

すなわち、今のヴァルバトーゼは悪魔としても、吸血鬼としても恐れられる存在ではない。

「だがまあよいではないか。恐れエネルギーに頼らないチカラがあったからこそ我らは

『恐怖の大王』をも叩き潰すことができたのであろう」

「それは……確かにそうかもしれないませんが、このまま恐れエネルギーの供給が回復してしまいますと閣下が相対的に弱くなってしまうです。再び閣下が歴史の表舞台へと上がった今を逃す理由はございません。今こそかつてのおチカラを取り戻すときかと」

「フ……ならば待て、フェンリツヒよ。アルティナが生きている今、奴を恐怖に怯えさせれば再び血を吸うことができるようになるう」

アルティナ——彼女こそ先程話に上った人間である。

ヴァルバトーゼは彼女が生きていると表現したが、厳密には事実と違う。

彼女は確かに死んだ。しかしその清らかな生き方と魂が天界で認められ、天使として登用されたのである。

しかし天界もまた、人間界における信心の現象によって敬いエネルギーの減少と財政難に苦しんでいた。

それを打破すべく、アルティナは魔界でお金を『徴収』することにする。

そこで奇縁にもヴァルバトーゼと再会し、共に先の事件へと立ち向かったのだ。

なれば今こそ約束を果たすとき、とヴァルバトーゼは語るのだが、フェンリツヒの表情は渋い。

なぜならその望みは薄いからだ。

かつて人間であつたころの彼女でさえヴァルバトーゼを怯えなかつたというのに、天使となり様々な経験を積んだ今ヴァルバトーゼを怯えるなどということは万に一つもないだろう。

というかヴァルバトーゼはどうにもアルティナに情を移しているように思える。フェンリツヒとしてはその情が愛情でないことを願うばかりなのだが。

しかし今の彼女ならばチカラを取り戻させることに同意し、怯える演技ぐらいはしてくれるかもしれない。だがそれでヴァルバトーゼを欺けるとは思えないし、納得もしないだろう。

だからといって約束を破らせるというのも現実的ではない。今までありとあらゆる危機においてヴァルバトーゼはそれを選択肢にも挙げなかつたのだから。

なのでフェンリツヒはその言に対して同意するだけにとどめた。

「……まあ閣下はその方針で頑張つて下さい」

「うむ。任せておけ」

ではどうやってヴァルバトーゼのチカラを取り戻させるか。

フェンリツヒには一つだけ腹案があつた。

「ところで一つ確認しておきたいのですが」

「何だ」

「血を吸う以外の方法で魔力を取り戻せる場合、それを拒否したりはしませんよね？」

「うむ。あくまで血を吸わないことが約束だからな。もちろん手段にもよるが——チカラを取り戻してしまうからといった理由で拒むことはない。約束しよう」

その言葉にフェンリツヒは笑みを浮かべる。

こう言ったからには己が主は違えない。だからこそフェンリツヒはヴァルバトーゼに仕えているのだから。

「ならば一つ、心当たりがあります」

「ほう？」

「まだもしかしたら、という程度なので実行に移せる段階になったらご報告いたします」

「なるほど。期待しているぞ、フェンリツヒよ」

「お任せください。全ては我が主のために」

ではその件で調べたいことがあるので、とそう言い残しフェンリツヒはその場から去る。

もし自分の考えが正しければ近いうちにあの凄まじいまでの力を取り戻した主君の姿が見れるだろうと思いつながら。

しかし調査を進め、フェンリツヒがヴァルバトーゼのところへ戻ってきたとき、ヴァルバトーゼの姿はどこにも見当たらなかった。

プリニーどもに聞いても誰一人としてヴァルバトーゼの居場所を知らず、最後に見たのは教育を終えて帰るときだと言う。

だが彼の館はもぬけの空で、翌日になつてもヴァルバトーゼは姿を見せない。

それから一週間。フェンリツヒはありとあらゆる手段と人脈を用いてヴァルバトーゼを探した。

天界、人間界、魔界——三界遍く全てを探したはずだというのに、しかしてその全てにおいて彼の存在その痕跡すら見つけることができず、こうして地獄の片隅で己の不甲斐なさに震える体たらくを晒している。

「閣下……貴方は今どこにおられるのですか」

悲痛なフェンリツヒの問いは、誰にも届くことなく儚く消えた。

Phantasm

暗くて深い夜の闇。

長くて高い石段の遥か上空で。

数多の閃光が交錯した。

「……………」

そこにあるのは二つの影。

片や紅白の巫女服に身を包んだ黒髪の少女——博麗霊夢。

彼女は八方より迫る敵の弾幕を器用にかわしながら敵手へと肉迫していく。

同時に指で挟んだ術符に霊力を流した。スperl宣言。

「『二重結界』ッ！」

顕現した結界は文字通り闇夜を切り裂いた。相手を縦横二つの霊力線が、正方形を描いて取り囲む。

それは空間すらも断絶する超常の力場。

傍目には隙間だらけに見えるそれは、絶対的ともいえる堅牢な檻。

だがこの結界の用途はそれだけではない。

霊夢は左手で印を組んで、結界へと干渉する。

「縛！」

徐々に結界を狭めて、相手の身動きすらも封じる一手。

この縛撃で一つ。さらに追撃のスペルで一つ。

一度結界に捕らえればほぼ確実に二機撃墜できる有用な攻撃。

それが、尋常な相手ならば。

「甘いわね」

「――！」

たしなめるような声は背後から。

反射的に前方へ加速し、振り返りながら追撃を確認する。

だが彼女は相手のいる方に注意を払いすぎた。だから、進行方向へ現れた裂け目に気

づけない。

「なっ――」

視界の暗転は一瞬。その刹那にてようやく霊夢は転移させられたことを把握した。

その場所はあるうことか自らの結界の中。己が霊力に縛られて、霊夢は動きを封じられた。

しかし己の結界であるならば解術はたやすい。

呼吸一つで自身の縛鎖を振り払い、だが間に合わなかった。

『二重黒死蝶』

霊夢を囲うように赤と青の妖弾が展開される。その数およそ百。

その僅かな隙間から覗いた敵手の口元が歪んだ。同時に、自身へと殺到する弾幕。

霊夢は咄嗟に全方位に結界を張った。弾幕との反発で起こった閃光が周囲を瞬かせる。

どうにか凌ぎきった霊夢。いや、耐えられるように調整されたのだろう。

何故ならこれは撃墜扱い。そしてもはや既に――

「これで四機目。もう後がないわよ、霊夢」

余裕を多分に孕んだ声。その主を霊夢は強く睨んだ。

ウエーブのかかった金の髪が夜風で揺れる。アメシストと見紛う瞳は冷たく霊夢を見下ろしていた。

霊夢は彼女を知っている。それどころか三指に入るほど、彼女の生涯で付き合いが長い。

――八雲紫。

博麗の巫女と幻想郷の管理者は、人知れず相對していた。

四季。一年を彩る春夏秋冬は、幻想郷においても例外ではない。

そしてこれらには実質的な区切りは存在しない。曆上は存在するが、年によつて気候の変化はまちまちなものだから。

だから三月を終え、四月を迎えても未だ冬のように寒い——なんてことも百年に一度はあるのだろう。しかしそれが五月に入つても吹き荒ぶ大雪が止まないとすればどうだろうか。しかも、桜の花びらが混じつた。

ここでようやく巫女は現状を異変と認識。身を竦めながらこたつから腰を上げた。

唯一の手がかりはどこからか流れてくる桜の花びら。彼女はそれを辿るにつれ、高い空の上へとたどり着く。

そのまま暖気のあるほうへと進み往くうちに、どうやら浮世の境も越えてしまったよううで、霊夢は冥界にある大きな屋敷へと辿りついた。

春を幻想郷から集めていたのは冥界の管理人、西行寺幽々子。ある桜を咲かせるために幻想郷中の春を集めていたのだと彼女は言う。

曰く——桜の下には何かが封じられているとのこと。私はそれを見てみたい。ああだからもう少し待つて。

そんな幽々子の主張を霊夢はばつさり切り捨てた。封じられているモノには相応の

理由がある。ならば不用意に目覚めさせるべからず。

こうして二者の対立が始まり、霊夢の勝利を以て幕を閉じた。

ここで事が終わればいつもの異変で済んだのだが、何やら一つ問題が発生したらしい。

それは雪解けが始まって、例年より遅い春を満喫し始めたときのこと。

何故か冥界の幽霊たちが、現世へと現れ始めたのだ。原因は至極明快。生者である博麗霊夢が幽明結界を行き来したことで、結界の効力が弱まってしまったのだ。

その異常を知った霊夢は幽々子に話し、しかし幽々子はすでに修復は頼んであると言った。

だが未だ幽霊たちは増える一方。道理が通らないと問い詰めれば、どうやらまだ冬眠から覚めていないみたいねと幽々子はのんきに答える。

そののんびりとした態度にイラついた霊夢は、自分が起こしに行ってくるからとそいつの名前と居場所を幽々子に要求した。

だが両方聞く必要はなかったのだ。なぜなら霊夢はそいつもそこも知っていて——一つ聞けば答えを得ることができたのだから。

そもそも幻想郷で『結界』と言ったら自分かあいつしかいない。

知っている相手ならやりやすいと判断した霊夢は、返す足でそいつの居場所へ駆けつ

けた。

主を守って立ち塞がる式神を叩きのめして、さっさと直せと屋敷へ乗り込む。

しかし冬眠から覚めたそいつは、あろうことか上から目線で霊夢に告げた。

『いい機会ね。本当に危機が迫ったとき、あなたに解決能力があるかどうかを見てあげましょう』

己に勝てなくば結界は直さないと——八雲紫はそう言ったのだ。

言いたいことはいくらでもあった。それとこれとは話が違うでしょうと。そもそも今まで寝ていたくせになんて態度よと。いや、そもそも全て霊夢は言ったのだが。

しかしあれよあれよと主張は跳ね除けられて、気づけば霊夢は渋々ながらも頷いていた。

五機制のスペルルール。挑戦は日に一度。

ならばと霊夢はその場で紫に挑みかかった。

その結果が——

「少し、がっかりね。貴方にはもうちよつと期待しているんだけど。これで終わりかしら。」

勝手なことを、と霊夢は内心で抗議する。

しかし二者の間には隔絶たる実力差が存在した。

スペルカードルールでは負け知らずの霊夢だったが、少しばかりルールが変わって程度でこのザマだ。

こちらのスペルは悉くないなされ、かわされ、相殺^{つぶ}されて、あちらのスペルはポンポンあたる。

無論紫の持つ固有^ス能力^{キマ}は極めて優秀だろう。先のように逃げ場を塞いだところで、断絶した空間すらも抜けてくるのだから。

それでも、それでもこの差はありえない。そも紫のスキマが決定的だったのは先の一^度だけ。それまでの三機は悉く実力差によるものだった。

それがスペルの差なのか、基礎能力の差なのか、はたまた別の何かなのかは霊夢にはわからない。

とにかく紫はスペルルールにおいて自分よりも確実に強い。その事実だけを霊夢は冷静に認めた。

息を一つ吐き、改めて紫を見る。

彼女は霊夢の出方を伺っているようで、どうやら自分から動くつもりはないようだ。

その余裕に甘えて霊夢は状況を確認する。

残機は一、向こうは五。その差に加えて神具もなければ札も足りない。

何せ霊夢は戦うつもりでここへ来たわけではないのだ。当然準備も怠っている。

これはダメね、と思わず鼻で笑つてしまふ。どうにもやる気がでてこない。さつさと帰つて寝たいわねと彼女は心中で呟いた。

この戦い自体が紫が自分の仕事のツケをダシにして始まつたようなものに加え、ぼこぼこにされるわ就寝時間もとくに過ぎたとあつてはモチベーションなど保てるはずもない。一度そんな思考に陥ればみるみるやる気が失せていく。

それは目に見えるほどだったのだらう。唐突に、紫が口を開いた。

さも今気づいたかのように視線を空に投げ、閉じた扇子を口元にあてて彼女は言う。

「そういえば、一つ言い忘れてたことがあつたわ。私ね、幽明結界のほかにも様々な結界の歪みを放置してるのよ」

それは博麗の巫女にとって聞き逃せる内容ではなかった。

「大結界の北東の方とか、地底との区切りとか、他にもたくさん。折角だし貴方が私に勝てればこれらも全部きっちり引きなおしましょう。だけど——」

しかもこれは嘘ではない。

霊夢を奮奮させるために、というのとは考えられるが彼女として結界術の専門家。言われて調べればすぐ分かるようなことを紫が言うわけない。

何より、こいつならありえる。などと、霊夢は思つてしまったのだから。

「私に勝てないようだ——いつどこでどんな異変が起こるか、私にも想像はつかない

わね」

紫は言い終えると同時に開いた扇子で口元を隠したが、霊夢にはそれがどんな形をしているか今までの付き合いでよくわかっていた。

笑っている。絶対笑っている。間違いない笑っている。

ああなんて性格の悪い女なのだろう。今更ながらに霊夢はそう思った。

「あんたねえ……。いっつもいっつも好き勝手やってくれて——」

思えばこの女にはいつも厄介ごと抱えさせられている。

己の短い人生において、面倒ごとこの女が関わってなかったことのほうが少ないのではないかと思えるほどに。

だがここで糾弾を続けても意味がない。その程度でやめるような女であればとうにやめている。

そう思った霊夢は愚痴るのをやめ、代わりに一つ啖呵を切った。

「……はっ、上っ等じゃない。その顔、歪めてあげるわよ」

とはいうものの霊夢の窮地は変わらず決定的である。

どう考えても長期戦は不可能。ならば——

「やれるものなら是非やってほしいわね」

その分かりやすい挑発を皮切りに、幻想郷の夜空を再び神秘の光が彩った。

一分。

それから、決着がつくまでの時間である。

だがその短い間に霊夢は紫の残機を一まで削り、そして――

『弾幕結界』

そこで終わった。

果てしなく近い最後の一手を、しかし致命的に届かせることができなかつた。

敗北の味をかみしめながら、霊夢は深い闇の底へと墜ちていく。

その狭間で、頭上から声が落ちる。

「貴方の敗因を教えてあげましょう。それはね――」

その上から目線の講釈を拒むように、霊夢は己の意識を闇に落とす。

第一話 化外の里

Stage 1 霧中の未知

「……………」は、どっだ？」

眼前に広がる光景に、ヴァルバトローゼは己が目を疑った。

何故なら頭上を青い空が覆っている。

のどかにも生い茂る草木が視界を埋める。おまけにそれに満ちた山の数々が辺りを囲んでいる。

辺りの空気は魔界の刺々しいそれではなく、まるで春の陽気を連想させる穏やかなものであった。

己が立っているのはそんな場所に相応しい、草原の一角。

そんなはずはないと、ヴァルバトローゼはかぶりを振った。数瞬前の記憶が正しければ、確かに己は自分の館へと転移したはずなのだから。

しかしあたりを見回しても、自分の館どころか建物一つ見当たらない———というかそもそも周囲の景色からして、ここが魔界などということはない。

ならばどこか、などと深く考えるまでもなく一つの場所が彼の頭に浮かぶ。

その結論に眉を顰めながら、ヴァルバトローゼは自分の推測を口にした。

「まさか、人間界だと？」

だがそれも疑問生じる。

仮に転移に失敗したと仮定しても短距離の転移のはずが界を跨いでしまったなどということはありえない。世界の垣根を越えるという行為はそう容易くはない。

そもそもここが人間界だとするにしても、納得のいかない点が存在する。

かの断罪者が起こした事件の際、ヴァルバトローゼは数百年ぶりに人間界に訪れた。しかしその人間界は既に発達した文明に侵されきっており、こんなのかな自然が残っている余地があったとは思えない。

もちろんヴァルバトローゼとて人間界の全てを見てきたわけではなく、事実存在するのだとすれば反論の余地はないのだが。

とにかく答えを断定するには情報が足りない。無意識に何かないかとヴァルバトローゼは周囲を見渡した。

「……何だ、アレは」

蝶やトンボのような翅を身につけているそれらは、しかし決して虫などではない。

その小さな体軀はまさしく、人の形を成していたのだから。

こんな存在をヴァルバトローゼは知らない。いや、心当たりが一つあった。

人間界では天界や魔界にいる存在が歪んだ形で伝説となることがある。

そのうちのひとつ、妖精。それこそまさしく虫の翅に人の体を持った手の平サイズの存在である、ヴァルバトーゼは聞いた覚えがあった。

しかし妖精はそういった伝承でも起源がしっかりと把握されていたはずである。すなわち妖花族がさらった人間を気まぐれで帰すときに見せる幻覚に含まれる存在——架空の生物であると。あるいはその話こそが間違っていたのかもしれないが。

ともあれ人の形をしている以上、遺志の疎通ができる可能性は高い。早速ヴァルバトーゼは近くを飛んでいたソレに近づいていく。

しかしどうやら気配に敏感なようで、ヴァルバトーゼが一步足を向けるとすぐに逃げてしまった。

気を取り直して別のソレへと近づいてみる。

またもや逃げられた。

強引に捕まえることも考えたが、弱いものイジメのようで気が乗らない。

仕方なく他に何かないかと彼は再び周囲を見渡し——そして、それは見つかる。

「……バカな」

彼の視界に映っているのは一つの山。

辺りの山でも一際高い、一見すればただそれだけの山。事実ただの人間が見ればそれ

だけに留まるだろう。

だが人ならざる目を持つヴァルバトーゼには、山全体を覆う歪みが見えていた。一見陽炎のように見えるそれだが、それが陽炎などではないことをヴァルバトーゼはよく知っている。

極めて似た現象をヴァルバトーゼは魔界の、邪竜の歪みと呼ばれる場所で見ることがあつたからだ。

そこは魔界でも最強の種族と謳われる竜の一族が住まう山。

彼ら竜の一族が日常的に発する魔力は多く、少しずつ周囲の空間へと沈殿していった。それがいつしか光を歪ませるほどの密度になったという。

それと同じくするというならば、あの歪みはまさしく魔力が生み出したものなのだろう。

だがその現象が起こるには、長い年月を必要とする。

いかに強大な存在であろうとも数十年。だが山を覆うほどとなると相応の集団が存在することになる。ならば数百年——あるいは千年以上の時間が必要に成るだろう。

そんな長期間悪魔の集団が住み続けている場所が人間界にあるとは到底考えれない。

つまりここは人間界ではない、ということになる。

いい加減己の理解を超えてきた事態に、さてどうするかと頭を悩ませた矢先、彼はあ

ることに気づいた。

「おお、そもそもここがどこであろうとさした問題ではなかったか」

想定外の事態に動転こそしたものの、別に帰れぬわけではないのだ。

どういふ経緯であったにせよ、転移でこの場所にきてしまったというのならば転移して帰ればいい。

ヴァルバトローゼの用いる転移術は、目的地さえわかれば魔力次第でどこへでも行けるのだから。

まさか往路と復路で距離が違うなどということはあるまい。残存魔力は半分を超えて余りある。よもや帰れぬということはないだろう。

その判断から数秒と経たぬうちに、ヴァルバトローゼは己が魔力を駆動させた。

超速で発動する転移は一秒すら必要せず、彼を故郷へと――

「バカな……！ 転移が失敗しただとツ！」

組み上げた術式が解ける手ごたえを感じながら、ヴァルバトローゼは叫んだ。

だが、この発動失敗の感覚に彼は覚えがある。

「まさか――境界か！」

それは遙か昔、暴君と呼ばれ強大な力を揮っていた時のこと。そのネームバリューから彼は数多くの悪魔から命を狙われていた。

加えて卑怯を美德とする価値観を持つ悪魔ゆえに、数に恃んだ襲撃というのも珍しくはない。ヴァルバトーゼがその結界を使われたのは、そんな襲撃の一つであった。

逃げられると思つたのだろう。十を超える術者が築いた空間隔離の結界は、売り言葉を買う形で試したヴァルバトーゼの離脱を確かに封じること成功していた。

この失敗の感覚は、その時のそれによく似ている。

しかし、そうと仮定するならば対処法が存在することを彼は知っている。

例えば結界を力づくで破ること。あるいは術者を潰すこと。

このあたりは結界に限らず多くの魔法に共通する弱点である。

だが前者を行うには多くの問題が存在した。そもそも結界の範囲、効力、強度全てがヴァルバトーゼの感覚では掴めない。そんな結界を弱体化している彼が突破できるとは到底思えない。

対して後者には一つ、しかし決定的な問題が存在した。術者の存在が全く感じられない。それでも結界を破るよりは可能性を感じるが、どちらにせよ現状においては不可能だろう。

他にも結界を壊すのではなく解術するでるか、あるいは巧妙な転移ですり抜けるといった方法もあるのだが、このどちらもヴァルバトーゼの得手とするものではない。

つまり今すぐ魔界へ帰ることは不可能である。

「ならば」

思索を打ち切り、ヴァルバトーゼはある方向へと足を向けた。

その先には、歪んだ景観の高き峰がある。

ヴァルバトーゼの結論はシンプルだった。己では対処できないならば、他者の力を借りればいい。それが知恵であれ、能力であれ。

そしてそれに適した場所こそが、彼が見据えた先なのだ。あの山には強い魔力を持つ存在があることはほぼ間違いない。高魔力の存在は往々にして高い知能を持つことが多く、それが集団で存在するということはますますその可能性が高い。

何より己が頭脳労働など柄ではない。そう苦笑しながら、彼は歩を進め始めた。

十分ほど歩いただろうか。

山の麓が見えた頃、周囲を薄い霧が覆い始めた。

とはいえ障害となるほどではなく、先と変わらぬペースでヴァルバトーゼは足を動かして続ける。

そんな中、ふと視界の端で何か揺らめいた。

「むっ? ……湖か」

位置関係から見て、目的の山が水源である可能性が高い。

そちらを辿るべきかと、一步湖へ近づいた——その時であった。

「ちよーつとまったつ！」

高い制止の声か、霧を切り裂いてヴァルバトーゼに届く。

声の先を辿るように顔を上げれば、そこには一人の童女がいた。人間の基準で言うならば十にも満たない、といったところだろう。

強気な笑みを浮かべる彼女は、しかし冷たい氷をヴァルバトーゼに連想させた。

水色の髪、青いリボン、青い瞳、さらには青のワンピースと、寒色だらけ見た目からだろうか。

違う。その程度のモノから抱く印象にしては、イメージが明確すぎた。それにもっと決定的なそれが、ヴァルバトーゼの瞳に映っている。

それは少女の背より伺う六枚の羽。それは先に見た妖精たちのそれとは違い、まるで氷細工のようであった。

それにそもそも最初から分かっていたことではあるが、彼女は湖上に浮いている。

おまけに彼女が現れてから、周囲の気温が一気に低下した。人間界の春を思わせるそれが、まるで真冬の夜になったように。

ここまで異常な要素が揃っているのだ。目の前の少女がただの人間であるということはよもやあるまい。

「何か用か」

「アంతタ、見ない顔ね」

「うむ。……おお」

ぼん、と手の平を拳でたたく。

気づいたのだ。彼女こそヴァルバトーゼが求めていた意思疎通の図れる相手であると。

欲を言えばもう少し期待のできそうな印象を抱かせて欲しかったが、そう言える状況でもない。

そもそも、彼女が非常に博識であるという可能性も残っている。

「実のところここに来たばかりでな。ここがどういふ場所か教えて欲しいのだが」

「へー、そーなんだ。えーつとね——あー!」

存外友好的な態度にすんなり話が進むかと思つたが、ふと何かに気づいたかのように少女は顔を上げた。

彼女はごそごそと懐を漁り始めると、何枚かカードのようなものを取り出して構える。

「最初に一つ、このルールを教えてあげるわ!」

「ほう?」

「——欲しがりましたよう勝つまでね、よ！ 勝負だつ！ あたいに勝つたら何でも答えてやろーじやないの！」

その答えはヴァルバトーゼが望むものではなかったが、しかし興味深いものであった。

力で白黒つけるといふ考え方は、彼にとつて馴染が深くそして好ましい。

「ただーし！ あたいが勝つたらしばらくアンタはあたいの舎弟よ！」

「よかろう！ 受けてたつてやろうではないか！」

ヴァルバトーゼの快諾に、少女は笑みを深くする。自信の表れだ。

例えそれが過信だとしても、ヴァルバトーゼはそういう手合いが好きだった。

自然とこちらにも笑みが浮かぶ。

「よーし！ 負けてから謝つたつて許さないんだからね！」

「当然だ。約束は守ろう」

「じゃあ、この結晶が落ちたらスタートね。準備はいい？」

少女が胸の前で人差し指を立てると、その先に拳大の氷の結晶が模られていく。

それを見たヴァルバトーゼは小さく頷いた。

「じゃあいくよー！」

少女は大きく空に向けて腕を振ると、結晶が高く空へと孤を描く。

そして彼女はヴァルバトーゼを不敵に見据えると、高らかと名乗りを上げた。

「あたいはチルノ！ 泣く子も凍る妖精さ！ 覚悟はいいか！」

「我が名はヴァルバトーゼ、魔界のプリニー教育係だ！ 俺を敵に回したこと、後悔させてやろうではないかッ！」

直後、地面で結晶が砕けた。

まるで口上が終わるのを待っていたかのように。

「先手必勝！」

弾かれたようにチルノが動く。

右手にカードを一枚掲げて叫んだ。

「『ダイヤモンドブリザード』！」

宣言に応じるようにカードが凍り付いて破碎する。

変化はそれだけではなく、彼女の六枚羽を起点に六つの氷柱が放たれる。

しかしそれらの軌道はてんでためであり、ヴァルバトーゼを掠めることもしないだろう。

ならば狙うは隙だらけのチルノだろうと、ヴァルバトーゼは駆け出して、

「なめたな！」

「何だと？」

チルノの言葉に遅れて、全ての氷柱が小気味いい音を立てて砕け散った。

その意味をヴァルバトーゼが理解するよりも早く、答えが彼の視界を埋める。

多くのつぶてに分かれた氷弾は、今度こそヴァルバトーゼをその軌跡に捉えた。

とはいえそれでも隙間は多い。全ての氷の軌道を読みきったヴァルバトーゼは、右前方へと踏み出した。

「あまいー！」

しかしチルノの仕掛けはその上をいく。

彼女が一つ腕を振ると、全てのつぶてが破碎したのだ。

「——む」

無数に煌く氷の粒子をみて、ついぞヴァルバトーゼはダメージを覚悟した。彼は回避を諦めると、両腕で顔と胸を庇う。そして大地を踏み抜いて、あえてさらに速度を上げた。

直後に幾多の衝撃がヴァルバトーゼを襲う。同時に、強烈な違和感もまた彼を襲った。

「よーしー！ まず一機！」

だが今はそんな場合ではない。無邪気に喜んで隙を晒したチルノを視界に収め、ヴァルバトーゼは思考を断ち切った。

だが無邪気に喜び、隙を晒したチルノを見てヴァルバトーゼは違和感を振り払い意識を前方に集中する。

加速した勢いを殺さずに湖の岸を踏み切って、ヴァルバトーゼはチルノへと飛び掛った。

「えっ、あっ」

チルノが動揺した一息で懐まで飛び込むと、まるで地面があるかのように空中を踏み抜いた。

慌てて新たなカードを構えるチルノの右腕を掴み、湖岸へと投げ飛ばす。

それを追うようにヴァルバトーゼは空を蹴った。

「あうっ！」

背中から地面に叩きつけられたチルノは小さく呻き声を上げる。

迫るヴァルバトーゼは己が剣を右手に顕現。銀の刃がチルノの頭上に鈍く閃く。

恐怖に目を瞑るチルノに構わず、ヴァルバトーゼは手中のそれを振り下ろした。乾いた音が両者の耳を叩く。

「……………」

恐る恐る目を開けるチルノ。その体には切り傷一つ存在しない。ヴァルバトーゼの剣はチルノの顔、その右側の土を抉っていた。

「続けるか？」

冷たくヴァルバトーゼが問う。

しかしチルノの返答はない。いや、できないのだろう。

見れば瞳を潤わせ、目尻に雫を溜め、口からはくぐもった声が漏れている。有り体に言えば、今にも泣き出しそうであった。

そんな彼女を見たヴァルバトーゼは、剣を消して威圧を解く。

するとチルノはその場から飛び退き、ヴァルバトーゼに指を突きつけた。

「ずるいっー」

涙声の批判。まるでルールを破ったかのようにチルノはヴァルバトーゼを糾弾した。

しかしヴァルバトーゼには己の何が悪かったのか全くぴんとこない。

まさか武器を使ったことだろうかと思つたが、それは違ふと直感が告げている。

ならば何かと思考に意識を静めていき——ふと思ひ出す。先程の違和感を。

すぐに己の身体に意識を移したヴァルバトーゼは、ようやく答えを得る。

痛みの有無。それこそがヴァルバトーゼの抱いていた違和感の正体だった。

先の一撃は鋭利な無数の氷のつぶてであり、ならばヴァルバトーゼには無数の裂傷が

できていて然りのはずである。

今の彼の身体は脆い。例えばあれが微塵も魔力を含まぬただの水だとしてもあの速度でぶつかれば服や身体が傷ついていなければならない。

だというのに先程彼を襲ったのはあくまで被弾したという衝撃だけであった。

ならばもしやと、ヴァルバトーゼは己の推測をチルノに問う。

「まさか、これは実力勝負ではなかったのか？」

「弾幕ごっこだよ！ あとなんか別の呼び方もあつた気がしたけど……アンタほんとに知らないの!? じょーしきだぞ！」

ヴァルバトーゼがとぼけているように見えたのだろう。チルノは眉を上げて声を張り上げる。

しかし当然彼はとぼけているわけではない。

「俺はさつきここへ来たばかりだといったはずだ。ここの常識など知らぬ」

「あ」

そういえば、と言わんばかりにチルノは非難の声を止めた。

しかし感情が納得させないのだろう。頬を膨らませてヴァルバトーゼを睨んでいる。

そんなチルノの態度をみてヴァルバトーゼは苦笑した。

経緯はどうであれ、郷に入りていたのはヴァルバトーゼである。ならばこちらのルー

ルに則って戦うのは道理。

まあそのすり合わせができていなかったのが原因なのだが、明らかな年長者であるヴァルバトーゼがそれを行うべきだったのだろう。

少なくともチルノが一方的に悪い、ということはない。相応の非はヴァルバトーゼにもあった。

「……まあ、勝負のルールぐらいは確認すべきだったか。すまぬな」

「そーだそーだ！」

「というわけでだ。俺としては今の勝敗はなかったことにしても構わぬし、お前の言う弾幕ごっこことやらで再戦することも吝かではないのだが……ルールがさっぱりわからぬ」

「ええと、たしか……ちよ、ちよつと待って！」

そう言っただけでもないこーでもない頭を捻るチルノ。

一分以上うんうんと悩んだ彼女は、清しいほどにすっぱりと言い放った。

「カードの必殺技をあてて先に相手を落とすきつたほうの勝ち！ どうだ、わかったか

！」

「いや……」

「むー」

正確には情報が少なすぎる。

そのカードとやらは何なのか、落とすきるとはどういうことなのか、突っ込もうと思えばできるところはいくらでもあった。

しかしチルノにそれに対する答えを求めるのは明らかに酷な気がしたので、ヴァルバトーゼはわからないと答えるにとどめたのだが。

そのうち頭から煙を出しそうな勢いで悩んでいるチルノを見て、ヴァルバトーゼは一つ提案を告げた。

「……その弾幕ごつことやらはここでは常識なのだろう？」

「? そうだよ」

「ならば俺が誰か適当な相手にルールを聞いてくればいい。再戦はそれからにすればよかろう」

すぐに承諾の返事がくるかと思ったが、しかしチルノは表情を曇らせた。

そして意外なことを彼女は聞き返してきたのだ。

「でもアンタ、なんか聞きたいことがあって勝負にのってきたんでしょ? じゃあそのときとーな誰かにそれも聞いちゃえば別にあたいと勝負しなোস必要なんでないじゃん」

「ふむ、確かにそうだな。だがこんな形で終わりというのはお前も納得ゆかぬだろう?」

さらに問い返されたチルノは、小さく頷いた。

「……うん。白黒つけたい」

「——では約束しよう。俺は必ずその弾幕ごつこのルールを誰かに聞き、再びお前と勝負をするためにここへ来ると」

「……ほんと?」

まるでその言葉は想像もしてなかったと、チルノは目をぱちくりさせてヴァルバトーゼを見上げている。

だからヴァルバトーゼは泰然と頷いてみせた。

「当然だ」

「ほんとにほんと?」

「俺は約束を破りはしない。絶対に、だ」

その言葉にようやくチルノは安心したのか、ぱあつと表情を輝かせた。

「じゃあ出血大サーブス! ひとつ、このチルノ様が何でも質問に答えてあげる!」

何でも聞きなさい、というようにチルノは大きく胸を張った。

ヴァルバトーゼが抱える疑問はいくらでもあつた。しかし確信めいた直感が、これを尋ねろと強く告げる。

だから彼はそれに従って、一つの問いをチルノに投げた。

「では一つ尋ねよう。ここはどこだ？」

それはチルノにとつても回答が容易な質問だったのだろう。
強気な笑顔を浮かべて、自信満々に彼女は答えた。

「ここは——幻想郷さ！」

Stage 2 滝下の昂揚

陽を隠すほどの木々の重なりが、風を受けて乾いた音を鳴らしている。その最中で大きな溪流が絶えず飛沫を散らしていた。

その脇を一つの影が進む。落ち葉を踏み分けながら軽快な足取りで歩みを続けるヴァルバトーゼ。

彼は今、目当ての山を登っていた。

「しかし、妖怪の山というわりには拍子抜けの場所だな」

凄まじい魔力が覆うこの山は、妖怪の山と呼ばれているらしい。

何故それをヴァルバトーゼが知っているのかは、少々時を遡る必要がある。

それはチルノから幻想郷という地名（あるいは世界の名前）を聞いた後のこと。

別れの挨拶を告げたヴァルバトーゼに、チルノはどこへ行くのかと問いかけた。ヴァルバトーゼが目の前前の山を指差すと、チルノが妖怪の山と呟いたのだ。

ヴァルバトーゼが「それは知らなかったな、良いことを聞いた」と笑うと、慌ててチルノは口元を押さえて前言を撤回したのだ。

ともあれこれまでの情報を統合すれば、この山には高い魔力を持った妖怪が生息して

いるのだろうかとは容易に分かる。

だからヴァルバトーゼはさぞ凄まじい魑魅魍魎が跋扈しているのだろうと期待していた。

だが予想に反して変わったことなど見受けられる妖精の数が若干増した程度で、それ以外には何の存在も見つからない。

「む。……ほう」

麓の湖から水源を辿るように登山していたヴァルバトーゼだが、眼前にそびえた大きな障害に足を止める。

それはまさしく大瀑布と呼ぶべきモノだった。

高空から落ちる水流が常に轟音を撒き散らし、叩きつけられて飛散した水がヴァルバトーゼの頬を叩く。

その壮大な光景に、思わずヴァルバトーゼは感嘆の息を零した。彼の記憶にもここまでの滝は存在しない。

しばし自然の極致に目を奪われたヴァルバトーゼだが、本来の目的を思い出し周囲を見渡す。

いつの間にか森を抜けていたようで、滝つぼの周りは開けた空間になっていた。近くに迂回できそうな道は見つからない。

ならばとヴァルバトーゼは大きく息を吐いた。両足に力を込めて、解放する。その寸前のこと。

「そこで止まりなさい」

声の出所はヴァルバトーゼの頭上から。

見上げた先には一つの影がある。しかし逆光でそれ以上はわからない。

しかしどうやら相手はその場で話を続けるつもりはないらしく、ゆつくりと下降していく。地面に降り立つと、黒いスカートがなびいた。

ようやく姿を確認できたヴァルバトーゼの心境は、安堵と落胆が半々といったところだろう。

安堵の意味は単純で、話が通じそうな相手ゆえに。有り体に言えばただの悪魔にしか見えなかったのだ。

服装が陰陽術師と意匠が近く、容姿は殆ど人間そのもの。しかし両手に持つ剣と盾がただの人間であることを否定している。そして小さな赤い帽子の下、白い髪の中から小さく覗く獣耳は人ですらないと主張していた。

見た目から伺える年はヴァルバトーゼの仲間であるフーカと同じ程度。彼女の言葉を借りて評するならば中学生ぐらいといったところだろう。とはいえ相手がヴァルバトーゼと同じような存在ならば見た目から推測できる年齢など何の基準にもならない

のだが。

何にせよ、彼女こそこの山に住む妖怪とやらなのだろう。

そしてだからこそヴァルバトーゼは落胆の念も抱いた。妖怪などとカテゴライズされていくからには、言葉では表現できない凄まじさを彼は期待していたのだ。

そんな彼の心境を無視して、目の前に立つ少女は淡々と言葉を連ねていく。

「私はこの山の哨戒を勤めている犬走権と申します。ここから先は許可なく通すことはできません。まずは貴方の素性を。そしてこの山に住む誰かの友人あるいは知人であり、用があるというのでしたらその方の名前を述べて下さい」

突きつけられる剣は、彼女の警戒を表しているのだろう。通らば斬る、といわんばかりの勢いである。

まさしくヴァルバトーゼは招かれざる客といったところだろうか。

だが彼の目的は登山そのものではなく、無理して通る理由はなかった。

何故ならば、この段階で半ば達せられたようなものだから。

「俺の名はヴァルバトーゼ。この場所へ訪れたのは今日が初めてだ。顔見知りすらいはしまい」

「ではどういったご用件でこの山へ来たのですか？」

「それを一口に説明するのは少々難儀だな。俺の状況を把握して貰う必要があるゆえい

ささか長くなるのだが、構わぬか」

「……まあ、いいでしょう」

不承不承、といった様子で剣を下げた椛に対しヴァルバトーゼは事情を語る。

気づけば幻想郷にいたこと。何らかの結界によつて帰還が阻まれていること。手がかりを求めてこの山へきたこと。

それらを話して一度言葉を区切つたヴァルバトーゼだが、もう一つ聞かねばならないことを思い出して付け加える。

「それともう一つ、弾幕ごつことやらのルールが知りたい」

「……はあ。何でまたそんなことを」

「大したことではない。ある相手にそのルールで勝負をすると約束したのでな」

疑問を呈する椛に、ヴァルバトーゼはありのままの理由を答えた。

しばらく眉根を寄せていた椛だが、追求を諦めたのだろう、表情を切り替えると話を戻す。

「まあ、事情はわかりました。私では貴方の疑問に答えられるか怪しいですが、幻想郷の事情に詳しい方を知っています」

「ほう」

「特に悪意がありそうな要求でもないですし、紹介して差し上げても構いません。です

が個人的な事情により、その方に話を通すことをしたくありません」

そう述べる椀の表情は険しい。体のいい断り文句というわけではなさそうだ。

だが彼女の事情がどうであれ、ヴァルバトーゼもまた容易く身を引ける状況ではない。

どうにか紹介してもらおう術はないかと頭を悩ませていると、椀は表情を崩して口を開く。

「そこで一つ提案があります。私と一戦交えませんか？」

「……何？」

思わぬ提案、それも予想外の内容に疑問の言葉が口から零れる。

「……………」、幻想郷は非常に平和です。ある種の理想郷といってもいいでしょう」

唐突に関係のない話を始めた椀にヴァルバトーゼは眉をひそめた。

だが彼女はそんなヴァルバトーゼの様子に意を介した様子はなく、朗々と話を続ける。

「私もこうして武器を持ち、哨戒係を務めてはいるものの実際にその任務を果たしたことなくありません。来る日も来る日も哨戒と鍛錬を繰り返して、たまに何かあったとしても迷い込んだ人間を送り返すぐらいのことしかないものでして。ようするに退屈なんです、ここは。悪いことだとは思いませんけれど。まあ若干話がそれてしまいました

が、つまりは私の暇つぶしに付き合つて欲しいということです。その上で私に勝つたのなら、例の方に話を通しましょう」

「成る程」

つまりは交換条件というわけだ。

悪くない。一方的に施しを受けるよりはそちらの方が余程ヴァルバトーゼの性に合う話だ。

何より幻想郷の妖怪とやらの実力、大いに興味がある。

「いいだろう。その話、のろうではないか！」

「ではルールの方ですが——貴方は『スペルカードルール』、なんて知りませんよね？」

「うむ。聞いたこともない」

「まあ弾幕ごっこを知らないのであれば当然でしたか。ではどちらかが気絶、あるいは降参した場合に決着とします。——おっと、貴方が負けた場合の話をお忘れてしまいましたね。そのときは素直に下山していただくということでしょうか」

「それで構わぬ」

では、と棍が構えた。片刃の西洋剣は前に、紅葉をあしらった円盾を後ろに。

その構えにヴァルバトーゼは疑念を浮かべる。盾を持ち、前に出さない相手は彼の数多い戦歴においても珍しい。

しかし考えたところで答えが見つかるわけもなく、思考を打ち切り剣を抜いた。右手で持ち、剣先を下げる。

椀の表情もまた、訝しげに歪む。おそらくは虚空から剣を取り出したさまを見てだろう。

「覚悟はいいですか？」

「好きなタイミングで来るがいい」

「――では遠慮なく」

その声よりも早く、ヴァルバトーゼの頭上で銀が煌いた。

「――ッ！」

響いたのは金属音。

かろうじてヴァルバトーゼの反応が追いついた。どうにか剣を合わせられたのだ。両者の剣が大きく後ろに弾けるが、大きく体勢を崩したのは椀だった。

道理で考えるならば紙一重の対応をしたヴァルバトーゼが崩れてしかるべきだが、二つの要因がそれを覆している。

一つは椀のそれは速さを重視した一閃であり、鋭くはあったが同時に軽かったこと。

もう一つは彼女の攻撃が空中からのものであったことだ。大地を支えにしたヴァルバトーゼと違い、椀の支えは大気しか存在しなかった。その差は歴然。

ゆえに必然であつたこの結果を見逃さず、一瞬早く持ち直したヴァルバトローゼはさすが踏み込み剣を薙ぐ。しかしその軌跡は突如現れた円盾に阻まれた。甲高い音が周囲に弾ける。

しかしこの交錯もまた、二者の差は明白であつた。しかと踏み込み振り抜いたヴァルバトローゼの剣に対し、差し出しただけの楯の盾はあまりにも頼りない。ヴァルバトローゼがさらに力を込めると、拮抗は呆気なく終わつた。楯が大きく吹き飛ばされる。

「……む」

すかさず追い討ちを、と判断したヴァルバトローゼだがその足はその場から動かない。彼を阻んだのは一つの疑念だつた。

その予感は正しかった。弾丸のように後方へ飛んでいた楯が、突如慣性を無視して空中で静止する。ダメージを受けている様子はない。しかし彼女は少し驚いたように目を開いていた。

「てつきり追撃が来ると思つたのですが」

「手応えが軽過ぎる。自分から後ろに飛んで衝撃を殺したのだろう」

つまりはそういうこと。どうやら楯は自在に空中で姿勢を制御できるらしい。

いや、それだけではない。あの状況から後ろに飛んだということは自在に加速もできるということだ。

「……どうやら、少し貴方のことを舐めていたようです」

「それはお互い様だな」

正直なところ、ヴァルバトーゼも椀を舐めていた。

チカラを失って以来極力そういったことは控えていたはずのだが、チルノの一件が尾を引いていたのと——この場所の雰囲気だろう。魔界に比べてあまりにものどかなこの幻想郷とやらは、いささかヴァルバトーゼから緊張感を奪っていたらしい。

山に渦巻く魔力を見ておきながらなんて愚かだと、ヴァルバトーゼは気を引き締めた。左足を引き、剣を構え直す。

再び迫り来る椀。変わらずどころかさらに速度を増した彼女は、刹那の間に間合いを詰める。

だが意識を切り替えたヴァルバトーゼの目は、しかとその姿を捉える。完璧なタイミングで剣を合わせた。両者の間で火花が散る。

ならばその一合を制するのはやはりヴァルバトーゼ。大きくぐらいついた椀目掛けて剣を右から薙ぐ。やはり盾を合わせてくるが、力で押せぬ道理はないと構わず彼は振りぬいた。

しかし焼き直しのような情景はそこで終わる。

「ふっー」

激突の瞬間、椀が前方へと加速。軌道修正をする間も与えられず、劍の根元を盾で受けられた。

斬撃とは即ち『線』の攻撃である。そして効率よく威力を乗せるために、その軌跡の殆どは孤を描く。ならば必然その威力は、大きく孤を描く得物の先端に迫るほど増していく。言い換えればいかに十二分の威力を秘めた劍閃といえど、根元で受けられてはさした威力を発揮できない。例えば、今のよう。

結果、二人の武器は拮抗した。しかし彼らには明確な違いが存在する。

ヴァルバトローゼは劍を止められ、その左手には何も無い。

しかし椀は盾で受け止めただけであり、その右手には――

「くっ……」

苦悶の声はヴァルバトローゼ。その左肩には切り裂かれたような傷があった。

血の雫を散らしながらヴァルバトローゼは背後へと振り返る。彼を斬り抜けていった椀は、宙に浮かんで動かない。それは余裕からか警戒からか。何にせよ追撃を行うつもりはないらしい。

油断なく椀を見据えながら、ヴァルバトローゼは表情を苦く歪めた。

傷は浅い。著しく劣化しているヴァルバトローゼの再生力でも、数分もあれば治癒するだろう。ゆえに問題はそこではない。

彼が苦慮しているのは、椀の飛行能力だった。あのような飛び方をする相手と戦った経験は、彼においても存在していないのだ。

確かに魔界においても空を飛ぶ悪魔は多くいる。しかしそれは翼を用いた——いわゆる物理法則にのっとったものではない。

もちろん魔法や魔力を用いて空中機動を可能にする手段は存在する。例えば麓の湖で用いたのもその一つだ。足裏で魔力を固めて足場にすれば空中を跳びまわるというもの。

だが所詮直線移動しかできないそれで空中戦を挑むには、明らかに不足している。

ならば、と——そんな思慮に耽るヴァルバトーゼに椀はため息を一つ吐いた。

「どうしました？ そちらからは攻めてこないのですか？ まさか——怖氣ついたわけじゃありませんよね？」

「……安い挑発だな。だが、乗ってやろうッ！」

手の内を一つ見せる事を決めて、椀へと駆け出す。愚直に見えるほどの直進。対する椀は半身を入れ替え盾を前へと押し出した。

構わず突撃の勢いを乗せて地面を強く踏み切ったヴァルバトーゼは、矢を引き絞るように腰を捻る。そして椀の目前へと迫ったその瞬間、溜めたエネルギーを全て剣先に乗せて突き出した。

冷たく笑みを浮かべてそれを見た楯は、刺突の軌道を撫でるように盾を合わせた。すりと、まるで舐めるようにヴァルバトローゼの剣は盾の表面を滑り進む。

その最中、小さく楯は盾を押しした。正面への大きなベクトルを横にずらされたヴァルバトローゼは、それだけで隙だらけの脇を楯に晒す。致命的な隙。

それを迎えるように楯は剣を横へ薙いだ。二人の影が交差した瞬間、ヴァルバトローゼは薄く笑ったことにも気づかず。

「な——」

狼狽する声を楯が漏らす。目の前でヴァルバトローゼの姿が消えたともなれば当然のことだろうが。

その彼は楯の背後、その上方にいた。圧倒的有利な位置を確保した彼は、そのまま剣を振り下ろす。

だがその位置こそが仇となった。彼の体は陽の光を遮って、楯に大きな影を落としていた。それこそが、楯の反応を間に合わせた。

落ちるように下方へと加速した楯は、くると体を回転させると剣と己の間に盾を差し込む。

驚異的な反応といえよう。しかし今度こそ衝撃を殺すことは叶わなかった。

「が、っ……っ……！」

背中から地面へと叩きつけられた棍は、苦悶の声を零す。

跳ねたその体に容赦なく迫ったヴァルバトーゼが二の太刀を落とした。しかし紙一重で剣閃を避けるように棍は加速する。

そのままどうにか持ち直した棍は、大きく咳き込んだ。

「大したものだな」

ヴァルバトーゼは棍への追撃を止め、代わりに賞賛の言葉を送った。

何故なら彼女は、初見では間違いない対応できないだろうと放った一手を凌ぎ切って見せたのだから。

すなわち――

「げほっ、瞬間移動とは流石に予想外でした」

「こちらもな。今ので決まると思っていただけだが」

「影が差さなければ、多分間に合いませんでしたよ」

吸血鬼だから太陽が苦手、などというものはヴァルバトーゼに存在しない。しかしどうやら味方をしてくれることはないようだ。

そんな冗談を差し置いても、今の一合で決められなかったのは痛手だった。基礎能力で負けていると判断したからこそ勝負をかけたのだ。まさか二度同じ手が通用するとは思えない。そもそも、今の彼には転移を簡単に連発できるほど潤沢な魔力が存在しな

いのだが。

加えて相手はそれらしい手は一つも出してきていない。あるいは武芸と空中機動の
みが手札なのかもしれないが、安易に決め付けるのは愚考だろう。

まずはそれを探る。そう判断したヴァルバトーゼは剣を握る手に力を込めて、一步踏
み出す。

よりも、早く。

「——ッ！」

一陣の風となって椀が切り込んできた。三度目の仕掛けは振り降ろしからではなく
刺突の一撃。

機先を制された形となったヴァルバトーゼはその一撃に反応が遅れる。加えて最短
速度で己が身に迫る突きの一撃。迎撃が間に合わない。剣先が彼の腹へとめり込んで
いく。

ヴァルバトーゼはその鋭い痛みを無視しながら、懐の椀を袈裟懸けに斬る。

しかし脇をくぐるようにかわされ、そのまま椀は剣を薙いで斬り抜けた。

「が、アッ！」

腹部から零れた鮮血が地面を濡らす。

だが苦痛に喘いでる暇はない。背後より迫る追撃の刃をどうにか振り向きながら剣

で受ける。

体勢とダメージ、その二つの要因からヴァルバトーゼは力負けした。彼の右腕が剣とともに大きく後ろへと跳ね上がる。踏みとどまらず、一步右足が後ろに下がった。

そんなヴァルバトーゼの姿を見たからだろう。勝利を確信したかのような笑みを浮かべながら、杖は刃を返す。

対するヴァルバトーゼは、間違ひなく剣の戻しが間に合わないだろうことを悟つていた。

銀閃が迫る。

だがその間際において、彼の口元は歪んでいた。

「

ぼたり、と一滴の血が刀身を伝って地面にたれる。

杖は剣を腰溜めに構えたまま、目を見開いて動かない。

その理由は驚愕による硬直ではない。杖の喉元に突きつけられた一振りの剣が、彼女の行動を阻んでいるのだ。

あの瞬間ヴァルバトーゼが行ったことはそう難しいことでない。

ヴァルバトーゼは大きく右半身を仰け反らせていた。それは言い換えれば左半身が前に出ているということ。

だから彼はそのまま左手を前に突き出し、右手の剣を左手に持ち替えた——正確には、右手の剣を消して左手に顕現させたのだが。

椀からしてみれば、突如喉元に切っ先が現れたのだ。反応できるはずがない。

だがヒントはあった。彼が闘いを始める前に虚空から剣を出すのを見ていた彼女は、ヴァルバトローゼが左手を動かしたときに気づくことは可能だったのだ。

しかし椀には圧倒的に欠けているものがあつた。彼女曰く退屈な幻想郷では決して培えないもの——すなわち経験。二人の明暗を避けたのはまさしくそこだった。

「さて、まだやるか？」

その声は口内から溢れる血のためか、濁りを見せている。それだけではない。肩の傷は既に塞がりかけているが、腹部の傷は未だ血を零し続けていた。

しかしヴァルバトローゼはその明らかにポロポロの風体でありながら、揺らぐことなく泰然と椀の返答を待っている。

そんな彼に椀は苦笑すると、武器を落として両手を上げた。

「参りました。私の負けです」

椀に宣言に応じて、ヴァルバトローゼは剣を引く。

口内の血を吐き捨てた彼は、腹部の傷を撫でた。

「大丈夫ですか？」

「この程度ならば問題ない」

例えチカラを失っていても、ヴァルバトローゼは悪魔である。

彼女の斬撃が速く鋭かったこともあって、多少深くて広かろうと切り口自体は綺麗なものの。ならば半刻と経たずに全快するだろう。

「それよりも約束を果たしてもらおうか」

幻想郷に詳しい相手を紹介する。その約束の履行をヴァルバトローゼは権に求める。

本当にそれが嫌なのか、権の表情が少し暗くなった。

だが小さく顔を振って表情を払うと、彼女は力強く頷いてみせる。

「わかりました。では伺いを立てに行つてきますのでしばらくお待ち下さい」

「——その必要はありません」

今にも飛び立たんとした権を制したのは空より届く一つの声。

それに少し遅れて、一人の少女が風と共に彼らのそばへと降り立った。

当然というべきか、その相手にヴァルバトローゼは見覚えがない。だが予想はついた。

何故なら少女の頭の上にある特徴的な赤く小さな帽子は、権が被るそれと同じものだったから。何より、権の苦渋に満ちた表情を見ればおのずと知れるというものである。

同じく苦渋に満ちた権の声が、少女の名前をぼつりと漏らした。

「射命丸、文……」

Stage 3 無為の光明

「おやおやおや、随分な態度ですね。折角私のほうから来てさしあげたというのに」
文と呼ばれた少女は、口元にうちわを当てると不満げに眉を寄せる。

それが椀の神経を逆撫でたのか、声を荒げて反論した。

「誰が、貴方なんかを！」

「あやややや。それは失礼しました。私の早とちりだったようですね。……ではどうぞ
幻想郷の事情に詳しいというお方へ話を通しに行つて差し上げて下さい」

「……っ！」

苦虫を噛んだような表情とはこのことか。

言葉に詰まった椀をみて、ヴァルバトーゼはそんな感想を抱いていた。

加えて文はどうやらおおよその流れを知っているらしい。あるいは最初から覗き見ていたのか。

「どうしたんです？ いかないんですか？」

右手を掲げてどうぞと告げる文の顔に浮かんでいるのは明らかかな冷笑。

椀は強く強く拳を握り締めながらも、どうにか激情を孕ませないように言葉を搾り出

す。

「……貴方に、頼みがあります」

「声が小さいですねー、よく聞こえませんよ？ ……あはは、そんな怖い顔しないでくださいよ冗談ですって。で、頼みとはなんですか？」

「この方の話を聞いて、できれば協力してあげて下さい」

「おや！ それは奇遇ですねー。私、実はそのつもりでここにきたんですよ」
さも驚きましたというように、文は目を丸くして両手を叩いた。

対する椀の表情は厳しい。鋭く煌くその眼光は、限度があると告げている。

そんな椀に、文は肩をすくめて苦笑を見せた。

「まあ、面白いものも見れましたね。見物料代わりと思えば安いものです。その頼み、聞き入れましょう」

「……お願ひします」

最後まで表情を崩さなかった椀は、小さく頭を下げ、踵を返す。

「では、事の報告しなくてはなりませんので失礼します」

一瞬たりとも長くこの場に留まりたくはない。そんな感情を隠しもせずに飛び上がった椀は、しかしふとヴァルバトーゼの方へと振り返った。

「ヴァルバトーゼさん、でしたか」

「ああ」

「先の一戦、楽しかったです。ありがとうございます」

「……礼を言うのは俺の方だな。この借りはいつか必ず返そう」

一見対等な勝負の末ゆえに貸し借りなしと思えるが、そもそも先の条件は権にとってメリツトが存在していなかった。戦いたいというのであれば、侵入者を撃退するという名目で襲い掛かれればいいのだから。

だというのに彼女は見て分かる通りの、己が望まぬ条件を敗北に定めて勝負を始めた。

あるいは己が負けるはずがないと思っていたのかもしれないが、それでも約束を守ったことは事実である。

なればこそ、ヴァルバトローゼは助けてもらったという自覚があった。

「そうですか、では期待しておきましょう」

そう言い置いた権は、今度こそ山の上へと消えていった。

それを見送り、視線を文へと移す。彼女はなぜか頬を引きつらせていた。

「あー、その。えーと……もしかしなくても、私の第一印象って最悪ですか？」

意外なことに、先程のやりとりが悪印象であったという自覚はあったらしい。

ヴァルバトローゼはため息を吐いた。

「……お世辞にも印象がよかつたなどと言えぬ。だが別段キサマが悪いなど思っているわけではない。今のやりとりでどちらが悪いかを決められるほど、俺はキサマら二人を——ましてやキサマについては何も知らぬのだからな」

「そう言つて頂けると助かります。どうも彼女とは相性が悪くてですね。わかつてはいらんですけど、つい」

めんぼくない、と頬をかく文。

ヴァルバトーゼとしても尾を引かれては困るので、すつぱりと話を切り替えた。

「まあそれはいい。それよりもそろそろ本題に入りたいのだが」

「おっと、そういうお話でしたね。ですがその前に一つ、やらなくてはならないことがあります」

「む。なんだ？」

ヴァルバトーゼが疑問に首をかしげた。

すると文は得意げな顔で答えを述べる。

「自己紹介です。お互い既に名前を知っているとはいえ、直接名乗つてはいませんしね。円滑に話を進めるためにもここは一つやっておくべきかと」

「なるほど。確かに。では俺から名乗ろう——俺の名はヴァルバトーゼ。魔界のプリン——教育係だ」

「おや、魔界から来られたんですか」

「ほう、知っているのか」

「それはもちろん有名ですからね。プリニー教育係というのはいまいわかりませんですけど」

やはり、という感情がヴァルバトーゼの心中を覆った。

魔界の存在を知っていると答えたときこそ存外楽に話が進むとは思ったが、どうやらそうはいかないらしい。

表情にも若干の落胆がでていたのか、文がこちらの様子を伺っている。

「どうしました？」

「いや……何でもない。次はキサマの番だぞ」

「そうですか。では——」

そう言うとう文は懐へと手を伸ばす。

そして何やら一つの小さな紙束を取り出した。

「わたくし、幻想郷不定期発行『文々ぶんぶんまるしんぶん新聞』の記者を務めております射命丸文と申します」

そういいながら文はそのうちの一枚をヴァルバトーゼへと差し出した。手の平大のそれをよく見ると、そこには今彼女が語った新聞の名前に自分の名前、あとはキャッチ

フリーズなどが印刷されている。どうやら名刺のようだ。

これによると文々。新聞とは幻想郷で最速の情報紙らしい。また名前の部分が『清く正しい 射命丸 文』となっており、何とか非常にうさんくさい。

具体的に言うくと三流ゴシップのような。もちろんヴァルバトーゼとてそんなことは口に出さないが。

「そこですね、是非貴方から伺ったお話を記事にしたいのですが構わないでしょうか」
「……まあ、構わんが。ただし誤字は許さん。その場合は直訴を覚悟しておくのだな」

事実、過去にヴァルバトーゼは『プロニー』という誤字に対して情報局に直談判を行ったことがある。

まああれはどちらかといえば正確さを司る政府直轄の情報局発行だったからという面があるのだが。

「あのー、普通は捏造とか出鱈目を記事にした場合に文句を言うのでは……」
「ほう？ キサマは事実無根の記事を書くというのか？」

「そんなことはありません！ 文々。新聞は——」
「ならよいではないか。何の問題もあるまい」

あつさり信じた様子を見せるヴァルバトーゼに文は毒気を抜かれたように口を開けた。

一拍おいて彼女は呆れたように笑う。

「貴方、変わってるってよく言われませんか？」

「うむ。よくわかったな。……ところでいい加減話を戻したいのだが」

「あやや、それは失礼しました。ええと先ほどこっそり話を聞いていたところによると、何やら幻想郷へ迷い込んでしまったということですが」

「そうだ。俺は自室へ転移したつもりだったのだが、気づいたらここにいたというわけだ」

未だに原因はわかっていない。むしろここまでの流れで余計に混乱が増したとも言える。

実のところヴァルバトーゼは何らかの作為的な干渉ではないかと疑っていた。しかしそれならばいい加減そろそろ何かアクションがあってもいいはずなのだが。

「それで、どうにか魔界へ帰りたいということでしょうか」

「そういうことだ。何らかの結界に邪魔をされているようだな、ここから出れぬ」

その言葉に文は少しだけ思案する様子を見せると、思い当たる節があるのか表情を変えろ。

「おそらく、それは博霊大結界でしょう」

「博霊大結界だと？」

「はい。詳しく説明しますと——」

「ここ、幻想郷はかつて人間界——地球の一地域、その辺境であったという。

「……………」

「どうしました？ 小骨が喉に刺さったような顔をして」

「いや、なんでもない。続けてくれ」

しかし人間が勢力を増すにつれ、徐々に勢力を失っていく妖怪を案じて一人の妖怪が五百年ほど前、幻想郷にある境界を引いた。

その効果は外部から勢力が弱まった妖怪を自動的に内側へ引き込むものであったという。

「それが博霊大結界というものか？」

「いえ、違います」

その境界により妖怪が集中したため、しばらくは妖怪の存在も安定していた。

だがそれから数百年、急激な科学の発展により人間たちは加速度的に妖怪の存在そのものを否定していく。これは妖怪たちにおいて見逃せず、かつ致命的な事態であった。何故ならば『妖怪』という存在は、人に畏れられることで在るモノゆえに。

この窮地において、ある妖怪が一つの案を出した。『もはやこの世界には妖怪の居場所がない。ならば妖怪が在れるような世界を作ればいい』と。

しかし世界創生は、人に依つて生きている妖怪程度にできることではない。そこで世界の一部を間借りすればいいと発想を変えた。論理的な結界で外部と隔絶することでその内部を擬似的に世界として完結させたのだという。

あとは再現をするだけでいい。人と妖怪が生きていけるような世界を。無論容易いことではなかったらしいが、結果としてその目論見は成功する。それがここ、幻想郷という一つの世界。

そして、その中核とも言える論理結界。

「それが博霊大結界です。私は結界術には詳しくないので具体的にどういった結界かを説明することはできません。しかし物理的魔力的な結界ではなく、内外の常識を入れ替えるものだと聞き及んでいます」

「成る程。それが俺の転移を阻んだ、というわけか」

「……と、最初は私も思ったんですけど」

「何？」

「話してる途中で思い出したのですが、この結界はあくまでも一つ一つの人間界として独立させるものなんですよ。ですから他の世界——つまり天界や魔界、冥界の行き来は博霊大結界の影響を受けないはずなんですよね。冥界のように別の結界が張られていることもあります、魔界との間にはなかったはずなんですけど」

文の言うことが全て正しいのならば、ヴァルバトーゼの転移が失敗するはずはない。ならばこの論理のどこかに矛盾が存在しているということになる。そしてその矛盾に、ヴァルバトーゼは一つの心当たりがあった。

当初は小さな疑念でしかなかったそれは、既に確信へと変わっている。

「……恐らくキサマは一つ思い違いをしている」

「はい？」

「結論から言えば俺の言う魔界とキサマの言う魔界は違うものだ」

「……はあ？ 何を仰っているんですか？」

露骨に胡乱な者を見るような眼差しを文が向ける。

それでもヴァルバトーゼは動じずに、己の確信を語った。

「キサマは五百年ほど前、妖怪の勢力が弱体化し一人の妖怪が世界中からそういった妖怪を集める境界を引いたといったな」

「ええ、そうですけど」

そんなはずがない。そんなことがあつたはずはない。

五百年前に、妖怪が弱体するなど――

「俺は四百年ほど前まで人間界で活動していた。キサマの語る地球が俺の知っている地球と同一のものであるならば五百年前に妖怪が人間に押されて弱体化していたなどと

ど、ほぼ存在しえないはずだというのに。

あるいは極めて珍しい種族ならばありえた。しかしそこら中で存在を見せる妖精たちは、そうでないことを明確に否定している。

ゆえにここは彼の知る場所ではない可能性が非常に高いと考えていた。事実チルノがこの場所を『幻想郷』と告げたときに納得したのだから。

だが文が語るにはここはもともと『地球』——彼の知る人間界と同じ名前、その辺境だったという。加えて魔界との行き来が可能であるとも。さらに五百年前には妖怪の危機があったという。

そんなものは何一つとしてヴァルバトーゼにとつて覚えがない。妖精を知らない可能性はあった。幻想郷を知らない可能性もあった。それでも、世界中の妖怪の危機が五百年前にあったとなれば確実に知っていたはずなのだ。

ならば答えは一つしかない。ここは似て非なる世界であると。異次元。異世界。そういった常識が、彼の世界には存在している。

例えば数々の魔界を渡り歩いてきたという自称ダークヒーロー。別魔界の覇者を名乗る魔王や魔神。そういった手合いをヴァルバトーゼは今まで見てきているのだから。

しかし目の前で必死にヴァルバトーゼの言葉を咀嚼している文から考えるに、この世界では全くの新しい概念あるいは殆ど浸透していない概念なのだろう。

だがだからこそ新たに一つの疑念、そして懸念がヴァルバトローゼに生じていた。しかしここで論じても意味がないどころか、ますます文を混乱させる可能性もある。そう考えたヴァルバトローゼは一度その思考を凍結させた。

「信じ難いか」

「……ええ、正直全力で疑っています。突拍子のないなんてレベルの話じゃないですし」
仕方のないことだろう。既存概念の破壊は、例え物証を伴っていたとしても否定されることが多い。

「だから信じなくて構わん」

「はあ」

ゆえにヴァルバトローゼはあっさりと言の疑念を受け入れた。

肩透かしを食らったように生返事をする文だが、彼女は一つ勘違いをしている。

話の本質は、ヴァルバトローゼが異世界の住人であるか否かではないのだ。

「よく考えてみるがいい。今俺たちは何について話している」

「……貴方が、どうすれば帰ることができるか」

「そうだ。大事なことは『幻想郷からでは転移ができない』という事実だ」

ここにヴァルバトローゼが言ったような別世界の存在の是非は関係ない。

文を混乱させてまでもこの話題を切り出したの派、話が魔界への行き方にすり替わり

そうだったからである。

「つまり必要な情報は『幻想郷からの出方』、というわけですか」

もちろん幻想郷を出る手段として魔界へ行くというのが、最も適切な手段であるならばそれでも構わないのだが。

ともあれここが作為的に閉じられた世界であるということがわかっただけでも大きな収穫だった。断言こそできないが転移ができないのもやはりそれが関係しているのだろう。

「その通りだ。何か知っているか？」

「うーん。……あ」

文は何か思いついたかのような声を漏らす。

「心当たりがあるのか」

ヴァルバトーゼの確認に、文は小さく笑みを浮かべて胸を叩いた。

「ええ。私にお任せ下さい」

Stage 4 伽藍の弾幕

日が傾きかけた頃。

幻想郷のある獣道にて、二つの影と一つの足音があつた。

膝上程度の高さを、ふよふよと宙を進む文。そんな彼女に並ぶ形でヴァルバトーゼは歩いている。

既にヴァルバトーゼらが妖怪の山を発つてから、半刻が経過していた。

道中は洪水のように噴き出す文の質問に対応していたのだが、ふと尋ねておきたいことを思い出したヴァルバトーゼはそのことを文に問う。

「弾幕ごっこ、ですか？」

「うむ、その弾幕ごっこことやらのルールを教えて欲しいのだ」

何故これから故郷へ帰るはずのヴァルバトーゼがそんなことを知りたがっているのか。

最初こそ理解できないという表情を見せた文だが、何かを思い出したのか表情を崩して頷いた。

「ああ、そういえば約束があるとか仰っていましたね。でも一体、どなたとそんな約束を

されたんですか？」

「氷を操る妖精だ。確かチルノと名乗っていたな」

「それはまた……」

名を聞いた文は苦笑った。

チルノという妖精は存外名を知られているらしい。

「知っているのか？」

「ええまあ、彼女は幻想郷で一番有名な妖精だと思いますよ」

「ほう」

文曰く、チルノは『最強の妖精』らしい。そこらの木っ端妖怪程度なら勝てるほどだとか。

そう言われたところで、妖精と妖怪の力関係を知らないヴァルバトーゼにはいまいちどれほどのことか理解できないのだが。

興味はあったものの話が逸れるのは望むところではないため、ヴァルバトーゼは疑問をぐつと飲み込んだ。

「まあ、教えることは構いませんけど……彼女すぐ忘れちゃうと思いますよ？ 下手したらもう覚えてないかもしれないですね」

妖精とはそういうもので、特にチルノは顕著な方らしい。

だが、そんなことはヴァルバトーゼにとつて何ら関係のある話ではない。

「……きつと忘れるから守らなくてもいいなどと、そんな約束は存在しない」

真剣な面持ちで語るヴァルバトーゼに、文は少しばかり目を丸くする。しかしすぐに肩をすくめると、仕方ないですねと薄く笑った。

不意に文は前方へと加速して、ヴァルバトーゼの前へと躍り出る。そのままくると振り返り、器用に微速後退を始めた。

そして懐から黒縁メガネを取り出してかけると、人差し指を一つ立てる。

「ではこれより講義を始めます。準備はよろしいですか？ 質問をする際には手を上げてくださいね」

「……それは助かるのだが、なんなのだそのメガネは。それにキサマ何かキャラが変わっていないか？」

「お約束、つてやつです。一度やってみたかったので」

一点の曇りも見せない笑顔で断言されては、ヴァルバトーゼも納得せざるを得ない。

感心したように小さく頷く。

「ふむ。お約束なら仕方あるまい」

「すんなり受け入れられるのもちよつと複雑な気持ちですね……」

「む、何かマズかったか」

「いえいえ、そういうわけじゃないんですけどね。……あー、こほん。それでは気を取り直して。弾幕ごつことは何か。実はこちらの呼び方は俗称でして、正式名称を『スペルカードルール』といいます」

権もそのようなことを言っていたなど、ヴァルバトーゼは頷いた。

では何故そのような名前なのか、そう前置きした文は懐から何枚かのカードを取り出した。

名刺大のそのカードにヴァルバトーゼは見覚えがあつた。あの氷精、チルノが使っていたものと酷似している。

チルノのそれとは異なる紋様が描かれたカードの中から、文は一枚を抜き出して高くかざした。

「これをスペルカードといいます。一見何の変哲もないカードに見えますが——『天の八衢』やちまた」

文の言霊に応じてヴァルバトーゼの周囲に円錐状の空間を残して、青い球状の弾幕が展開された。

規則正しく静止するそれらは、一つ一つに確かな威力が秘められているように感じられた。

しかし脅威とは感じない。それらの密度は薄く、その気になればいくらでも抜けよう

があるゆえに。

「えい」

だが文のやる気のない掛け声に応じて、状況が一辺した。

ゆらりと、突如意思が宿ったように好き勝手動く青玉の群れ。そこにはある一つの法則があつた。

「ぬ、おっ!？」

落ちてきている。右へ左へ、前へ後ろへ。不規則に動くそれらは、しかし必ず下へと進んでいる。

すなわちそれは殆どがヴァルバトローゼを目掛けているということ、マズいと思つたときには既に逃げ場を塞がれていた。

不可避を悟つたヴァルバトローゼは、魔力を活性化させて頭上で両腕を交差する。

直後、幾多の衝撃が彼の体を駆け抜けた。

降り注いだ幾多の弾丸は、炸裂させた威力で土煙を巻き起こす。

かつてのヴァルバトローゼなら兎戯にも等しい威力だろう。しかし今の彼では傷を負いかねない威力だった。

そのはずなのに。

「……むっ。」

何度も体を貫いた衝撃が止まり、構えを解いたヴァルバトーゼは自身の違和感に気づく。

痛みがない。ダメージもない。そしてこの現象には覚えがあった。

すなわち、チルノの氷弾を受けたその時と同じものである。

「驚きましたか？」

晴れた視界の先に、変わらぬ様子で佇む文。しかしその手の中のカードは、黒く染まっていた。

「これがスペルカード最大の特徴です。詳しく説明しますと——」

それから文が語った内容を、ヴァルバトーゼは心中で整理する。

まずスペルカードの発動条件は三つ。

事前に攻撃をプログラムしておくこと、カードを手に持ちチカラを流し込むこと、発動を宣言をすること。

プログラムには容量限界が存在するらしく、無限の弾幕やどこまでも追いかける攻撃などは作れない。当然複雑な攻撃にするほど容量を食うため、弾幕を増やせば直線的な攻撃のみに、一発一発に複雑な軌道や特殊な性能を持たせれば同時顕現数は極小数となる。

ちなみに発動したスペルに攻撃力は存在しないが、衝撃はそれなりに存在する。これ

はヴァルバトーゼもチルノと文、両名の攻撃で体感していた。

また攻撃が命中した際、もしくはプログラムの全工程が終了した瞬間に、スペルカードは黒く染まって使用不可となる。再び使うためには勝負が終わった後にプログラムを込めなおさなくてはならない。

さらにプログラムが込められたスペルカードが持てる枚数は十枚まで。お互いにスペルを発動している場合は半径三メートル以内に近づくことができず、スペルを発動している相手の三メートル以内でスペルを発動することもできない。

最後に、スペルの併用は不可能。

「と、いうわけです。続いてスペルカードルールそのものについて」

まず最初に残機を互いに話し合つて決める。例えば三機なら三回攻撃を食らったら敗北となる。

そして勝負中に許される行動は二つのみ。物理的な移動とカードによる攻撃である。例えば剣による攻撃、例えば転移による回避、それは全て反則行為らしい。ちなみに弾幕による相殺はセーフである。また防御行動は自由であるが、撃墜判定は当然存在する。

なおスペル一つにつき撃墜判定は一度のみ。たとえ発動したスペルの弾が何発あたらうとも一度の撃墜という形になる。

ちなみに両者のスペルカードが切れた場合は、その時点での撃墜数が少ない方の勝利となること。

ここまで聞いたヴァルバトーゼに一つの疑問が浮かんだ。

「……だが、それではただの持久戦になりさがらんか？」

攻撃前に宣言をし、十通りのパターンしかない。組み合わせることも不可能。加えて放つごとにパターン数が減っていく。

それでは例え三機制でもお互いの実力が伯仲していれば相手のスタミナ切れを待つだけの勝負になってしまう。

「はい、いい質問ですねヴァルバトーゼ君」

くい、とメガネを上げて文は質問に応じた。

「その問いに対する回答は二つ存在します。まず一つ目はこちらです」

一枚のカードを取り出した文は、そのままヴァルバトーゼに向けてかざしてみせる。すると文を中心に放射状に弾幕が射出された。

既にスペルの特性を理解していたヴァルバトーゼは回避行動を取らずに、その身で受け止める。若干の衝撃は存在したが、やはりダメージはない。

「スペルは宣言しないと使えぬのではなかったのか？」

「これは弾幕カードといえます。まあスペルカードの簡易版みたいなものです。大ま

かな違いは四つ。一つ、宣言は必要ありません。二つ、容量が少ない。三つ、再利用が可能。四つ、所持限界枚数が存在しない。です」

「ほう」

大技だらけの闘いというのはどうしても大味で単調になりやすい。弾数制ともなればなおさらに。

しかしまともな牽制手段が存在しているのなら話は変わる。格段に攻撃パターンが増えるのだから当然と言えるが。

「そしてもう一つの答えは——『天の八衢』」

文が唱えたのは先程と同じスperl。

だがヴァルバトーゼの視界には、無数の木の葉が乱れ舞うのみ。無数の青弾などどこにもない。

「これはどういうことだ?」

「今発動したスperlの本当の名前は『風神木の葉隠れ』といいます。ですが私は今『天の八衢』と宣言しました。結論を言うとスperlの偽証宣言が可能なんですよ。ただこれもルールがありました、手持ちのスperl名でなくては偽証宣言が成立しません」

つまりスperlカードルールとは、弾幕による牽制から本命のスperlをあてることを基本とし、偽証宣言を駆使することで相手の裏をかくこともできるものである、というこ

とになる。

余談として文がこの後語ったところによると、スペルカードルールとは元来力の差が激しい人間と妖怪の間で比較的安全かつ公平に白黒をつけることができる手段として考えられたものらしい。

しかし攻撃を回避するという仕組みが基本となる以上、常人では妖怪との身体能力差が著しく勝負にならないのだが。それでも同じ土俵に立てる人間が増えたのは確かである。

殺し合いではなく、痛みも存在しない勝負。ごっこ遊びと呼ばれるのは、そういう背景があるからなのだろう。

「中々面白い仕組みだ」

「ええ、そうですね。ちなみにこのルールが制定されたのは最近のことです。今幻想郷ではこのスペルカードルールもとい弾幕ごっこが大流行中、というわけです」

「成る程」

「ではヴァルバトーゼ君。早速一つスペルを作ってみましょうか」

はい、と文はヴァルバトーゼに無地のカードを差し出した。

受け取りながら、どうすればいいのかをヴァルバトーゼは文へ尋ねる。

「それでどうすればよいのだ」

「自分が望む攻撃を思い描き、それをカードに込めるようイメージをして下さい。その際に妖力を走らせること。目を瞑るとやりやすいでしょう」

文の指示に従い、ヴァルバトーゼは目を瞑った。

ついでイメージ。三メートル制限がある以上遠隔攻撃手段である必要がある。

ならばとヴァルバトーゼは脳裏に描いた光景を妖力とともに流し込む。

ぽふん、と乾いた音が手元で鳴った。目を開く。

「はい、完成です」

「存外簡単だな」

「手軽なのも人気の一つです。早速試し打ちをしてみてもどうでしょう」

「ふむ。では——『カズイクル・ベイ』！」

ヴァルバトーゼの宣言に応じ、彼の周囲からコウモリの群れが出現した。

そのコウモリたちは並列編成で文へと直進、命中する。

その後コウモリたちは文の周囲で自らを黒い霧に変え、瞬く間に幾多の牙へと成り代わった。

一瞬の間をおいてその顎門が閉じられる。

本来ならばヴァルバトーゼが自らを変じ、攻撃することで対象の生命力を略奪するという吸血鬼の特性を生かした魔技であった。しかし力を失った今では威力燃費ともに

劣悪なモノと化してしまい、使わなくなって久しいものとなっている。

「どうだ、今のは？」

過去の技を再現しただけなので、弾幕として優れているかは怪しい。

ゆえに苦言を呈される可能性も考えていたのだが、何故か文はぼかんと口を開けている。

どうしたのかと尋ねようと口を開いたヴァルバトーゼを制する形で、文が叫んだ。

「あー！　そうか、そうでしたか！　その黒いマントにタキシード！　病的なまでに色白の肌！　魔的に輝く赤い瞳！　口から覗く鋭い八重歯！　モノ凄くひっかかってたんですよね！　今のでようやく合点がいました！　ヴァルバトーゼさん、貴方吸血鬼ですね！」

ずびし、と名推理を披露する探偵のように文はヴァルバトーゼを指差した。

特に隠すつもりもなかったヴァルバトーゼはあっさりと頷く。

「うむ。そういうえば言っていないかったな。確かに、俺は吸血鬼だ」

「つてちよーつと待ったあ！」

何故か文は眉を顰めながら、しきりにヴァルバトーゼと彼の背後を視線を往復させている。既に先程までの教師然としたキャラクターは存在していない。完全に崩壊していた。

そんな事態を引き起こした何かは己の背後にあるのかと、ヴァルバトーゼは振り返ったもののそこには何も特別なものは存在していなかった。精々が沈みかけた太陽程度である。

きよとんと首を傾げるヴァルバトーゼに、文は凄まじい勢いで手の平を左右に振り出した。

「いやいやいやいや。何で貴方太陽平気なんですか？ 普通に、ふつつーに陽が出てたときから活動していましたよね？」

「何を言っているのだキサマは。吸血鬼は太陽が弱点であるなどと、迷信に決まっているではないか」

魔界に生まれる全ての存在は人間を恐怖によつて戒めることを使命として存在する。であるからして、人間界での活動が阻害されるような弱点をもっていないのは当然なのだ。

彼の世界において吸血鬼が太陽を苦手といわれるのは、吸血行為によつて眷属化させた人間が太陽の光で開放されることから来ている。

これは彼の魔界においての常識。しかしここ幻想郷においてはそれは常識足りえぬものであった。

ありえないものを見ている。そんな文の狼狽ぶりは既に見ていて可哀想になる領域

にまで達していた。

「…………え？ 貴方本当に別の世界から来たんですか？」

「生憎だが、俺は嘘をつかないことを信条にしている」

言外に本気であると告げたヴァルバトーゼに、文は乾いた笑みを漏らす。

しばらくそうしていた文であつたが、ふいに表情を変えてヴァルバトーゼに詰め寄つた。

「ヴァルバトーゼさん。一つ、いや二つ、いや三つ……いえ、とにかくたくさん聞きたいことがあるんですけど」

「構わぬ、と言いたいところだが——」

そう答えるヴァルバトーゼの瞳は、文の背後にある何かを捉えていた。

「どうやらそうもいかぬらしい。あれが目的地ではないのか？」

ヴァルバトーゼのその言葉に、文は背後へと振り返る。

彼女の瞳が捉えたのは、生い茂る木々の隙間から、そびえる高き石段と頂点に座す赤い鳥居の存在だつた。

博麗神社——文がヴァルバトーゼに述べた『心当たり』である。

Stage 5 悪魔の帰郷

人工灯が発達していない幻想郷の夜は暗い。

ましてや深夜ともなれば人里の明かりも全て落ち、欠けた月と無数の星のみが幻想郷を薄く照らす。

そんな夜空に、眩いばかりの光が一点。

その光源は一人の少女の影がある。

博麗霊夢。発せられている光は、高純度かつ高濃度の霊力ゆえに起きる現象。

やがて光は彼女の右手、その指先にある霊符へと収束していく。

『『二重結界』』

短期決戦。

そう決意した霊夢の戦術はやはり自身が誇る結界術を用いるしかないと考えた。

捕まえて叩く。シンプルであるが非常に有効な手段。

スペルカードルールならばこの手段は使えない。何故なら縛撃が成功した瞬間に結界はその効力を失うゆえに。

だがこの勝負はスペルカードルールによるものではない。ゆえに縛撃が成功しても

結界は解けず、何度でも追撃が可能となる。敵手が離脱に成功するその時まで。

しかしそのためには成さねばならぬ前提が一つ。

「あら、芸がないのね。そもそも、捕まえられると思っっているのかしら？」

紫の指摘は正しい。

境界操作による亜空間移動を可能とする彼女を相手に、結界で捕らえるなど愚の骨頂。

事実、これまでの戦闘においても幾度となくその能力によって離脱を図られたのだ。彼女の見下したような視線も当然と言えるだろう。

だがその彼女の境界移動——その実体は一般的な空間転移とは少し異なる点がある。まさしく消えるように移動する空間転移とは違い、彼女のそれは空間の裂け目を通して擬似的に空間転移をしているに過ぎない。

つまり空間の裂け目に自ら入らなければ移動ができないのだ。ならば一度身動きを封じてしまえさえすれば、追撃を入れる余地は十分に在ると霊夢は睨んでいた。

問題はその手段。

紫が述べるとおり、このまま結界を締めたところで到底捕まえうるとは思えない。彼女の移動手段にラグがあるのは事実だが、こちらの縛鎖にもラグが存在しているのだから。

無論靈夢としてそんな分りきった行動をするつもりはない。策はある。バレさえしなければ成功する自信もあった。

紫とて靈夢が何か策を練っているのは理解しているのだろう。それでも彼女は動かない。靈夢の出方を伺っているのか、それとも単に舐めているのか。靈夢にとつてはどちらでもよかった、どうせやることは変わらないのだから。

右手で結界を維持したまま、彼女は左手で印を結んでいく。彼女の左手が流れるように次々と形を変えていった。

それを見た紫は目を細める。術式の並列起動という技術を靈夢が用いたからか。否、今彼女が編んだ術式を見破れなかったからに他ならない。

これまでと比較にならないほどの膨大な数の印。この場で靈夢が用いるそれは、正しく博麗の秘儀が一つであった。いかに様々な術式に精通している『妖怪の賢者』といえども、容易く見抜けるものではない。それでもあるいは彼女ならば、術式の系統程度は判断できるかもしれないが――

『夢想妙珠』

紫の周囲に現れた数多の靈弾が、それ以上の解析を許さなかった。

しかしそれを見た紫は眉根を寄せて靈弾を見据える。違和感があると、その正体を見透かさんと強く目を凝らした。

「滅！」

それを拒むように、靈夢は靈彈を解放する。

虹色の軌跡を描いて、その全てが紫へと迫った。

だが彼女に届く寸前、ずるりと彼女は虚空へと沈んでいく。

「まあどんな小細工にしても、避けてしまえば意味はないわ。貴女に残された手段はその結界で私を捕まえることだけだ——」

声は響けど姿は見えず。

遮るものなど何もない空の上だというのに、反響して届く声は出所を掴ませない。

「できるかしら？　貴方が私の出現を感知して結界を閉じる。いつどこに現れるかわからない私を——きゃ、あっ!？」

語りの途中で突如紫は悲鳴を上げた。その声には先程までのような反響効果がかかっていない。

靈夢はその発生源、自身の背後へと反射的に振り返る。

はたしてそこに紫はいた。苦痛と驚愕に顔の色を染め上げている彼女は、上半身だけ裂け目から出したまま逆さぶりの状態になっている。

当然その隙を逃す靈夢ではない。即座に右手の靈力を解き放つ。

「縛ッ！」

「つ、あ……！……！……！……！……！」

渾身の捕縛結界が紫をとらえた。まず一機。

理解が追いついていないのだろう、理由を求めるように視線を彷徨させた紫はある一点でその動きを止めた。

「まさか、貴方……！」

『陰陽宝玉』

確認するように詰問する紫に、しかし霊夢は言葉を返さない。

代わりとでもいうように、スベルを宣言した。橙色の霊力が牙を剥く。

これで二機。まだ手を止めない。霊力を練り上げ術式を編む。

『拡散結界』ッ！

荒れ狂う結界の奔流が紫を襲った。

これで残り二つ。瞬く間に霊夢は手の届くところまで紫を墜としてみせた。

ここまで劇的に形勢を変えたのは、最初に紫を捉えたあの一撃。二重結界よりも早く発動し、紫を捉えた謎の術式、その正体こそが――

八方鬼縛陣。侵入反応型の不可視結界である。

霊夢が結界行使のために組んでいた長い印は、これを展開するためのものであったのだ。

鬼縛陣は結界を張った後に新たに現れた生命エネルギーを捕縛対象とする。

しかし結界を発動した瞬間、紫は結界の範囲内にいた。よって彼女は捕縛対象とはならず、事実発動した瞬間は彼女が捕縛されていない。

だが彼女は一度別の空間へ姿を消し、再び現空間に現れた。この時彼女は新たに結界に侵入した存在と感知され、攻撃を受けたのだ。

鬼すら縛ると冠された退魔陣の威力は伊達ではなく、電撃に似た性質を持つ霊波が対象を痺れされる。この際対象の妖力の流れを乱し、一時的にはあるが妖力行使を制限することが出来るのだ。無論紫の境界操作とて例外ではない。鬼縛陣の効果が切れるまでは、いかに彼女とて動くことは出来ないだろう。

この通り、一見極めて強力な術に思える八方鬼縛陣、実は使いどころが非常に難しい。発動さえすれば効果は絶大なものの、その発動条件を満たすことが困難なのだ。

不可視とはいえ、結界の境界は少し感知に優れた妖怪程度にすら見抜けてしまう。しかし結界で飲み込むように発動してしまえば捕縛対象足りえない。つまり空間移動を用いる相手でもない限りは有用に用いることが難しいのだ。

その点に関して言えば、紫は条件を満たしていた。だが彼女は結界術に造詣が深い。馬鹿正直に印を組み宣言したところで、見切られてしまうだろう。それでも境界移動を制限できるのはアドバンテージ足りうるが、劣勢であることや結界を維持しなくては

ならないことを考えると勝機は見えない。それに境界移動を完封できるわけではないのだ。効果範囲が有限である以上、移動先を境界外にされては何の意味もなさない。

ゆえに霊夢は宣言を放棄した。撃墜カウントこそされないが、そもそも決まらなければ何の意味もない。

問題は印であった。省略して発動することも可能ではあるものの、やはり威力は落ちる。紫を墜としきるまで捕縛するには、やはり印を省略することはできないと霊夢は判断した。

しかし印を結んだはずなのに何も起こらなければ、間違いなく紫は警戒するだろう。よって何かしらの偽装策をとらなくてはならなかった。

その答えこそが先程紫が目を向けた先、霊夢の右手の中にある。

ひらひらと夜風に揺れる一枚の霊符——二重結界の媒体であるその影に隠れるように、一枚のカードが見えていた。

スペルカード。僅かな霊力と、宣言をキーにして発動する見せ掛けだけの術法。だがそのカードに刻まれた術式は神秘の極致とも言えるほどで、脅威を孕んだ攻撃かと錯覚させるほどに凄まじいものであった。

今や異変解決の主流ともなった『スペルカードルール』に必要なカードを、博麗の巫女たる彼女が常備してないはずもない。当然スペルもプログラムされており、残る発動

条件は後二つ。

靈力を流し込むことは造作もなかった。元より右手には二重結界の維持靈力が充満している。ゆえに残り一つ、スperl宣言をするだけで組み込まれた弾幕が現出する状態だったのだ。

ゆえに靈夢は八方鬼縛陣の発動に合わせて手に持つカードのスperl宣言を行った。紫からしてみれば、印を組んで宣言を行い術を発動させたようにしか見えないだろう。

それでも懸念が二つ、靈夢には存在した。

一つは靈夢の印を紫がどこまで見抜けるか。もし術式を見切られてしまえば、即座に仕込みに気づいただろう。しかしどうにか違和感を覚える程度で済んだらしい。時間を与えてしまえば気づいたかもしれないが、即座に攻撃することでそれを防いだ。

もう一つは、紫が結界の範囲外に出ないかどうか。鬼縛陣は二重結界と同程度の大きさで展開していたため、二重結界を避けるように移動された場合靈夢の目論見はかくも儂く破綻しただろう。しかし靈夢を試すなどと宣言した紫が、そんな安全策を取るとは思えなかった。伊達に長い付き合いではない。

あとはこのまま決めれるかどうか。

こんな奇策が二度も紫に通じるとは思えない。そもそもタネが割れてしまった。

ゆえに自力で劣る靈夢は、この一手で決められなければ確実に敗北する。

「『封魔陣』！」

霊力波動。これで四機。

鬼縛陣こそその効力を失ったものの、未だ二重結界は紫は縛り続けている。速度を重視した術式展開ということもあり、ダメージの程には自信がない。しかしこれはスペルルール。五回あてれば霊夢の勝利で幕を閉じる。

「『夢想封印』」

祝詞の応じて紫の周囲に十の虹弾が現れた。

霊弾一つ一つの威力を底上げした、霊夢が得意とする妖魔覆滅最大の奥義。手前にかざし、叫ぶ。

「——集——」

紫目掛けて収束していく弾幕。

未だ二重結界に囚われてる彼女には回避ができない。例え即座に抜け出したとて、境界移動では間に合わない。

勝利を確信した霊夢の口端がっぴりあがる。

だがその刹那。かの大妖怪、八雲紫は妖しく笑った。

「『弾幕結界』」

紫を包むように現れたのは、彼女の名と同じくする色の壁。

術式を視認できないほどの超速展開。一瞬で展開されたそれは、霊夢の攻撃よりも僅かに早い。

だからこそ、霊夢は勘違いをした。紫は障壁を展開したのだと。スペルルールにおいても防御はご法度。撃墜扱いで自身の勝利となる。

まさしく油断。例えば一瞬に満たない間の出来事とはいえ、目を凝らせばしかとそこには継ぎ目のようなものが見えたはずだというのに。

理解してれば対応ができた。だが光が収まる瞬間まで、霊夢は動かなかつた。ゆえにその報いは、視線の先で姿を見せる。

「な………」

いくつか穴の開いた壁——否、超々高密度の妖弾群を見て霊夢は驚愕とともに何が起こつたかを悟つた。

あれは弾幕だ。紫は防御を試みたわけではない。相殺を狙つたのだ。ならばその球状の壁が、膨らんでいるように見えるのも錯覚ではないのだろう。

慌てて回避に転じるも既に遅い。

はち切れたように高速で、放射状に射出された紫弾を霊夢は回避しきることができなかつた。思わず反射的に展開した障壁も呆気なく数発で碎かれて、数多の妖弾が霊夢を叩いた。

「ぐ、う……っ」

如何に博麗の巫女と言えども、所詮は人間の少女である。妖怪とは耐久力の桁が違
う。

ゆえにたったこれだけの攻撃で、彼女の意識が一気にかすれていく。飛行状態を維持
する余裕など当然ありえず、ぐらりと体が重力に引かれていくのを霊夢は感じた。

暗転していく視界が夜の闇によるものなのか、断絶していく意識なのかも分からない
中、紫の声が妙な鮮明さを持って霊夢の耳を鋭く叩いた。

「貴方の敗因を教えてあげましょう。それはね——気合よ、き・あ・い」

今の霊夢はまさしくポロポロである。とても声など出せる状態ではない。

それでも、それでも霊夢は突っ込みの衝動を抑えることができなかった。

「——アホか！……ってあれ？」

がばりと起き上がってから、霊夢が現状が認識できずしばし周囲を見渡した。

襖に障子に畳にと、見慣れた日本家屋の一室である。手足で感じる柔らかい感触は、
やはり見慣れた布団のそれだった。

まさか夢かと自身を見下ろした霊夢は、ズタボロになった巫女服が目映る。

ここでようやく、彼女は夢と現実の区別がついた。

あれは現実にあつて、挙句に夢でもみたということだろう。その証拠に、最後の紫の

言葉は聞き取れた記憶と、聞き取れていない記憶の二つがある。

ここにいる理由は、おそらく意識を失った霊夢を紫が運んだのだろう。

「……はあ」

ため息をつきながら外を見れば、既に日は沈みかけていた。

どうやら半日以上寝ていたらしい。

今更日課の掃除やら何やらをやる気にならなかつた霊夢は、本日の巫女業を完全休業することに決めた。

そうと決まればまずは饅頭でも食べよう。そう思いつつ立ち上がった霊夢の耳を遠くからの声が揺さぶった。

「霊夢さーん！　いますかー？」

どうやら来客らしい。

正直なところ居留守を使いたいところだが、どうせ気配でいることはばれているのだから。

ゆつくりすることを諦めて、霊夢は神社の境内へと足を向けた。

「生憎だけど、無理ね」

相手の要望を却下しつつ、霊夢は目の前の相手が語った内容を反芻する。

突然現れた訪問者は二人。一人は霊夢もよく知る天狗の射命丸文。

だがもう一人、ヴァルバトーゼと名乗った妖怪は霊夢の全く知らない男だった。

どうやら霊夢に用があるのはこの男らしい。常ならば赤の他人、ましてや妖怪の話など聞く耳すら持たない霊夢だが、知人の紹介ということもあつたので一応話だけは聞いてあげることになった。

結果、話を要約すると突如幻想郷に迷い込んだこのヴァルバトーゼとかいう妖怪は、故郷へ帰るために空間転移をしようとするもおそらくではあるが博麗大結界に阻まれて失敗。ならば結界の外にでてから転移すればいいという結論になつたらしく、結界の管理者である霊夢を訪ねてきたという流れらしい。

残念ながら、その希望が叶えられることはないのだが。

「何だと……!?!」

「でも霊夢さんが幻想郷に迷い込んだ人間を帰してらつて話はよく聞くんですけど、それは?」

どうやら彼女らはそれなりの根拠があつてここを訪れたらしい。

しかし文の言うことは的外れもいいところであつた。

霊夢はあくまで外に帰る手伝いをしているに過ぎない。彼らにとって大事なのは、巫

女ではなく場所なのだから。

「博霊大結界が外と中の常識を入れ替えてるって話は知ってるわね？」

「ええ」

「で、結界の基点がここ博霊神社なのよ。基点だけあつてここは少々特殊でね、ここだけ外と中が重なっているわけ。わかる？」

懇切丁寧に説明する気はなかったため、大雑把に要点だけ解説する。

案の定ヴァルバトーゼの方は首を捻ったが、文は納得したように頷いた。

「……………どういうことだ？」

「私は聞き覚えがあります。確か……………博霊神社だけ外にも中にも存在する、ということでしたか」

「そう。でも私たちは今間違いない幻想郷の博霊神社に立っているわ。何故それが成立すると思う？」

「何故つてそれは博霊大結界が……………ああ、そういうことですか」

「流石、察しがいいわね。そっちのアンタはさっぱりわかってないようだけど」

ヴァルバトーゼはこれでもかというほどに眉根にしわを寄せて唸っている。

いささか可哀想に思えたので、霊夢は肩をすくめて少しだけ話を掘り下げた。

「博霊大結界は常識と司る論理結界。じゃあ常識つてのは何なのか、それは個人個人の

中にある『あたりまえ』よ。当然人によつてそれは違うわ。つまり私たちがこちら側に立ち続けていられるのは——」

「俺たちの中にある『あたりまえ』がこちら側だから、というわけか」

「そういうこと。まあだからといってここに来るだけで外の人間が帰れるとまではいかないけどね。ただ目を瞑らせて、そいつの信じる現実つてやつを思い返させるだけで勝手に外へ帰つていくわ」

「ここまで話したところでようやくヴァルバトーゼの表情が変わつた。どうやら何故、霊夢がヴァルバトーゼを外に出すことができないのかを理解したらしい。

しかし疑問が解決したはずの彼の表情は、決して晴れやかなものではない。まあ仕方のないことだろう。無理だということが、より深く理解できてしまったのだから。

「つまり俺が外に出れない理由は、俺の常識がこちら側だからというわけか……」
「残念だったわね。大人しく別の方法を探しなさい」

悪いわね、と霊夢は心中でのみ謝つた。

実のところ眼前で渋い顔をしている妖怪を外に出す方法はあるのだ。

ただその方法はとつともなく疲れる。紫に敗北し機嫌が最悪に近い今、見ず知らずの妖怪のためにそこまでする気は霊夢になかった。

そもそも彼女は妖怪退治が生業なわけでもあるし。

「仕方あるまい。話を聞いてもらっただけでも感謝せねばな」

そんな霊夢の心中を知る由もないヴァルバトーゼは、納得したように感謝を述べた。これで話が終わり、今度こそそのんびりできる。そう思った矢先のことであった。

『そうはいかないわよ、霊夢』

「んな……い」

今一番聞きたくない声が、霊夢の鼓膜を刺激した。

厄日というのがあるならば、霊夢のそれは間違いない今日のことだろう。

というか大体全部彼女のせいなのだ。声の主——八雲紫の。

『悪いけど、彼を外に出してあげてくれないかしら。ああ、まさか私にまで出来ないなんて妄言を吐いたりはしないわよね?』

突然表情を変えて呻いた霊夢をヴァルバトーゼと文はきよとんとした目で見ている。

つまりこの声は霊夢にしか聞こえていないということだ。性質の悪いのことに。

ここで紫の声に答えてしまうと霊夢は明らかな変人扱いをされてしまう。別に紫のことを話してもかまわないのだが、事態が悪化する予感がしたため霊夢は黙って言葉の続きを待った。

『まあ、一応私も手伝ってあげるわ。これも負けたペナルティだと思いなさい』

「勝手なこと言ってるんじゃないわよ!」

ぶちんと、霊夢はそんな音を聞いた気がした。

霊夢からしてみれば、突如紫に勝手な言い分ではこぼこにされた挙句、降ってわいた面倒事をどうにか流せると思えば邪魔されたのだ。それも紫に。

擦り切れる寸前だった彼女の忍耐が断ち切れるのもやむなし、というところだろう。

しかしそんなことは霊夢の前にいる二人には関係のないことで。

はつとした霊夢が二人を見ると、明らかに可哀想なものを見る目を彼女に向けている。

やり場のない激情に歯噛みしつつ、霊夢はどうにか飲み込んだ。

「ヴァルバトーゼ、って言ったわね」

「うむ」

「前言撤回するわ。アンタを外に出してあげる」

「……何？」

「理由は聞かないこと。これが条件よ。いい？」

有無は言わさない。

その意思だけを言葉に乗せて、霊夢は淡々とヴァルバトーゼに告げた。

「いいだろう。その条件で構わぬ」

即答。

正直なところ断つてくれればいいと思つていた霊夢にしてみれば残念な結果と言える。

しかし応否の如何はともかくとして、即座に返答されるのは予想外だった。普通はもう少し悩む素振りを見せるだろうと。

「……アンタ、裏があるとか普通思わない？ それとも考えなしバカなの？」

「フン、ではキサマは何か企んでいるのか？」

「そりや違うけど……って、だーかーらー！ そういうことを言いたいんじゃないよ！」
「違ふのならよいではないか。俺を外に出してくれるのだろうか？」

「くっっ！」

話を通じない。霊夢はこれまでの人生で一番理解できない存在は八雲紫だと思つていたし、事実そうであつた。だが、この妖怪も負けず劣らず凄まじい。

言葉にできない感情を胸中で渦巻かせながら文を見ると、彼女は肩をすくめて首を振つた。彼女もこの妖怪に煮え湯を飲まされたのだろう。

しかし理解できない存在との付き合いが長い霊夢は、こういうときの対処法を知つていた。真面目に相手をしてはいけないことである。

「はあ……もういいわ。ついてきなさい」

同意を待たず、霊夢は背を向けて歩き出した。

神社の裏手へと進んでいく霊夢を、慌てて二人が追ってくる。それから数分、目的地へと辿りついた霊夢はその足を止めた。

「はいは……？」

神社の裏手にある、一見何の変哲もない森。

実際、余程感覚が鋭敏な手合いじゃなければ何の違和も感じ取ることはできないだろう。

だがここは博霊大結界の物理的境界線である。ここから先に進むと内側に戻されるようにできているのだ。

「黙って待ってなさい」

ヴァルバトローゼを外に出す手段というのは非常に単純である。

力づくで結界に穴を開け、固定する。その間にヴァルバトローゼを通せば彼は外の森にでるというわけだ。

だが擬似的にはいえ世界を隔てる結界である。そこに穴を開けて固定するなどという行為は決して容易なことではない。

本来ならば綿密な準備をし、最高のコンディションでようやく十秒あけられるといったところだろう。

しかし今回ばかりは事情が違った。

『私の方は準備いいわよ』

八雲紫。霊夢と同等かそれ以上に結界術に通じた術者であり、境界を操る特殊な能力を持つ妖怪。

彼女の境界操作で結界の境界を都合のいいように改竄すれば、ことは簡単に済ませられるだろう。

そもそも彼女の能力で簡単にヴァルバトーゼを外に出せるはずなのだが、何かそうしなくはない理由があるらしい。

どうせ考えても理解できない。そう判断した霊夢は思考を打ち切り、術の行使に集中することにした。

「そろそろいくわよ。準備はいい?」

「待て、その前に一つ聞いておきたいことがある。再びこちら側へ入るにはどうすればいい?」

やはりこの妖怪も理解できない。霊夢は心からそう思った。

「……何、アンタまたくるつもりなの?」

「無論だ。ここには約束をした相手がいる。借りを作った相手もいる。それらを放置したまま悠々と生きるつもりなど毛頭ない。必ずそれらを清算しに訪れるとも」

妙に律儀な妖怪もいたものだ。

霊夢は呆れたようにため息を零した。どうにもこの妖怪と出会ってからはため息が多い。

「……さつき、外の人間の戻し方を話したわね？」

「うむ」

「その逆よ。中の常識を持つてるアンタなら、外の神社でここを想うだけでこつちにこれるわ」

「成る程。道理だな」

「じゃ、今度こそやるわよ」

「待て」

「っ、今度は——」

前を向き術を行使しようとしたのを再び制されて、苛立たしげに振りむいた霊夢が見たものは彼女の想像を超えるものだった。

頭を下げている。ヴァルバトーゼが。

糾弾も忘れて絶句する。これまで多種多様な妖怪と交流してきた霊夢だが、人間相手にこうまで律儀に謝罪する妖怪など見たことがない。

同意を求めるように視線を彷徨わせると、同じく文も驚愕に目を見開いていた。

「世話になった。お前たちがいなければ俺はここを出ることはできなかつただろう。礼

を言う。そしてこの借りは必ず返そう。我が名に誓って約束する」

「……そうかしこまられちゃうと、私としても困るんですけどね。知人の頼み半分、興味半分でしたから」

「私もよ。別に善意でやってるわけじゃないわ」

『ほんと、変な妖怪ね』

非常に癪だが、その声に霊夢は同意する。

もつとも、変なのはアンタもだと言いつ返したくもあつたが。

「ただそうですね、もし借りを返していただけるのでしたら——何かこう、でかい異変でも起こしてくれると嬉しいんですけどね。記事のネタになりますから」

「博霊の巫女を前にそういうことを言うなんていい度胸してるわね、文。でもそうね、何か返してくれるっていうのならうちの神社に賽銭いれてくれると助かるわ」

「フ……よかろう、覚えておこう」

『境界を歪めたわ。いつでもやりなさい』

紫の合図をきつかけに、今度こそ霊夢は術を行使した。

目の前の空間に霊符を四枚、人が通れるぐらいの大きさの長方形を描くように配置する。

霊夢が印を結ぶと、四枚の霊符から伸びた光が四角く空間を切り取った。

「——解！」

宣言に応じるように、符で囲まれた空間が歪む。まるでそこだけ別の絵を張り合わせたように、景色がずれる。

それを確認した霊夢は、一步引いてヴァルバトーゼに道を譲った。

「この先に進めば出られるはずよ」

その言葉に、ヴァルバトーゼは迷いを見せずに一步踏み出す。

「そうか。ではな、また会おう」

「はいはい、じゃあね」

「また会いましょう」

別れの言葉を交わし、ヴァルバトーゼはあっさり向こう側へと消えていった。

それを見届けてから、維持していた術を解除する。同時に空中に固定されていた符が力なく地面に落ちた。

『じゃあ私も帰るわ』

「好きにしなさい」

疲れた。とにかく今日はもう何もしたくない。部屋に戻って今度こそそのんびりしよう。そんなことを考えながら霊夢は振り返った。

なぜか文がその場から動くことなくそこにいて、霊夢を見ている。

「では、そろそろ私の用件に入らせてもらってもよろしいでしょうか？」

「……………はっ。」

おそらく霊夢は、ここ数年でもっとも間拔けな表情を晒しただろう。

疲労で麻痺した思考は、何でどうしてと益体もないことをぐるぐると回し続けている。

「あれ？　まさか霊夢さん私がわざわざヴァルバトーゼさんを連れてくるためだけにここまで来たと思ってるんですか？」

そんなわけないじゃないですか、と文は朗らかに笑った。

彼女は彼女で最初から霊夢に用があつたというわけだ。

「ですから、さつきはちよつと焦りました。華麗にヴァルバトーゼさんを故郷に帰してそのまま記事のネタもゲット！　そんな思惑が潰れそうでしたからね。後は任せてくださいなんていっておいて、ほっぽりだすわけにもいかないですし。まあそれはさておき本題に入りましょうか。実は昨夜、貴方が神社を発つところを目撃しまして——」

かーかーとわめき始めた鴉天狗を無視しつつ、霊夢はぐつたりと肩を落とした。

早く部屋に戻って饅頭を食べたい。そのためにはまずこの天狗を追い出さなくては。

そんなことを考えながら、霊夢は袂から霊符を取り出した。

余談だが、今の霊夢はまだ知らない。実は彼女が楽しみにしている饅頭は既になく、残っているのが箱と『送り賃』などと書かれた一枚の紙だけであると。

つまるところ今日の幻想郷でもっとも災厄に見舞われたのは、どこぞの吸血鬼ではなく、とある白狼天狗でもなく、博麗の巫女——彼女だった。

第二話 二つの世界の吸血鬼

Stage 1 突撃、隣の吸血鬼

ある晴れた昼下がりのこと。

幻想郷の空を一つの影が切り裂いた。

風を纏って翔け抜けるのは、黒い髪をなびかせる一人の少女——妖怪の山の鴉天狗、射命丸文。

新聞記者である彼女は、常日頃から特ダネを求めて幻想郷を駆け巡る。

しかし今日の彼女の目的はネタを探すことではない。ある妖怪への取材である。

要するに、目的地が存在した。

「お」

目当ての場所を視界に捉えた文は、徐々に高度を落としていく。

彼女の瞳が捉えているのは、深い霧のかかった湖——ではなく、その畔にそびえる大きな洋館であった。その名を紅魔館という。

最初こそ中心にある時計塔へと目を向けがちな紅魔館だが、色とりどりの花が咲き誇る庭園もまた素晴らしい。既に幾度か訪れている文もまた、時計塔ではなく庭園へと視

線を向けている。

そこでふと文は、その花壇のそばに一人の女性が立っていることに気がついた。注視してみると、その女性と目線が絡んだ。つまり相手は既に文を補足していたのだろう。花壇に水遣りでもしていたのか、如雨露を持ったままじっと文を見つめている。

無視するのも気が引けたので、正面玄関に下りる予定を変更して女性の方へと降り立った。軽い会釈を行う。

「どーもー、毎度お馴染み射命丸です。本日はこちらのお嬢様に用があつてきました。ご在宅ですか？」

「こんにちは。多分お嬢様ならいると思いますよ。出かけたところを見てないですし」

赤く長い髪をなびかせ、深緑の中華衣装に身を包んだ女性は愛想よく応対した。

ホンメイリン
紅美鈴。ここ紅魔館の門番を務めるれつきとした妖怪である。

しかしここは平和でのどかな幻想郷。そんな任を果たす事件など早々起こるはずもなく、もっぱら庭師のようなことを行っているらしい。

「そうですか。では早速お話を伺ってきます。ありがとうございます」
「今日は話が聞けるといいですね」

札を述べて踵を返した文を、美鈴は小さく手を振って見送った。

常ならば、ここからが問題である。

美鈴が『今日は』などといったように、ここのお嬢様を取材するのは少々難易度が高い。

興味のない話題はぼつさり切られ、機嫌が悪ければ門前払いされることもある。

しかし今日は違う。自分が持つているネタなら必ずお嬢様は食いつくはずだと、そんなことを考えながら文は玄関の呼び鈴を鳴らした。

しばらくして、大きな玄関扉が開く。

「どちら様ですか？」

そう問いかけながら、メイド服を着た銀髪の少女が顔を出す。

「どうも、毎度お馴染み射命丸です」

「あら、射命丸様ですか」

少女——十六夜昨夜もまた、文の姿を見て表情を和らげた。

すっかり馴染みのある、という程度には訪れているのだから当然ではあるが。

何せここ紅魔館は新聞のネタに事欠かない。もちろん彼女らがまだ幻想郷に引越してきて数年の新参だということは大い。どんな界限でも新入りとは話題が事欠かないものであるからだ。

しかし捨て置けない事実がもう一つある。彼女ら——紅魔館の住人たちが幻想郷でも指折りの勢力であるということ。これこそが最大の要因だろう。概ね幻想郷におい

て、事件の頻度や規模は当事者の実力按比例するものなのだから。

「本日はどなたに御用でしょうか？」

「お嬢様です」

文がそう答えると、咲夜は顔をあきれたように眉を下げた。

「貴女も懲りないですね。それで、お嬢様に何とお伝えいたしますか？」

「ここが第一関門。」

文が告げた内容が、お嬢様の興味に適うものでなかった場合はこのまま帰らされることとなる。

しかし文は自信たっぷりに答えてみせた。

『昨日面白い吸血鬼と会いました』、とそうお伝えください」

「……かしこまりました。しばらくお待ちくださいませ」

その内容に咲夜もしばし瞠目したものの、表情を変えて一礼するとその場から姿を消した。まさしく、文字通りに。

そして一分と経たないうちに咲夜は突如文の目の前へと現れた。しかし文は驚かない。彼女の能力を知っているがゆえに。

「是非部屋へ、ということですよ。案内いたしますので、私についてきていただけますか」

「はい、わかりました」

背を見せた咲夜の影で、文は喜色を浮かべて拳を握った。そのまま咲夜の後をついていき、二階にある一室の前へと辿りつく。

思えば私室へと通されたのは初めてのことであった。普段は立食パーティーなどを行う大広間でしか会ったことがない。

そんなことをつらつらと文は考えていたが、前に立つ咲夜のノックで我に帰った。

「お嬢様。射命丸様をお連れしました」

「入りなさい」

あどけなさを感じる女性の声が部屋の中から届く。

応じる形で咲夜がドアを開けて、文へと道を譲る。

「どうぞお入り下さい」

促されるままに部屋へと入った文は、己を襲う違和感に思わず辺りを見回した。

天蓋付きの大きなベッド。違う。

ティーテーブルと、そこに座る一つの影。違う。

明かりのついたシャンデリア。違う——と、あやうく見過ごしそうになったが文はようやく答えを見つけた。

何ら変哲もないシャンデリア。文はそのどこに違和感を覚えたというのか。

無論、明かりがついているということに。今はまだ昼である。夕暮れにすら程遠いこ

の時間で、何故明かりがついているのか。よく見れば部屋のカーテンが全て閉まっている。

「よく来たわね、文」

そんな思案にふけるよりも早くその声が文の注意を引いた。しかし奇しくも彼女は、その声によって答えを得る。

そう、全てはこの部屋の主の種族がゆえに。

声が放たれたのは、先程見過ごしたティーテーブルに座る小さな影から。

青みがかった銀の髪と、紅の瞳が印象深い、可愛らしいドレスを着た少女。人間ならば十にも満たない程度の幼さだろう。

だが違う。その背中に見える小さいながらも紛れもないコウモリのような翼と、立ち上る紅い魔力が彼女が人間であることを否定していた。

そうすなわち、彼女こそがこの館の主——吸血鬼、レミア・スカーレットなのである。

「どうも、毎度お馴染み射命丸です」

「中々面白い話を持ってきたようね。今日は歓迎するわ」

「どうぞで」

背後にいたはずの咲夜が、いつの間にか正面の椅子を引いていた。

言葉に甘えて、文は腰を下ろす。

「射命丸様は紅茶でよろしいでしょうか？」

「は、うん」

こぼこぼと紅茶が注がれる音を聞きながら、なるほどと文は内心で頷いた。

中々のもてなしっぷりである。よくて立ち話が限度の常からは考えられない。

確かに今日は歓迎されているようだ。

「では私は他の仕事がありますので」

紅茶を注ぎ終えた咲夜が、そう言い残して退室する。

残された二人のうち、先に口火を切ったのはレミリアだった。

「——で」

かちん、とレミリアがティーカップを置く。

両肘をテーブルにつき、組んだ手の上に顎を置いて見上げるようにレミリアはその紅

き瞳で文を射抜いた。

瞬間、寒気が走ったのは文の錯覚ではないだろう。

嘘を吐けば潰す。そういうイロを放っているのだから。

「あなた、面白い吸血鬼にあつたんだって？」

「ええ。中々ぶつとんだ感じの方でしたね」

「そう。ならまずはその話を聞かせなさい。あなたが私に何を聞きにきたのか知らないけど、あなたの話が面白ければ答えてあげるわ」

「わかりました。では順を追ってお話ししましょう。話は、昨日の夕暮れ前へと遡ります——」

紅茶と洋菓子を味わいながら、文は昨日の顛末を語った。

その間レミリアは何一つ口を挟むことなく、文の話が終わってから思案するように瞼を閉じて語らない。

それから数分。整理がついたのか、レミリアは片目を開いて問いを放った。

「別の世界だの太陽が効かないだの色々疑問に思うところはあるけれど——まずはこれからかしらね。そもそもそいつ、本当に吸血鬼なの？」

「……やつばそうなりますよねー」

ぼやきながら、文は顔を両手で覆う。何故もつと話を聞いておかなかったのかと、後悔の念が募る。

いかに日暮れ以降は霊夢に話を聞いてもらえる可能性が下がるとはいえ、普段の文ならば自分の都合を優先したはずなのだが。やはりあの妖怪らしからぬ珍妙な性格に調子を崩されてしまったのだろうか。

「そいつが吸血鬼だって証拠が、自白と格好とスペルの雰囲気だけじゃあ、ね」

「ですよねー」

今考えれば、彼はそれ以外だと吸血鬼らしからぬ要素の方が多く存在だった。

「せめて強い妖力でも感じていければ話は違うんだけど。そいつの妖力、大したことなかったんでしよう？」

今レミリアが語ったこともそのうちの一つである。

本来吸血鬼といえば妖怪の中でも一際強いチカラを持つ種族なのだ。だからもしヴァルバトーゼがそうであるならば当然彼の妖力も尋常なものではないはずなのだが。

「そうですね……そこらへんの木っ端妖怪ぐらゐの妖力でした」

「……そんな弱い吸血鬼、見たことも聞いたこともないわ」

確かに吸血鬼にしては感じたチカラが弱すぎる。というかもっと決定的な何かが違う。

ヴァルバトーゼの妖力は、今レミリアから感じるそれとは致命的なまでにその質が食い違っているように感じるのだ。

「んで、太陽も効かないと」

「ええ、全く意に介す様子は見せませんでしたね」

もしヴァルバトーゼが吸血鬼だと仮定すると、信じられないほどにこの世界の吸血鬼と生態が異なっている。

それこそまさに——

「はん、確かにそいつが吸血鬼だったら別の世界なんてのが存在する証明になるかもしれないわね」

まさしく。文はテーブルを叩き、腰を浮かせて同意を示した。

「その通りです！ もし彼が吸血鬼ならば、それはこちらの常識から考えて無茶苦茶な存在となります。ということは逆説的に考えるとそんな吸血鬼がいることこそが別世界の存在の肯定するということになります。ということは——」

「文」

段々と言葉の熱が増してきた文を、冷たくレミリアは割り込んだ。

文はきよとんとした様子で言葉を止める。

「はい？」

「うるさい。ここは私の部屋よ」

「……はい。すみません」

文はうなだれて再び椅子に座った。

そんな彼女を見てレミリアは苦笑した。

「ま、あなたの言いたいことはわかったわ。同時にあなたが何を聞きに来たのかもね。

——吸血鬼の定義と生態。違うかしら？」

「(一)明察です」

そもそもヴァルバトーゼがまさしく異次元の住人で、存在も常識も何もかも違うといふならばその真偽をいくら議論したところで意味はない。キユウケツキという言葉が指しているものが全く違う可能性すらあるのだから。

だが致命的なまでに常識が食い違っているわけでもなかった。何故なら地球も魔界も存在している。加えて『吸血鬼は太陽が弱点である』という話自体は向こうの世界にもあると言っていたのだ。ならばかなり成り立ちが近い異世界であると考えるのが妥当だろう。もちろん、異世界が存在するという仮定を前提にすればだが。

ここで重要となるのが、妖怪の種族の区分け方である。もしこれが生態に依拠していることならば議論の意味はないだろう。ヴァルバトーゼがいかに別世界の吸血鬼を自称しようとも、生態で否と断じられてはどうしようもないからだ。

だが違う。妖怪の種族とは、もつと曖昧で抽象的で——概念的なものである。ゆえに『生態は違えど同じ吸血鬼』という理論がこの世界では通用する。

しかし『生態が違う吸血鬼』がこの世界に存在しないのならば、『ヴァルバトーゼは吸血鬼であるが、この世界ではありえない吸血鬼である』となり、別世界の証明足りうるのだ。

「吸血鬼とは何か、ね。あなたは どう思う？ 太陽に灼かれてしまう存在か？ その身

をコウモリに変える存在か？ 死者を操る存在か？ どれも正しいわ。でもこれらの特徴を全て持っていたとしてもそれだけでは吸血鬼と呼べない。当然ね、あくまで吸血鬼とは『血を吸う鬼』なのだから。他の要素なんておまけに過ぎないわ」

「つまり吸血行為をしている存在ならば全て吸血鬼であり、そうでないのなら吸血鬼ではない。ということですか？」

名に忠実であれ。

存在構成の多くが精神的なモノによつて成り立っている妖怪にとつて、名が示すものは何よりも重要であるということだろう。

「違うわ。よく考えなさい、文。結論を急ぐのは悪い癖よ」

そう認識した文の解答を、しかしレミリアは否定した。

「どういうことでしょうか」

「正確には足りないわ、というところかしら。『鬼』が欠けているのよ、あなたの答えには。もし血を吸うだけの存在ならば『吸血人』でも『吸血者』でもいいわけだしね。なのにどうして、鬼が冠されたのか。あなたにはわかる？」

「……鬼と弱点を共有しているから、というのはいちばん違いますよねやつぱり」

「そうね。それは順序が逆だもの」

吸血鬼の弱点は数多い。太陽や流水の他にも、いぶした豆やらヒイラギの小枝やらと

鬼が持つ弱点も抱えているのだ。

それをレミリアは順序が逆であると述べた。つまり『吸血鬼』となったがゆえに、そういう弱点も付随してしまったということだろう。

名前に引きづられるということ。肉体よりも精神に存在を依存している妖怪たちにはよくある話だ。

ならば鬼とは何か。角などといった身体的特徴ではないのだろう。事実レミリアには角など生えていない。

「うーん」

「そう難しく考える必要はないわよ。往々にして真実って単純なものだから。つまり鬼、っていうのはね——チカラの象徴よ。あなたも鬼と聞けば強い存在を想像するでしょう?」

現在、幻想郷に鬼の存在は確認されていない。平和で退屈な幻想郷に飽きた彼らは、新天地に旅立ったのだといわれている。

だがそれでも。それでも鬼の強大さを耳にしたことのない者などいない。

大地を砕くかの豪腕。鋼すら超える硬さを持つ肉体。そう、鬼とは力という概念を凝縮したような存在なのだ。

「……………そうですね」

ましてや文は天狗だ。今でこそ妖怪の山を統べる種族は天狗だが、かつてさらにその上にあった種族こそが鬼であった。

それなりに古参の天狗である文は、当然鬼という存在が強く記憶に刻まれている。今更鬼の強さを語られるなど、釈迦に説法もいところだろう。

「ならば吸血鬼とは——血を吸って、莫大なチカラを得る存在。そう言えるんじゃない？」

「ということとは」

「そう、そいつに血を飲ませて妖力が活性化するかどうかを見れば一発でしょう、ってあー」

「その当人が帰っちゃったんですよねー」

だからこそ、文はレミアに会いに来たのだ。

当人がいるならばこんな回りくどいまねなどしていない。

「でもまあ、そいつ全然チカラ感じなかったのよね？ もし本当に吸血鬼だったら相当おかしなヤツだわ」

「確かに。だからこそあんな格好してたのに結びつかなかったわけですしね」

何せ妖怪という種族はあまり見た目に拘らない。

存在の構成を大部分を精神が占めている以上、当然ともいえるのだが。

「あんな格好つて、そんなにそのまんまだったの？」

「そうですね、文献で見るとような吸血鬼のイメージまんまでしたよ」

「ふーん。今時珍しいわね」

基本的に世間一般に語られる妖怪の姿のイメージとは、遥か古に人が語った姿そのままであることが多い。

昨今では人間たちの服飾の多様化が進んできたこともあって、妖怪たちの中でも衣装の多様化が進んでいる。

それでも文たち天狗は比較的人間のイメージに近い格好を維持しているのだが、ヴァルバトーゼのそれはその次元を遥かに超越していた。

まさしくそのままなのだ。まるで――

「はは、まさか」

「どうしたの？」

「いえ、なんでもありません」

思わず脳裏を過ぎった発想を、文は振り払った。

まさしく、彼こそが吸血のモデルだったなどと。そんなことがあるわけないのに。「まあ何にしても見てみたかったわね、そいつ」

「いずれまた来ると言っていましたから、大人しくその日を待つことにしましょう」

「……そうね。その時はここに連れてきなさい」

「はい。ではそろそろ——」

話を切り上げた文は、腰を上げる。

ノックの音が響いたのは、そんな時だった。

「入りなさい」

レミリアの許しを得て部屋に現れたのは咲夜。

「お話中失礼します」

「いいわ、丁度終わったところだったし」

もし問題があるとすれば、タイピングが完璧すぎて文が所在無さげに腰を浮かせたままにいることだろう。

しかし主従の二人はそんな文が視界に入っていないらしい。何事もないように会話を続ける。

「それで？ 何かあったの？」

「珍しく門番が仕事しているようなので、一応ご報告に」

「あら、本当に珍しいわね」

これには文も目を丸くした。

門番が仕事をしている、というのはつまり紅魔館への侵入を試みた存在に美鈴が応戦

しているという意味だろう。

しかしこれには首を傾げざるをえない。

この幻想郷に、よりもよつて吸血鬼の居城を襲撃する輩などいるだろうか。幻想郷に詳しい文をして、心当たりが全くない。

「ふん、面白そうね。見物に行くわ。文もくるかしら？」

「……そうですね、ご一緒させていただきます」

咲夜曰く、紅魔館の真正面で闘り合っているらしい。

ということでのその場所を一望できる、正面玄関真上のテラスへと彼女たちは足を運んだ。

そこで彼女たちは、予想外の光景を目にすることとなった。

「ねえ文？」

「あー……もしかして、もしかするかもしれません」

侵入者と美鈴が戦闘しているのは、庭を挟んだ門の外。

距離にして二百間といったところだろうか。常人ならば影を見るのがやつとだろう。その距離、しかし人ならざる彼女たちならその姿すらも克明に捉えることができるだろう。

無論、止まっているのであればの話だが。

美鈴と侵入者は両者ともに近接戦闘を得手としているようで、常に動き回っている。こうなると鮮明に姿形と捉えることは難しい。

それでも拳を揮う美鈴に対して、黒衣の男が剣を煌かせている程度のことは確認できた。

明言を避けた文だが、内心では確信していた。アレだと。

そして今。体を入れ替えた二人が動きを止めたことで、文の瞳は彼の姿をくつきりと映した。

「うわ。まんま」

「やっぱ幻覚とかじゃないですよね」

「じゃああれが？」

「ええ、あれです」

どうみてもヴァルバトーゼだった。

帰ったのではなかったのだろうか。というかそもそも何で紅魔館で美鈴と闘ってるのか。つつこみどころ満載の光景に、文の理解が追いつかない。

頬をひくつかせて立ち尽くす文に対し、レミリアの行動は迅速だった。隣で日傘をさしている咲夜へと告げる。

「咲夜」

「はい」

「アレを止めて、あの男を私の部屋に連れてきなさい」

「かしこまりました」

傘をその場にとどめたままで、暎夜の姿がかき消える。

「ほら、文もいつまでもぼけーつとしてないで私の部屋に戻るわよ。あなたも興味あるんでしよう？ 同席させてあげるわ」

そう言い放ち、レミリアは館の中へと戻っていった。

その言葉で我に返った文は、慌ててレミリアを追いかける。

そしてその場に残された日傘は、まるで己の役目が終わった事を察したかのようにその場へと落ちた。

レミリアの部屋で待つことしばし、ついにそれは訪れた。

ノックに遅れて扉が開く。姿を見せたのは文の記憶と寸分変わらぬ異郷の妖怪——ヴァルバトーゼだった。

文は開きそうになる口をどうにかこらえる。応ずるべきは己ではないと、流石の彼女も分を弁えた。

「ようこそ紅魔館へ。歓迎するわ」

その言葉に、ヴァルバトーゼは怪訝そうに目を細める。

「歓迎自体はありがたいのだが、いまいち状況が掴めぬ。互いに面識などないと思つていたのだがな。事実、俺はキサマに見覚えなどない」

ふとそこで、ヴァルバトーゼは何かに気づいたように視線を動かした。

「文ではないか。……成る程、客人とはお前のことか」

「どうも、ヴァルバトーゼさん。昨日帰つたはずなのでは？」

「ああ、それがな——」

「そこまでよ」

割り込んだのはレミリア。

じろりと文を睨んで、冷たく警告する。

「主人を差し置いて会話を弾ませるのは感心しないわね。そもそも許可したのは同席することだけよ」

「う。……すみません」

「わかればいいわ。さて——」

そういいながら、レミリアはヴァルバトーゼへと向き直る。

紅の瞳が紅の瞳を映し、よりその色を深くすた。

「自己紹介がまだだったわね」

レミリアはフリルスカートの裾をつまみ上げ、うやうやしく頭を下げる。

「私はレミリア・スカーレット。ここ、紅魔館の主で——吸血鬼よ」

「我が名はヴァルバトーゼ。魔界のプリニー教育係で——吸血鬼だ」

その名乗りに、ヴァルバトーゼはマントを鳴らして力強く応じた。

彼の言葉に、レミリアは小さく鼻を鳴らす。

「文から聞いた話は本当だったみたいね。でも——」

一歩。一歩。また一歩。

レミリアはヴァルバトーゼに迫りながら、酷薄に笑う。

そして触れ合えそうな距離まで近づいたレミリアは、見上げるようにヴァルバトーゼを紅く射抜いた。まるで、彼の深淵を覗かんとするのように。

「ほんと、全然妖力を感じないわね。あなた本当に吸血鬼つ……!?!」

だがそこで、レミリアはびくりと体を震わせた。

あつという間に渋面に変わった彼女は、口元を押さえて後ずさる。

「アンタ、何持ってるの」

「む?」

刺々しく詰問するレミリアに、しかしヴァルバトーゼは心当たりがないようだった。不思議そうにレミリアを見つめている。

しかし数秒後。ほんと拳を叩いたヴァルバトーゼは、懐から何やら取り出した。

「もしやこれのことか」

彼が手に持っているのは何やら魚の頭のようなものだった。幻想郷では見ない種類だ。

だが吸血鬼が嫌がる魚の頭など、一つしか存在しない。

よく終の小枝とセツトで使われる鬼避けの道具——イワシの頭。

それを見たレミリアはますます顔をしかめて、咲夜へと命じる。

「咲夜、捨ててきなさい」

「む」

ヴァルバトーゼが違和感に唸ると、既に彼の手からはイワシの頭が消えていた。いや、奪われたというべきか。

いつの間にか咲夜がヴァルバトーゼの目の前に現れている。イワシの頭は、彼女の手の中に移っていた。

「申し訳ありませんが、お嬢様が嫌がっておりますのでこちらで処分させていただきます」

そう告げた咲夜は、そのまま姿を消した。

原理が掴めないのだろう。ヴァルバトーゼは咲夜が消えた場所を訝しげに眺めていた。

「はあ……、何であなたイワシの頭なんか持っているのよ。私への嫌がらせかしら？」

呆れたような声色から一転、レミリアは凍えるような声でヴァルバトーゼへの詰問を行う。

だがその態度も己む無しと言えるだろう。訪問を歓迎したというのに、その相手は己の弱点を抱えていたのだから。

ヴァルバトーゼの答え次第では、一気に敵対関係にもなりかねない。

若干はらはらした様子で推移を見守る文をよそに、あつけからんとヴァルバトーゼは答えを述べた。

「いや、イワシの頭には魔除けの効果があると以前聞いてな。その効果を実感すべくほぼ常に携帯していたのだが……」

そこで言葉を区切ったヴァルバトーゼは、何故か大げさに両手を広げると感激したように天を仰いだ。

「——まさか本当に効果があるとはッ！ 流石はイワシッ！ その素晴らしさは留まることを知らないッ！」

「……………」

突如始まったイワシに対する美辞麗句で、一気に場の空気が弛緩した。

何かを求めるように文はレミリアの方へと顔を向ける。するとレミリアも同じ心境なのか文を見ていた。そのまま数秒、視線を交わす。

すると奇妙な同調感を得たのか、二人揃って肩を落とした。そのまま半眼でヴァルバトローゼを睨む。

そんな視線に気づいたのだろう。ようやく我を取り戻したヴァルバトローゼは己の不徳を詫びた。

「む。つついツイワシへの感動に耽ってしまった。何にせよ、よもやイワシが苦手などという存在がいるなどは思わなくてな。知らなかったとはいえ、悪い事をした。すまん。今後ここへの持ち込みはしないと約束しよう」

「……はあ。もういいわ。今回は不問にしてあげる」

呆れ半分、苦笑半分といった風でレミリアは謝罪を受け入れた。

その陰で、文は小さく胸を撫で下ろす。一混乱こそあったものの、どうにか友好的な関係を維持できたといったところだろうか。

「で、さつきも文が聞いていたけど何であなたが幻想郷こっちにいるのかしら？」

中々に長い前置きとなつてしまったが、ようやくレミリアが本題へと切り込んだ。

これは文も気になるところである。昨日のヴァルバトローゼの言葉が本当ならば、彼は元の世界に帰っているはずなのだから。

あるいは帰ってから再び訪れた、という話なのだろうか。だが昨日の今日である。仮にそれがありえたとしても、紅魔館に乗り込んでくる理由が掴めない。

「ああ、それはな——」

二人の疑問を一身に受け、ヴァルバトーゼは口を開いた。
幻想郷の外へ出てから、今に至るその過程を。

Stage 2 フォーリンダウン・ファンタジア

ヴァルバトローゼは結界を踏み越えた直後、明確に空気が変わったことを知覚した。振り返ればそこには獣道と木々の群れしか見当たらず、霊夢の姿も文の姿も見当たらない。

「外に出れた、ということか」

そう呟きながら、ヴァルバトローゼは周囲を見渡した。特別景観に変化はない。

しかしあることを思いついたヴァルバトローゼは、歩んできた方向——博麗神社があった場所へと向かっていった。

重なり合う枝葉の奥に見える建物の影。その正体が明確になった瞬間、ようやくヴァルバトローゼは確信を得ることができた。

「成る程。重なっている、というのはこういうことか」

確かに、そこは博麗神社が存在した。

形も大きさも全て同一。だがそれは彼の知っているそれとは違う。ところどころに虫食いや腐食が見られるその寂れ具合は、人の手が入らなくなって久しいことを示しているのだから。

しかしこれはすなわち外に出れたという証明に他ならない。ならばヴァルバトーゼの転移は今度こそ阻まれずに発動するはずである。

ゆえに彼は、己の魔力を脈動させた。特殊な条件も複雑の術式も必要ない、まさしく瞬間移動に相応しい転移術が今次元の壁に亀裂を刻み――

「……………やはり、か」

だが、ヴァルバトーゼの姿はそこに在り続けた。

転移失敗。だが結界ではない。そんな手ごたえは感じておらず、しかし答えは知っている。

魔力の不足。それこそがヴァルバトーゼの帰還を阻んだ原因であり、致命的な原因でもあった。

しかしそれでは道理が通らない。転移でこれたのならば、転移で戻れるのは当然の理屈なのだから。

言い換えればそれは、ヴァルバトーゼは転移の結果としてこの世界に訪れたわけではないということになる。

だがヴァルバトーゼに驚愕はない。ここが異世界であると確信した瞬間から、予想はしていたのだから。

そもそもからして、吸血鬼のチカラを失っている彼に次元間転移を成し遂げる魔力が

存在するはずなどない。

例えばそれが転移の失敗の結果によるものだとしても、行き着く先は消費した魔力量に応じるのだから。

それでも、あるいは、万が一。この世界が彼の世界と極めて近い位相に存在しているのだとしたら可能性はあった。

やはりというか、そんなことはなかったのだが。

「さて、どうするか」

これで振り出しへと戻ったことになる。手がかりなど何一つ存在しない。

しかしどういう過程を経たにせよ、ヴァルバトーゼが現れたのは幻想郷だった。ならば帰還の手段、あるいは手がかりがあるのはやはり幻想郷だろう。

そして幻想郷に戻る手段は聞いている。この場所で瞑想でもすれば、おそらく中へと戻れるだろう。

だがその手段を即座に取れない事情が、ヴァルバトーゼにはあった。

文から聞いた話が、彼の脳裏を掠める。それは彼女が幻想郷の成り立ちを説明したときのこと。

『幻想郷とはある島国の山奥に存在していました』

そしてそれはごく狭い範囲であるとも言っていた。

ならばほぼ確実に、幻想郷には海が存在しないだろう。それこそヴァルバトーゼが迂闊に戻れぬ最大の理由。

何故ならば、幻想郷には海水魚であるイワシがほぼ確実に存在していないからだ。

これはヴァルバトーゼにとって死活問題と断じていいだろう。イワシとはヴァルバトーゼにとつてただの大好物というわけではないのだから。

かつて吸血行為を断つた彼は、長きにわたる断血の影響で著しく弱体化している。一番酷い時期では碌に肉体活性もできなかった程だ。

そんな彼が今ではまともな戦闘行為に耐えうる魔力量を確保し、短距離とはいえ転移すら複数回行使が可能となっている。

ヴァルバトーゼはそれこそがイワシの力だと断じた。まともな思考の持ち主ならば、一笑に付すような話だろう。

だが恐るべきことに彼の魔力が上昇傾向を示し出した時期と、彼がイワシを食べ始めた時期が一致しているのだ。

それだけではない。ヴァルバトーゼがこれをイワシの力だと強く信じていることも重要なのだ。

人間とは違い天使や悪魔といった存在は己の精神状態に強く能力を左右される。当然ブラシーボ効果も、人間のそれとは桁違いに強い。

結果、『イワシを撰取できなければ、イワシパワーがなくなってしまう』——そうヴァルバトーゼが思ってしまったら、それが現実の結果として現れかねないのだ。非常に馬鹿げた話ではあるが。

何にせよイワシを断つということは、ヴァルバトーゼの精神に多大な影響を与えることだけは紛れもない事実なのだ。

「何にせよ、まずはイワシだな」

ゆえに彼が幻想郷への帰還を後回しにしたことは決して愚かとは言えないだろう。

目的地を海とした彼は、まずは下山だと一歩足を踏み出した——その瞬間だった。

「な」

ヴァルバトーゼの足は、何故か大地の感触を伝えてこなかった。それだけではない。まるで何もないかのように、際限なく足が沈んでいく。

異常事態に目を向ければ、そこには『裂け目』が存在した。物理的なものなどではない。おそらくは空間的なものだろう。

深い闇と、無数の目玉。その裂け目の奥には、その二種類だけが存在した。

マズい、とヴァルバトーゼは直感的に確信する。だから彼は軸足に力を込めてその場から離脱を試みた——みようとしたり。

未遂に終わった理由は、裂け目がより大きく口を開いたゆえに。力を込めた軸足もま

た、闇の底へと飲み込まれていく。寒々しい浮遊感がヴァルバトーゼを包み込んだ。ならばと彼は転移の術式を編み出した。

理解できない異常事態。秒にも満たない僅かな猶予。それでも動揺を最小限に抑え、迅速に離脱を選択した彼の意志力はまさしく剛毅果断といえるだろう。

だが、彼を襲う『それ』はさらにその上に達していた。

「んだとオオオオオオ!?!」

転移失敗。

確かな結界による妨害の感触に、今度こそ彼は絶叫した。もがく余裕も与えずにあつさり彼を飲み込んだその裂け目は、目的は果たしたといわんばかりにその口を閉じる。

こうして彼は亜空間へと閉じ込められた。

重力が存在しないため上下左右の感覚が掴めない。加えて無数の紅い目玉がところ狭しと周囲を覆うこの異界。常人ならば数分と持たずに発狂してもおかしくない。

だがヴァルバトーゼはこれを好機と判断した。

何故ならこれはこの世界へ訪れて、初めて彼を襲った作為。あるいは彼を、この世界へとつれてきた張本人の仕業かもしれないのだから。

来るなら来いと、そう不敵に笑うヴァルバトーゼを襲ったのは下へとかかる力の流れだった。

「む——?」

視界が明転したことで、ようやくそれが重力であることに気づく。

どうにか平衡感覚を取り戻せたヴァルバトローゼは、紙一重の差で足から着地することに成功した。

「……何事だというのだ、一体」

空を見上げる。青い。ならばここは中か外か。何故己は異界から放り出されたのか。状況を把握せんと、彼の思考が高速で回る。その、最中。

「——ようこそ私の屋敷へ、歓迎しますわ」

「——」

例えるなら、それはまるで意識の隙間に差し込まれたかのように。

そう評するほどに絶妙なタイミングであった。思わずヴァルバトローゼが飛び退いたとしても無理もない。

油断なく声あるほうへと目を向ければ、そこには大きな屋敷があった。その縁側。一人の女性が優雅に腰を下ろしている。

今話しかけてきたのは彼女に違いないだろう。

「何者だ、キサマ」

誰何を行いながらも、ようやくヴァルバトローゼは現状を把握しつつあった。

どうやら己はこの屋敷の庭へと落とされたらしい。誰によってなどというのは、無用な思考というものだろう。今日の前にいる、右手の扇子で口元を隠して見透かすように紫眼を向ける金髪の女。彼女の他に誰がいるというのだ。

だがこの気配。ヴァルバトーゼは彼女の気配をどこかで感じた覚えがあつた。それもつい最近に。

「はじめまして。私の名は八雲紫、よろしくヴァルバトーゼ……でよかつたかしら？」
「何故俺の名を……そうか——キサマは神社で感じた気配と」

博麗神社に訪れてから、ヴァルバトーゼは奇妙な違和感を覚えていた。

その違和感が最大に膨れ上がったのが、まさしく霊夢が術を行使する間際のこと。ゆえに彼女が原因だと納得していたのだが、どうやら違つたらしい。

「あら、いい勘してるわね——つて言つてあげたいけど貴方を見ていたのはもつと前からよ、吸血鬼」

「フン、悪趣味だな」

ヴァルバトーゼが己の種族について話したのは未だ文のみ。その情報を知っているということは、それ以前から覗き見ていたということだろう。

自身の種族は文にしか話していない。つまり博麗神社に向かっているときも見ていた、と言いたいのだろう。

何にせよ、上から目線で話しかけられるのはいい気分ではない。敵対も辞さない構えを見せながら、ヴァルバトーゼは目的を問う。

「それで？ 何が目的だ」

「そういきり立たないの。別に貴方と敵対するつもりはないわ。今のところはね」
「何？」

おそらくは彼女こそがヴァルバトーゼをこの世界へと連れてきた元凶である。

そう考えていたヴァルバトーゼにとって、紫の答えは予想外もいいところだった。彼の眉間に強く皺が寄っていく。

それでも紫は口元に湛えた笑みを崩さずに言葉を紡いだ。

「ただ一つ、貴方に確認したいことがあるわ。答えてもらえるかしら」

「言ってみるがいい」

「なら遠慮なく。何故貴方は、故郷へと帰らなかつたのかしら？ 私はね、貴方が素直に故郷へと帰るなら邪魔をするつもりはなかつたわ。だというのに貴方は何故かどこかを目指して歩き始めた。だからこちらへ——幻想郷へとお帰り願ったのよ。それともまさか、異世界へ行くのに歩いていく必要があるなんて言わないわよね？」

口調こそ柔らかいが、紫の目は鋭く細められている。奥に灯る紫の光は、虚偽は認めないと強い意志を発していた。

しかし成る程。幻想郷、言われてみれば確かに空気の感じがそれらしい。そして紫の言葉が事実なら、確たる正当性は彼女にあるということになる。疑うのは当然だろう。

無論、ヴァルバトーゼにそんなつもりはなかったのだが。

「帰らなかったのではない。帰れなかったのだ。どうやら魔力が足りぬようだな」

「確かに、貴方からは別の世界にいけるようなチカラを感じないわね。その言、信じましょう」

理屈は通ると、紫は小さく頷いた。

しかし未だ彼女の放つ圧力は途絶えていない。

「——ではどこへ行こうとしていたのかしら？　幻想郷と外の関係について話を聞いていた貴方なら、外では大した手がかりが望めないことなどわかるでしょう？」

道理を通せと、見下すように紫は告げる。

だからヴァルバトーゼもまた、堂々と即答した。

「無論——イワシだ」

だというのに、どうして紫は豆鉄砲を受けた鳩のような面をぶら下げ出したのか。

それでもどうにか笑みで取り繕った紫は、聞き間違えたというようにこめかみに指を当てて聞いて直す。

「……ごめんなさい。私ちよつと耳が遠くなつてしまったみたい。もう一度言ってもら

えるかしら?」

では仕方ないなど、ヴァルバトローゼは頷いた。

「イワシを補給するつもりだったと、そう言ったのだ。……待て。まさか! この世界にはイワシが存在していないのか!」

この世界は、同一世界だと言われれば納得してしまうほどに酷似している。ゆえヴァルバトローゼはイワシもまた存在するものだと思っただが。

イワシのない生活に戦慄を覚えながら、洗面を浮かべて答えを待つ。

しかし中々その答えが返ってこない。紫を見れば、その表情に確かな困惑が透けて見えた。

「ねえ、まさかイワシって……魚の?」

「うむ! その通りだ! そしてその口ぶりから察するにどうやらきちんと存在しているようだ。安心したぞ。だが流石はイワシ。異世界においてもしっかりと存在を保っているとはな」

うむうむと頷いていたヴァルバトローゼだが、ふと紫の様子がおかしいことに気づく。

見れば頭を押さえて顔をしかめている。

「どうした。頭痛でもするのか?」

「……いいえ。大丈夫よ。それより貴方、吸血鬼なのよね?」

「当然だ。自分の種族を偽う理由などなからう」

「だから私はつきり人間の血を吸うために外で活動するつもりなのかと思っていたのだけだ」

なるほど、とヴァルバトーゼは手を叩いて納得した。吸血鬼が人間界で何をするかを考えれば、確かに至極妥当な推察だろう。

もつとも、常識を当てはめるにはいささか相手が悪かったようだが。

「……まあいいわ、納得しましょう。それで、貴方はこれからどうするつもりなのかしら？」

「無論、帰る手段を探すとも」

「——もし幻想郷に住むというなら歓迎するわよ？　ある程度なら便宜を図ってあげてもいいわ」

「……どういふ風の吹き回しだ」

とてもではないが、先程まで一触即発の空気を作っていた相手とは思えない。

だというのに紫はその返答に不服そうな表情を見せている。

「別にそう不思議なことでもないでしょう。ここは幻想郷、受け入れる相手の出自は問わないわ。例えばそれが異世界であつてもね。貴方が悪意持つ妖怪ではないことが理解できた以上、拒む理由はないわよ」

「……ふむ。だがその話、断らせて頂こう」

「別に今結論を出せとは言わないわよ。もし帰る手段が見つけれなかったら、という話で構わないわ。悪い話ではないと思うのだけど」

「いまいち心の奥で何を考えているのが分からない相手だが、それでもその提案は紫の善意によるものだろうとヴァルバトローゼは思った。

だがしかし、彼女の話は論ずるにすら値しない。

「そういう問題ではない。故郷には絆がある。果たさねばならぬ約束も残している。ならば必ず帰らねばならぬ。事の可否など問題ではない。帰らねばならぬ以上は必ず帰る。それが約束を果たすということだ。そもそも、現実に膝を屈して怠惰を貪るなど——
—例え神が許そうともこの俺自信が断じて許さんッ！」

そしてそれは自身を探すために手を尽くしているだろう仲間たちへの最大の侮辱であると、ヴァルバトローゼは知っていた。

ならば彼に諦観など生まれる余地すらありはしない。この程度の無理難題など、かつて幾度も乗り越えているのだから。

だからこの話はなしだと、ヴァルバトローゼはそう告げた。

だというのに、何故紫は笑みを浮かべているのか。しかも今まで彼女が見せていた、貼り付けたような笑みではない。柔らかな、暖かい笑みだった。

「——気に入ったわ。手を貸しましょう」

「む。いいのかわ？」

「ええ、私もね、幻想郷には愛着があるの。だからもし私が貴方のような立場になったら、決して帰還を諦めないでしょう。端的に言えばね、共感したの。でも貸し一つよ。必ず返しにきなさい」

そう言いながら、紫は妖艶に笑う。

そんな彼女にヴァルバトーゼもまた笑みを返した。

「フ……よかろう。必ず借りは返す。約束しよう」

「期待しておきましょう。——さて、貴方の帰還について話す前にいくつか聞いて貰いたいことがあるのだけど」

「ほう。何だ」

「幻想郷の常識よ。文から多少は聞いたでしょうけど、全然足りないわ。あまりトラブルを起こされても面倒だし、できる限りここで覚えていつて貰うわよ」

「成る程。よかろう、聞こうではないか」

こうして、紫による幻想郷レクチャーが始まった。

幻想郷の成り立ち、スベルカードルールを初めとする特殊決闘法についてや妖怪と人間の関係、妖怪同士のルール。

知っておくべきこと、知っておいて欲しいことを彼女は時間をかけてゆつくりと語っていく。

そしてその話の多くに関わる、一人の妖怪がいた。その名を八雲紫——すなわち彼女だ。

どうやら彼女はこの幻想郷においてかなり重要な位置を占める妖怪らしい。本人談だというのがいまいち信用に欠けてしまうが。

だがいくつか納得がいく点もあった。例えば先程ヴァルバトーゼに幻想郷の定住を勧めたことだ。まるで紫がある程度の権力を持っているかのような語り口だったが、幻想郷の歴史に深く関わっているならば領ける話である。

幻想郷に愛着があるのも当然だろう。成り立ちから、あるいはそれ以前からこの地に過ごしてきたのだろうか。

そして紫はこれが最後と前置きして、ある一つの契約について語り始めた。それが――

「……吸血鬼との契約だど？」

「そう、以前この幻想郷で吸血鬼が暴れたことがあったのよ。勿論結果としては鎮圧したのだけどね。お咎めなしとはいかないし、禍根を残したくなかったからいくつか約束事を決めたのよ。吸血鬼を対象としてね。幻想郷にはその契約を遵守させる結果が存

在するのだけど、貴方に効果が及ぶかは怪しいしね。一応貴方も吸血鬼である以上その契約は守ってもらわなきゃいけないのだけ——」

「ひとまず、内容を聞かねば判断できんな」

「では挙げていきましょうか。一つ、勢力の拡大禁止」

当時幻想郷で暴れた吸血鬼は、幻想郷内の弱勢力を片っ端から傘下に収めたらしい。そしてその手段がまた問題だったとも。

力で屈服させただけならばよかったのだが、件の吸血鬼は血液交換による傀儡化を多数の妖怪に対して行ったらしい。確かにこれは、禁じられても仕方ないといえるだろう。

もつともヴァルバトーゼには全く関係のない話であるが。勢力争いに興味などなく、シモベも仲間も十分以上に足りているのだ。ヴァルバトーゼがこの契約を破る理由などない。

「二つ、侵略行為の禁止」

これもまた問題はない。この幻想郷を侵略する理由など何一つないのだから。

そもそも侵略行為自体に興味がない。手段としてならあるいはとりうることもありえるが。

「三つ、人間を襲わないこと。これで最後ね」

幻想郷の人妖バランスは極めて際どいバランスで成り立っているのだと紫は言う。

そんな中ぼんぼん人間の数が減らされていつてはすぐに幻想郷は崩壊してしまうのだと。

しかし当たり前前なことではあるが、吸血鬼は人間の血を吸わなくては存在意義を失ってしまう。また他にも他の動物でもある程度代用は聞くとはいえ、人を食べる妖怪も存在する。

そこで外との流通を行える自身が、外の人間をさらってきた上で食料として提供しているのだと紫は語った。

「当然貴方にも血が必要でしょうから、提供するつもりはあるのだけど」

「無用だ」

「……………？ どういう意味かしら？」

鋭い目でヴァルバトーゼを射抜く紫。まさか貴方、などと言い出しかねない表情だ。

だが違う。彼女は大きな勘違いをしている。ヴァルバトーゼに血が必要ない理由は、もつと単純なものなのだから。

「俺は今、血を断っている。よって人間の血は必要ないというだけだ」

「……………貴方、本っ当に吸血鬼？」

「そうだと言ったはずだがな」

「種族の業に逆らう、というのはそんな簡単なものではないのだけど。貴方の世界では違うのかしら」

「いや、そんなことはないぞ？ 事実今、俺は吸血鬼としての魔力を全て失っている」

とはいえ普通ならば存在の維持に関わるレベルの話である。種族の業に逆らうとは、自己の否定に繋がりがかねないのだから。

ヴァルバトーゼがチカラを失うだけで済んでいるのは、おそらく彼が己を『悪魔』とカテゴライズしているからだろう。

「……待つて。ということとは、血を飲めば必要な魔力を得られるのではなくて？」

「生憎とその仮定には意味がない。血を飲まぬと、約束しているのでな」

「つまり断血は自分の意思、ということかしら」

「そういうことだ」

かつての事件——世界存亡がかかっていたときですら、彼は迷う素振りも見せなかったのだ。

今更この程度で血を飲むはずがない。

「……そう、わかったわ。ということとはもしかしなくても、貴方つて故郷だとさして強くないのかしら」

「当然だ。俺より強い奴などいくらでもいるだろう」

とはいえヴァルバトラーゼを知る者ならば、この言を否定しかねないが。事実彼は魔界政腐を転覆させている。

しかしそれは『今の魔界』を基準にしていること。ヴァルバトラーゼは『あるべき魔界』を基準にその言葉を述べていた。

人間を恐怖で戒めるといふ使命が果たされ、恐れエネルギーが満ちている魔界。ヴァルバトラーゼが暴君と呼ばれていた時代の魔界こそが、おそらくは一番相応しい。

そしてそうなる道理が通る。彼が今の魔界で最強格を担っているのは、あるアドバンテージが存在するからに過ぎないからだ。

——すなわち、恐れエネルギーの影響を受けていないということ。

それはエネルギーの供給が著しく減少している今の魔界においてはメリットとなる。だが魔界にエネルギーが満ちれば話は変わる。他の悪魔たちが十全に力を発揮できるようにする中で、唯一ステータスが変動しないのだから。

そうなるのとチカラの絶対量では殆どの悪魔に及ばなくなるだろう。技術と経験である程度の実力差は埋められるだろうが、やはり限度がある。

例えば当時最強を競った死神王ハゴスには到底及ばないだろう。事実恐れエネルギーの影響を露骨に受けたハゴスとの戦闘において、辛勝するのがやっとだったのだから。

「……そう。参考になったわ」

望む答えではなかったのか、紫の声がいささか硬い。

しかしヴァルバトーゼがそのことを言及するよりも早く、紫の口が再び開いた。

「それで、契約の内容については問題ないかしら？」

「ああ、そんな内容ならば問題はない。ただ一つ、頼みがある」

「何かしら」

「キサマは外へ自由に行けると言っていたな」

先程確かに外との流通を管理していると紫は言った。外の人間をさらっているとも。というかそもそもヴァルバトーゼを外から連れ戻したのも彼女であるし。

おそらく空間操作に長けているのだろう。それにしても些か特殊な分類のようだが。あのような亜空間などヴァルバトーゼをして見たことがない。

「ええ、そうだけど……まさか、イワシかしら」

「うむ。中々察しがよいではないか。その通りだ。可能ならばマイワシで頼みたい」

ヴァルバトーゼからすれば当然かつ真面目な話だったのだが、何故か紫は呆れたようにため息をついた。

「はいはい、わかりました」

「では、そろそろ俺は行くでしょう」

「待ちなさい。まだ貴方の帰還について話してないでしょうに」
「む、そうであったな」

しかし忘れたヴァルバトローゼを責めるのも酷というものだろう。紫の話がそれほどまでに長かったのだから。

日が沈んだあたりから話し始めたはずだというのに、既に空は白んでいる。つまり半日近くも話していたということだ。

とはいえ彼が忘れた理由の大部分は、イワシの定期供給が確定した喜びだからだろうが。

「大体どこへ行くつもりだったのかしら。ここが幻想郷のどこかもわかっていないでしょうに」

「……言われてみれば確かにその通りだな」

「全く。まあ話を戻しましょうか。もし貴方が帰れるとしたらその手段は大きく二つ。転移で帰るか、原因を突き止めるかのどちらかかしらね」

「そうだな。問題はどちらからあたるかだが……」

もし転移で帰るなら、魔力を不足を補う手段を探すことになるだろう。術式の効率化か魔力の増幅がもつとも単純な手段だろうか。

あるいは幻想郷に来てしまった原因を突き止めて、その原因を利用して戻るという方

法もある。再発を防ぐためにも原因は極力解明しておくべきだろう。問題は原因がわかったところで帰還に繋がるかどうかかわからないところか。

何にせよ、どちらか一つを満たせば帰還できるのだ。並行して探す意義は薄い。一つ一つに集中して事に当たるべきだろう。

「何のアテもないのなら、紅魔館へ行くといいわ」

「紅魔館、だと？」

聞き覚えのない地名。響きからして何かしらの館であることは推測できるが。

「ええ。最近幻想郷に移住してきた妖怪たちなんだけど、その手段が中々珍しいケースなのよ」

「とうとうと？」

「屋敷ごと外から転移させたのよ、そこに住む魔法使いがね。話を聞くことができれば助言を貰える可能性は高いわよ」

事実だとしたら相当な腕の持ち主だろう。己のみならず屋敷を含めて界渡りなど尋常ではない。ましてやここには博麗大結界も存在するというのに。

ならば少なくともヴァルバトーゼよりは転移に熟達していると見て間違いない。

「成る程。その紅魔館とやらはどこにあるのだ？」

「妖怪の山の麓の方にある、湖はわかるかしら？ 昼間には深い霧がかかっているのだ

けど」

「うむ。覚えがある」

チルノと出会った場所だろう。地理的に一致するし、霧もかかっていた。

ちなみにこのことから、紫がヴァルバトーゼを監視し始めたのがそれ以降だと判断でききる。

「その畔に赤い洋館が建っているの。そこが紅魔館よ。他に何も無い場所だから間違うこともないでしょう」

「ではそこを指すとしよう。……ところで、ここは一体幻想郷のどのあたりなのだ？」
目的が定まった以上は一直線に行きたいのだが、どこをどう進めばいいのかがヴァルバトーゼにはわからない。

そんな当然の疑問を、紫はあっさりと一蹴した。

「ああ、それについては心配無用よ」

「……何？」

何故か、嫌な予感が脳裏を走った。

地面の感触が消えたのは、その直後のことである。

「ぬおっ……！」

半ば確信しながら視線を落とせば、やはり裂け目が口を開けていた。

犯人へと視線を戻すと、紫はいつの間にか広げた扇子で顔を隠している。表情を隠しているつもりなのだろうが、ヴァルバトーゼにはその奥に描いた孤が透けて見えた。やっつけてくれる。

「また会いましょう」

その紫の言葉を最後に、ヴァルバトーゼは再び異界の口へと飲み込まれた。

Stage 3 氷とイワシと約束と

明け方の幻想郷。

顔を覗かせた太陽が、まだ霧のでていない湖を朱色に焼いている。

その様子を、ヴァルバトーゼは腰を下ろして眺めていた。よく見ると手に持つ何かを食べている。

「……ふう。よもや水揚げされたばかりのイワシを食べることができるとはな」

何故彼がイワシを手に行っているのか。少し話は遡る。

先程紫の異界を経由して落とされたのがまさしくこの場所、湖の近く。

ヴァルバトーゼはそのまま紅魔館へと向かおうとしたが、紫にそれを止められた。行くのは昼過ぎがいいわよ、と。

どうやら館の主は夜型妖怪らしく、この時間帯から昼にかけては寝ているらしい。無理に起こして機嫌を損ねない方がいいだろうということだ。

紫の口ぶりからすると他にも理由があるらしいのだが、彼女はそれを語らなかった。ヴァルバトーゼとしてもさして興味がなかったため、深くは追求しなかったが。

ともあれその時を待たなくてはならなくなったヴァルバトーゼだが、実のところ彼に

は他にもこの場所に用があった。紅魔館での事が済んだらそちらの用を消化しようと思つていたのだが、順序を入れ替えればいいだけで何の問題もない。

そのための下準備をしていたヴァルバトーゼの頭を、ぺちぺちと何尾かのイワシが叩いたのだ。見上げればそこには閉じゆく裂け目が存在した。早速紫が約束を果たしてくれたということだろう。

そして今、ヴァルバトーゼは最後の一尾を食べ終えた。あえて残した頭を懐に収めて立ち上がる。彼の視線は、湖上をゆらゆらと動く一つの影を捉えていた。

小さく笑い、ヴァルバトーゼはその影の方向へと歩き始める。すぐに湖面へと差し掛かるが、彼は両足裏に魔力を集中させることで水面へと干渉。何事もないように歩を進めていく。

その先にある影——浮かぶ氷の上で寝そべる一人の少女がむくり上半身を起こした。僅かな水音と揺れる波紋に気づいたのだろうか。

だが構わずヴァルバトーゼはその少女の目の前まで進み、静かに宣言した。

「小娘。約束を果たしに来たぞ」

「んう？」

そんな彼を寝ぼけ眼で見上げるのは、氷の妖精チルノ。

気持ちよくまどろんでいたのだろう、眠たげに目元を擦っている。

だがやがて目が覚めてきたか、びつくりしたように目を見開くとがばりとその場で立ち上がった。

「ア、アンタは昨日の！ 確かヴァ、ヴァル……」

「ヴァルバトーゼだ」

「そうヴァルバトーゼ！」

違う。

文が話していた通り、頭の方はあまりよろしくないようだ。

「ヴァルバトーゼだ」

「ヴァルバトーゼ！」

「うむ。それでいい」

元氣よく名前を言えたチルノに、ヴァルバトーゼは満足げに頷いた。

それにチルノは気をよくしたのか、自慢げに胸を張る。

「ふふん。……あれ。それであんたは何しに来たの？」

「これだ」

きよとんとした様子を見せるチルノに、ヴァルバトーゼは懐から何枚かのカードを取り出してみせた。その表面には様々なイワシが描かれている。

これこそがスペルカード。ここ幻想郷に張られている結界の効果で、スペルカードが

欲しいと願えば誰でも手にすることができると特殊な術式札。

ヴァルバトーゼが先程行っていた下準備とは、まさしくスペルカードプログラムを組み上げることだったのだ。

「ルールは聞いた。準備もできている。さあ、今度こそ弾幕ごっこを始めようではないか」

「あ、そっか。アンタ……ほんとに約束を守りにきたんだ」

「無論だ。言ったはずだ、俺は必ず約束を破らぬと」

堂々と当たり前のように告げるヴァルバトーゼに、チルノは喜色を浮かべた。

彼女は腰に手をあてて、彼に指を突きつける。

「よし、じゃあ——勝負だ！」

「待て」

そのまま始めてしまいそうな勢いのチルノをヴァルバトーゼは手で制した。

勝負を始めるには決めておかなければならないことがある。

「残機を決めていない。普段は何機でやっているのだ？」

「あ、そうだった。えーと……多分三機が一番多いかな」

思い返してみれば前回も残機についてチルノは話していなかった。

おそらくいつもは対戦相手が決めているのだろう。

「ならばそれでいい。準備はいいか？」

「いっよー」

チルノが懐から出して呼応する。

だがこの場で始めるにはいささか間合いが近すぎる。そう判断したヴァルバトーゼは大きく後ろへ飛び退いた。

湖上から畔へ。柔らかな草の感触が足から伝わる。

「あたいの方が先輩だからね、先手をとらせてあげる！ いつでもこい！」

「フ……よかろう！ ならば受けてみよう！ 我が弾幕の真髄をッ！」

そう叫びながら掲げたカードは弾幕カード。魔力を流し、カードが輝く。

弾幕が展開されたのは、ヴァルバトーゼの後背頭上。その構成は、まさしく彼が考案したとおりのものであった。

「なっ」

弾幕ごっこを彩る華の一つに、多種多様な弾幕の形状がある。

その形について、紫はヴァルバトーゼに一つのアドバイスを話していた。

己が信じる力の形にせよ、と。

ゆえにチルノは氷の模っている。巫女ならば神具。魔法使いならば属性の形に。妖怪ならば種族の象徴を。

ではヴァルバトーゼは何とするのか。

彼は吸血鬼である。ならば血か？ コウモリか？

否。そんなはずはない。彼を知る存在ならば口をそろえて一つのモノを挙げるだろう。

すなわち、今の彼が信じる力の象徴とは――

「なにこれ!？」

背が青く、腹部が白い小魚――イワシ。その造形と色合いは細密かつ忠実に再現されている。

その群れこそが、ヴァルバトーゼが放つ弾幕の形。今顕現した数はおよそ三十尾。

それらをよく見るときちんと隊列が組まれており、魚のサイズで三隊に区分けされている。

「よく聞け！ イワシは三つ、大きさによつて呼称が変わるツ！ 一つ！ 体長十センチ前後の小羽ツ！」

突如ヴァルバトーゼは腕を広げてイワシの解説を始めた。

そして言い終えると同時に、一番サイズの小さい群体がチルノに向かって射出される。

「う、わわわ！」

シンブルな直線攻撃。

プログラムリソースの全てを速度に裂いたその一手は、紛れもなくチルノの不意をついただろう。

——それでもなお、彼女を捉えることはできなかつたのだが。

予備動作なしの空中機動。尋常ではない初速を誇る幻想郷特有の空中機動は、その弾幕を以てしても遅い。

にやりと、見下したようにチルノは笑みを浮かべた。

「二つ！ 体長十五センチ程度の中羽ッ！」

「つとことー！」

構わず第二射が放たれるが、やはりあたらない。

ヴアルバトーゼに残された弾幕は残り十尾——いや、十発というべきか。

「三つ！ 体長二十センチ以上の大羽だッ！ 覚えておけッ！」

初弾よりもサイズが倍以上大きいイワシの群れが、チルノに迫る。

だが彼女は既に平静を取り戻している。大きく回避運動を取った一射目二射目とは違い、チルノは三射目を最小限の動きで回避した。

そしてカードの効果が終わる。薄暗く色褪せたそのカードは、発動できないことを示している。

これを紫は再使用不可時間と言っていた。例え弾幕カードといえど同種の連続使用はできないらしく、一度別のカードを発動しなくてはならないらしい。

「なんかよくわからないこといつてたけど、それで終わりみたいね！ 今度はこつちの番よ！」

チルノもまた弾幕カードを掲げたらしく、氷の礫がヴァルバトーゼへと乱れ飛ぶ。彼女のまた、極めて単純な弾幕。回避は容易だろう。

だがヴァルバトーゼの反射がそれを妨げた。ダメージのない攻撃と知っている彼の経験は、回避ではなく迎撃を選んだのだ。

理性がそれをとめたのは、腕を振り上げてからのこと。その硬直は如何に単純な弾幕相手とはいえ、致命的であった。

「く」

「よーしー！ 後二つ！」

想像以上に面倒な縛りだと、ヴァルバトーゼは内心で毒づいた。

正面突破や真つ向勝負を好む気質の彼にとって、回避を主軸としたゲーム性は相性が悪い。

チカラを失う前など、全ての攻撃に対して迎撃を選択していたほどだ。思考よりも反射が体を動かしてしまう。

加えて機動性。

ヴァルバトーゼは基本、足を用いた移動になる。魔力固定の応用で空中機動も可能だが、やはり直線移動となってしまう。

対してチルノは自在に空中を動くことが可能だ。手足を用いず、予備動作も必要ない。

両者の差は歴然とわかっていいだろう。

『ブラッディホール』！』

受けて回れば負ける。

そう判断したヴァルバトーゼは一気呵成に攻め立てた。牽制も用いぬスペル宣言。

スペルカードが無数のコウモリへと変じ、突如現れた闇がチルノを包んだ。

「穿てッー！」

スペルの仕込みを間違えてなければ、今まさにチルノを多数の赤い針が襲っただろう。

命中したという手応えが伝わる。チルノの悲鳴も聞こえたことから一機撃墜したことを確信した。

「う、うう……」

闇が晴れて、涙目のチルノが現れる。

だがヴァルバトーゼは手を緩めない。彼が抜いたカードの絵柄はソコノギリイワシツブイワシ。

『魔陣大次元断』ツ！』

宣言に応じて、光の剣がヴァルバトーゼの右手へと現れた。その剣先をチルノへと向ける。

そしてその剣先は、チルノ目掛けて伸びだした。慌ててチルノが横へ避けるが、スペルの効果は終わらない。

「な、な、な」

彼女の背後へと抜けた光の刃はその身で孤を描き始めると、チルノを囲むようにその身を走らせていく。

次第にその軌跡は螺旋を描いて天高く昇り始めた。前後左右を塞がれたチルノは、その場で呆然と光の終点を目で追っている。

気づけばそこには光の塔ができていた。同時に、ヴァルバトーゼが剣を横へ払う。すると塔の頂点で剣が千切れるが、しかし輝く塔はその場に残る。

ここでようやくチルノが唯一の逃げ場に気づいた。頭上——塔の天辺から抜け出せばいいのだろうかとその身を高く浮かせていく。頭上——塔の天辺から抜け出せ

しかしその判断は余りにも遅い。既にヴァルバトーゼはその身を膨張させた光の剣

を上段に構えていた。

「喰らえッ！」

振り下ろされた光の剣は、チルノの逃げ場を塞ぐように襲い掛かった。

炸裂した光波が周囲を蹂躪していく。だが手ごたえを感じない。どうにか直撃は避けようだ。

これで残り一機とするはずだったヴァルバトーゼは、計算が狂ったことで次手を迷った。

『アイシクルフォール』っ！」

その逡巡は相手ヘターンを譲ることとなる。

響き渡るソプラノボイスに応じて、チルノのスペルが発動した。

声が出た方向——遙か上空を見上げると、そこにはチルノの姿と無数の氷柱がある。

「お返しだっ！」

縫いとめられたように動かなかった氷柱が、その言葉によって解き放たれた。存分に重力の影響を受けた氷柱はあっという間に高速の弾丸と化してヴァルバトーゼへと降り注ぐ。

同時に、着弾点から離脱せんとヴァルバトーゼは駆け出した。その手には一枚のカードが握られている。弾幕カード。

魔力に応じてカードが輝き、大量のイワシ弾がヴァルバトーゼの周囲へと展開された。そのまま全段高速射出。無論目標はチルノ。

大雑把な任意宝庫への全段射出をプログラムされたその弾幕は、運よく高密度かつ複雑怪奇な形を築いた。

だがほくそ笑む暇もなく、ヴァルバトーゼの腕に衝撃が走る。撃墜された。

「うわっ」

しかしチルノもまた、回避に失敗した。これで互いの残機は一つ。

このまま決着をつけんと、ヴァルバトーゼはチルノ目掛けて跳躍した。そのまま懐からカードを取り出すが、その色は暗い。

弾幕同時展開不可。先に展開したイワシ弾の効果が未だ残っているらしい。

対してチルノはスペルの効果が終わっているらしく、ヴァルバトーゼに先んじて宣言を行った。

『『パーフェクトフリーズ』！』

色鮮やかな弾幕が、チルノを中心に放射される。

しかし全方位に射出される弾幕だけあって、密度が薄い。

それでも凄まじい総体速度になっているだろう。回避はおろか反応すら難しいはずのその攻撃を、しかしヴァルバトーゼは空中を跳ね回って回避。

再びチルノへと向かっていき、肉迫。その瞬間彼はスペルを宣言した。

『カズイクル・ベイ』ッ！』

だが不発。

バカな、と思わずヴァルバトーゼは目を剥いて手元のカードを見た。

しかし描かれたマイワシのつぶらな瞳が見返してくるのみで、全く原因がわからない。

ヴァルバトーゼの宣言に身構えたのだろうチルノも、何もこないことに気づいたらしくきよとんとしている。

跳んだ勢いのままチルノとすれ違ったヴァルバトーゼは、ようやくルールの一つを思い出した。

半径三メートル以内でのカード使用不可。宣言が近すぎたのだ。

だがならば、今再び宣言をすればスペルを放てるはず。必殺の機を逃したものの未だ好機と、彼は再びカードへ魔力を流し始め――

┌

口から漏れたのはスペル宣言ではなく驚愕の吐息。

ようやく彼は、自身を囲む異常に気づいたのだ。

灰色の弾幕。いつの間に現れたというのか。新たなスペル宣言は未だ聞いていない。

ならばこれは弾幕カードだということのか。

刹那にも満たない時間で思考が回る。だがその答えを得るよりも早く、その弾幕が変化をみせた。

徐々に動き始め——その身に色を灯していく。赤、青、黄、緑。その色の配列にヴァルバトーゼは見覚えがあった。

パーフェクトフリーズ。

おそらく一度射出した弾幕を停滞させ、再動させる効果を持つのだろう。ヴァルバトーゼは、それに気づくのが遅すぎた。

もはや完全に色を取り戻した弾幕は、速度も同じく取り戻している。回避は間に合わない。

「フ……、見事だ」

その一言を最後に、無数の弾幕がヴァルバトーゼを襲った。

「いやったー！ あつたいの勝ちだー！」

「うむ。俺の負けだ」

無邪気に飛び回るチルノを見ながら、ヴァルバトーゼは笑う。

流石に初戦で勝てるほど甘い仕組みではないらしい。

だが何にせよ敗北は敗北。ヴァルバトーゼは素直にそれを受け入れた。

「では俺はしばらくキサマの舎弟、ということになるか」

もしフェンリツヒがいたのなら、間違はなくこれを阻止せんと動いただろう。

だが生憎ここに彼ははいない。もつとも、いたところでヴァルバトーゼに約束を翻意させられたとは思えないが。

しかしチルノはそんな彼の言葉をほかんとした様子で聞いている。

「……なんの話？」

「昨日キサマはそう言っただろう。負けたらしばらく自分の舎弟になれと」

「……たしかに覚えはあるけど。でも今日の勝負の話じゃないじゃん」

「それは、そうだが。しかし昨日の勝負のやり直しと考えればおかしな話でもないだろう」

「そりやそーだけどき。じゃあアンタが勝ったらどうするつもりだったの？」

「む……」

昨日の条件に照らし合わせれば、チルノに対する何でも質問権といったところだろう。しかし今のヴァルバトーゼに尋ねるような問いななどない。

あえていうのであれ帰還手段かそれに準ずる手がかりだが、チルノがそれを知っているとは思えない。

「弾幕ごつこのルールをきいてきたつてことは、あたいに聞くようなことなんてないんでしょ？」

だがそれをチルノが察していることは予想外だった。思わずヴァルバトーゼは瞳目する。

しかしチルノはそんな彼に構わず言葉が続けた。

「そんな不公平な勝負であんたを舎弟にするほど、あたいは落ちぶれてないよっ！」

その大きく胸を張った宣言に、ヴァルバトーゼは苦笑する。

見誤っていたと、素直にヴァルバトーゼは反省した。

「そうだな、キサマの言う通りだ」

「でも楽しかったしもう一回やりたい！」

敗者であるヴァルバトーゼは、そのかわいらしい願いを断る気にはなれなかった。

何より負けたまま、というのは彼とて好むところではない。

「いいだろう。次は負けんぞ」

「ふふん、さいきよーなあたいに勝てるかな！」

それから太陽が高く高く昇るまで、彼らの弾幕ごっこは続いた。

なお、結果はヴァルバトーゼの全敗である。敗因はいくらでもあった。

性格による不向き。練り込みが足りない弾幕。スペルカードルールの勝負経験。だがやはり最たる理由は機動性だった。

完全な立体機動を行えるチルノに対して、ヴァルバトーゼは直線的にしか動けない。その差は甚大と言えるだろう。

要するに、ヴァルバトーゼは致命的なまでにスペルカードルールに向いていなかったのである。

「というわけで明日もくることー」

びしっ、とヴァルバトーゼを指差してチルノは言った。

もつとも、何がというわけなのかさっぱりわからないが。

「よかろう。だが明日は敗北を覚悟しておくことだな」

「絶対だよー」

「約束しよう」

この日を境に、霧の湖上空にて氷とイワシが飛び交う光景が見られるようになる。

その光景の異様さたるは幻想郷でも噂になるほどで、興味をもった妖怪や人間が見物

に訪れるようになったとか。

Stage 4 虹彩華拳

太陽が下り始めた頃、チルノと別れたヴァルバトーゼは紅魔館へと足を向けた。元より彼がいたのは霧の湖。その畔にある館ゆえに、辿り着いたのはそれからすぐのことであつた。

彼の視界に映るのは、天辺に聳える時計塔が特徴的な赤く壮大な館。

中々立派ではないか、とヴァルバトーゼは感嘆の吐息を漏らしながらその手前にある大きな門へと手を伸ばす。

しかし彼の手が門に触れるよりも早く、その門は金具を軋ませて外側へと動き出した。開いた隙間から覗き込むように赤毛の女が顔を出す。

「どちら様ですか？」

「む。……俺の名はヴァルバトーゼ。ここに優れた魔法使いがいると聞いてな、尋ねに来た」

意表を突かれたヴァルバトーゼは若干であるものの狼狽をみせた。まさか気配を辿られていたとは。

あるいはその手の結界を張つていたという可能性もある。そうなれば彼女こそが目

当てる魔法使いとなりうるが、ヴァルバトーゼの勘は違うと告げていた。この女は、純粋に己の気配を察知したのだと。

「うーん。館に知らない方を上げるにはお嬢様の許可が必要なんですけど、今お客さんがきてまして」

「どのくらい待てばよいかわかるか？」

「そんな時間はかからないと思うんですけど、ちよつとわからないですね。どういったご用件かも聞いてないので」

「そうか。では出直すとしよう」

先客がいては仕方ない。日が落ちる前にもう一度来るとしよう。そう決断したヴァルバトーゼは踵を返した。

だがそんな彼の背中に声が投げられる。

「あ、ちよつと待ってください」

「むっ。」

疑問符を浮かべながらヴァルバトーゼが振り返ると、女は門の外へと出て深々と頭を下げた。

「申し遅れました。私はここ、紅魔館で門番を務めている紅美鈴と申します。どうでしょう、お暇でしたら一つ手合わせしませんか？」

「……スペルカードルールか？」

散々チルノとやりあつた後だ。とてもではないが気乗りしない。

そんな内心をありありと浮かべるヴァルバトーゼに対して、美鈴はにやりと笑つて否定する。

「いえ、こちらです」

美鈴はそう言うのと、腰を落として拳を突き出した。拳法の構えだ。

その澱みのない構えを見て、ヴァルバトーゼの経験が告げる。彼女は凄まじい達人である。

それだけではない。ヴァルバトーゼは彼女の構えに見覚えがあつた。もつとも、具体的に思い出すには至らなかつたが。

「面白〜」

意図せず、ヴァルバトーゼは呟いた。

美鈴は明らかに人ではない。気配が違う。悪魔——こちらでいうところの妖怪だろう。

だが技を極めた悪魔というものは、ヴァルバトーゼの知る限り極めて少ない。その理由は大きく二つ。

一つは単純に努力を嫌う悪魔が多いから。地道にこつこつ——などというものは一

般的な悪魔の性格と噛み合わないのだ。

もう一つは技を用いる必要がないためである。卑怯を美德とする悪魔において、技を必要とする場面——『脅威的な存在に、一人で正々堂々と立ち向かう』などということはずありえない。

力で勝るならば力で。力で勝てないならば数で。それでもダメならば不意打ち、毒殺、騙し討ち——これこそが悪魔の常道である。

ヴァルバトーゼも己が用いることこそ好まないが、用いられることに対しては何一つ異論を持っていない。

このことから彼の住む魔界において、武術——流派としての発展度は著しく低い。我流で戦う悪魔が殆どだろう。ヴァルバトーゼもまた例外ではない。

だが美鈴は違う。それは世界を隔てた悪魔と妖怪の価値観の差異によるものか、もしくは——

「それで、やりますか？」

問われ、現実へと意識が浮上する。随分考え込んでいたらしい。

勝負を受けることには否やはないのだが、ヴァルバトーゼには気になることがあった。

「何故だ？」

「はい?」

「何故俺に手合わせを願ったのだ」

ヴァルバトーゼが抱いた印象では、美鈴は手当たり次第勝負を挑むような性格には見えない。ならば何か理由が存在するはず。

「簡単ですよ。少々血が騒いだ、というだけです」

「それこそ解せぬ。俺の魔力が少ないのはキサマも理解しているだろう」

一見した相手の力量を図る際、もつとも分かりやすい指標は魔力の強さだ。

しかしその指標に照らすと、ヴァルバトーゼという悪魔は間違いなく弱い。少なくとも、美鈴とは一段二段大きな壁が存在している。

そして他の観点からヴァルバトーゼの何かを見出すには、出会ってからの時間が余りにも短い。

「そうですね。ですが貴方は幻想卿の妖怪にしては余りにも心配が鋭い。そんな貴方に少々あてられてしまったんですよ」

「ふむ、まあ理解できなくはないな」

闘争——ともすれば殺し合いを常とする世界でヴァルバトーゼは生きてきた。そんな彼が纏う雰囲気は、ここ幻想卿では少々強烈なのだろう。触発されるというのも十分納得できる話である。

「それに——」

成る程然りと頷いたヴァルバトーゼに対して、美鈴は他にも理由はあると言葉を続ける。

「——貴方が弱いと思つたなんて、一言も言つてませんよ、私」

その言葉に、ヴァルバトーゼはしばしその目を瞬かせた。それほどまでに予想外のゼリフだったのだ。

無論世辞などではない。美鈴のアクアグレイの瞳は、嘘偽りなしと強くヴァルバトーゼを射抜いているのだから。

少しの間沈黙が場を満たし、ふと美鈴がくすりと笑つた。

「勘ですけどね」

「……フ、フフフ。ハハハハハハッ！　よかろう！　手合わせ願おうではないか！」

かつての世界においても、彼を強いと評する存在は数多くいた。

だがその理由は、畏れエネルギー問題による相対的な優位があつたからこそ。

なればこそ、今この世界においてヴァルバトーゼは決して強くない。少なくとも魔力量のみで見たら弱いと断じて何ら異存はない程度には。

だというのに、初対面のこの女はそんなことはないと言つてのけた。ならばその期待に応えねばならない。

滾る気持ちを笑みに変えたヴァルバトローゼは、愛剣を呼び出して問う。

「ところで俺の得物はこれだが——問題はるか？」

万が一。美鈴がヴァルバトローゼを拳法家とみての立ち合いを望んだのならば訂正しておかなければならない。

とはいえやはり杞憂だったらしい。当然のように美鈴は頷いた。

「ええ。何でもありのつもりでしたから。何もないところから剣を取り出したのには驚きましたけど」

「そうか。では始めるか？」

この高ぶりが冷める前にと、ヴァルバトローゼは美鈴へと剣を向けた。しかし彼女は申し訳なさそうに首を振る。

「そうしたいのは山々なんですけど、少し場所を変えても構いませんか？ 流石にここで始めると門や庭、下手したら屋敷に被害が出てしまうので」

「成る程な。キサマの役目は門番だったか」

「ええ。ですから離れすぎない程度の場所ということだ」

その言葉を最後に、少しの間彼らは会話もなく歩き続けた。

「ではこの辺りで」

そう言つて美鈴が立ち止まったのは、広く開けた草原の真ん中。

近接戦闘を主とするならば館周りには間違ひなく被害はでないだろうという距離だ。

「気絶か降参で決着、異存はあるか？」

「ありません」

「では始めるとしようか。先手は譲つてやろう」

そう言つて、ヴァルバトーゼは半身に構えると剣をたらした。

対する美鈴は腰を落として左手をゆるやかに前へと。右手は拳を固めて腰元に。

「では——」

言いながら、美鈴は軽く左足を前に出す。

直後、誇張なく大地が揺れた。

その凄まじき衝撃と轟音——その震源は、驚くべきことにヴァルバトーゼの足元に
て。

「——」

彼の眼下では、赤い長髪が揺らめいている。

ともすれば混乱の渦中へと落とされかねない現象を前に、どうにかヴァルバトーゼは
冷静さを保ち続けた。刹那の間に状況を分析する。

美鈴は完全の間合いの中に。剣は未だ過去の彼女を見つめている。回避も防御も迎
撃は不可能。ならば。

「破ッ！」

「ガ——！」

思考が結論へと至ったのと同時に、砲弾のような一撃がヴァルバトーゼの腹部を貫いた。堪えきれず吹き飛ばされる。

しかしどうにか体勢を入れ替えて両足で着地。無様に地面を削るマネはさける。

ヴァルバトーゼハ口内にたまった血を吐き捨てると、拳を放った形のまま動かない美鈴へと視線を移した。

「流石ですね」

「……キサマもな」

ヴァルバトーゼの言葉に応えたかのように、美鈴の左腕から血が滲みだす。その傷口は紛れもない斬撃のモノだった。

そう。先の一合にて剣が間に合わぬことを悟った彼は、吹き飛ばされた直後——剣の間合いになったその瞬間を狙って剣を薙いだのだ。

体勢こそ最悪だったが、美鈴の左後背——すなわち死角より迫った凶刃は間違いなく彼女に手痛いダメージを与えるはずだった。ありえないことに反応されたため失敗したのだが。とはいえ流石に無傷とはいかなかったらしい。

「ち……」

重い鈍痛がヴァルバトーゼの身を蝕む。やはりダメージは彼の方が大きい。これでも打点をずらした結果だというのだから恐れ入る。

美鈴の技巧が卓越しているのか、ヴァルバトーゼの体が貧弱なのか。おそらくは両方だろう。

「では、次はこちらからゆくぞ」

「ゴ自由こ」

やはり身体能力で劣っている以上受け手に回ると厳しい。

次はなどと言ったものの、もはやヴァルバトーゼは二度と受けに回るつもりはなかった。

ヴァルバトーゼは左足で一步踏み出す。まるで、先刻の美鈴のように。

まさしく焼き直し。事実、彼はその場から姿を消し去ったのだから。

秒のズレもなくヴァルバトーゼが姿を見せたのは美鈴の背後。深く体を沈めた彼は、腰に溜めた剣を解き放った。

「……………そッッッ！」

その瞬間、彼女は反転して拳を放つ。剣閃の軌道と寸分違わぬその位置に。

凄まじい感知能力。椀の一戦を省みて影が差さない位置に転移したのだが。

だが反応したとはいえ所詮は無手。煌く刃と唸る拳、どちらが勝つかなど明白で――

「な」

直後、鋼鉄を叩いたかのような甲高い音が響いた。刃と拳が鳴らした音とはとてもではないが信じ難い。

だが幻聴などではないらしく、美鈴の右拳はヴァルバトーゼの剣と鬩ぎ合っていた。斬撃の威力を殺したと判断してか、美鈴は器用に腕を捻って剣を払う。

ヴァルバトーゼは体勢を崩さぬように即座に剣を引くが、遅い。既に美鈴の次弾は装填されている。

入れ替える形で左拳を放たなかったのは、右を打ち直してなお先手をとれるとみたからだろう。それほどまでに拳と剣では回転率に差が存在する。

ゆえにヴァルバトーゼの迎撃は間に合わず、美鈴の渾身を受けるしかない。——本当に、そうだろうか。

確かに返しの刃は間に合わない。ならば刃を返さずして、先手を取ればいい。

一つ吐息を零したヴァルバトーゼは、己が右手から剣を消す。無論彼の剣が再び姿を見せたのは——左手。そのまま薙ぎ払う。

芯のない、軽一闪。だがこの局面において何よりも重要なのは早さなのだから何一つ問題はない。

「くっ」

肉を裂く感触が剣を通して腕に伝わる。だが浅い。ぎりぎりまで飛び退かれた。

美鈴から目を切らずに、剣を右手に持ち替える。追撃も考えたが、迂闊な深追いは愚行だと判断した。事実美鈴は零れる血を気にする素振りもみせずに拳を構えている。

だが一つわかった。美鈴の肉体硬化は意識的に発動しているものだということだ。でなければ傷を与えられる道理はなく、そもそも彼女は避けなかつただろう。

「そういえば、貴方の剣は出し入れ自由でしたね。失念していました」
「俺もよもや、剣と殴りあうとは思っていなかったぞ」

自らの失態を笑う美鈴に、ヴァルバトーゼは笑みと賞賛を返した。

「いえ、他に取り柄がないものですから——」

美鈴は恥らうように目を伏せると、左足を軽く上げる。

「ね！」

激震。

再び姿をかき消した美鈴は、やはりヴァルバトーゼの懐へと現れた。

だが——

「フン、二回連続とは舐められたものだな」

二度同じ技に翻弄されるほど、ヴァルバトーゼは甘くない。

何よりも彼はその技を知っている。否、思い出したというべきか。

縮地。彼の世界にも存在する特殊な歩法。一瞬にて間合いをつめることができる非常に有用な技術だが、転移と違い単純な瞬間移動ではない。

すなわち、直線移動しかできないということだ。

「――！」

美鈴の驚愕が、気配を通してヴァルバトーゼに伝わる。無理もない、踏み込んだ瞬間視界が暗転したのだから。

美鈴の眼前にあるのはヴァルバトーゼの左掌。タネさえ割れば例え擬似瞬間移動であろうと対応は容易であるということだ。

無論彼女として硬直するのは一瞬だろう。やはりヴァルバトーゼの剣は間に合わない。だから彼は、そのまま左手で彼女の顔を強く掴んだ。投げつけるように力を込める。

すると至極、拍子抜けするほどあっさり和美鈴の体が後ろへとぐらついた。まるで抵抗を感じない。

「ぐ――！？」

衝撃が、ヴァルバトーゼの顎を貫いた。認識外の一撃にヴァルバトーゼは目を見開く。その瞳が、高く伸びた美鈴の脚を映した。状況を理解する。

あえて倒されるままにして、反動で足を跳ね上げた。美鈴が行ったのはそういうこと

だろう。あわよくば意識を刈り取る狙いもあつたはずだ。

「っ!？」

だが無論、ヴァルバトーゼはこの程度で意識を手放したりはしない。

「ガアアアッ!」

痛みすらも糧に変えて、ヴァルバトーゼは地面へと美鈴を叩きつけた。その威力に地面が陥没し、放射状に亀裂が走る。

彼もまた頭部への衝撃で意識を奪う狙いがあつたのだが、こちらもまた失敗した。美鈴の頭と地面の間に、彼女の右腕が差し込まれている。だが流石にその右腕はただでは済まないだろう。

加えて体勢でも圧倒的にヴァルバトーゼが有利。無防備に体を晒している美鈴へと剣を振り下ろす。

「く、うっ……」

肩口を狙った一撃を、美鈴の左腕が阻む。鮮血が舞ったことから、肉体硬化までは間に合わなかつたらしい。ヴァルバトーゼが今感じている硬い手ごたえはおそらく骨だろう。

かなりの痛みが美鈴を襲い続けているはずだが、彼女は力を緩めない。ぎちぎちと押し合いが続く。圧倒的不利な体勢から拮抗を続けるとは尋常な膂力ではない。

「あ、あああつー！」

「ぐっ……！」

数秒にわたる競り合いは、美鈴の強烈な蹴撃で終わりを告げた。寝ながら放たれたとは思えないその一撃は、ヴァルバトーゼの体を浮かす。

そこにもう一撃。弧を描いた鋭い蹴りは、ヴァルバトーゼを遥か後方へと吹き飛ばした。

したたかに背中を地面に打ちながらも、ヴァルバトーゼは剣を突き立てて体を止める。口元の血を拭い、剣を抜いて血を払った。自分の体の状態を確認し、美鈴の様子も確認する。

彼我の損傷を比較すれば、若干ヴァルバトーゼが有利といったところか。彼は攻撃を喰らった回数こそ多いが、そのどれもが戦闘に支障を与えるほどのモノではない。

対する美鈴は両腕のダメージが痛恨だろう。拳士である以上、決して無視できない痛手のはずだ。

しかし美鈴はヴァルバトーゼが動かないことを確認すると、両目を瞑って鋭く強く息を吐いた。

直後、目に見えて美鈴の傷が癒え始める。

「な——、っ！」

呻きながらも、反射的に駆け出したヴァルバトーゼは流石といえるだろう。

その気配を察したのか、美鈴は目を開き迎撃の構えをとった。同時に再生も止まったが、明らかに傷が軽くなっている。

何にせよこれで持久戦はできない。足を止めれば即座に回復される。そう結論付けたヴァルバトーゼは、決着するその瞬間までその足を止めないことを決意した。

それからの展開は、いささか単調だったと言えるだろう。

攻め手を決して緩めないヴァルバトーゼと、幾多の剣閃を捌き続ける美鈴。その繰り返し。決してヴァルバトーゼの刃が美鈴へと届くことはない。

だがそれも仕方ないと言えた。彼は美鈴に力や速さといった身体能力も、武術としての完成度も劣っているのだから。

特に技。その一点においてはヴァルバトーゼの膨大な経験においても、彼女を上回っていた者は少ない。

しかし交わされた拳と剣の数が幾百を超えようとも、戦局は停滞し続けている。無理に攻める必要のない美鈴と、攻め続けなくてはならないヴァルバトーゼでは前提からして対等ではない。それでもヴァルバトーゼとて美鈴の反撃を全て凌ぎ切っている。互角の攻防——そう評していいだろう。

ならば一見して絶大な彼我の実力差を埋めている何かを、ヴァルバトーゼが持っている

なければ道理に合わない。

そう、ヴァルバトーゼが唯一絶対的に美鈴に勝っているもの——それこそが、経験だった。

魔界に現存する悪魔において最多を誇るその交戦回数。おそらく幻想卿の妖怪では比較にもならないだろう。

ヴァルバトーゼはほぼそれ一つで、美鈴が持つ数々のアドバンテージと拮抗していた。

加えて彼女の用いる拳法が彼の知るところであつたことも大きい。そう、ヴァルバトーゼは激しさを増す闘いの中でほぼ完全に彼女の用いる拳法を思い出していた。人間が用いる武術の中でも極めて有名な拳法——その流派が一つ。達人特有の崩しが随所に見られるものの未知の武術を相手取るよりは余程まともに戦える。

例えばもしこれが幻想郷独自の空中機動を交えたものだつたなら、おそらくあつさりとは着がついただろう。ヴァルバトーゼの敗北という形で。

とはいえ現状でもとてもヴァルバトーゼが有利だとは言いがたいが。燃え尽きるまで走り続けなければならぬヴァルバトーゼと余力を残してそれを待てる美鈴では、大局的に見ればどちらが勝利を手にするかなど一目瞭然であつた。

そして、その時が訪れる。

「ぬ——」

間隙を縫うように放たれた美鈴の拳が、ヴァルバトーゼの右手から剣を払い飛ばした。強い痺れが右手を襲う。

大きく放物線を描いて飛んでいく剣を見送る暇もなく、美鈴がさらに一步懐へと踏み込んだのをヴァルバトーゼは視認する。

剣は触れてなければ干渉できないため、再現は不可能。今ならば転移が間に合うが、残存魔力を考えれば無駄な魔力は払えない。加えて転移で下がれば回復を許す可能性もある。だからといって回避しようにも、既にそれが許される猶予はない。結局防御が妥当に思えるが、彼女の拳法は『貫く』ことに長けていた。

ゆえに、残されるは一手のみ。ヴァルバトーゼは無事な左手を強く握る。

「終わりです」

「ち、い——！」

迫る美鈴の拳。それに合わせるようにヴァルバトーゼもまた拳を放った。

直後に、それまでとは違う骨の碎ける乾いた音が響く。

「ぐ、アツ……！」

苦悶の声はやはりヴァルバトーゼから。

威力をあえて殺さずに後ろへと吹き飛んだヴァルバトーゼは、地面に転がった剣を

拾つてから体勢を立て直す。

そんな彼の左腕は、肘から先が奇怪なオブジェのように捻じ曲がっていた。

だがそれだけで済んだと、ヴァルバトーゼは笑う。

とはいえ形勢はますます不利へと傾いた。戦闘続行こそできるものの、この左腕では先程までと同じ動きはできないだろう。

それだけではない。そもそも先の均衡が崩されたということは、双方の実力に開きが生じたということだ。

その要因は美鈴がヴァルバトーゼの闘い方に慣れたことだろう。

元より美鈴の武術を知っていたヴァルバトーゼに対して、美鈴にとつてのヴァルバトーゼとはまさしく未知であつた。

技に対して常に正しく対応されること。左右対応の奇妙な剣術。予備動作のない瞬間移動。最初こそそれらに翻弄された美鈴だが、並外れた洞察力を持つ彼女は既にそれらに適応しつつあつた。

もちろんヴァルバトーゼとて美鈴に対する慣れが徐々に生じてはいた。だがそれによつて埋まる差———いふならば伸び代に決定的な差が存在したのだ。

「まだ、続けますか？」

もし回復をする素振りを見せれば即座に転移で斬りかかるつもりだつたヴァルバ

トローゼだが、美鈴の行動は勧告であつた。

確かに趨勢は決したと、断言しても間違ひではないだろう。加えてこれが比武である以上続ける意義は薄い。

「フン、無論だ」

しかし、まだ一手。ヴァルバトローゼには切っていないカードが残されている。

負けを認めるならば、せめてその手でもう一博打——そう彼は考えた。

「そうですか。では」

不敵に笑うヴァルバトローゼに未だ勝敗は不明とみたのか、美鈴はそれ以上問い直すことはせずに構えを深くする。

同時に、ヴァルバトローゼは疾走した。機を伺うなど無意味と断じたゆえに。

一瞬で距離を縮める二つの影。一息で一足の間合いまでつめたヴァルバトローゼは、さらにもう一步踏み出そうとして——

「——そこまでです」

両者を分かつように、銀の光が煌いた。その先には一つのナイフが地面に突き刺さっている。

ヴァルバトローゼ、そして美鈴はその出所を辿るように一つの方向へと視線を合わせた。

そこにいたのは銀髪のメイド嬢。彼女は両者に向けて深々と頭を下げた。

「勝負の最中と知りながら、お邪魔しましたことについてはお詫び致します。私は十六夜咲夜。紅魔館のメイド長を務めております」

「それで、そのメイド長とやら何の用だ？」

問いかけるヴァルバトーゼの声は剣呑さを纏っている。勝負に水を差された彼の心情を考えれば当然と言えるだろう。

しかしそんな彼の態度に意を介した様子はなく、咲夜と名乗ったメイドは淡々と語った。

「お嬢様——紅魔館の主が貴方をお呼びしています。命令ですので貴方の否応を問わずに連れて行かなくてはならないのですが——それはそちらにとつても都合のいい話かと」

まるで話が掴めない。答えを求めて視線を彷徨わせると、美鈴もまた首をかしげている。彼女は何も知らないらしい。

何にせよもはや完璧に興が削がれてしまった。この状況では闘い直す気にもなれないと、ヴァルバトーゼは剣を納める。

「癪だが、キサマの言っていることは事実だ。よかろう、キサマの主の元まで連れて行くがいい。——というわけだ。この勝負、俺の敗北で構わぬ」

元より劣勢。ここで決着とするならばヴァルバトーゼの判定負けは明らかだった。だが美鈴は苦笑して首を振る。

「いえ、どちらにせよお嬢様の意向でしたら私も逆らえませんから。どちらが勝つかまだわかりませんでしたし、決着は持ち越しということでは」

そう語る美鈴の声には嘘がない。彼女は本気で、あれから自分が敗北する可能性はあつたと言っている。

だからヴァルバトーゼもまた、それを受け入れた。

「……そうか。ならば必ず、この決着はつけると約束しよう」

「はい。お待ちしています」

Stage 5 紅い闇の底で

「と、いうわけだ」

ヴァルバトーゼはチルノとの戦いや、紫との会話の詳細は省いた半日間の出来事を説明し終えた。

つまり彼が語った内容は、故郷へ帰れなかったこととその原因、幻想郷へ戻ってきた理由、紅魔館へきた理由。大まかにこの三つとなる。

きちんと筋道を通して話したため、疑問が生じる余地はない。そうヴァルバトーゼは思っていたのだが。

「どうしたのだ、揃って神妙な顔つきをして」

何故かレミリアと文の表情が硬い。

確かある話をしたあたりで、彼女たちの表情が変わったのだとヴァルバトーゼは記憶している。

だがさてそれは何の話だったか——その答えを得るよりも早く、レミリアが問いを投げた。

「ヴァルバトーゼ。一つ聞きたいのだけど、いいかしら」

「何だ」

「あなた、血を断っていると言ったわね。私の常識に照らすと、吸血鬼が血を断つなんて正気の沙汰とは思えないのだけど——何故かしら？」

隣に立つ文も小さく頷いて同意を示している。自己主張が小さいのは先ほどレミリアに怒られたからだろう。

成る程、そういうことか。確かにイワシを持っていた理由にあわせて、血を飲んでいないことも話している。疑問に思うのも無理はない。

「……まあ、よかろう。隠したい話というわけでもないしな」

ヴァルバトーゼは語る。

四百年ほど前に一人の人間と出会い、ある約束をかわしたことを。

そしてその約束が果たされずに死に別れたことを。

「で、それから四百年バカ正直に血を飲まずに生きてきたってわけ。——あなた、本物の大馬鹿者ね」

理由はわかったと、レミリアは結論を引き継いだ。

もつともまだ続きがあるのだが、確かに理由を話した以上無理に続ける必要も感ぜず、ヴァルバトーゼはレミリアに話を合わせた。

「そういう約束をしたのだからな。守るのは当然のことだろう」

「その結果あなたはチカラを失ったのよ？ 未練はないのかしら」

「——あるとも。俺がチカラを失ってさえないければ、と思ったことなどいくらでもある」
もしヴァルバトーゼがチカラを失っていないければ、先の断罪者事件において彼奴の小細工を全て力づくで叩き潰すことができただろう。人界魔界を纏めて地獄に墜として再教育することもたやすく行えた。この一件も特に奔走することなく転移して帰ることができたはずである。

そして何より——フェンリツヒに耐え難いほどの雌伏を強いることもなかったのだ。しかし。それでも。

「だが後悔はしていない。もし後悔があるとすれば、あいつを死なせた俺の甘さだけだ」

「……ふん、口だけは立派ね。——咲夜」

ぱちん、とレミリアは指を鳴らす。

数瞬の間において、音もなく咲夜が現れた。その手には紅い液体を揺らすグラスが一つ。

レミリアはそのグラスを咲夜から受け取ると、ヴァルバトーゼへと突き出した。特徴的な香りがヴァルバトーゼの嗅覚を刺激する。

その正体が何であるか、ヴァルバトーゼに理解できないはずがない。この液体は、イ

ワシすらも超えて馴染みが深いものなのだから。

「血か」

「そうよ。ところで、こういう話ならどうかしら。『あなたは私に無理矢理血を飲まされた』。これなら、約束を破ったことにならないんじゃない？」

「フン、話にならない」

ふざけた提案だと、ヴァルバトーゼは一笑に付した。

そんな形だけの理屈でヴァルバトーゼが納得するならば、既に彼のシモベが飲ませている。フェンリツヒもまた、同じような手管を用いたことがあるのだから。

だがレミリアとフェンリツヒでは一つ決定的に違う点がある。

「しかし解せん。何故、俺に血を飲ませようとする」

フェンリツヒには明確な理由があった。主に力を取り戻してもらい、共に野望を果たして欲しいという。

ではレミリアの理由とは何か。

「そう難しいことじゃないわ。あなたが戦ったうちの門番、美鈴は決して弱くないの。いかに吸血鬼とはいえ、チカラを失つてはまともに勝負になるはずがない。でもあなたは違った。なら、チカラを取り戻したときはどれほどになるのか興味があるのよ。……まあ別に、断るならそれはそれで構わないわ」

そう言いながら、レミリアは笑った。

大きく大きく口を裂いて、牙を剥き出しに。幼い容姿にそぐわない邪悪な凶笑。

「——力づくで、飲ませるから」

直後、レミリアから紅い魔力が噴き出した。空間が軋むほどの大魔力。これまで幻想卿で対峙してきたどの妖怪よりも強烈な奔流が、ヴァルバトーゼの肌を鋭く刺す。

あるいは、並の悪魔ならばこれで屈服してしまうだろう。恐慌して襲い掛かるかもしれない。

だがヴァルバトーゼの心中は、眼前の暴虐さにさざ波一つ立てていなかった。あるのはただ一つ、懐古の念のみ。

少なくともヴァルバトーゼの知る限り、故郷では己以外の吸血鬼が現存していない。

ゆえにレミリアが放つその紅い魔力は、己がチカラを失って以来始めてみるものだった。

なればこそ——

「断る」

「……何ですって?」

ヴァルバトーゼに怯む理由はない。

何故なら今の彼の立場が、過去のさかしまであるゆえに。

かつてはレミアアの位置に彼がいて、彼の位置に敵がいた。

確かに現在、彼我の戦力比は膨大。魔力量という一点だけで見ればまさしく巨像と蟻の例えに等しい。

それだけではないかと、ヴァルバトーゼは口元を歪ませる。

そんなことは過去の戦いで腐るほどあった。彼が、強者という立場で。それでもなお立ち向かってきた輩を、彼は蹂躪してきたのだ。

ならばどうして、ここで怯むことができるというのか。

「断ると、そう言った。キサマに一つ教えてやろう。俺がこの世で恐れるモノはただ二つ。イワシの小骨と——約束を違えることだけだッ！ 力で俺の意思を折れると思うなッ！」

剣を抜き、即座に構える。少ない魔力を全て肉体活性に注ぎ込み、レミアアの一挙手一投足を注視する。

気を抜けば、次の瞬間には消し炭になりかねない。ただでさえ、美鈴戦のダメージが抜けきっていないのだから。

ならば交戦した場合、どのような手をとるか。そこへ思考が伸びたとき、一つのことを思い出す。イワシの頭——先程のトラブルを。

そう、こちらの吸血鬼には弱点が存在する。そしてその最大の弱点は当然——

その瞬間、紫の助言が脳裏を掠めた。彼女はこの展開を読んでいたのかもしれない。方針が決まり、より一層ヴァルバトーゼの集中力が増した。狭窄化した彼の視界からはレミリア以外の存在が消滅している。

手か、足か、魔力か。極限まで引き伸ばされる時流の中で動いたのは、そのどれでもなかった。

「いいわ」

「……何？」

言葉とともに、紅い暴威が止んだ。

何がいいというのか。訝しむヴァルバトーゼに、レミリアは笑みを返した。先程までの悪意に塗れたそれではない。

まるで、もうその気がないと言っても言うように。

「あなた、元の世界へ帰るためにうちの魔法使いに用があるんでしょ？ 便宜を図ってあげるわ。当然、対価は要求するけどね」

「……どういふつもりだ」

不可解だと、ヴァルバトーゼは思う。

確かにレミリアには己への害意があった。返答次第ではと、その意を感じたのだ。

「私はね、あなたの話を全般的に信じていなかった。もちろん、吸血鬼であることもね。」

だからあなたを信用するに値するか、試したのよ」

レミリアは手元のグラスを口へ運び、瞬く間に飲み干した。

すると彼女の魔力が脈動する。その現象をヴァルバトーゼは知っていた。

「見ての通り、血を飲めば妖力が活性化するわ。チカラを失っているというあなたならこの比じゃないはず。だからあなたに血を飲ませることができれば、吸血鬼か否かを判断することができる」

「だが俺は血を飲んではいない。結局、是非がわからぬままではないか」

「いいのよ、それで。だって飲んでたら、叩きのめしていたもの」

さらりと、レミリアは先の発言を翻した。とはいえよくよく考えてみれば、確かに彼女は飲んだら何もしないとは言っていない。

ではレミリアは一体何がしたかったのか。いまいちその目的がヴァルバトーゼには掴めなかった。

「話が見えんな」

「肝心なのはあなたが信用できるか、ということよ。あなたの話が真実なら、あんな脅しで四百年守った約束を破るわけがないでしょう。その場合あなたは信用に値しない、ということになるわ」

成る程道理だと、ヴァルバトーゼは頷いた。

「でもあなたは断った。この場合重要なのはその理由よ。吸血鬼ではないとバレルことを怖れてのはったりなのか、約束を守るためなのか。結局最後は自分の判断に頼ることになったけど——」

そう言いながら、レミリアは苦笑する。

「あなたは嘘をいつていない。そう見えた、自分の目を信じることにしたのよ。……おかしいかしら？」

「……いや、おかしくはないな」

おどけたように笑ったレミリアに、ヴァルバトーゼも薄く笑みを返した。

「だからあなたを、紅魔館の正式な客人として認めましょう。改めて歓迎するわ」

「そうか。それはありがたい」

そこでふとほう、と吐息がヴァルバトーゼの耳を叩いた。

見ればほっとした様子で胸を撫で下ろしている文がいる。

一触即発。あわや殺し合い。そんな場に巻き込まれた彼女にしてみれば当然の安堵というべきだろう。

「ところで、対価とは何だ？」

前置きが長くなったが、本題はこれからだ。

ヴァルバトーゼはまだ、交渉のテーブルにいただけに過ぎないのだから。

「友人に紹介する。その程度のことには法外な要求をするつもりはないわ。そうね……」
言いつつも、レミリアは悩んでいるようだった。髪先をいじり、思案に更けている。
十秒ほどそうしていただろうか、ふいに視線を戻して彼女は口を開いた。

「将来、チカラを取り戻すことができたなら私に会いに来なさい。それでいいわ」

「……確かに帰ることができれば遠くない未来にチカラを取り戻すことができるだろうが、いいのか？」

後払いかつ無期限。それは余りにもヴァルバトーゼに有利な条件だった。実質、対価などなきに等しい。

しかしその確認の問いに対して、レミリアは額に指をあてて一粒の汗を流していた。

「……どうした？」

「どうした、じゃないわよ。チカラ……取り戻せるの？」

レミリアは頬をひくつかせてヴァルバトーゼに問う。

何がおかしいのかと疑問を抱きながらも、ヴァルバトーゼはそれに頷いた。

「うむ。約束を履行すればいいだけだからな。それに我がシモベが——」

「待ちなさい」

言葉が遮られる。

レミリアの額には青筋が浮かんでいた。苛立たしげにヴァルバトーゼへ問う。

「例の人間は死んだんでしょう？ どう果たすのよ」

「ああ、そう難しい話ではない。先の話には続きがあつてな——」

ヴァルバトーゼはその人間——アルティナが天使となつて再び彼の前に現れたことを話した。

しかしどうやら両世界間における死後の概念は大分違うものであつたらしい。話を聞いた三者は——今まで全く表情を動かさなかつた咲夜でさえ、驚きを浮かべていた。

「……色々言いたいことはあるけど、無茶苦茶ね」

「同感です」

主従揃つて呆れたようにため息をつく。

だが世界の違いに驚いたのは彼女らだけではない。

「俺も驚いたぞ。もしやとは思っていたが、まさかプリニーが存在せぬ世界があるとはな」

「そういうえば昨日と、さつきもプリニーがどうか仰つていましたね。何ですか、プリニーって？」

疑問の声を上げたのは、やはりというか文だった。

記者の性でもいうべきか、未知への興味が強いのだろう。

「ああ、プリニーとはな——」

「はいはいそこまでよ」

二回、手を打ち合わせてレミリアが話に割り込む。

「そういう疑問を解決していたらいつになるかわかったもんじゃないわ。というか文、あなた何回言えばわかるのかしら？」

「……返す言葉もありません」

しょんぼりと、肩を落とす文。

身長では明らかに文の方が高いはずなのだが、縮こまった彼女はレミリアよりも小さく見えた。

「ヴァルバトーゼには悪いけど、私はすぐに帰れるようになるとは思えないわ。しばらく幻想卿にいることになるでしょう。だから今度、機を改めて聞きなさい」

「はい、そうします……」

さて、と前置きしてレミリアはヴァルバトーゼへと向き直す。

「ヴァルバトーゼ、早速うちの魔法使いに会いに行きましようか」
「わかった」

「では私はこれで。レミリアさん、今日は色々ご迷惑をおかけしました」

そう言つて、文はぺこりと頭を下げる。

それにレミリアは薄く笑った。

「まあ、あなたから話を聞いてなければこう面白いことにはならなかったわ。だから今回に限っては気にしなくていいわよ。今後、面白い話なら歓迎するわ」

「はい、その際はよろしくお願いします」

「咲夜、見送りよろしくね」

「かしこまりました。では射命丸様」

部屋の扉を開け、咲夜は文を促す。

それに文は頷きながらもヴァルバトーゼの方を向いた。右手は人差し指を掲げて、左手は腰に当てるとヴァルバトーゼに念押しをする。

「ヴァルバトーゼさん、今度絶対詳しく話を聞かせてもらいますからね？」

「フ……よかろう、好きにするがいい」

「はい、そうさせて頂きます。では」

「うむ。また会おう」

退室する文を見送ると、レミリアが動いた。

「じゃ、私たちも行くわよ」

「うむ」

こつこつと、二つの足音が下へ下へと降りていく。その場所には窓がなく、僅かな照明がぼんやりと二人の吸血鬼を照らしていた。

彼らが向かっている場所は、件の魔法使いがいるという紅魔館地下にある大図書館。

その魔法使いはここ紅魔館では珍しくレミリアと対等の存在らしい。曰く友人だとか。

色々と頼みごとを引き受けて貰う代わりに、地下の一部を住まいとして提供していらしい。幻想卿への『引越し』もその一つだとレミリアは語った。

「外観に反して、この館は広いな」

歩きながら、ふとヴァルバトローゼは違和感を零す。彼の方向感覚は、既に幾度か館の敷地外へ出ていることを告げていた。

あるいは錯覚かとも疑ったが、レミリアがそれを否定する。

「当然よ。館の空間を広げているもの」

「ほう、そんなことができるのか」

「あら、そつちはそういうことできないの?」

「さあな。やろうと思えば出来る奴もいるのかもしれないが、生憎と俺はその方面に詳しくないのでな」

ヴァルバトローゼは空間操作の専門家ではないため、これがどれほどの技術なのか判別

つかなかった。

そもそも、彼の世界には既存の空間を拡張するという発想がない。亜空間が多く次元間移動が比較的容易な彼の世界では、空間の不足がそもそも起こりにくいからだ。

「ふうん、そう。……つと」

レミリアは相槌を打ちながら、唐突に足を止めた。長い廊下の途中。彼女が足を止めた右手には、大きな両開きの扉があつた。

「着いたわ。ハハハよ」

レミリアは大扉にある二つの取っ手を左右の手でそれぞれ掴むと、そのまま押し開けていく。

その身に秘める力を考えれば当然なのだが、小さな体躯で苦もなく大扉を開く光景はいささかシユールといえるだろう。

そのまま中へと進むレミリアに、ヴァルバトーゼもまた続いた。一步踏み入ると、途端に紙の匂いが鼻をくすぐる。

「ほう」

中を一瞥したヴァルバトーゼは、興味深そうに吐息を零した。

広い。おそらくここも空間を広げているのだろう。前後左右もそうだが、凄まじく天井が遠い。

だというのに大して開放感を感じないのは、やはりこの空間を埋めているある存在があるからだろう。

すなわち本。大図書館とは伊達ではないようだ。本、本、とにかく本。広大な空間全てを使って本棚が存在しており、その全てにぎつしりと本が詰め込まれている。それでもなお足りないのか、壁にも棚が埋め込まれ、天井からも棚が吊り下げられていた。

そんな場所に、本以外のものがあれば嫌でも目が向くだろう。

部屋の奥、その片隅に人影が一つ。その人影——少女はロッキングチェアに座って一冊の本を読んでいた。

そんな彼女に、レミリアは近づいて声をかける。

「はあい、パチエ」

「……あらレミイ、どうしたの？」

読書に集中していたのだろう。ワテンポ遅れて、ようやくパチエと呼ばれた少女はレミリアの方へと顔を向けた。

彼女こそがおそらくは例の魔法使いだろう。

何故なら細い。筋肉も脂肪も見えないその体つきは、魔法を専門とする手合いによく見られる体型だ。

あるいはただの人間という可能性もあるが、静かに揺らめく力強い魔力がそれを否定

していた。

「ちよつとあなたに頼みたいことがあつてね」

「ふうん。……そつちの妖怪に關係あるのかしら」

ちらりと、少女はヴァルバトーゼの方を見る。

「流石、話が早いわ。——ヴァルバトーゼ、彼女がお探しの魔法使いよ」

レミアアの紹介に、ヴァルバトーゼは一步前に進み出た。魔法使いの少女もまた、応じる形で本を閉じる。

「ヴァルバトーゼだ。優れた魔法使いがここにいると聞いてな、協力を請いに来た」

「パチュリー・ノーレッジよ。よろしくするかどうかは、貴方の話次第ね」

抑揚のない声で、パチュリーはそう告げる。その表情はどんな感情の色も示していなかった。

もつとも魔法使いとは往々にしてそういう者が多い。特に探求を目的にしている場合は、その興味関心を全て魔法へと注ぎ込んでいるため、それ以外のことなどどうでもいいというタイプが多いのだ。

「……そうだな。まずは事情を話さねばならんな」

ヴァルバトーゼはもはや何度目になるかわからない経緯の説明をした。

例によってパチュリーも驚愕あるいは懐疑の念を見せるかと思つたのだが、その予想

は裏切られる。

最後まで淡々とした様子を崩さずに話を聞き終えたパチュリーは、あつさりと頷いたのだ。

「事情は理解したわ。貴方の世界の魔導書を持つてくると確約するなら、引き受けてもいいわよ」

「……やけにあつさりと信じるのだな」

納得のいかない表情を浮かべるヴァルバトーゼに、パチュリーは呆れたように言う。

「別に貴方の話を疑ったところで確かめようがないじゃない。だから私は、貴方を紹介したレミイを信じたのよ」

それはまるで先程のレミリアを彷彿させるような言葉だった。レミリアは自分自身を、パチュリーは友人をという違いはあるが、つまりは己が信じるものを信じたということだろう。彼女らが友人だということのも領ける。

「……そうか。ではその条件で頼もう」

「わかったわ」

こうして拍子抜けするほどあつさりと、契約は成立した。

だが問題はここからだ。はたしてパチュリーの手ほどきを得て、ヴァルバトーゼは故郷へと帰ることができるのか。

「じゃあ早速、始めましょうか。最初に、貴方の転移の仕組みを見せて貰うわ」
「俺は何をすればいいのだ」

「適当に転移してみて。この部屋には解析用の術式を張り巡らせているから、それだけで貴方の転移がどうなってるのかわかるわ」

「把握した」

求めに応じ、ヴァルバトーゼは一メートルほど後方に転移。

眉を顰めるパチュリーに、レミリアが問う。

「で、どうなの？」

「少し待って。……というかレミイ、貴女こそ何でまだここにいるの？」

「することないし」

「……暇人ね」

肩をすくめて、パチュリーは呟いた。

ヴァルバトーゼも内心で同意する。

「まあいいわ。で、ヴァルバトーゼ……でよかったかしら？」

「うむ」

「今度は部屋の外へ転移してみてください？」

「よかろう」

これで何が変わるのかさっぱりだったが、理由など後で聞けばいい。

ヴァルバトーゼは疑問を捨てて、転移を発動した。視界が途切れ、景色が切り替わる。特に失敗する理由もなく、ヴァルバトーゼは大図書館の入り口へと現れた。赤い絨毯の敷かれた、長い廊下。ヴァルバトーゼの右手には大図書館への扉がある。

こんな場所に長居する理由があるわけもなく、ヴァルバトーゼは扉の取っ手へと手を伸ばした。

「——ねえ、そこのあなた」

だがそんな彼を呼び止めるように、声がかげられる。

幼く高い——そんな印象を抱きながら振り返れば、やはりそこには相応のシルエットがあつた。背丈の程がレミリアと同じ程度の少女。

そう思わずレミリアを例えに出すほど、その少女はレミリアを連想させた。見た目だけで言えば確かに違う。左右で結えた金の髪、あどけなさの残る勝気な目つき、そして何よりも背中とのソレだ。

もしソレがレミリアと同じようなコウモリ系の翼だったなら、ヴァルバトーゼは彼女をレミリアの血縁と断じただろう。

しかし違う。彼女のソレは決してそのようなものではなかつた。

黒い枯れ枝のような、いわゆる翼手の部分。それはいい。

だがその下にあったのは、皮膜でも羽毛でもなかった。

石だ。水晶のような菱形の石が左右七つずつ、まるで吊り下げられているかのように浮いている。

そしてその石は、左右それぞれ虹の七色を振り分けられていた。

「……誰だ？」

問いを投げたヴァルバトーゼの声は硬い。その理由は彼自身も明確に掴んでいなかった。

この場にいる以上、紅魔館の関係者であることは間違いない。おそらくはレミリアに近しい存在のはずだろう。ならば警戒する必要などどこにもないと、冷静な思考はそう告げている。それでも、本能は警鐘を鳴らし続けていた。

——危険だ、と。

「あなたって、男？」

そんなヴァルバトーゼの内心とは裏腹に、少女は無邪気に問いを投げてきた。

質問に質問で返されことに顔を顰めつつも、ヴァルバトーゼは律儀に答える。

「そうだが、それが一体——」

「じゃあ」

少女はヴァルバトーゼの言葉を遮り、口の両端を吊り上げた。それはまるで黒い三日

月のように。

彼女はゆっくりと右手を前へと伸ばしていく。

「コワしても、いいよね——？」

「っ——!?!」

刹那、おぞましいほどの悪寒がヴァルバトーゼの背筋を駆け抜けた。

そしてその直後、三つの音が連続して響く。

一つ目は、ヴァルバトーゼの両足が絨毯を蹴った音。彼自身、遠のく少女を見て初めて己が飛び退いたことを自覚した。

二つ目は、ヴァルバトーゼの両足が絨毯を擦った音。この間少女は何もしていない。あえて言うならば、右手を握ったぐらいだろう。

そして三つ目。

その発生源は彼の足元。重く鈍い音が、絨毯を叩いた。まるで、何かが落ちたような

「——」

そこにあつたものに、ヴァルバトーゼはその両目を大きく見開いた。

一見すればそれはただの黒い棒。よく見ればその先端は白い布で包まれており、さらに細い棒が五つ伸びている。

それはまるで黒い袖を通して、白い手袋をつけた腕のよう。

否。それはまさしく――

「バ、カナ……ッ」

紛うことなく、彼の左腕だったのだから。

第三話 歩み止まりて

Stage 1 プリニーぷりちー

太陽が頂に座した頃、霧のかかった湖の近くで激しい弾幕が飛び交っていた。

かたや氷の弾幕、かたや——イワシの弾幕が。

『『ヘイルストーム』っ！』

チルノの宣言とともに氷柱の雨が降り注ぐ。

その中心にいた一つの影——ヴァルバトーゼは大地と空間を足場に跳ね回って回避を続けていたものの、ついぞかわしきることなく氷槍をその身に受けた。

残機零。ヴァルバトーゼの敗北である。

「……俺の負けか」

「あたいの勝ちだ！ でも、今日は大丈夫そうね！」

「うむ。前言の通り復調している」

前言とは昨日チルノとスペルカードルールでの一戦目を終えたあとに交わした言葉だ。

その時のヴァルバトーゼの動きは著しく精彩を欠いており、それをチルノが指摘した

のである。

否定する意味がない程度には動きが酷かったもので、ヴァルバトーゼは素直に頷いた。するとチルノは勝負の終了を宣言したのである。

以前の対戦回数を思い出し、チルノが満足しているはずがないと思つたヴァルバトーゼは異議を唱えたものの、怪我人や病人をなぶる趣味はないとチルノは告げた。

その言葉にヴァルバトーゼは引き下がり、明日には回復しているとチルノに答えたのである。

そして今日、自身の調子に問題がないことを確認したヴァルバトーゼは約束通りチルノと弾幕ごっこをしているというわけだ。

「じゃあもう一戦、いくよー」

「うむ。次は勝たせてもらおうかー」

既に両手の指を余らせる程には続けているが、昨日できなかったこともあつてチルノはまだまだやるつもりらしい。

それだけの回数を経て、なお勝てていないヴァルバトーゼとしても望むところではあるのだが。

ちなみに今日は妖精の観客が多い。

一部はチルノが呼んだみたいだが、その多くは氷とイワシが飛び交う珍妙な光景に惹

かれて現れたのだと思われる。

そしてそれからも幾度か対戦を繰り返し、その全てをヴァルバトーゼの敗北で終えた頃、一陣の風が吹き抜けた。

風がやむのと同時に、一人の少女が姿を見せる。

「どうも、毎度お馴染み射命丸です」

「あ、新聞書いてる天狗だ。さてはあたいの最強すぎる戦歴を聞きつけてインタビューにきたんだな！」

ふふん、とチルノは腰に両手をあてて胸を張った。

確かに対ヴァルバトーゼに限ってはチルノは全勝なので、あながち言っていることは間違っていないが。

「いいえ、違います。……というか、もう目的は果たしたようなものなんです」

そう答える文の表情は暗い。さっぱり見当はつかないが、意にそぐわないことがあったようだ。

ため息をつきながらヴァルバトーゼの方を見る。

「まあでもいい機会ですし、ヴァルバトーゼさんに話を伺おうかとも思っているのですが……まだ続けますか？」

当然、勝負のことだろう。

ヴァルバトーゼとしてはどちらでもよかった。

「チルノ次第だな」

「んー、いいタイミングだしこれで終わりにしよう。結局アンタあたいは勝てなかったし、また明日ね！」

どうやら、勝てるまで毎日戦わなくてはならないらしい。

しかし遊びの戦いとはいえ、敗北の代償としては十分安い。ヴァルバトーゼは頷いた。

「うむ、ではな」

「じゃあね！」

元気よく別れの挨拶を告げたチルノは、ある妖精の一団の方へ飛んでいった。おそらくは友人なのだろう。

そんな彼女を見送り、ヴァルバトーゼは文の方へと振り向いた。

「ところで、キサマは何しにきたのだ？ 俺に用があつたわけでもないのだろうか？」

「ええ、まあ」

そう答える文の歯切れは悪い。

一つため息を吐くとようやく話を切り出した。

「実は樫が『麓のほうで魚の大群が空を飛んでいる』とか言い始めたので、確かめにきた

んですけど」

「ああ、これのことか」

ヴァルバトーゼは反射的に心当たりへと手を伸ばす。

弾幕カード。『魚強』と書かれたそれにヴァルバトーゼは魔力を流した。

直後、文の頭上数メートルの高さに数十尾のイワシが出現。間髪居れずに降り注ぐ。

「え、ちよつ。ひゃあ!」

造形がリアルなそれに生理的な恐怖でも感じるのか、文は表情を歪めて必死に避ける。

とはいえ流石は幻想郷の天狗というべきか、狼狽こそしていたものの全てのイワシ弾を回避した。

「な、何するんですか!」

「別に当たっても害があるわけでもなからうに」

「それは、そうですけど……」

げんなりした様子で肩を落としている文。

その様子は、イワシ弾のせいだけではないように見える。

「どうしたのだ」

「いやあ、実は山を出る前に棍を散々バカにしてきたんですよ。そんなのあるわけない

じゃないですかって」

以前二人が顔を合わせたときの様子を思い出し、ヴァルバトーゼは納得した。

けなした相手が正しかったというのであれば落ち込む気持ちはわからなくもない。同情の余地はないが。

「自業自得というほかあるまいな」

「全くです」

苦笑しながら、文は頷いた。

「しかし、椀の視力は大したものだな。山の上から弾幕の仔細を見抜けるとは」

「椀なら千里先でもモノが見えるでしょうから」

「……ほう？」

誇張でないのなら、凄まじい視力である。

彼の住む魔界においてもそこまでの目をもった存在がいるかと問われれば頷けない。

「まあ、それはおいといてですね。先日の約束通り、色々話を聞かせてもらってもいいですか？」

文は手帳とペンを取り出して、ヴァルバトーゼに問いを投げる。

断る理由はなかった。約束をしたのだから当然である。

「何でも聞くがよい」

「じゃあ、お言葉に甘えて。えーっと、プリニーって何ですか？」
至極簡単な問いだった。

魔界天界における常識であり、そもそもヴァルバトーゼはプリニー教育係である。
悩む素振りも見せずに彼は答えた。

「罪を犯して死んだ人間の魂が、その罪を償うためにペンギンの被り物をした姿のこと
だ」

「ごめんなさい意味がわかりません」

ヴァルバトーゼとしてはこの上なく適切な説明をしたつもりだったで、少し頭を捻
る。

仕方がないので、もう少し詳しく説明することにした。

「俺の世界では人間は死んだ後に生まれ変わることになる。輪廻転生といったか、こち
らはどうなのだ？」

「ええ、まあそこらへんはこちらも変わらないですけど」

「だが生前に罪を犯した人間はそうはいかぬ。その罪の償いをしなくては転生ができぬ
のだ」

「その意味も理解できます」

「そのためには天界で善行を積むか、魔界で労働の対価に金を得なければならぬ」

「……はあ」

「そこで地獄のプリニー生産工場で腐った牛の皮をペンギンの形に模って魂に被せて――」

「ちよつと待つてください」

「何だ」

「話が飛躍しすぎじゃないですか!?! 何ですかプリニー生産工場って! ていうか腐った牛の皮ってどういうことですか!?!」

「ちゃんと臭いは消しているぞ」

「そういうことじゃありません! そもそも天界と魔界での方法に差がありすぎですし、何にしたってどこにそんな被り物する必要があるっていうんですか!」

ぐあー、とまくし立てる文。

今にも飛び掛ってきそうな彼女をヴァルバトーゼは手で制した。

「落ち着け。理由はある」

「……一応、聞きましょう」

「天界にせよ魔界にせよ、罪を償う手段をとるためにはある程度まともななりをしてなくてはならぬ。これはわかるな?」

「ええ、まあ」

「だが十全の能を与えるわけにもいかぬのだ。生前の姿にすること自体は難しくないのだが、蜂起されては面倒なのでな。三界のバランスが崩れかねん」

ヴァルバトーゼの仲間に、風祭フーカという少女がいる。

彼女はプリニーの皮が足りないという非常事態下において、そのままを再現された。

しかしその実体は魂という強烈な力の塊を人の形に変えただけに過ぎない。

結果として、彼女はただの中学生という立場にありながら魔界の悪魔と渡り合うことができた。無論、理由の一つに畏れエネルギー供給の減少における魔界悪魔の弱体化があったことは確かだが。

しかし天魔両界において最も数の多い種族が人間の魂である以上、これは看過してよい事実ではないのである。

「そこで着ぐるみ用いて、ある程度制限を加えることにしたということらしいな」

流星は現役プリニー教育係というべき知識で、ヴァルバトーゼは解説を終えた。

ちなみにプリニーを投げると爆発するのも、反乱防止の一貫である。

「……ちなみに、なんでペンギンになったんですか？」

「それは実際に見てもらおうのが一番いいのだが——ふむ、試してみる価値はあるか」

一つ頷いて、ヴァルバトーゼは白いカードを取り出した。

そして目を瞑り、そのカードに魔力を流す。すると数秒後気の抜けそうな音と共に、

そのカードへ文字が刻まれた。『ぶりちー』と。

ヴァルバトーゼはそれを確認すると笑みを浮かべて、カードをかざして叫んだ。

『プリニー召喚』ツ！

スペルカードは正しく効果を発揮し、彼らの眼前へと全容を見せる。

体長は五十センチほど。悪魔のような羽を背中に小さく生やし、体躯と比較して大きなウエストポーチをつけていること以外はまさしくペンギンであった。着ぐるみであるため随所にデフォルメが見受けられるが。

びしっ、と敬礼の構えをしたままそれは——プリニーを模したスペルは動かない。

「どうやら成功したようだ。イワシを作れるのだからあるいは、と思ったが。便利なものだ、このカードは」

このちっぽけなカードに組み込まれている術式はまさしく至高と呼べる領域にあるだろう。

八雲紫は自身が開発したと言っていたが、そうであるならば彼女の評価を上げなくてはならない。

「ともあれ、これがプリニーだ。何か感想はあるか」

「……こう、なんていうか。いじりたくなりますね」

そう言う文はプリニーもどきに近づいてつつつき始めた。にやにやと笑っている。

「それが理由だ。最初こそ様々なデザイン案があつたらしいがな。天使にウケるが悪魔にウケない。あるいはその逆が殆どだったらしい」

天界の住人と魔界の住人はやはりというべきか嗜好に大きな差がある。

天使側からは清らかなイメージの案が出され、悪魔側からは化け物ちつくな姿の案が出される。天使側の案は悪魔に受け入れがたく、悪魔側の案は天使に受け入れがたかつた。

そんな中雷鳴の如く現れたのがこのデザインだったという。

「天使には単純に愛らしいと評判になり、悪魔からは嗜虐心をそそられると好評を博してな。以来その姿に統一されている。ところで文」

数歩後退しながら、ヴァルバトーゼは声を投げた。

しかし文はプリニーに夢中で少し反応が遅れる。

「……あ、なんですか?」

「そろそろ爆発するぞ」

忠告したものの、時すでに遅く。

軽い爆音とともにそのプリニーが炸裂した。

ぺたんと地面に座り込んだ文へ、ヴァルバトーゼは説明をする。

「どうやら仕様上『弾幕』の永久展開はできぬらしくてな。指示を出すか時間がくれば自

爆するようにしておいたのだが、言っておくべきであつたか」

当然だが文にダメージはない。

しかし爆風や衝撃自体は小さいものとはいえ存在する。それに驚いたのだろうか、彼女は放心した様子を見せていた。

少しの間をおいて、ようやく何が起きたのか理解できたらしい、文はヴァルバトーゼを睨んだ。

「今度からは非そうして下さい。……ともあれ、話を聞く限り以前言っていたプリニー教育係とは」

「うむ、人間の魂であるプリニーには魔界や天界の常識が存在せんのでな。それを出荷前に教え込むのがプリニー教育係の仕事だ」

全くの余談ではあるが、ヴァルバトーゼ印のプリニーはよく働くと評判である。

悪魔らしからぬ熱心な教育を施していることの証左だろう。

「……なんか、ものすごい下働きっぽい感じがするんですけど」

「魔界でなりたくない職業ランキング堂々の一位だからな。当然だろう」

「いや、そこで胸を張られても困るんですけど」

「まあ世間ではそういう評価を受けているが、別に俺は厭うてはおらぬ。実にやりがいのある仕事だからな」

毅然と語るヴァルバトーゼの目に嘘はない。

彼は質の落ちた人間の魂に再教育を施すことに悪魔としての使命感を持って望んでいたし、そんな己に付き従うプリニーたちは決して嫌いではなかった。

そんな彼の態度に、文は神妙そうに表情を変えたと軽く頭を下げる。

「……なるほど。失礼しました」

これにはヴァルバトーゼが驚いた。

文の目は真剣だ。彼女は本気で謝っている。

「別に頭を下げるこの程でもなからう」

「いえ、私も新聞記者というだけで謂れない中傷をうけることがあるので」

確かにその職業の特性上、他の職種よりも批判や中傷を受けることが多いだろう。

それを理解したヴァルバトーゼは目を伏せて頷く。

「……そうか。ではその謝罪、受け取っておくとしよう」

「そうして下さい。……そういえば貴方がここにいるということはまだ帰ることができないみたいですけど、あれからパチュリーさんの協力は得られたんですか？」

「うむ。まあ、トラブルはあったが概ね問題はない」

ちようど、この話が終わったらパチュリーを訪ねようと思っていたところでもあった。

だが文はその事実よりも、その前の言葉が気になったようで首を傾げて問いかけてくる。

「トラブル、ですか？」

「ああ、左腕を落とされてな」

前腕部を指差しながら、ヴァルバトーゼは答えた。

当然今はくつついているが。ちなみに昨日チルノとの戦いの際に不調だった理由もこれであつた。

流石に千切れた腕を繋げて全快となると、今のヴァルバトーゼでは一日以上かかる。

結局あれから丸一日半、昨夜未明にようやく全快となつた。

「……だ、誰にですか？」

「フランドール・スカーレット、といったかあの小娘の名前は」

パチュリーに一度聞いたただけではあるが、間違つてはいないはずである。

その証拠に、目の前の文の表情が変わつた。納得の色。

「その様子だと知っているようだな、ならば話が早い。どうやら俺は出会いがしらにやられたらしい」

「実際に会つたことにはないですけどね。……つて、やられた、らしい？」

「うむ。未だに何をされたのかすら理解できておらぬ。気づいたときには腕が落ちてい

た。よもや何かをされたことにすら気づけぬとはな」

気づいたときには攻撃を受けていた。そういうことはヴァルバトーゼの過去の闘いにおいて幾度もある。

だが攻撃を受け、ダメージを負ってなお、それを自分の目で見るまで気付かなかったことは記憶の彼方にすら存在していない。

流石は別の世界、とでもいうべきだろうか。今思い返しても感じるあの非常識さにヴァルバトーゼは笑みを浮かべた。

そんな彼に文から疑念の視線が注がれる。

「……怒ったりはしないんですか？」

「何にだ？」

「いやだって、理由もなく殺されかけたようなものじゃないですか」

「それは俺の立場での話だろう。奴にしてみれば少しちよっかいを出したようなものに過ぎぬかもしれん」

なぜならば、あの時のフランドールには殺意どころか敵意すらも感じなかったのだから。

それよりも触れられて崩れる我が身の脆弱さを恥じるべきだと、ヴァルバトーゼは思っている。

「でも、よくそれだけで済みましたね」

「レミリアが止めた。近くにいたのでな。でなくば……さて、どうなっていたか」

あの瞬間、間違いなく死が間近にあった。

撤退ならば可能だったと思っっているが、それでも相応の深手を覚悟しなくてはならなかっただろう。

「……というか、何で襲われたんですか？」

「さあな」

「聞いてないんですか!？」

「うむ。レミリアが今度説明すると言っていたのでな。焦って問い質しても仕方あるまい」

それがどうしたと言わんばかりのヴァルバトーゼの態度にか、文は呆れたようにため息をついた。

かぶりを振って、話を変える。

「……わかりました。じゃあ——」

それから、文の取材は小一時間ほど続いた。

Stage 2 千カラの秘密

レミリアの部屋で、二人の吸血鬼がティーテーブルを挟んで腰を下ろしていた。当然、レミリアとヴァルバトーゼである。

レミリアは手に持ったカッツプを置くと、気遣わしげにヴァルバトーゼへと口を開く。「もう腕は大丈夫なのかしら」

「ああ、問題ない」

軽く左腕を動かしてみせながら、ヴァルバトーゼは答えた。

チルノとの弾幕ごっこもこなせたように、既に行動に支障はない。

「そう。……先日のごめんなさいね。不肖の妹に代わってお詫びするわ」

「気に病むことはない。あの短時間で腕を落とされた俺が脆かっただけだ」

己とフランドールとの間に隔絶とした実力差がなければこんな大事にはならなかったと、ヴァルバトーゼは思っている。

ゆえに本心からの言葉だったのだが、その言葉を聞いたレミリアは苦い顔をしていた。まるで原因はそうではないと言いたげに。

「そのことだけど……あなたは『能力』というものがどういうものか知っているかしら

「？」

「……………いや、さっぱりだ」

言葉の意味だけなら当然わかる。

だがレミリアが述べているのはそういうことではないのだろう。ピンとくるものになかったヴァルバトーゼは素直に首を横に振った。

そんな彼にレミリアは一つ頷くと、能力の説明を始める。

「こちらの世界では殆どの妖怪や一部の人間が備えているものなんだけどね。河童が水を操ったり、天狗が風を操ったり、吸血鬼が血を操ったり——呼吸をするように容易く行使できるチカラの総称よ」

「……………それは、当然のことではないのか？」

「そうね。確かに殆どは自分の種族に則したものよ。でも稀に例外がいるの。例えば——咲夜は時間を操ることができるわ」

「……………何だと？」

言葉の意味を咀嚼しきれずに、ヴァルバトーゼは瞠目した。冷静に言葉を反芻させてる。レミリアはなんと言ったのか。

十六夜咲夜は時間を操作することができると、そう言ったのだ。

だが咲夜はただの人間だとヴァルバトーゼは聞いていた。いや、例え妖怪だとしても

時間を操るなどといった能力を使うことが出来るのだろうか。

しかしヴァルバトーゼはイワシの頭が奪われたときのことを思い返した。あれが時間を止めている隙に奪った、とでもいうのならはその瞬間まで気づけなかったのも領ける話ではあるが。

「何なら咲夜を呼んで、実証させてみる？」

「いや……いい。納得できる部分は確かにある。それにキサマが嘘を言う理由も見当たらず」

「じゃあ、ここからが本題なんだけど」

ここまですればヴァルバトーゼもレミリアが何を言いたいのか予想がついた。

こちらの世界において、理解できない現象がその『能力』によつて説明できるというならば——あの時もまた。

「フランの能力なんだけど、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』なの」

それでもなお、レミリアの告げた事実は驚愕に値するものであった。

つまりヴァルバトーゼの腕が落とされた理由は、フランドールがその能力を使ったからだということになる。

しかしその事実を知つたからこそ、ヴァルバトーゼは疑問が浮かんだ。

「よく、左腕だけで済んだものだな」

額面通りのチカラであるならば、腕一本といわずに文字通りヴァルバトーゼを壊すこともできたはずだからである。

当時のフランドールの様子を思い出しても、ヴァルバトーゼを殺さないようにしていたとは思えない。彼女は純粋に、ヴァルバトーゼを『壊す』つもりだったはずだ。

「別に不思議なことでもないわ」

「どういふことだ？」

「絶対的かつ問答無用ではないのよ、その能力は。少なくとも今のフランに限ってはね」
つまり条件、あるいは制限のようなものがあるということか。ヴァルバトーゼはそう解釈した。

しかしそれよりも気に掛かる部分がある。レミリアが今話したことのある部分に違和感を感じたのだ。

「……今の、だと？」

「……フランの能力の発動には、いくつか条件があるわ」

ヴァルバトーゼの疑問を無視する形で、レミリアは話を進めた。

少なくとも今は答えるつもりがないと判断したヴァルバトーゼは黙って続きを待つ。

「まず、壊す対象に『目』が見えてないといけない」

「目？」

抽象的な意味だろうか、とヴァルバトーゼは首を傾げる。

しかしレミリアはそのままの意味であると、自分の目を指差して首肯した。

「ええ、少なくともフランにはそう見えているらしいわね。私も最初に聞いたときはどういうことなのかさっぱりだったけど、今は検討がついてるわ」

「それは？」

「対象の致命点。砕いて表現するのなら壊れやすい場所、とでも言えばいいかしら。それがフランには『目』として見えるみたい」

つまりあの時フランには腕が千切られた場所に『目』が見えていたということになるのだろうか。

「そしてその目をフランは手の中に移動させることができるみたい。後はそれを握り潰せばそこを破壊できるらしいわ」

「……ふむ」

確かにあの一瞬、フランドールは右手を掲げていた。おそらくあの時には左腕の『目』が手中にあったのだろう。

だからこそ、飛び退いたところでどうにもならなかったということか。

とすれば気になることは一つ。

「『目』が見える基準とは何だ？」

「対象の意思の有無、そしてその意思の強さよ」

これまでと打って変わり、レミリアは断言した。

これだけは確かだと、彼女の声色は告げている。

「これはフランに限らず、能力全てに共通する特徴なの。他者に能力で直接干渉することは極めて困難であるという意味でね」

「ほう？」

「フランの能力ではそれが『目』の見難さとしてあるみたいね」

見方を変えれば基本的に生物以外は問答無用で破壊できる、ということでもあるが。

ともあれ朗報ではあった。任意破壊に時間操作、まさかこの二人だけが飛び抜けて馬鹿げた能力を持っているとは思えない。

今後もしそういった能力の持ち主と戦うことになったとしても、気づいたら死んでいったということは早々なさそうではある。

「あとは、対象が壊れかけているかというのも重要らしいわ。深い傷を負っていたりするとその場所の目はかなり見やすくなるみたい」

それがおそらくあの時左腕を壊された理由なのだろう。

ヴァルバトーゼの左腕はその少し前に美鈴によって骨を砕かれていた。流石にあの短期間では完治しておらず、その結果『目』が見やすくなっていたのだろう。

「成る程。……しかし、凄まじいものだな能力とは」

原則として一人一能力、かつ身につく能力を選ぶことはできないようだが。

それでも彼の世界では考えられないモノである。

「うーん。あなたが思ってるよりは大したものじゃないわよ」

「どういうことだ？」

「一見凶悪な能力に思えても、その分制限が多いことが殆どなのよ。例えば咲夜の時間操作だけど、まず基本的に時間回帰はできない。停止は任意だけど停止中の物体には干渉できない。加速ができるのは自分の無機物のみ。とかね」

つまり戦闘において考えると、精々が『目の前に凶刃が迫っていた』程度だということか。彼女が人間だということも加味すると、確かにそこまでの脅威とは思えない。

もちろん戦闘に限定しなければ用途は広く、便利であることは疑う余地もないだろうが。

「逆に大したことのない能力だとほぼその名の通りのチカラが揮える。——なぜかしらね？」

「リターンに見合った、ということではないのか？」

基本的に強い力、というものには相応のリスクや制限がある。

膨大な魔力を必要としたり、あるいは長時間の詠唱を必要としたり、もしくは発動条

件が限られていたり、ということだ。

しかしレミリアはそれを否定した。

「いいえ、もつと単純な話よ。人や妖怪の精神では、もたないのよ」

「もたない？」

「強すぎる能力というのはそれだけで全能……とまではいかなくてもその何歩か手前までは届きかねない。そんなものを行使するには人や妖怪の精神は柔すぎるの」

理解できない話ではない。

チカラの質に、人妖の精神うっわが追い付いていないということだろう。だから薄めて使っているというわけだ。

だが奇妙な話でもあった。

確かに今までの話はつじつまは合う。そういうものだと言われればそうだと納得できさるだろう。

しかし、これは断言できるようなものではないはずだ。あくまで推論の一つでとどめるような話である。

すなわち、レミリアはそうと言いつけるほどの確信があるのだ。

ということは――

フランドールの、籬の外れたような振る舞いを思い出す。

「まさか、キサマの妹がそれを行ったのか？」

「違うわ。逆よ」

それなりの自信があつた推測はきつぱりと否定される。

そしてレミリアの言つた逆という言葉、その意味にヴァルバトーゼが辿りつくよりも早くレミリアは続きを語つた。

「あれでも、マシになつた方なのよ」

「――」

絶句する、とはこのことか。

その思考の空白に、レミリアは一つの疑問を投げかけてきた。

「そちらの世界の吸血鬼はどうやって生まれるのかしら？」

「……何？」

いきなり話が変わつたことに訝しむヴァルバトーゼ。

だがレミリアの目は真剣そのものだった。話を逸らそうなどという意図は見えない。仕方なく答える。

「……突如発生するか、子を成すかの二択しか知らぬな」

「こつちにはもう一つ、誕生の仕方があるわ。死体から成ることよ」

話の流れから、レミリアが言いたいことは察せられた。ヴァルバトーゼはそれをその

まま口に出す。

「つまり、キサマは……」

「そう、一応人間ということになるのかしらね。当然、フランもね」

つまりレミリアとフランドルが姉妹だというのは、人間だった頃の名残というわけか。

面白い姉妹関係もあるものだ。

「そしてそういう生まれ方をした吸血鬼には一つの共通点があるの」

「ほう？」

「見た目が成長しないのよ。ところで、私とフランはいくつ離れてるように見えるかしら？」

小さく笑ってレミリアは問うた。

既に本題は遙か彼方。それでもヴァルバトーゼは提示された疑問を素直に考えた。

妖怪や悪魔にとって見た目から年齢を推測することは不可能に近い。だがレミリアの弁を鑑みるのなら、人間だった時と双方見た目は変わっていないということになる。

目の前のレミリアと記憶の中にいるフランドルを比較しつつヴァルバトーゼは答えた。

「精々一つか二つ、双子と言われても信じるだろう」

「半分正解ね」

「……何だと?」

意味が分からない。

もし当時の二人の成長に差があつたとして、ヴァルバトーゼの予想よりも年が離れていくというのであれば理解できた。

だがそうであるならレミリアは違つたと答えただろう。だが彼女は半分正解だと言つた。これはどういうことか。

「人間だつた頃は確か二つ、だつたかしら。でも私が吸血鬼になつてからおおよそ五百年。あの子とは延べで五つ違うのだけど……何でだと思つ?」

ようやくヴァルバトーゼはレミリアの言いたいことを理解した。

生きている年数にズレがあるというならば、当然もう一つズレてなくてはならないものがあるからだ。

「フランドールの方が死体でいた時間が長かつたということか……?」

「大正解。私は死後半年、フランは死後三年超で吸血鬼になつたわ」

にやりと笑つてレミリアは首肯した。

だが、それが何だというのか。

「解せない、という顔ね。でもよく考えてみて……三年以上も土の下にあつたら、普通死

体はどうなつてると思う？」

「……腐敗する」

「そう、腐るのよ。吸血鬼になるのは基本的に土葬された人間なんだけどね、基本的に死後一年以内には吸血鬼になるわ。むしろ一年以内でなくては間に合わないというべきかしらね」

吸血鬼足りえる最低限の原型が保てないということだろう。

単純に考えるならフランドールが吸血鬼になれたのは運がよかつたということになる。

だが敢えてこういう話し方をしている以上そう簡単な話ではないことは容易に察せられた。

「基本的に肉体の腐敗は成り代わつたときに治るわ、でもここは違う。表面上は復元したとしても中身までは戻らない」

そう言つて、レミリアは自分の頭を指差した。

「だから死体から妖怪になつたとき、何かを失っていることが多いわ。記憶か、感情か。私は人間だったときの記憶に穴が開く程度だったんだけど、フランは違つた」

当然だろう。

知性が獣並みになつていても不思議ではない。

「失ったのはほぼ全て。私がフランのことを知ったのは、当時大暴れしてる吸血鬼がいるって話を聞いたからなんだけど——」

その時のことを思い出しているのか、レミリアの表情は硬い。

一つ息を吐いてから彼女は続きを話した。

「見るだけで、壊していたわ。そしてフラン自身には、理性のかけらも見当たらなかったわ」

「……」

そんなものを見ているのなら、確かに断言できるだろう。

だからこそ納得がいかない。

「では何があった？ そんな有様でどうやって現状まで立ち返ったというのだ」

「……ほぼ全て、と言ったわよね」

「ああ」

「フランに残っていたのは、姉に対する愛情だけだったのよ」

姉妹仲は良かったからね、とレミリアは優しげに笑う。

すぐにその表情を消して彼女は続けた。

「フランは、その場にいた私を見つけた瞬間にある程度の理性を取り戻したわ。私の言うことを聞けるくらいにはね。それ以来、紅魔館（まじか）で時間をかけて情緒を育んでいるの

よ。安心して外に出せるようになるには、あと何百年かかるかわからないけどね」

レミリアは自嘲気味に笑うと、一転して表情から緊張を滲ませる。

「そこで、一つお願いがあるのだけど」

そう言ってレミリアは頭を下げた。

予想もしなかった彼女の所作にヴァルバトーゼは瞠目する。

「これから何があつても、フランのことを恨まないで欲しいの。代わりに私のことならいくらでも恨んでくれて構わないわ」

「フン……何を言っているのだ、キサマは」

ヴァルバトーゼの言葉は冷たく、重い。

その声色に確かな彼の苛立ちを感じたレミリアは、表情を痛ましげに歪ませた。

「……虫のいい話であることはわかってるわ。でも——」

「そうではない」

「……え？」

勘違いも甚だしいと、ヴァルバトーゼは言う。

彼が憤りを感じたところはそうではない。

「キサマが妹の行いに深い責任を感じていることは理解できる。精神面に問題がある妹に代わってキサマが頭が下げるといふこともな」

レミリアの行動からは妹に対する深い絆を感じ取ることができる。ヴァルバトーゼはそういう手合いが嫌いではなかった。むしろ好ましいと言える。

「その上でキサマのすべきことはなんだ？ 妹が『それは悪いこと』だと思えるように、自ら頭を下げるように教育することだろうが！ そのために、キサマは今尽力しているのではないのかッ！」

そうだ。レミリアはそう言った。フランドールの情緒を育んでいると。

およそ五百年、己への愛情のみを残した存在に、常識を教育するというのはどれほどの苦行なのかヴァルバトーゼには想像もできない。

ゆえに彼はレミリアの敬意の念すら抱いていたのだ。だからこそ、レミリアの言葉が許せなかった。

「ならばキサマが頭を下げる理由はなんだ！ 妹への教育不足に対してのみではないのかッ！」

だからもし、それを踏まえてなお願うことがあるというならば。

それは、たった一つのみであるはずなのだ。

「頼みたいことがあるというのであれば、それは己へ憤怒や憎悪の矛先を向けることではないだろう！ 自分が責任を持って教育するから、信じて待つて欲しいと——それだけではないのかッ！」

「……………そうね。少し、弱気になっていたのかもしいわね」

そう答えたレミリアの瞳には、強い意思が感じられる。

彼女は不敵に笑みを浮かべると、小さくしかしはつきり聞こえる声でこう言った。

「これから、そうするわ」

S t a g e 3 トリプル・レット

それから雑談を交えることしばし、ヴァルバトーゼはふと思い出したことがあった。

「そういえば、レミリアよ」

「何かしら」

「フランドールは何故いきなり俺を壊してきたのだ？ まさか知らない顔ならやつてもいいなどと言いつけてあったわけではあるまい」

そういえば、フランドールが何か理由のようなものを言っていたような気がしたが。

なんだったかとヴァルバトーゼは記憶の引き出しに手をかける。整理がされていないようで、中々答えが出てこない。

「……あー、それね」

そんなヴァルバトーゼに、レミリアは頬をかきながら口を開いた。

目を逸らし、言いづらそうにしながらも彼女は言葉が続ける。

「女には手を出しちゃだめよ、って言ってあったのよ」

「……………ん？」

確かに、フランドールは男だからと言っていた。

それはつまりどういうことかといえ、フランドールは姉の言いつけを守っていたというだけで。

「まてまてまてまて。ということは何か？ 先日のアレに限ってはキサマの責任が最も重かったということか？」

「ええ、まあ……そういうことになるかしらね」

「そういうことになるかしらね、ではないわ！ さっきのやり取りはなんだったというのだ！」

「うぐ。いや、あれがあつたから言い出しづらかつたというか……その……」
「矛先うんぬんに関しては元々これからも迷惑をかける可能性を考慮してのことだつた。」

元々それについての話が終わってから事情を説明して謝るつもりだった。

それがお互いヒートアップした結果いい話っぽくに纏まったので切り出しづらかつた。

以上が、しどろもどろになりながらもレミリアが弁明した内容である。

「ふう………わかつた、それはよしとしよう」

思い切り顔を顰めながらも、ヴァルバトーゼは頷いた。

しかし納得いかないことはある。

「だがそもそも女はダメ、というのはどういうことだ。大雑把すぎではないのか？」
ここ紅魔館に男が入ることは禁じられている、というのであればともかく。

少なくともヴァルバトーゼはそういった話を聞いた覚えはなく、そういう雰囲気を感じたこともない。

だが驚くべきことにレミリアはそれを否定した。

「いえね、それがそうでもないのよ」

「……何？」

「だって、幻想郷は男が壊滅的に少ないもの」

「……………」

沈黙しながら、その言葉の意味を噛み締める。

実のところ、ヴァルバトーゼも何となく気づいていたことではあった。

何せ出会う相手が悉く女なのだ。疑問に思わないほうがおかしい。

「理由はあるけど、聞く？」

「聞こう」

私自身も聞いた話が多いのだけどね、とレミリアは前置きして話し始めた。

「まず第一に、ここって平和なのよ」

「……成る程、そういうことか」

何せ『^{スベルカードルール}とても安全な闘い』などというものが流行る場所だ。平和以外の何物でもないだろう。

そして男というのは全般的に好戦的というか血気盛んというか、とにかくそういう手合いが多い。ましてや悪魔や妖怪というようなチカラを持った存在ならばなおさらに。ヴァルバトーゼ自身もそうであるから理解ができる。観光や息抜きに訪れるならともかく、永住するとなるといささか幻想郷は退屈に過ぎるといふことだろう。

「ええ、だからバトルジャンキーみたいのは大体どつかに行つたんじやないかしら。強い妖怪の男、なんていうのは幻想郷に居ないんじやない？」

だから種族ぐるみでいなくなったものいるみたいよ、とレミリアは付け加えた。

確かにそういう種族がいても不思議ではない。

「で、まあ……そういう環境になると碌でもない男が増えるのよ」

「……そうだろうな」

力が強く恐ろしい妖怪が減り、女性比率の高い場所だ。

さらに外から弾かれたものがやってくるという幻想郷のシステム上、そういうのが増えるのは当然の理といえる。

当然、そういう輩の跳梁を許しているのであれば今幻想郷は平和であるとはいえないだろう。

つまり――

「それで昔、そういうのを纏めて肅清したみたい」

「……それは、男がないわけだな」

「まあそういうワケだから人里の男女比率は普通だし、人畜無害な妖怪になら男もいると思うわよ」

「成る程、女に限定するわけだ」

「そういうこと。万が一男が紅魔館に客としてくることがあつてもその都度言っておけばいいと思つていたのよ。誰も壊すな、って言葉は束縛感が強いしね」

それらの情報を踏まえて考えれば、先日のアレは恐ろしいまでの偶然の一致があつたということだ。あの一瞬を除けばヴァルバトーゼは常に紅魔館の住人と共にいたのだから。

つまりレミリアに過失はあつたものの、仕方がないといえるものだった。この流れを思い返しても、レミリアがフランドールに注意できるタイミングはない。どちらかといえば――

「つまり、俺の間が悪かつたと」

「まあ、それも理由の一つでしようね」

そういうことだった。

「何にせよフランには言いつけておいたから、これからは大丈夫だと思うわ」
「ちなみに、何と言ったのだ？」

「さつき腕を壊した男はもう壊しちやダメよ、って」

「……そういう表現をされると、己が情けなく感じるものだな」
まるで積み木のような扱いである。

「なら、さつきとチカラを取り戻すことね」

「……そうだな」

そのためには何としても帰らなくてはならない。

ひとまずはパチュリー次第ということになっているが。

「ともあれ、そろそろ去るとしよう」

ヴァルバトローゼは椅子から立ち上がり、告げた。

カーテンの隙間から覗く色は暗い。既に日は落ちてきているのだろう。

思えば随分と話し込んだものだった。

「……そういえば、あなたどっかに住んでるの？」

確かにそれは疑問に思うところだろう。

何せヴァルバトローゼは幻想郷に訪れてからまだ一週間もたっていないのだから。それも事故という形だ。

「特に定まった場所はないな」

休むときは周囲の気配がない場所を選んでいるぐらいである。

そんなヴァルバトーゼを見上げて、レミリアは一つ提案をした。

「適当な部屋でも貸してあげましょうか？」

「いや、いい。生憎無用な借りを作るのは好きではなくてな」

そう、まさしく無用の話である。

空気は澄み渡り、気質は穏やか。ここ幻想郷は外でも十分休むに事足りる。あえて屋内に腰を据える必要は感じなかった。

ゆえにその提案に乗ることは無意味に借りを作るだけである。

「そう言うと思ったわ。なら、咲夜を見送りもいららない？」

「うむ。玄関までの道は把握している」

いかに広いとはいえ、造り自体は複雑ではない。

方向音痴の気があるわけでもないヴァルバトーゼが、外までの道筋を違う理由はなかった。

「ところで、最後に一つ聞きたいことがあるのだが」

ドアノブに手をかけたところでヴァルバトーゼは振り返る。

彼には一つ、気になっていたことがあったのだ。

「何かしら」

日が沈んだからか、レミリアは明かりを落としてカーテンを開けていた。

上弦の月が妖しく彼女を照らし出す。

「キサマの能力はなんなのだ？」

「ああ、それはね——」

レミリアは薄く笑い、自らの能力を答えた。

「運命を、操る能力よ」

玄関へと向かう途中。ヴァルバトーゼは足を止めた。

迷ったわけではないし、迷わずに外へ出れると考えていたヴァルバトーゼの判断は間違っていない。

ならば何を以て彼の歩みは止まったのか。

「こんばんは、お兄さん。今日もいい月夜ね」

答えは一つ、他者による干渉である。

ヴァルバトーゼは言葉に応じる形で外を見た。

廊下の窓から覗く夜空は雲一つない。満月ではないことこそ惜しいものの、いい月夜であることは疑いようはなかった。

「……そうだな。その通りだ」

ヴァルバトローゼは同意して、視線を正面に戻す。そしてその先にある影へと問いを投げた。

「で、何の用だ？——フランドールよ」

先日、ヴァルバトローゼの腕を落とした張本人——フランドール・スカーレットがそこにいた。

ヴァルバトローゼの口調は硬い。確かに彼自身、フランドールに含むところはない。腕を落とされたことは能力によってという話だったが、それでもなお彼は己が未熟であったと思っている。

だが、だからといって彼女に馴染みを感じる理由もまたないのだ。

「ああ、私の名前は知っているのね。あなたの名前は……お姉様に聞いた気もするけど忘れちゃった。教えてくれない？」

「……ヴァルバトローゼだ」

「ヴァルバトローゼね、今度は忘れないようにしましょう。それにしても、あなた凄いな」

「……何がだ」

嘆息しながら、問い返す。

結局のところ、最初の問いにフランドールは答えていない。

「全然目が見えないんだもん。一回壊したのに見やすくなならないなんて、美鈴みたい」
「ほう」

己でそうならば美鈴は間違いなくそうだろうと、ヴァルバトーゼは頷いた。

武芸を極めて高いレベルで修めている彼女である。ならばその程度で精神の均衡が崩れるはずがない。意思の衣は剥げず、恐怖に溺れることもないだろう。

「どれくらいで崩れるか試してみたいな。お姉様はダメって言っただけ、本人がいいって言えば大丈夫だと思っただよ。どう？」

フランドールは見た目相応に無邪気な笑みを浮かべてヴァルバトーゼへと問いかけた。

あからさまであるが、抽象的なその言葉の意味をヴァルバトーゼは考える。

崩れるかどうか、というのはおそらくどの程度の負傷で目が見えるようになるかということだと思われる。

ならば当然、試してみたいというのは考えるまでもないことだろう。彼女の後ろに立ち上る攻撃的な魔力を見れば瞭然だ。

当然、返事は一つに絞られる。

「お断りだ。俺にそういう趣味はない」

「うーん、残念。今度お姉様にお願いしてみようかな」

言い終わると、フランドールは頭を捻り始めた。

これが用件だったのだろうか。何にせよ奔放というかマイペースというか。ため息を吐きながら、ヴァルバトーゼはフランドールの思考を裂いた。

「……話は終わりか？」

「あ、うん。もういいよ」

フランドールは焦点をヴァルバトーゼに戻して頷いた。

ヴァルバトーゼは別れの言葉を告げて、横を通り抜ける。

「ではな」

「ばいばい——またね」

今度こそ、ヴァルバトーゼは紅魔館の外へ出ることができた。

気持ちのいい夜風を受けながら門の外へと歩いていく。

そんな彼に、一つの影が近づいた。当然こんな時間に館の外にいる相手など一人しかない。

「……大丈夫でした？」

「フランドールのことか」

紅魔館の門番、美鈴は親しげな笑みを見せながら問いかけてきた。今その問いを投げ

てくるということは、フランドールと会っていたことを知っているのだろう。

何故か、というのは愚問である。彼女ならば邸内の気配を全て把握していても不思議ではない。

「はい。ですが特に問題はなさそうですね」

「フン、それで？」

「はい？」

「惚けるな。まさかそんな当たり前のことを確認したかったわけではあるまい」

どこか壊されでもしたのか、という懸念を解決したいのであれば遠目で見ただけで十分である。

そもそも何かあったのなら、こうして平然とヴァルバトーゼが外に出てくるはずがない。何にせよあえて問う必要はなく——美鈴が話しかけてきた目的は別にあるということになる。

そうしたヴァルバトーゼの追求に、美鈴は観念したように肩をすくめた。

「ばれちやいましたか。大したことじゃないんですけどね、貴方と同じくアレを受けたもの者として感想を伺いたくて」

「そういえば、フランドールもそのようなことを言っていたな。どういう経緯でそうなったのだ」

一戦交えた印象や、フランドールの能力を考えてもそのような状況になるとはいまいち考えづらい。

もちろん殺し合ったとでもいうならば話は別だが、それはそれでどうすればそうなるのかわからない。

だが、真実は彼の予想の斜め上にあつた。

「いやー、どういうものか一度その身で体験してみたくて一度頼んでやつてもらつたんですよ」

あはは、と笑いながら答える美鈴。

聞く者が聞けば愚か者の極みだと嘲笑するだろうが、ヴァルバトーゼはそういう輩が嫌いではない。ゆえに彼は感心の笑みを見せた。

「大物だな、キサマは」

「まあ、強くなる上ではああいったものも経験しておきたいですから」

だがここではその機会に恵まれなだらう。そういった言葉をヴァルバトーゼは喉の奥へとしまいこむ。

そこまでする美鈴がここでこうして門番をやっている以上、相応の理由があるはずだからだ。

ゆえにヴァルバトーゼは納得を示すだけにとどめ、当初の質問に応えた。

「……成る程な。まあ、大したものだとは思った。だが付け入る隙も多い」

「例えば？」

興味深そうに美鈴が尋ねてくる。

わかっているだろうにと、苦笑しつつヴァルバトーゼは答えた。

「当然、破壊に至るまでの条件全てだ。視界内に対象を捉えねばならないということ」

その驚異的な破壊能力を行使するためにはいかなる状況においても、まず壊す対象の『目』を見なくてはならない。

もし最初から『目』が見えていたとしても、正面から見合つてのよーいどんで始まる戦いでなければ打つ手は多いといえるだろう。

「一度に壊せるのは精々二箇所だということ」

手に『目』を収めて、という条件がある以上一回につき一つと考えるのが妥当なはずだ。よって両手で二つ。

さらに手中に『目』が収められたとしても、握るアクションさえ潰せば破壊を免れることができる。

「そして必然、両手か両目を潰せば能力を使えない。最後に——意思を砕くか、肉体を砕くかせねば『目』を見ることできないということだ」

これらのことから導き出せる結論は一つ。

「つまり、我らにはほぼ関係のない能力だということだ」
「やっぱ、そういう結論になりますよね」

嬉しそうに、美鈴は同意した。

重要なのは『目』が見える条件だ。フランドールの言葉に偽りがなければヴァルバトーゼと美鈴は平時において『目』を見られることはない。

よって身体に相応のダメージを受けない限りは破壊の対象にならないと言える。

しかしフランドールの破壊能力における最大の長所は『対象の強度を無視できる』ということだ。だというのにその頃には深手を与えることができている——ならば破壊能力など必要はあるまい。

当然それがフランドールの渾身によってようやく、という防御耐久を持つ相手なら話は別だろう。そこで破壊の追い討ちを重ね、さらに相手の意思を砕くことができたのなら——確かに脅威の能力と言える。

だがヴァルバトーゼも美鈴も違う。

「どうせ妹様が軽く魔力を込めた一撃でも、私たちじゃズタボロでしょうしね」
「違うない」

喜べる話ではないが。

ステータスという意味での能力が負けているのだ。それも圧倒的に。

だが、とヴァルバトーゼは笑う。

「だからといって、負けるつもりはないがな」

「それがどうした、という話ですよね」

美鈴もまた、笑みを浮かべて同意した。

もちろん彼らはフランドールと戦うつもりはないし予定もない。

だが、しかし、もしも——相対することがあつたとしたら。

ただ、それだけの話であつた。

Stage 4 マジカルスターシーフ

闇に閉ざされた大図書館。

その暗がりにも動くものが一つ。人影だ。

人影は大きな荷物を背負っており、近くの本棚には多くの空隙が見えた。

この人影の目的を敢えて語る必要はないだろう。見たままである。

「今日も大量だぜ」

声の高さからおそらく女性であろうその人影は小さく眩き、出口を目指す。満足のいく成果を得られたのだろう。

彼女は己の成功を疑っていなかった。

なぜならこれは半ば公然化した行為だからだ。仮に捕まったとしても大したリスクはない。精々今日の成果を没収されるだけだろう。

そもそも見つかったとして、逃げ切れる自信もあった。

だから、一斉に部屋の手元が灯った今この瞬間においても彼女は焦っていない。柵の影に隠れて状況を見極める。

「いつもいつも、ねずみが多くて嫌になるわ」

棚越しから聞こえたその声には聞き覚えがあった。この図書館の主だ。

卓越した魔法使いであり、その熟達ぶりは魔導同じくする彼女を大きく超えている。人生経験が桁一つ違うのだ。同じ土俵で争ったのならばまず勝ち目はないだろう。

しかし図書館の主——パチュリー・ノーレッジには一つの欠点がある。体が弱いことだ。

生粋かつ模範的な魔法使いである彼女は、基本的に拠点から動かずに魔法の研究を続けている。そのため身体能力はそこらの人間にも劣っており、さらには喘息持ちでもあった。

ゆえに一度離脱に成功すれば追いつかれることがないという確信が彼女にはある。

問題はタイミング。ここは熟練の魔法使いの拠点、虎穴と言って差し支えはない。

間違はなく己の位置を補足しているはずだった。ならば間違はなく魔法で捕らえにくる。

その初撃を回避し、全速で離脱する。というのが彼女——

「貴女もそう思うでしょう？　ねえ、魔理沙」

「そうだな」

霧雨魔理沙の作戦だった。

「それならねずみ捕りでも仕掛けてみたらいいんじゃないか？」

軽口を叩きながら、左手の箒に魔力を込める。

パチュリーが大切にしている本がある以上、広範囲の攻撃魔法は間違いなくこない。空間干渉か、実体魔力による行動制限を狙ってくると魔理沙は睨んでいる。

術式の起動を見切れば私の勝ちだ、と魔理沙は心中で呟いた。

「ええ。だから――」

しかし魔理沙は一つだけ思い違いをしていた。

いつもそうだから、気づかない。

いつ、どこで、誰が今日も一人だと言ったのか。

「今日はそうしたわ」

「――げ」

視界の端で、何かが光る。

気づいたときには手遅れだった。

「チェックメイト、だな」

その声は低く、パチュリーの声ではない。

見たことのない男が、魔理沙へ剣を突きつけていた。

「術式の改良？」

ことの始まりは三日前の夕方まで遡る。フランドールに腕を落とされた後のことだ。

レミアアはフランドールをつれていずこかへ去り、ヴァルバトーゼは図書館内へと戻ってパチュリーから治癒魔法による応急処置を受けた。それからどうにか腕が繋がるところまで回復したヴァルバトーゼは、パチュリーに転移のことを尋ねたのだ。

そこで返ってきた答えが、今彼自身が使っている術式を改良すべきであるというものであった。

「私はこの図書館内に展開している解析魔法でさつき貴方が用いた転移術を見せてもらったわ。その結果判明したのは、貴方の転移は大きな無駄があるということよ」

「ほう」

ヴァルバトーゼは感心の吐息を漏らす。

パチュリーはあの瞬間、特に何をしてもなくヴァルバトーゼの転移を見ていた。

だが、それは違う。そうではなく——何もする必要がなかった。そういうことなのだろう。

「順序よく、説明しましょうか。貴方が使うような転移には発動までに大きく二つの工程が存在するわ」

言い終えると、パチュリーは一つ指を立てた。

「二つ、目的地の設定。目視とイメージ、どちらでも転移は成立するけれど——共通することは『その場所を知らなくてはならない』ということ。これによつて貴方は貴方自身の転移でしか帰れない」

これはヴァルバトーゼもわかつていたことだ。彼は頷くだけにとどめて、続きを待つ。

パチュリーは二本目の指を立てた。

「二つ、現在地と目的地を繋げる事。亜空間のトンネルを作る、とでも表現すべきかしらね。問題がなのはここよ」

「とうとうと?」

「空間に穴を開ける方法は大きく二つ。チカラを溜めて一気にやるか、少しずつ掘り進めていくか。貴方は後者」

「……そのどこに問題があるのだ?」

訝しげに、ヴァルバトーゼは眉根を寄せる。

むしろ余剰エネルギーが生まれかねない前者こそ、ロスが生まれかねないのではないか。

そんな彼の疑問を、パチュリーは鼻で笑った。

「チカラを使うのが、それに対してのみならね」

「……………」

「穴を開けられた空間は当然元に戻ろうとする力が働くわ。なら当然、チカラを使つて開けた空間を維持・固定しなくてはならない」

「そうか……………」

はつとした様子で目を開くヴァルバトーゼ。

空間の維持・固定には『常に』魔力が必要になる。つまり時間をかければかけるほど消費する魔力は増えていく、ということだ。

そしてヴァルバトーゼの手法では時間単位の魔力消費量が距離に応じて増えていく。

「わかつたみたいね。対して前者は先に十分量の魔力を溜めてから一気に開通させる。

維持・固定に使うチカラは移動するまでの一瞬分だけよ」

つまり移動する距離が遠ければ遠いほど、後者の魔力効率も低下していくということになる。ましてや次元を隔てた世界への移動ともなれば——語るまでもない。

加えて前者の運用ならば最初に溜めた魔力の量で、維持・移動に必要な魔力を逆算することも可能である。ということは自身の持つほぼ全ての魔力を無駄にすることなく、最長距離の転移ができるということだ。

その事実を理解したヴァルバトーゼは大きく嘆息した。

「……………確かに、大きな無駄があつたようだ」

「そう卑屈になることもないわ。至近への転移ならば魔力の溜めがない分発動までの早さは後者のほうが上だもの。長距離転移に向いてないというだけよ」

「……ふむ。何にせよ、これで希望が見えたというわけか」

少なくとも、理論通りならば今の魔力でも転移射程が大幅に伸びることは間違いない。

問題は一つ。

「どう身につけたものか」

ヴァルバトローゼはその手の専門家ではない。解決手段が見つかっていても具体的な実行手段が見つからなければ先に進むことは出来ないのだ。

「二、三日くれれば貴方が使えるように術式を用意するわよ」

「本当か」

「それで帰れるようになるかどうかは、保障しないけどね」

「わかった。頼む」

それから二日後、ヴァルバトローゼは再び図書館を訪ねた。

だが彼を出迎えたパチュリーの表情は硬い。その理由はすぐに彼女自身から知れることとなった。

「魔導書がない？」

「そ。術式自体は既存のものを流用すれば済むんだけどね、妖力でも駆動できるようにカスタマイズしなくちゃいけないのよ」

そのパチュリーの言葉に、ヴァルバトローゼはかねてからの疑問をぶつける。

「……待て、そもそも妖力とはどういうことだ。俺の使っているチカラは魔力ではないのか？」

ヴァルバトローゼはこれまでも何度かそういった発言は聞いていたが、チカラの呼び方が違うだけだろうと判断していた。

しかしパチュリーの言葉は明確にそれを否定している。

「違うわ。……多分、そちらの世界ではチカラの分類が大雑把なのね。こちらではチカラの波長に応じて呼びび方が変わるのよ。魔力、妖力、霊力、神力、といった具合にね」

「……血液型のようなものか」

あるいはヴァルバトローゼが好きなもの——すなわちイワシで例えるならば、彼の世界における魔力はニシン目ニシン科全体を指す。

対してこちらの世界における魔力ならばニシン目ニシン科マイワシ属マイワシを指し、妖力ならばニシン目ニシン科ウルメイワシ属ウルメイワシを指している、ということだろう。

「そうね、おおむね間違っていないわ。私の術式はあくまで魔力にのみ適応させたものだ

から、妖力で動くような術式にするにはそのことについて書かれた魔導書が必要なんだけど」

「そのための魔導書がない、ということか」

「ええ、ジャンルがジャンルだけにあまり読み込んでないから記憶も曖昧なのよ」

「……？ その口ぶりだと、元々はあつたという風に聞こえるが」

ヴァルバトーゼはてつきり、この広大な図書館にも存在していないという意味だと思っていた。

だがパチュリーは首を振って否定すると、本の行方を口にする。

「有り体に言えば盗まれたみたいね。心当たりがあるもの」

自分の本が盗まれているというのに、パチュリーの態度は平然そのものであった。

あえてそこは追求せずに、ヴァルバトーゼは心当たりを尋ねる。

「相手はわかるのか？」

「霧雨魔理沙。人間の魔法使いよ。最近知り合ったのだけどね、しよつちゆうここへ忍び込んで魔導書を盗んでいくのよ。彼女に言わせれば『死ぬまで借りるだけ』らしいけど」

「……いいのか？」

「まあ人間を止めないのなら長くても百年程度。それぐらいなら貸しておいてもいいか

なって。回収するときに利子として魔理沙の成果をいただくつもりでもあるしね」

「成る程な」

確かに千年単位で生きる妖怪と、精々が百年しか生きられない人間では時間に対する考え方が違う。

その魔理沙という人間はそこまで考えてそういう行動をとっているのかもしれない。だとすれば相当したたかな人間である。

「でも、入用になったからにはしようがないわね。あれだけでも返してもらいましょうか」

「どうするのだ？」

「あいつの家はわかるんだけど、泥棒対策とか仕掛けてありそうだし家捜しはやめておくべきね」

「ならば？」

「決まってるでしょう？ 折角向こうから来るのだし、そこで『お願い』すればいいじゃない」

パチュリー曰く来るとしたら昼過ぎから夕方にかけて、ということらしい。

なのでその時間は、基本的にヴァルバトーゼも図書館で待機することとなった。

結果、特に読みが外れることもなくその翌日の昼に魔理沙が現れ――

「わかった。降参、降参だ」

いささか引きつった表情を見せながら、両手を上げる魔理沙。

そこにパチュリーが椅子に座ったまま空を飛んできた。正直魔力の無駄遣いにしか見えない。

「とりあえず、貴方には確認したいことがあるの。少し付き合ってもらおうよ」

それから三人で卓を囲んで、魔理沙にヴァルバトーゼの事情を大まかに説明した。

そしてパチュリーが本題に触れる。

「魔導書？」

「妖力や霊力で魔法を使うための方法が書いてある本よ。貴女が持っていたんでしょ？」

「あー、あつたかもしれないな。多分部屋の隅でほりかぶってるんじゃないか？」

からから、と軽く魔理沙は笑った。

パチュリーが半眼で睨みつつ催促する。

「なら返しなさい」

「別にいいぜ。あつても使い道ないしな」

「せめて必要な本を盗みなさいよ」

ヴァルバトーゼも同感だった。盗まれる側からすればたまったものではないだろう。

そんな糾弾を魔理沙はおどけた様子で否定する。

「人聞きの悪いこというなよ、借りてるだけだぜ。それに人生何が役に立つかわからないだろ?」

「はあ……。ま、そういうことだから今すぐにも持つてきてもらおうよ」

「仕方ねえなあ。取つてくりやあいんだろ?」

言うが早く、魔理沙は立ち上がった。

しかしパチュリーがその襟首を掴んで止める。

「ぐえ」

「待ちなさい。こいつについてってもらおうから」

空いている手でパチュリーはヴァルバトーゼを指し示す。

話の成り行きを見守っていた彼は首を傾げた。この話は聞いていない。

「おいおいそんなに私が信用できないってか? これでも約束は守る性質なんだぜ?」

「貴女は約束を忘れるだけだしね」

「……こりや手敵しい」

言つて、魔理沙は肩をすくめる。否定をする気はないらしい。

結局ヴァルバトーゼは魔理沙の家までついていくこととなった。パチュリー自身がいかないのは動くのが億劫だからだろう。まさしく魔法使いひきこもりというべきか。

「ところで、その本とやらはどういう外装なのだ。おそらく俺はその魔導書を読むことはできんぞ」

ヴァルバトーゼは悪魔という存在の特性として、人間が意思疎通の手段として開発した言語は全て理解及び解説ができる。

それはこちらの世界でも例外ではないらしく、ちらりと近くの本棚に目を向けても多くの背表紙の文字が彼には読めた。

だが魔法言語のような、意思疎通を目的としない言語に関してはそうはいかない。専門家でもないヴァルバトーゼが読める道理はなかった。

つまり魔理沙から魔導書を手渡されても、それが本当にそうなのか確認することができないのだ。

「こんな感じよ」

そんなヴァルバトーゼに対して、パチュリーは人差し指を立ててみせた。その直上の空間に幾何学模様が浮かび上がり、立方体を模っていく。

それから少しの間をおいて、赤い装丁の本が具現した。全体を見せるように、ゆっくりと回転している。

魔理沙がそれを見て興味深そうに問いを投げた。

「それ、中は読めないのか？」

「無理ね。私の記憶を元に外見だけ再現したものだから」

その言葉を証明するように、本が開く。

ぱらぱらとページがめくられていくがその全てが白紙であった。

「まあでも、便利な魔法だな」

魔理沙の言葉に、ヴァルバトーゼは内心で追隨した。

かねてから感じていたことだが、こちらの世界の魔法は用途がやけに広い。というよりはあちらの魔法が戦闘用ばかりなのだが。

「そうね、同感よ」

そう答えたパチュリーの表情はなぜか苦い。

それに対する疑問が呈されるよりも早く、パチュリーは理由を述べる。

「この術式の基礎設計は私じゃないのよ。スペルカードの弾幕形成に使われてるのを
アレンジ
流用しただけ。悔しいけど、大した術式よ」

「ふむ。成る程な」

先日、文にプリニーを見せたときのことを思い出しヴァルバトーゼは頷いた。

形を再現している術式ぶぶんだけを抜き出したのだろう。

「ま、なにせよこれでどんな本かもわかったわけだ。さっさと済ませちまおうぜ、ええとっ。」

「ヴァルバトーゼだ」

「ヴァルバトーゼだな。短い間だがよろしく頼むぜ」

話は終わったと、魔理沙は踵を返した。

ヴァルバトーゼも同調し、その背中を追う。

「魔理沙」

しかし再び、パチュリーが待ったをかける。うんざりした様子で魔理沙が振り返った。

「何だ？ 流石にちゃんと返すから安心しろって」

「違うわ。右手のそれ、置いていきなさい」

「ちっ、ばれたか」

舌打ちしながら魔理沙は右手に持ったそれを置いた。ところどころにでっぱりがある大きな袋だ。中身は言うまでもないだろう。

大した手際だ、とヴァルバトーゼは感心した。動作が自然すぎて違和感がない。

「じゃ、また今度借りにくるぜ」

「歓迎はしないわよ」

「ではな。本を回収したら届けに戻る」

「はいはい、いってらっしゃい」

パチュリーからの見送りを受けて、今度こそ二人は紅魔館を後にした。

Stage 5 万覆の気配

外に出たヴァルバトーゼは、魔理沙に行き先を尋ねた。

「ところで、キサマの家はどこにあるのだ？」

「魔法の森さ」

「魔法の森……というところか」

ヴァルバトーゼは視線を南へ——広く生い茂る森林へと向けた。

ちなみに彼がある程度地理を把握しているのは、今朝紫からイワシと共に幻想郷の地図を受け取ったからである。

大雑把な地名と、概要が書いてあったので頭に入れておいたのだ。

「ところで気になっていることがあるんだが」

「むっ」

「お前さん、空を飛べるよな？」

箒に腰を下ろした魔理沙は、ふわりと浮かび上がるとそう聞いてきた。

箒にのって宙に浮かぶ彼女は、黒いとんがり帽子と黒を基調にしたドレス染みた服装も相まって、まさしく魔法使いの名に相応しい。

ともあれヴァルバトーゼがその質問に答えるとするならば、それはたった一つ。

「いや、飛べぬ」

「……おいおいおい、勘弁してくれよ。まさか歩いていかなきゃなんねーのか？

日が暮れちまうぜ」

うんざりした様子で魔理沙は顔を覆った。

しかし、失望するには早い。ヴァルバトーゼがいつ、追隨できぬと言ったのか。

「別に、空を飛んでいくキサマについて行けぬわけではない」

表情一つ変えずにヴァルバトーゼはそう言い切った。

それに魔理沙はにやりと笑うと、一気に高空へと飛び上がる。

「じゃ、頑張っついてきてくれ。もし追いついてこれなくても知らない、ゼー」

言葉尻に力を入れた魔理沙は、箒の穂の部分から爆発的に魔力を放出させて一気に加速した。彼女の影がみるみるうちに小さくなっていく。

当然そんな彼女を、ヴァルバトーゼは黙って見送るわけにはいかない。

「フン」

彼は鼻を一つ鳴らすと、右足に力を込めた。そのまま地面へと炸裂させる。

その反動たるや凄まじく、砲弾もかくやと言わんばかりの速度で、彼は鋭角機動を描いて空へと跳んだ。

そう、あくまで飛行ではない。見も蓋もない言い方をするならばただのジャンプだ。速度自体には問題はない。彼女の姿が見えている今はそれでも追いつがることができらう。しかし森へ入ってしまったては枝葉の群れに阻まれて見失いかねない。

だから彼は踏みしめるように左足を落とした。空を切らずに硬い感触が返る。魔力を足場にしたのだ。再び踏み切った彼は、さらに高度と速度を上げた。

一時は米粒ほどの大きさまでに小さくなった魔理沙だが、瞬くに輪郭が掴める程度まで距離を詰める。先行する彼女の速度が遅かったのも容易に追いつけた理由だろう。初速を維持せずに低速飛行に移ったのだと思われる。

そして三度目の跳躍にて、ヴァルパトリーゼは魔理沙に並んだ。

「おおおう!？」

「というわけだ」

再び足場を作り、今度は勢いを殺す。魔理沙の速度に合わせたのである。

いつの間にか驚きの表情を消した魔理沙は、興味深そうにその仕草を見ていた。感心したように言葉を零す。

「……なるほどな、放出した妖力を固定させて踏み台にしているわけか」

「うむ、その通りだ。大したことではない」

自在に飛行できるということが常識ではない彼の世界において、空中で姿勢制御ある

いは方向転換する手段は押さえていて当然のモノである。

その中でも自分の近くで魔力を板状に固めることは容易かつ消耗も少ないため、最もポピュラーな手段と言っている。

特に今のヴァルバトーゼにとって、空中を移動する相手にはこれぐらいしか対抗手が存在しない。誇れるものでは決してなかった。

「まあでも、発想自体は面白いな。飛べることが当たり前の私らには中々でないものだと思うぜ」

「そういうものか」

「そういうものさ——さて、そろそろ到着だ。降りるぜー」

かくん、と隣の魔理沙が高度を下げた。その先には、森の中に小さく開いた空間にある館が見える。おそらくあれが彼女の家なのだろう。

ゆるやかに直下していく魔理沙に対して、ヴァルバトーゼは言葉通り落ちていく。それでも魔力を足場に勢いを殺しながらではあるが。

着地した魔理沙は家に背を向けてヴァルバトーゼの方へと向くと、自慢げに両手を広げた。

「ここが私の家だ」

魔理沙の言葉に従って、ヴァルバトーゼは彼女の背後に目を向ける。白を基調にした

洋風の館のようだ。

鶯が絡まっているなど手入れの行き届いてない面も伺えるが、十代の小娘が住むには十分過ぎる家だろう。立地を考えれば尚更である。

なのでヴァルバトーゼは素直に賞賛した。

「中々立派ではないか。よくこんな辺鄙な場所に建てたものだ」

「ああ、私もいい拾い物をしたと思ってるよ」

「……む？」

思わぬ魔理沙の発言に、ヴァルバトーゼは聞きとがめる。

「あ」

彼女は失言に気づいたように、口元を押さえていた。頬をかきながら目を逸らす。

「まーなんだ。聞かなかったことにしてくれ」

「……よかろう」

ため息を吐きつつも、ヴァルバトーゼは頷いた。

そこでふと、視界の端に気になるものが目に入る。大きな看板だ。玄関の横に立てかけられている。

「霧雨、魔法店……？」

「ああ、一応店もやってるのさ」

霧雨、というのはおそらく魔理沙の苗字だろう。

つまり魔法に関連する店、ということだろう。術式か、魔導書か、魔法具かあるいは全てか。

そんなヴァルバトーゼの思考を見透かしたように、魔理沙は首を横に振った。

「生憎だが、アンタの思ってるような店じゃないと思うぜ」

「そうなのか？」

「ああ、基本的には何でも屋みたいなものさ。……といつても妖怪退治が殆どだけだな」

「ほう」

見かけによらず、魔理沙は武闘派なのだろうか。あるいは、スペルカードルール専門なのかもしれない。

「さて、さっさと探し出すとするか。悪いが外で待つててくれ」

当然の話だろう。会ったばかりの悪魔を家に上げるのは警戒に欠けるにも程がある。

そもそもここに至るまでの過程も十分そう言えるが、あるいは幻想郷においてはそんなものなのかもしれない。

「ではここで待つているとしよう」

「日が落ちるまでには見つかると思うぜ」

そう言って、魔理沙は家の中へと消えた。

西の空は既に赤い。そう時間はかからないだろう。

特にすることのないヴァルバトーゼは、彼女が出てくるまでの時間を思索に費している。

そして空が暗くなってきた頃、玄関の戸が軋みをあげて開いた。出てきた魔理沙は右手に持っているものを掲げる。

「ふう、待たせたな。これだろ?」

赤い表紙に、見覚えのある文字列。それはまさしくパチュリーに見せて貰った魔導書であった。

「ああ、それだな」

「ほい」

差し出されたその本を、ヴァルバトーゼは受け取る。

後はこれをパチュリーに渡せば、今度こそ転移の術式を完成させてくれることだろう。

「確かに渡したぜ」

「うむ。……それは?」

ヴァルバトーゼが気になったのは魔理沙の左手にあるものだった。何らかの液体が入っている大きな瓶。紙のラベルに書いてある文字列は、中身の名称を表しているのだ

ろう。

そしてその名称自体には見覚えがなかったが、しかしどんなものであるかは見当がついた。思わずヴァルバトーゼは魔理沙の顔を見ている。人間であるはずの彼女はどう見ても精々が十代半ばに思えるが。

そんなヴァルバトーゼの態度を受けて、魔理沙はにやりと笑う。直後に告げられた正体は、やはり彼の予想通りだった。

「察しの通り、酒だけ」

人間は飲酒に年齢制限をつけているものだと思っていたが、存外幻想郷にはないのかもしれない。

あるいはそうであったとしても、ヴァルバトーゼに咎める理由はなかった。しかし疑問は残る。

「何故今、持ち出したのだ？」

「今日これから宴会があるのさ。すっかり忘れてたけどな」

「何かあったのか？」

何かめでたいことでもあったのだろうか。

そんな意図を込めた問いかけはあっさり否定される。

「いや？ 強いて言うなら、騒いで楽しむ——これじゃあ理由として不足か？」

「……言われてみれば、そうでもないな」
「だろ？」

得意そうに魔理沙は歯を見せて笑う。彼女は心底宴会が好きなようだ。しかし一転して表情を曇らせると、怪訝そうに呟いた。

「でも流石に最近のは何かおかしいんだよなあ」

「そうなのか？」

「ああ。まあアンタに愚痴っても仕方ないか。……ところでアンタも宴会に来るかい？」

「……何？」

流石にそれはどうなのか。

先の主張を考えるならば、魔理沙自身はいいのかもしれない。しかし他の参加者はそうではないだろう。

「いつも同じメンツで飲むより、知らない奴がいたほうが場が盛り上がるだろう？ それに紅魔館の連中も来るだろうから、そんな疎外感を感じることもないだろうよ」

「……成る程な。だが断らせて貰おう。誘い自体は嬉しいがな」

ヴァルバトーゼ自身は別に飲めや騒げや、という雰囲気は嫌いではない。

だが、今は。

彼の仲間が己を探すために奔走しているだろう今は、帰れる目処も立っていない状態で宴会に参加して楽しめるとは思えなかった。

もちろん帰るための情報が得られる可能性はある。だが聞きたいことだけ聞いて帰るわけにもいかない。となれば断るよりほかなかった。

「そりや残念。外から来たつてんで話も聞いてみたかったんだがな」

「すまん」

「いいさ、仕方ない。その気がないやつを無理に呼んでもお互い楽しめないだろうから」

そこで魔理沙はふと空を見上げた。

夜空に浮かぶ月を見てか、慌てたように表情を変える。

「おっと、そろそろいかないとな。また縁があつたら会おう。じゃあな！」

「ああ、ではな」

箒に乗って挨拶を済ませると、魔理沙は早々に空の彼方へと消えていった。

ヴァルバトローゼはそれを見送ると、彼もまた空へ跳び上がり紅魔館へ向かう。

後はこれをパチュリーに届けるだけ、だったのだが――

「あ、一足違いでしたね」

紅魔館へと着いた彼を出迎えたのは、美鈴のそんな一言だった。

その意味は考えるまでもないだろう。間違っていないだろう予想を、ヴァルバトローゼは口にする。

「……宴会か」

「あら、知ってましたか」

「魔理沙に、軽くな」

「なるほど。それで本は返してもらえたんですか？　もし貴方が本を持ってきたならば私が預かっておくように言われてるんですけど」

「うむ、これだ」

懐から魔導書を取り出して、美鈴に渡す。

受け取った美鈴は、とても奇妙な質問を投げかける。

「そういえば、貴方は宴会に行かないんですね」

「……変なことを聞くな、キサマ」

確かにヴァルバトローゼは、先程魔理沙から宴会に誘われた。

しかしそのことを美鈴が知るはずがなく、事実そうであろう。それでも彼女はヴァルバトローゼが宴会に足を運ぶ理由がある、と言ったのだ。

とはいえ心当たりはなく、真意も掴めない。そんな彼に美鈴は言葉を重ねる。

「パチュリー様が宴会に行くのって、不思議に思いませんか？」

「……言われてみれば、そうだな」

外出を余りしないであろうパチュリーが、魔理沙曰く理由のない宴会に足を運ぶというのはどうも彼女のイメージにそぐわない。

もちろんパチュリーが宴会を非常に好んでいる可能性もある。だが美鈴の反応を見る限りは、少なくとも表立ってそういうことはないようだ。

「……最近、三日起きに必ず宴会があるんですよ。そして必ずお嬢様と咲夜さん、パチュリー様が三人揃って行っているんですよね」

魔理沙もまた、そのようなことを言っていた。

そしてその宴会に普段余り行かないような者までも欠かさず足を運んでいるとなれば、確かにおかしいと言える。

ふと、そこで気づく。

「……待て、三日前もか?」

「ええ、三日前もです」

含みのある笑みを浮かべて、美鈴は頷いた。

すなわちヴァルバトーゼがフランドールに腕を落とされたあの日あその後、彼女ら三人は宴会に足を運んだということになる。

自棄酒だったのかも知れないが——それでもおかしい。

「何かある、ということか」

「妙な気配も感じますしね」

「妙な気配だと?」

「ええ。どう妙なのか、と問われると難しいのですが……あえて表現するならば——広い、ですかね」

ヴァルバトーゼも神経を研ぎ澄ましてみようもの、何も違和を感じない。

だが美鈴に冗談の気配はなく、ならば事実なのだろう。

「それが原因だと?」

「気配を感じるようになった時期と一致するんですよ。まあだからといって対処法も思いつきませんし、実害もないので放置しているんですけど。最悪、霊夢さん——博麗の巫女が解決するでしょうから」

「……成る程な」

「もし貴方が宴会に行くようならば間違いなく異変だと断言できたんですけどね」

あるいは、魔理沙がヴァルバトーゼを宴会に誘ったのはそれが原因なのかもしれない。ふとヴァルバトーゼはそう思った。

「まあ、そんなことはさておき」

唐突に、美鈴は話を変える。

硬く握った拳を掲げている彼女の用件は、自ずと知れた。

「もしお暇でしたら、一戦どうですか？」

「そういえば、決着をつけていなかったな」

もしあの瞬間で判定するのなら己の負けである。

ヴァルバトーゼはそう思っていたが、口には出さなかった。もう済んだ話だからだ。

何よりこれから闘うのであれば、あえて無粋なことを言う必要もない。

「はい。いい機会ですので」

「よかろう——受けて立ってやる」

かつて切り落とされた幕は、今宵再び開かれた。

第四話 初夏の宴

Stage 1 紅白と黒白

煌々と太陽が照らす夏の昼下がりに。

幻想郷の東の果て、博麗神社に一つの影が舞い降りた。

箒に跨り万人がイメージする魔法使い風の衣装で固めているのは、まさしく霧雨魔理沙その人である。

「ふう。前回は随分遅くなっちゃったからな。今日は間違いなく一番のりだろ」

独り言を呟きながら、魔理沙はきよろきよろと境内を見渡した。

しかしあるべき姿が見つからないことに首を傾げる。

「つかしーな。この時間はいつも掃除してるはずなんだが」

神社の横手に回りこみ、住まいの縁側を覗くものの目当ての人物は見つからない。

魔理沙は顔をしかめながら縁側に膝を乗せて、彼女の名を叫んだ。

「おーい！ 霊夢ー！ いるかー？」

「何よ」

「うひよわあつ!？」

真後ろからの声に、魔理沙は奇声を上げて飛び跳ねた。

彼女は振り向きそれが見知った顔だと確認すると、胸を撫で下ろしながら縁側へ腰を落とす。

「…………ふー。なんだ、霊夢か。驚かせるなよ」

「勝手に人ん家の縁側に上がるからよ。自業自得だわ」

「あー…………ま、細かいことは気にすんなよ。…………ん、随分汗かいてるな。どうしたんだ？」

ようやく落ち付いた魔理沙は、普段の霊夢と異なる様子に気づいた。

確かにもう夏に入ったとはいえ、霊夢がこの程度の暑さで汗だくになるとは思えない。

霊夢も言われて暑さを思い出したのか、ぱたぱたと手で扇ぎながら答えた。

「ああ、少し修行してたのよ」

「……………あん？」

どうやら耳がおかしくなったらしい。それともこれは夢なのか。

魔理沙は己の正気を疑った。頬を抓る。痛い。

「随分失礼な反応ね」

「修行ってあれか？ 強くなるために努力するーみたいなの」

つまり霊夢とは無縁の行動である。

だというのに彼女は肯定した。

「そう、それ」

「どういう風の吹き回しだ？ やつと長い冬が終わったばかりなんだぜ？」

ようやく雪も溶けたところだというのに、また雪に降られるのは勘弁して欲しい。向こう二年分は冬を満喫したのだ。

そんな意味も込めた魔理沙の言葉は、いささか霊夢の琴線に触れたらしい。彼女は瞋を吊り上げて怒気を示す。

しかし彼女自身自分が珍しいことをしている自覚はあるのか、ため息を吐いて表情を軟化させた。

「ま、ちよつと色々あつてね」

「ふーん、面白そうだな。聞かせてくれよ」

おおよそ茶を飲んでいるか、掃除をしているか、異変解決に乗り出しているか。

霧雨魔理沙の知る博麗霊夢とはそういう存在である。そんな彼女が何が起これば修行を始めるといふのか。

「まあ一息いれようと思つてたところだし、いいわよ。お茶汲んでくるから待つてて」

「あーよ」

少しの間を置いて二人分のお茶を持ってきた霊夢は、自分が修行を始めた理由を簡潔に語った。

その内容に驚いた魔理沙は、思わず彼女の言ったことをそのまま聞き返してしまう。

「負けたあ？」

「そ」

「弾幕ごっこで？ お前が？ 誰に？」

弾幕ごっこ——すなわちスペルカードルールが制定されてからまだ二年とたっていないが、その間霊夢が負けたなどという話は一度も聞いたことがない。

しかしどうやら早とちりだったらしい。たしなめるように霊夢は魔理沙の言葉を訂正する。

「弾幕ごっこじゃないわ。スペルルールよ。それで負けた相手は紫」

「……スペルルール？ なんだそりゃ」

「ま、アンタが覚えてないのも無理はないわ。スペルカードルールのちよつと前に施行されたはいいものの、人気が出なくてすぐに廃れちゃったし」

「あー……そんなもんがあつたような、なかつたような」

額を人差し指で押さえながら、魔理沙は記憶の中を探り出す。スペルカードルールが出来るまでのことを。

話はそう難しいものではなく、要は幻想郷内の人妖口が安定してきたのであまり殺し合いとかしないで白黒つけられるようにしよう——そんな流れでルールを定めた決闘を考えることになったのだ。

結果としていくつかの特殊決闘法が生まれたのだが、スペルカードルールが莫大な人気を誇った結果すぐに他の決闘法は忘れられることとなった。

魔理沙もすぐにその流れにのつた人間なので、実際にスペルルールで戦った記憶はない。

しかし開発の中心人物であった博麗の巫女——すなわち霊夢との付き合いが長かった彼女は、案がある程度固まった決闘法の試験戦に付き合ったことがある。その中の一つに、スペルルールはあった。

「どんなルールだっけ？」

「スペルカードを使わない弾幕ごっこみたいなもんじゃない？」

「じゃないってお前……」

「私だつてそんなおまけその一、みたいな決闘法のルールをいつまでも覚えてるわけないじゃない。あるとき紫が何も言つてこなかったつてことは少なくともルール違反はしてないわよ」

「そりやそうかもしれないけどよ……まあいいか。それにしたつて地道に修行とはお前

らしくないな。いつものお前だったら挑戦を繰り返して最終的に勝てばよし！　みたいな感じだろ」

少なくとも魔理沙の知る限り、霊夢がまともに修行を積んでいるなどということは見たことも聞いたこともない。

スペルカードルールが制定される前には、幾度か霊夢が負けたという話は聞いたことがある。しかし彼女は回復するとすぐさにリベンジマッチを敢行し、勝利をもぎ取っていたはずだ。

そんな荒業が可能なのも、幻想郷に住む妖怪は博麗の巫女を殺せないというのを逆手に取っているからなのだが。

ある意味、霊夢にのみ許されたコンティニューと言える。

「それができれば苦労しないわよ」

「どういうことだ？」

「あいつ、私を負かした次の日に『悪いけどしばらく手が空かないから貴女の挑戦は受けられないの。ごめんなさいね』とか抜かしやがったのよ」

「そりやまた、災難だな」

吐き捨てるように霊夢は言った。どうやら相当鬱憤がたまっているらしい。

そこらの妖怪が相手ならば知ったことかと襲撃をかけることができるが、その点にお

いて八雲紫という存在は非常に厄介だった。

魔理沙にしてみれば、いつもうさんくさい笑みを浮かべてうさんくさいことを言っている妖怪に過ぎない。

だが、あれでも幻想郷の中核を担う妖怪である。そんな彼女が相手をできないというのであれば、本当に大事なことなのだろう、おそらく。断言できないのが紫の人間性——もとい妖怪性なのだが。

だからこそ、霊夢も大人しくしているというわけだ。真の意味で幻想郷に害することを紫はしないだろうという確信ゆえに。

「だから次戦うときは完膚なきまでに叩き潰すために修行してるってわけ」

あるいはそれが紫の目的なのかもしれないが。しかし魔理沙はそれを口に出すことはしなかった。

霊夢もそれは織り込み済みだろう。紫との付き合いの長さは魔理沙とは比較にならないほど長いことから。

「ところで魔理沙」

「ん？」

「今日は何しに来たの？」

魔理沙はよく博麗神社に訪れる。どれくらい頻度かというとはほぼ毎日。

基本的には他愛のない雑談をするだけで終わるのだが、それでも彼女は話のネタを一つは持つてくる。それを霊夢は尋ねたのだが、魔理沙は覚えてないのかといわんばかりの口調で答えた。

「何っってお前、今日は宴会だろ？」

「あー……：そういえばそうだったつけ。でもその割に早いわね。前回なんかぎりぎりしてきたのに」

「ありゃあ予想外のトラブルがあったからな。いつもこういう催し物は私が一番だろう？」

「それにしたってまだ昼間よ？ 宴会は夜からだっというのに」

基本的に宴会とは夜に行われることが多いものだが、ここ博麗神社で行われる宴会はそれに輪をかけて夜に行われることが多い。というかまず日が出ているときに行われることはないだろう。

その理由の大部分に、参加者に妖怪が多いことが含まれているのだが——それがおかしいことであると追求するものは不思議なことに誰もいない。

ともあれ魔理沙がここまで早く来たことには一応理由はある。

「いい加減、話しておきたかったからな。——明らかにおかしいだろ？」

「……：そうね」

何を、とは霊夢は聞き返さなかった。この流れで話すことなど一つしかないからだ。周りを見回す。既に雪は溶け、短いながらも鮮烈に咲き誇った桜も散り、季節は夏へと足を踏み込んでいく。

「三日ごとには必ず開かれる宴会。これで何回目だ？ 特別誰かが提案しているわけでもないつてのに、いつの間にかまた三日後に宴会をすることになってる。自然すぎて不自然だぜ」

あれは雪も溶きかけ、桜も力を失いかけた頃だっただろうか。思えば冬と春の終わりを同時に見れる、というのは奇妙な情景だった。とはいえまさしく幻想的で美しく、酒も進んだのではあるが。

ともあれいかに幻想郷——もとい霊夢や魔理沙の交友関係には宴会好きが多いとは言え、宴会をするならば花見程度には理由をかこつける。桜が散った今、こんな短いスパンで定期的に宴会が続いているというのは流石におかしい。

そしておかしいことはもう一つあった。

「原因はおそらくあの妖気でしょうね」

「だろうな」

幻想郷全体を覆う妖気。

奇妙な宴会と同時期から感じ始めたその妖気は、当初こそ違和を感じぬほどに微妙か

あった。しかし宴会を重ねるごとにその妖気は高まっていったのだ。

そしてその妖気は、宴会の日になると博麗神社のあたりで強く存在を主張する。当然それは今日も――

「つてあれ？ 何か今日はやけに薄くないか？」

「言われてみれば、そうね」

いつもならば他の場所に比べて明らかに妖気が濃密になっているのだが、今日はそれを感じない。

魔理沙のみならず、その手の専門家である霊夢が同意したからには間違いではないだろう。

「だから今日は忘れてたのかもかもしれないわ」

「ありえない話ではないな」

もしあの妖気が『そういう風』に意識へ働きかけるものだとするならば、確かに頷ける。

「つまり解決するなら今――というわけね」

霊夢は茶飲みを置いて立ち上がった。

確かに、普段と様子が違うということは妖気の元凶に何らかの異常が発生していると考えられる。

ならばこの掴みどころのない妖気から、尻尾がでている可能性は十分にあった。
「そうだな」

頷いて、魔理沙も立ち上がる。

縁側に立ってかけておいた箒を掴むと、魔理沙は一つ背伸びをした。

「……何でアンタも立つのよ」

「決まってるんだろ？ 異変の元凶を拝みにいくのさ。こういうのは早い者勝ちだぜ」

元々何かしら異変があれば霊夢に倣って魔理沙も動く。今に始まったことではない。

だからか、霊夢は肩をすくめるだけでそれ以上何も言わなかった。

「まあ考えようによつては丁度いい機会だわ。いい加減実戦で慣らしておきたかったところだしね」

スペルルールの、ということだろう。

魔理沙自身、相手になつてもいいかなとは思っていたのだが、それは提案しなかった。彼女の魔法は極めて火力に特化している。霊夢がそれに当たるとも思えないが万が一を考えるとぞつとしない。

なので別の勝負を提案することにした。

「じゃあ競争だ。どっちが先に元凶をとつちめるか」

「あら、勝てると思ってるの？」

霊夢の言葉は挑発ではなく、事実である。

魔理沙は未だかつて霊夢に先んじて異変の元凶と対面できたことはない。

その理由は調査能力や探知能力などといった明確な力量の差ではなく、もつと理不尽なものであった。

勘。

霊夢はほぼそれのみを頼りに異変の元凶へと辿りつく。恐るべきことである。

本音を言えば勝てる気はしないのだが、魔理沙は皮肉げに口元を歪めて挑発する。

「今の霊夢には負け運がついてるからな。案外、私が勝つかも说不定ないぜ?」

「……言ってくれるじゃない。負けたほうは今日の宴会で一発芸よ!」

「上等だ!」

こうして、いつものように紅と黒の二つの軌跡が幻想郷の空に刻まれることとなった。

Stage 2 移ろいゆく事態

「出来たわよ」

魔理沙から魔導書を回収してから三日。

紅魔館地下図書館を訪れたヴァルバトーゼを出迎えたのは、パチュリーのそんな一言だった。

「おお」

どうやら、転移の術式が完成したらしい。

それ自体は喜ぶべきことなのだが、今更ながらに一つの疑念がヴァルバトーゼを包んだ。

「ところで……その術式をどう身につければいいのだ？」

ヴァルバトーゼの転移運用は極めて感覚的なものである。先日パチュリーに理論を説明されたときも、理解はしたものの自身がそういう使い方をしているという実感は終ぞ沸く事はなかった。

ならば懇切丁寧な解説を介したところで実用までこぎつけるとは思えない。あるいは半端に術式が乱れ、今までの転移運用すらも難しくなるかもしれない。

そんな懸念を込めた問いかけに、パチュリーはテーブルの上に一つの魔導書を置くことで応じる。

「これは？」

「手を載せて、妖力を——魔力をスペルカードを使うときの流してみなさい」
無為に問いを重ねることはせず、ヴァルバトーゼはその言葉に従った。表紙に手を置いて、魔力を流す。

直後、閃光が駆け抜けた。

「――」

見かけ上に変化はない。しかし彼の内面で起こった変化は劇的であった。

脳の奥を無数の言語や記号が駆け巡る。それはまさしく魔法言語であり、まさしく術式であった。だがそれだけである。

その手の知識が欠けているヴァルバトーゼは、それがどういう意味を持っていて、どう成り立っているのかを理解することができない。

濃密な数瞬を経て、その現象は終わった。もはやそれらを明確に想起することも適わない。

しかし『どうすればいいのか』はわかる。

不思議な感覚だった。体感的に件の転移を使えるという確信が、彼の中にあつた。

「今のは、一体……」

内心が漏れたような眩き。

しかしパチュリーには届いたらしく、彼女は丁寧に答えた。

「一言で表すなら術式の継承よ。魔法使いが弟子に秘伝を授けるときとかによく使われる手法ね。適正な知識があれば相応の理論を手に入れ、適切な素養があれば術式の運用を可能とする。まあ、よくわからないけど使えるようになった——そんな理解で十分よ」

「あとは魔力さえ足りていれば——」

「今度こそ、帰れるかもしれないわね」

結局、そこに帰結するというわけだ。

もしこれでダメならば——というのはそのとき考えればいい。

とにかく試す。そのためにやらなくてはならないことがあった。

「まずは『外』へ出なくてはな」

「その必要はないわよ。そのまま抜けれるわ」

博麗大結界を越える手段を講じなければならぬ、と思いきやパチュリーがあっさり否定した。

紫を頼ることを考えていたヴァルバトーゼには朗報である。無闇に借りを作りたく

はない。

だがそれは一つの疑問をヴァルバトローゼに生じさせた。

「その術式も組み込んだのか？」

「まさか、そんな無駄なことしないわよ。一定以上の魔力があれば大結界を貫けるとい
うだけ」

つまり転移手法に付随した効果、ということだろう。

数多の空間をも次元断絶させている結界だが、チャージした魔力ならば容易に突破で
きるらしい。

「……大丈夫なのか、それは」

「自動修復機能があるみたいだし平気よ。一瞬のことだから影響もでないわ」
経験談なのだろう。澁みなく語るパチュリーにヴァルバトローゼは納得した。

そもそも一つの世界として確立させるほどの大結界が、そんな柔であるはずがない。

「ならば早速試すとするか」

「それがいいわ」

この方法ならば、このまま帰れたとしても魔力さえ回復すれば戻ってこれるはずであ
る。

世話になった相手には挨拶をしたいが、するならば成功したその上で戻ってすれ

い。

ヴァルバトーゼはそう判断し、体内の魔力を走らせた。自身の中にある、奇妙な感覚が術式を模つていく。

これまでとの違いはすぐに表面化した。彼の足元に法陣が展開されていく。ほのかに光る深い紺と淡い銀——魔力のラインが不規則に幾何を描いた。

数秒の時間をかけて、魔力のチャージが終了する。即座にヴァルバトーゼはそれを解き放つた。あとは同位相の二点間が亜空間で繋がれば自動で転移が発動するのだが――

「……ダメか」

放たれた矢は目標まで届かなかった。

待機していた空間の固定及び移動の術式は前提条件の食い違いからか、霧散する。音もなく展開されていた術式が消えた。

「どうするの？」

「……………」

大いに説明不足感のあるパチュリーの問いだが、ヴァルバトーゼは理解していた。即座に答えなかったのはすぐに結論が出なかったからに他ならない。

彼女が問うたのはすなわち帰還手段のアプローチをどうするか、ということだ。転移

にすぎるか、別の方法を探すのか。あるいは諦めるのか——という意図も込められているのかもしれないが、それは一考にすら値しない。

しばしの沈黙を置いて、現状を整理したヴァルバトーゼはすぐに結論を出した。嘆息しつつ、考えを述べる。

「……やれることをやるしかあるまい。引き続きキサマには魔法的なアプローチで元の世界に帰る手段を考えてもらいたい」

「貴方は？」

「俺がここへ来た原因を探るとしよう。直接帰還には繋がらなくともそこから何か閃くことがあるかもしれないな。あるいは魔力を増やすか、というのもあるが」

後者は望みが薄いだろう。チカラを失って四百年——そう、四百年かけてこの程度なのだから。一朝一夕は愚か、年単位ですら明確な増加が見込めるかどうか。

あるいはまさしく後一步のところであった、とでもいうのなら届きうる可能性はあるが。流石にそれは希望的観測が過ぎる。

よって短い期間でヴァルバトーゼが帰れるようになるとするならば、その可能性は大きく三つ。

まずヴァルバトーゼが幻想郷へ来た原因を掴み、それが帰還へ繋がるものであるかどうか。

あるいはパチュリーが全く新しい転移術式を閃いて完成させるか。

もしくは全く予想もつかない方策が見つかるか、だ。

「ま、私の方には余り期待しないでね。今の術式それが私の知る限り最効率の転移手段なんだから」

「ああ、結局は俺の非力ゆえ、だったのだからな。これ以上キサマを当てにして待つつもりはない」

そもそもヴァルバトローゼは待つ性分ではない、というのもある。自分の足で道を拓くのが好きなのだ。

問題は、具体的な方針が何一つ見つからないことだろうか。しばらくは幻想郷をしらみつぶしに当たるしかないだろう。

「とりあえず、一応転移のテストしておいたら？ 魔力不足以外に不備があつたのかもしれないし」

「……それもそうだな」

急ぎの用があるわけでもないゆえ、ヴァルバトローゼは頷いた。確かに『外』に出れるというならば、一度試しておくべきだろう。新たな転移を体得した、という実感も得られる。

目標は『外』の博麗神社。決断したヴァルバトローゼは再び魔力を活性化させた。

「ちなみに戻ってこなくていいわよ。私も用事あるから」

転移の間際、パチユリーが声が耳を叩く。

発動まで刹那もなかったが、その短い時間でヴァルバトーゼは思考にひっかかりを感じた。

しかし具体的な言葉には出来ず、今度こそ彼はその場から姿を消した。

結局、転移には問題がなかった。やはり魔力が足りないのだろう。

幻想郷へと戻ったヴァルバトーゼはアテもなく幻想郷を彷徨った。

それからしばし、空が朱色に焼けた頃のこと。

「……………む？」

こつん、と何かがヴァルバトーゼの頭にあたる。

転げ落ちてきたそれを掴むと、それは彼に馴染みのあるものだった。

マイワシ。おそらくもつとも食用に使われているイワシの代表。

ヴァルバトーゼは今、鬱蒼と茂る森の中にいる。周囲に気配も感じず、突如イワシが降ってくるなど珍事の極みと言えよう。

しかし彼には一つの心当たりがあった。

「一つ、貴方に聞きたいことがあるのだけだ」

八雲紫。

横合いの空間から突如現れた彼女は、一つの疑問がヴァルバトーゼにあるという。ひとまず手に持ったイワシをかじりつつ、彼は続きを待った。

「貴方、『外』に出た？」

「……うむ、先程な」

んぐんぐとイワシを飲み込んで、ヴァルバトーゼは答える。

つまり彼女が現れた理由とは、博麗大結界に異常が表れたからか。

「あの手法で『外』出たのは問題だったか」

「ああ、いえそういうことじゃないのよ」

「……何？」

予想と違った答えにヴァルバトーゼは毒気を抜かれたように疑問を零した。

空間の裂け目に座る紫は、どう答えたものかと思案しているようだ。聞かせたくないことでもあるのだろうか。

「……先日、貴方がここへ来たでしよう？」

「そうだな。全く何が起こったのか、未だに理解できてはおらぬが」

「流石に異世界の存在が幻想郷に訪れたのは初めてなのよ。だから少しここの出入りに気を遣っている、というわけ」

「ああ、成る程」

ヴァルバトローゼの顔に理解の色が灯る。

要するに『また』なのか、と懸念していたのだろう。杞憂に過ぎなかったわけだが。

「一応聞いておくけど、帰れたの？」

「いや、残念ながらそういうことではない」

これまでの事情をいかいつまんでヴァルバトローゼは話した。

紫は納得したように頷き、彼の現状を一言で表した。

「つまり振り出しに戻ったというわけね」

「遺憾ながらな。……差し当たっては俺が幻想郷に転移した原因を探っているのだが――

――手がかりがなくてな。何か知らぬか」

「……………」

今ヴァルバトローゼが入り出したことを察知したように、その時も何かを感じたのではないか。

そう考えたゆえの質問だったのだが、紫は即答しなかった。

無言。いつの間にか開いた扇子で、彼女は表情も隠している。

しかしヴァルバトローゼはその裏に一つの感情を感じていた。迷いだ。少なくとも悪意ではない。

なればこそ彼は口を開き、紫もまた同時に口を開いた。

「——おや、紫と知り合いだったのかあんだ」

しかし空間に響いた声はそのどちらのものでもなく——おのずと二人の視線がそこへ重なる。

直後にヴァルバトーゼが感じたのは強烈な違和感だった。ちぐはぐな、とでも形容すべきだろうか。

見かけは少女。レミアアやフランと同じ、あるいはそれよりも幼い。

しかし瓢箪を手に持ち、顔が赤みがかっている。つまり酔っているのだろう。

そして長く伸ばした薄茶の髪、その上のほうから二つの角が生えていた。

さらに感じるチカラの強大さは今まで出会ったどの妖怪をも越えている。

ここまでできて相手の正体を察せぬほどヴァルバトーゼは愚鈍ではない。彼女は己に負けず劣らず知名度の高い存在——

「鬼か……!」

「そういうあんたは吸血鬼らしいね。全然チカラ感じないけど」

なぜか、彼女はこちらの素性を知っていた。

そして深いところまでは知らないらしい。

「——で、何しにきたの? 萃香」

先程の言葉からも伺えたが、紫とこの鬼——萃香とやらは知り合いらしい。

割り込まれた形になったからか、いささか紫の視線は冷たい。

そんな彼女に萃香は意を介した様子も見せず、笑って答えた。

「いやなに、ただの興味本位さ」

「貴方の関心は霊夢にあるものだと思っていたけれど」

「否定はしないけどねえ。前から呼んでたのにちつともこないんだよ、こいつ」

「あら、珍しいわね」

「だろ？ 自覚した上で抗われるのはともかく、無意識に流されたのは初めてでさ。ちよつとはなしてみようかなあなんて」

いまいち意味の掴めない二人の会話に、ヴァルバトーゼは眉を顰める。

しかし彼は自分に水を向けられたのは察せられた。

「用があるのは俺に、ということか」

「うん。そういうこと」

あつさりと萃香は頷く。

しかしヴァルバトーゼには全く心当たりがない。興味を抱かれる理由も、呼ぶ呼ばないの事情もさっぱりだった。

とはいえあちらの用に応じてからでいいと彼は判断したのだが。

「で、俺に何を尋ねたいのだ？」

「うーん、それがさ、具体的に聞きたいことがあるわけじゃないんだ。強いて言うのならあんたの人となり——妖怪となりとでもいうべきかね」

ぞわり、と総毛立つ。

この瞬間、ヴァルバトーゼは自分が問いを投げる機会が訪れないことを直感した。

「でも私は会話で推し量るってのは得意じゃないのさ。だから——^{こぶち}拳で語らせてもらおうか！」

萃香がゆらりと身体を前に倒して——直後、大地が悲鳴を上げた。

Stage 3 古のさかしま

身体に残る痛みを無視して、ヴァルバトーゼは立ち上がった。彼の背を支えていた木はそれで限界を迎えたのか、軋みをたてて後ろに倒れる。

結構な距離を吹き飛ばされたらしい。空から見れば深い森の一角に一つの傷跡が見取れるだろう。

「これには反応できるみたいだねえ」

「それは流石に見縊りすぎというものだ」

過去においてヴァルバトーゼはその高名さゆえにあらゆる形で襲撃を受けている。不意打ち騙し討ちが日常茶飯だった過去と比較すれば今回のこれはむしろ温い。実際、彼は抜剣して対応する余裕があったのだから。

問題は、力に差がありすぎることか。いかに先手を取られ、万全な体勢で受けられなかったとはいえないささかダメージが大きい。

頑丈さに主眼をおいた愛剣には傷一つないが、抜けた衝撃だけでかなりの被害を受けた。剣を持つ手には未だに痺れが残っている。

だが今の交錯で、ヴァルバトーゼは二つの光明を見出していた。

一つは萃香のリーチ。彼自身もチカラを失った影響で若干縮んでいるものの、萃香の体躯とは比較にならない。加えて彼女は無手で彼は剣。間合いさえ読み間違えなければ一方的に攻め続けることも可能だということである。

もう一つは彼女の動きだ。先の一撃に積み上げられた術理は感じなかった。あるいは酔っ払っている影響なのかもしれないが、思うがまま力のままのその攻撃は直線的で読みやすい。

そもそもチカラの強い存在は技に頼ることを嫌い、正面からのぶつかり合いを好む傾向がある。先程の言葉を考えてもこの読みは間違っていないだろう。

ならば取るべき手は一つ。

痺れの残る右手から左手に剣を持ち替えたヴァルバトーゼは、こちらに向かって歩いてくる萃香目掛けて飛び出した。

「お」

それを見た萃香は面白そうに笑みを浮かべて足を止める。迎え撃つ心算だろう。

一息に間合いをつめたヴァルバトーゼは、彼女の手足が届かぬ距離から剣を払う。右から左への一閃。

その軌道に合わせるように萃香は左腕を掲げた。自身の頑強さならば問題なく受けきれ、という判断だろう。

だが――

「…………おおう？」

劍がすり抜ける。否、劍が消えた。

普段劍を魔力に還元して体内に納めているヴァルバトーゼは、呼吸をするように劍を『出し入れ』できる。それを利用して、萃香の腕に接触する直前に劍をしまったのだ。

予想外の状況に目を白黒させている萃香を尻目に、ヴァルバトーゼは右手に出した劍を振り下ろした。

肩口から袈裟に懸ける一閃。よもや両断できるとは思っていないが、深手は取れる。ヴァルバトーゼにはその確信があった。

しかし彼は忘れていたのだ。その確信を今まで砕いてきたのは誰だったのかを――

「――な」

「あんたもさあ、私を少し見縊りすぎちゃあいないかね」

あろうことか、その劍は萃香の肩口で止まっている。服の下の薄皮を一枚切り裂いて、少し血が滲んでいるだけ。

渾身の一撃ではなかった。しかし会心ではあった。だというのに――

ヴァルバトーゼのその驚愕、困惑は刹那にも満たない一瞬のことであった。

だがそれは間違いなく悪手。せめて隙を晒すのなら退いてからにすべきだった。こ

ここでは彼我が近すぎる。

「ガ——！」

痛みを伴った代償はヴァルバトローゼを再び宙へと舞い上げた。盛大に血を撒き散らしながら、二筋目の傷を森に刻んでいく。

木々をなぎ倒し地面を跳ねる最中、どうにか彼は剣を突き立て勢いを殺した。喉の奥から鉄の味が迫り上がる。

しかしそれを味わう余裕もなく、彼の頭上を影が覆った。

「まさか、今ので終わりなんてこたあないよねえ？」

「——！」

真上から迫った脅威を飛び退いてかわす。

砲音が優しく聞こえるほどの轟音が響いて、周囲の大地が隆起した。出鱈目な一撃。

これを以てヴァルバトローゼは萃香との絶対的な力の差を確信した。

受けに回ってはやられる、ならばどうするか。攻め続けるしかない。例えばダメージを与えられなくとも、代わりに反撃の暇を貰えばいい。

その判断と同時に、ヴァルバトローゼは駆け出した。盛り上がった大地の隙間、土煙の奥でゆらりと立ち上がった影を指して彼は突き進む。

跳ね球のように大地の合間を蹴り抜けた彼は、その勢いのままに萃香へ大上段から剣

を落とした。

「おお、まだまだ元気そうじゃないか」

「無論だ……！」

片腕一本で止められてしまったが、もはや驚くに値しない。受け止められた反動に逆らわず、後ろへ飛んで反撃を避ける。

その一つ一つの動作に体が悲鳴を上げるが、回復を待つ時間はない。悠然と立つ萃香に向かい、ヴァルバトローゼは再び呐喊した。

両者の間に存在する差というものは極めて顕著かつ明確である。

力——すなわち基礎能力全般においては萃香が勝り。

技——すなわち術理、経験においてはヴァルバトローゼが勝っていた。

これだけ聞くと互角に思えるかもしれない。だがここで繰り広げられている闘いの流れは、明らかに偏っていた。

「ほらほら、どうしたどうしたあ！　もう限界なのか！」

「つ……！　オオオツ！」

活性化した魔力が熱を持ち、交わされる剣と拳が空気を焦がす。気づけば彼らの周りには紅い霧が漂っていた。白熱化した戦場が飛び散る血を全て気化させているのだ。

そしてその全てがヴァルバトローゼのものだと言えば、この闘いの趨勢がどちらに傾い

ているかなど説明する必要もないだろう。

これは難しい話でも、道理に適わぬ話でもない。確かに武術家として、戦闘者としての能力ならばヴァルバトーゼが上だろう。

だから、どうしたというのか。

基礎能力ステータスの間に桁二つも差が生じれば、技術だの経験だのといった『小手先』でその差が覆ることなどない。

矮小な蟻が、巨像の足を流すことができないうように。

すなわち、ヴァルバトーゼと萃香の間に存在する実力差というものはそういうものであった。

「その諦めない精神は大したもんだと思うけどさ、もう何も無いのかい？」

「さてな……！」

ともすれば崩れ落ちそうな両足を叱咤して、ヴァルバトーゼは剣を振るい続ける。それはいかなる理由からか。

実のところそこまでして萃香と闘う理由が彼にはない。萃香の都合のみでなし崩し的に始まった戦闘に、彼が付き合う義理などないのだ。

もちろんヴァルバトーゼにはプライドは存在する。闘いを挑まれて背中を向けることを彼は決して好まない。

だがそれは命を懸けるに値することか、と言われれば彼は首を横に振るだろう。彼は死そのものを恐れることはないが、それによつて約束が果たせなくなることは断じて許容できることではないゆえに。

ならばこの闘いの本質が殺し合いでないからか。今までの萃香の態度から鑑みて、これは単なる力比べであると結論付けたからなのか。

だが萃香が振るう暴力は、下手すればヴァルバトーゼの命を吹き飛ばしかねないほどに凶悪極まりないものである。

そのリスクを背負い続ける彼の意図はどこにあるのか。やはりただの意地なのか。少なくとも戦況に変化は訪れず、そして萃香は見切りをつけた。

若干の落胆を声に滲ませて、彼女は宣言する。

「……それなりに楽しかったけど、何もないうてならそろそろ終わりにしようか」

そのセリフに抗うように、ヴァルバトーゼは横薙ぎの一閃を放った。だがいとも容易く萃香にいなされる。彼の右手が空を泳ぐ。

その隙を補うように、彼は左手に剣を入れ替えてのもう一閃。

しかし首を狙ったその一撃も萃香の右手に跳ねられた。

結果、彼は万歳のし損ないのような姿勢を晒す——完全な死に体。

当然、それを見逃す萃香ではなく。

「ガ、……ア………ッ」

凶手が、ヴァルバトーゼの腹を貫いた。

激痛からか、彼の手から剣が落ちる。

がくがくと震える身体はそれでも倒れることを拒むのか、彼の両手が虚空を彷徨う。

ふいに、彼は掴んだ。丁度よい高さにあつたそれを——萃香の両肩を。

その動作は余りに自然で、だからこそ萃香は苦笑した。

「ま、死にやあしないですよ。リベンジマッチは歓迎するからいつでもかかっておいで」

勝負はついただろうと、彼女は腕を抜く。

結局、彼女は気づくことができなかった。

真上——彼女の死角にある、ヴァルバトーゼの口元が終始大きく歪んでいたことを。

萃香はヴァルバトーゼの両腕を優しく払おうとして、ようやく気づいた。いつの間

か、万力のような力が込められていることを。

そして彼女が力を込めるよりもほんの少し早く、それは放たれた。

「——あ、かつ!?!」

萃香の表情が苦痛に歪んだ。傍から見れば何も変わっていないように見えるだろうが、ヴァルバトーゼの両手の平から鋭く研ぎ澄まされた魔力の針が彼女を貫いている。

彼は萃香との闘いにおいて、極力魔力の使用を抑えていた。転移はおろか、空中移動

も控えるほどに。

その行動は結局までの時間を著しく縮め、圧倒的なまでの敗北を彼にもたらした——ように、見えた。

今の、この瞬間までは。

だが違う。彼はこの時を待っていたのだ。手持ちの全魔力を練り上げて、敵に叩き込む隙を。

その効果たるは凄まじく、先の剣閃ですらともに裂けなかつた彼女の肉体を容易く貫いていた。少なくとも肺には達しているだろう、その手ごたえが彼にはあつた。

だが人間ならばいざ知らず、その程度で鬼がやられると彼は思っていたのだろうか。

「こゝの……っ！」

口元から血を零しつつ、萃香はヴァルバトーゼの両腕を掴んだ。

確かにダメージはある。しかし致命には程遠い。ゆえに彼女は己を見誤つた愚か者の腕を引き千切らんと力を込める。

だが——彼女を貫く魔力の針がそれだけのものであると、誰が言ったのか。

突如己を支配した強烈な虚脱感に、萃香は両目を見開いた。

「流石は鬼だというべきか——凄まじい生命力だな」

「あんた……私の、体力を……っ！」

生命強奪。

これこそ、ヴァルバトーゼが魔力に織った術理。

針で貫いた対象から一定の割合で生命力を吸収するそれは、対象の生命力が多いほどにその吸収量も増していく。

さらに吸命の瞬間にもたらされる虚脱感が対象から抵抗を奪う。

とはいえ虚脱状態は長く続くものではない。事実ヴァルバトーゼは己の腕を掴むそれに、少しずつ力が込められてきていることを確認していた。

「ハアツッ」

「がっ……」

ゆえにヴァルバトーゼは萃香の顎を膝で打ち上げ、術を解除すると剣を拾って後ろへ飛んだ。

一足で十メートルほどの間合いを確保したヴァルバトーゼは、動かない萃香を見つめつつ己の状態を確かめる。

腹部の風穴は塞がっており、その他の重傷もほぼ回復。少なくとも戦闘に影響がでるようなダメージはない。

問題は魔力。ほぼ全ての魔力を使い果たした以上、同じ手は使えず転移も使えないだろう。

「何だと——？」

残念残念——そう言い残して萃香の姿が消える。

ヴァルバトーゼは周囲の気配を探るが、それらしきものは感じない。

ついでに言えば紫のそれも。思えば闘いが始まって以降、影も形も見ていない。闘いに巻き込まれないように退いたのだろう。

「……ふう」

少しの間をおいて、ようやく闘いが終わったことを実感したヴァルバトーゼは緊張を解いた。

最後に萃香が零した言葉の意味が気になったものの、どうせ考えても詮無き事と彼は切り捨てる。

しかししてどういうことか——答えの方から訪れた。

それは空から現れた一つの影。

「……どうりで、心当たりがないと思った」

ヴァルバトーゼの眼前へと降り立った彼女の正体は、紅白の巫女衣装で身を包んだ博麗霊夢。

彼が彼女と会うのはこれで二度目だが、こちらを見るその目には紛れもない敵意が存在した。

「覚えのないそれに困惑するヴァルバトーゼへ向けて、
霊夢は鋭く宣言する。
「アンタが犯人ね——？」」

Stage 4 異主共演

「……………」

眼前に立つ自称異世界の妖怪を見つめながら霊夢は一つの違和感と闘っていた。

帰ったはずのヴァルバトーゼとやらが今ここにいること自体はさほど不思議ではない。魔理沙や紅魔館の連中から前回の宴会で色々聞いたからだ。

そしてこのよくわからない異変を起こした妖怪がこいつである、という判断は間違っていないと霊夢は思っている。

全く原因が掴めない異変も、知りもしない『異世界』とやらの妖怪ならば領ける話であり、何より件の妖気がここには濃密に漂っていた。

だというのに今まで幾多の異変を説明に導いてきた己の勘が、こいつではないと訴えているのはどういふことか。ここが異変の中核で間違いないのに。

諸悪の根源はここにいて、でも目の前にいる妖怪ではなく、しかし他に誰もいない。馬鹿げた話だが、勘を信頼するのであればそういう結論になる。

だからこそ、霊夢は問うた。常日頃異変の最中においては会話と弾幕の順序が逆である彼女だが、ことこの異様さにおいてはいささか慎重にならざるをえなかったのだ。

それに対してヴァルバトーゼは沈黙を続けている。ちよこちよこ表情を変えているのが奇妙であるが。

「もう一度だけ聞いわ。この異変は、アンタの仕業ね？」

「俺ではない」

再びの問いに、今度こそヴァルバトーゼは口を開いた。

答えは否。霊夢の勘と合致する内容である。

「……なら質問を変えるわ。アンタはこの異変の黒幕を知っているの？」

「おそらくではあるが、今の今まで闘っていた相手がそうなのだろう」

その言葉で霊夢は周囲の惨状に目を向けた。ここ一体だけ地形が変わっている。

そもそもここへ足を運んだ理由がそれだった。近くまで来ていたのは全くの勘だが。

「なら、そいつはどこに消えたのよ」

「キサマには借りがあるゆえ、答えてやりたくはあるのだが……生憎と知らぬ。突然消えたのでな」

嘘はない、と霊夢は捉える。

この荒れようはまさしく闘いの傷跡に相応しいものである上に、そうであるならば偽りを述べる理由が思い当たらない。

「ふうん、そう。じゃあとりあえず、アンタをとつちめることにするわ」

「……どうい話だ」

話の脈絡が見えなかったのか、その声には困惑が含まれていた。

しかし霊夢は当たり前のように告げる。

「どうもこうもないわよ。幻想郷で好き勝手暴れて、自然を荒らしたんだから当然でしよ」

「おお、成る程」

事実ではある。幻想郷は狭いのだ、力のある妖怪が好き勝手暴れてはすぐに更地になりかねない。

ゆえに闘り合うのであれば周囲に被害のでないスペルカードルールか、高空で争うことが推奨されている。霊夢の理論は間違っていない。

だが彼女自身、それはあくまで理由の一つであることを理解していた。

根拠はないが、こいつを倒せば黒幕が出てくる。そう勘が告げているのだ。

「だが、素直にやられてやるわけにはいかぬな」

「別に期待してないわよ。スペルルールで——と、思っただけどアンタが知っているはずがないか」

マイナーな決闘法だ、まだ幻想郷へ来てから半月も経っていないだろうヴァルバトーゼが知る道理はない。

というよりも特殊決闘法の存在を知っているかどうかも怪しい。

ルール無用の殺し合いすらも懸念した霊夢であったが、それは杞憂に終わることとなる。

「いや、知っている。残機はいくつだ」

驚くべきことに、ヴァルバトーゼは知っていた。

喜ぶべきことなのだが、高まる疑念を抑えることができない。

何かがおかしい。

「……二」

「よかろう」

考えるまでもなく、紫あたりが話したことは理解している。

それでもなお、作画的な影がちらついて離れない。

「さて、いつでもかかってくるがいい」

だが遅い。思案に耽るには状況が許してくれない。

霊夢は混濁した思考を振り捨てて、袂から札を取り出した。

相手は剣を構えて動かない。近接戦闘を得手としているのだろう。

『夢想妙珠』

ならば近づく道理はない。様子見もかねて放った霊弾は極彩色の軌跡を描きながら

八方よりヴァルバトーゼに襲い掛かる。

彼の判断は迅速だった。逃げ場がないと見るや霊夢に向かつて直進、行く手を阻む弾幕だけを切り裂いて彼女へ迫る。

しかしその手の芸当はヴァルバトーゼが初めてではない。ごく最近、長き冬にそれは見た。

ゆえに弾幕を突破して抜けてくる彼を見ても、霊夢は冷静さを保っている。後はスperlの起こりを見逃さなければ対処は容易い。

だが、いくつか彼女は勘違いをしていた。

『『イワシ』ッ！』

珍妙な『宣言』とともに放たれたのは『ただの』斬撃。

博麗の巫女である彼女が、致死を孕むそれを向けられたのは本当に久しぶりのことで。

硬直する思考に反して身体が結界を展開したのは、経験と本能によるものだろう。多分に、偶然であったことは否めないが。

しかしその衝撃が霊夢の意思を呼び戻した。

「っ、っのー！」

結界を破裂させて、衝撃でヴァルバトーゼを吹き飛ばす。

若干体勢を崩した彼に対して、霊夢が選択した行動は退避であった。全力で身体を上を持ち上げる。

上空へと飛んだ霊夢を見て、ヴァルバトーゼは動かない。追う手段を持っていないのか、別の理由か。

どちらにせよ霊夢には時間が欲しかった。既に思考はぐちゃぐちゃに乱れている。戦闘行動を続行するためには一度考えを整理しなければならぬ。

水を浴びせられたように冷えた頭は、一つの記憶を引き出した。スペルルールについてだ。

まずはルールの詳細。『残機制』と『宣言のみ有効』と『全身防御無効』の三つ。シンプルで悪くないルールといえる。しかしもはやこれを知る存在がどれほどいるか。

これらのルールの意図は大まかに実力に大きな開きがある存在同士でも闘り合えるように、と作られたものだ。事実このルールはその点においては問題がなかった。

しかし拮抗したモノ同士がこのルールで争うと、一つの問題が発生した。咄嗟の一撃が致命になりかねないのだ。

実力に格差があればそうはならない。弱者は全力であっても相手を滅ぼすことはありえず、ゆえに強者は余裕をもって対応できる。

だが実力が同程度の場合には違う。互角の攻防を演じる最中につき、ふと放った加減の効いていない一撃が相手を殺しかねない。

紫との闘いはそれがなかった。チカラの差うんぬんよりも、互いを良く知っていたから。

ならば今回の相手はどうか。両刃の剣を持った『異世界』の妖怪。

そう、幻想郷の住人でないのなら——

「そちらがその気がないのなら、ここちらから往くぞ」

戦闘の結果、己を死に至らしめたとしてそれを忌避する理由はないのではないか。

跳躍して迫るヴァルバトーゼの剣には殺意は見えない。だが——躊躇もまた、見えな
い。

「っ」

僅かに香る殺し合いの気配に、霊夢は小さく息を呑んだ。

とはいえ相手の行動は所詮跳躍に過ぎない。少しばかり身体を逸らせばその背中に
追い討ちをいれるだけで一つ墜とせる。

『『マイワシ』』

「甘い——、……ッ!?!」

その確信は、すぐに砕かれた。

確かにヴァルバトーゼは空を飛べなかった。だからといって、空中戦ができぬと誰が言ったのか。

彼は空中で足を踏み抜いた。そして反転、跳躍。返しの刃が鋭く煌く。

それは初撃をかわして油断していた霊夢にとって、致命的な一閃だった。

『ウルメイワシ』 ツ！

結界の展開は間に合わない。

しかしどうにか深手は避けた。かろうじて身体を逸らした霊夢に、相手が軌道の調整をできなかったことが幸運だったと言える。

「く——！」

「後二つだな」

それでも脇腹から鮮血が舞い、鋭い痛みが霊夢を苛む。

明確な危機。それに応じるように彼女の知覚が加速した。

世界から明度が消えていき、ゆるやかに流れていく景色からは時間との乖離を感じさせる。

そして極限まで加速した知覚が、世界の全てを止めたその瞬間。己に迫る明確な死を認めたそのときに。

霊夢の中で、何かが切り替わった。

刹那の間に世界へと色が戻る。気づけば、彼女の右手に霊符が握られていた。霊力を流す。

『封魔陣』

「な——、グ……ッ！」

自己中心範囲の霊力波動。

至近で放たれたそれは、空中移動が不自由なヴァルバトーゼが即座に回避できるものではなく、防御すら許さない。

「アンタもね」

ぐらりと落下するヴァルバトーゼに霊夢は冷たく言葉を被せる。

霊夢は先程までの己を自覚する。忘れていたことを。腑抜けていたことを。

およそ二年、スペルカードというぬるま湯に慣れてしまった彼女は戦闘における勘を著しく鈍らせていた。

無意識化で彼女はそれを自覚していた。だからこそ紫との敗北『程度』で己を鍛えるという珍事に至ったのだ。

しかしその一方で現状を忌避してはいなかった。博麗の巫女である己は——スペルカードルールが広まった今は、己が死に瀕する闘いはもはやないだろうと。

何を、勘違いしていたのか。

『カタクチイワシ』ッ！』

霊夢は喉元へ迫る刺突を紙一重で交わしつつ、ヴァルバトーゼの顔に手をかざして霊力を開放した。

『陰陽宝玉』

もし幻想郷が完全に閉じられた世界であるというのなら、それでもよかったのだらう。

しかしそんなことはありえない。あらゆる存在がふとしたことで現れかねないのがこの幻想郷なのだ。

その全てが、己に牙を向かぬ根拠はない。異変を起こした相手が、どうしてスペルカードルールを受諾してくれると妄信したのか。

かの吸血鬼が受け入れたからか、冥界の亡霊が受け入れたからか。たかがその程度でこれからも大丈夫だとなぜ妄信できるのか。

そう、博麗霊夢は博麗の巫女だ。真に幻想郷の住人ならば、今後も彼女を本気で害そうとする者は現れないだろう。

ゆえに彼女は『その時』に立たねばならない。幻想郷に仇なす相手が現れたのならば、その相手を滅することこそ彼女の役割。

すなわち、今の己に欠けていたものとは。八雲紫に敗北を喫した理由とは。

『そうね。もう一度、貴方の敗因を教えてあげましょう。それはね——危機感よ』

幻聴か、紫の言葉が形となって霊夢の耳を叩いた。あの夜、聞き取ることができなかった続きを。

博麗霊夢はおおよそ楽観的な人間である。今までにおいて『なんとかなるでしょ』で全てをどうにかしてきた程度には。

しかしそれでも過去の彼女は忘れていなかった。死を。恐れを。それらを踏みにじつてきたがゆえに彼女は彼女足りえた。だからこそ、彼女は過去の敗戦において死していない。

ようやく、彼女はそれを思い出した。そして刻む、次がないように。

『夢想封印』

大きく仰け反ったヴァルバトーゼを霊撃で吹き飛ばし、霊夢は霊力を高めていく。

それを察知したのか、ヴァルバトーゼは姿勢を持ち直して空中を蹴り抜いた。黒い疾風となって霊夢へ迫る。

発動前に潰す心算なのだろう。刹那でも早く届くようにと右手を伸ばし、勢いそのままに刺し貫く構えだ。

『ソコノコギリ——』

だが遅い。

「瞬」

虹の閃光が一条、ヴァルバトーゼの身体を穿ち抜く。

目前まで迫っていた彼の身体は、それだけで呆気なく吹き飛ばされた。

そして彼を囲むように空中に点在して現れた虹の光球が七つ、彼を蹂躪した。

眩い閃光を経て、一つの影が地表へと落下して激突する。

霊夢はそれを見届けて小さく吐息を漏らした。

そして数秒後、彼女ははつとしたように口元を押さえる。

「——しまった。あちゃー……生きてるわよね」

こちらとしても下手したら殺されていたかもしれないが、とはいえ相手に殺意は感じなかった。

憎い相手ではないし、聞きたいこともある。死なれているよりは生きている方が都合がいい。

ともあれヴァルバトーゼが落ちたと思われるあたりに霊夢は降りることにした。

「うーん」

激突の衝撃で折れた木々が積み重なり、彼の所在は確認できない。

抜け出す余力がないのか、あるいは死んでいるのか。

ひとまず吹き飛ばしてみよう、と霊夢が考えたところで大きな物音が響く。

「…………ふう」

折れた大木を文字通り切り開いて現れたヴァルバトーゼは存外余裕そうに見えた。頑丈なのかある程度相殺をしたのかまでは、霊夢にはわからなかったが。

ともあれ彼はその場から抜け出すと剣を消した。その目には戦意はない。

「俺の負けだな」

「物分かりがよくて助かるわ。とりあえず、色々話を聞かせてもらおうかしら」

霊夢の詰問に、ヴァルバトーゼは困ったように眉を顰めた。

「と、言われてもな。何を答えればよいのだ」

「とりあえず黒幕っぽいやつの情報。洗いざらい吐きなさい」

よくよく考えれば最初に聞いておくべきだったのだが、霊夢はそのことを考えるのはやめた。

何にせよ今の一戦はいい経験になったのだ。後は――

「――その必要はないよ」

「なっ…………」

すぐ近くからのその声に、霊夢は言葉を失って振り向いた。

鋭敏化された今の霊夢の知覚ですら接近に気づけなかったことを彼女自身信じたくはなかったが、はたしてそいつはそこにいた。

数メートル先に立っているのは幼い少女。とはいえそんな妖怪はこの幻想郷にはい
くらでもいる。

しかしその姿を見て、霊夢は驚愕の上塗りを喰らうこととなった。

彼女の目が射抜いているのは、その少女の頭から伸びる二本の——角。

「……鬼、ですって?..」

その反応に氣をよくしたのか、その存在はにかりと笑って言葉を返した。

「おうとも。小さな百鬼夜行——伊吹萃香たあ、私のことさ!」

Stage 5 一つの閉幕

鬼。

好戦的な種族である彼らは、平和で退屈な幻想郷に嫌気をさしてどこかへ消えたといわれている。

少なくとも霊夢は十数年の人生においてその存在を見たことはない。

ついこの前までならば今更現れるわけがないと、一笑に付しただろう。

だが『異世界』を語る妖怪がいる今、鬼程度を疑う理由はない。何よりそこに秘められたチカラが如実に真実であると告げていた。

とはいっても、疑問は残る。

「で、何でいまさら鬼が幻想郷ににいるのよ」

「いやなに、今年の春は短かったじゃないか。酒宴好きの私にとつちやあ、看過できる自体じゃなくてね。いい機会だからいつも宴会を行うようにしてくれようかと」

それはおおよそ告白と言っているいいものだった。

手段は不明だが、毎度の宴会を誘発させていたのは自身であると萃香は述べたのである。

しかし結局、質問である幻想郷にいる理由の答えにはなっていない。とはいえ霊夢はそれ自体はどうでもよかった。特に興味があったわけでもない。

重要なのは、この異変を引き起こした存在かどうかであるということだけだ。

「つまりアンタがよくわからない妖霧を撒き散らして、宴会を誘発させた元凶ってことでいいのね？」

「まあ、おおむね間違っちゃいないよ。色々訂正したいことはあるけどね」

「別にアンタが犯人ならどうでもいいわ。嘘じゃないんでしよう？」

「はっ、鬼が嘘を言うものかよ」

嘘というフレーズに何か思うところがあるのか、萃香は犬歯を剥き出しにして答える。

「あっそ」

しかし霊夢にしてみればどうでもいいことであった。そっけなく答えると、腰に手を伸ばす。

抜き出したるは御幣。軽く左右に振ると、紙垂が白い軌跡を描く。

思えばこれを使うのは久しぶりだった。スペルカードルールに慣れた影響で、自然と札ばかり使うようになっていたのかもしれない。

「おや、我を鬼と知って立ち向かうつもりかい？」

この無謀者めと、萃香は笑う。

だから霊夢も笑ってやった。この愚か者めと。

「あら、私を博麗の巫女と知って闘うつもりでいるの?」

不敵に笑う霊夢の顔に恐れはない。

不調から回復するどころか絶好調にまで針が振り切れた彼女は、今負ける気が微塵もしなかった。

そんな霊夢の強気な発言に、萃香は破顔して哄笑を上げる。

「あつはつはつは! 面白いこと言うじゃない! 気に入った、そっちの好きな条件で闘ってやろうじゃないか。スペルルール? それともスペルカードルールがいいかねえ?」

それは自信の表れか、あるいは花を持たせてあげようとも思っているのか。

その余裕が少しばかり癪に障った霊夢は、一つお返しをしてあげることにした。

「別にルールなんて要らないわ。私が勝つに決まっているもの。それに、鬼は真つ向勝負が好きなんですよ? ——正面から潰してあげるから、かかってきなさい」

流石にその発言は看過できなかつたのか、萃香の表情が不快げに歪む。

「……少し、大言壮語が過ぎるね。まさかあんな妖怪に勝つた程度で凶にのつてるのかい?」

「ん？ ああ、見ていたのね」

ちらりとヴァルバトーゼの方をみて、霊夢は納得したように声を上げる。そして呆れたようにため息を吐くと、萃香を文字通り見下した。

「なのに、わからないの？」

萃香の目付きが変わる。怒気を露にし、鋭く細められたそれが霊夢を射抜いた。空間に溢れた殺意が、周囲の温度を下げていく。

「……いい啖呵だ。ならその増上慢、叩き直してやろう！」

「ふ、ん——アンタこそ、身の丈ってやつを知ることね！」

日は没し僅かに欠けた月の下、決戦の幕が切つて落とされた。

蚊帳の外へと追いやられた形となったヴァルバトーゼは、大人しくその場から離れることにした。

十分な距離をとって腰を下ろすと、連戦の疲労からか彼は小さく吐息を漏らす。そして不意に虚空へと問いを投げた。

「……で、あれでよかったのか？」

「ええ、お疲れ様」

夜空に溶けると思われたその声に応じたのは、ねぎらうような女性の声。

それから僅かに遅れて空間を裂けると、そこからするりと紫が現れる。隠すまでもなく、今回の仕掛け人は彼女であった。

「よもや『本気で闘え』とはな。驚いたぞ」

「まあ致命の一撃はどちらにせよ防ぐつもりでいましたから」

ヴァルバトーゼがそれに応じたのは霊夢と相對したときである。

いきなり犯人宣言をされて、どう応じようかと言葉を選んでいた彼の耳を、紫の声が叩いたのである。

「ばれないように黙って聞きなさい、と前置きをした彼女の言葉を要約すると『なんだかんだ霊夢とスperlルールと闘うことになるから本気で応じなさい』というものであった。

この本気というのはすなわち脆弱な人間である霊夢の致命を厭うなどという意味である。

もし本当に霊夢を殺しかねないことになっても自分がどうにかするから気兼ねなくやりなさいと、そう締めくくった紫の言葉を信じて彼は普通に闘った。

結果は先の通りであり、紫が手を出す事態にはならなかったのだが。

「そういえば……一応、礼を言っておくべきだったか」

「あれは私が勝手にやったことだし、気にしなくていいわよ」

最後の瞬間、霊夢の夢想封印は紫によって半分近く相殺された。

ヴァルバトーゼのダメージが少ないのはそこに起因する。

もちろん彼もある程度いなして迎撃したため、実のところクリーンヒットしたのは初撃だけだったのだが。

「ふむ。ではそういうことにはしておこう。——しかし、大したものだな」

視線を二人の闘いに向け、ヴァルバトーゼはそう零す。

二者共に闘った彼は、二人の力量をかなり正確に分析していた。

その見立てではほぼ全てのステータスにおいて萃香が上だと結論しており、今現在においてもそれは変わっていない。

だが闘いの展開は全く逆の様相を見せていた。

当たらないのだ。萃香の攻撃が。

その全てを霊夢は紙一重でかわし続けている。

「あれが霊夢の強さよ」

「見切り、か」

「スペルカードルールはまさしくあの子のためにあるようなものね」

一見霊夢はどうかギリギリで回避しているように見えるが、それは違う。

相手の攻撃の軌道、範囲、威力を完全に見極めてダメージが発生するすれすれのところ

ろで身体を止めている。そして余裕ができた時間やエネルギーを全て反撃に費やしているのだ。

言葉にすれば簡単に思えるが、尋常なことではない。というよりも正気の沙汰ではないというべきか。

萃香の攻撃力と霊夢の防御力の差は筆舌に尽くしがたいほどであり、仮に一撃でもかわし損ねれば周りごとにもっていかれる。

だが霊夢の表情には焦りも恐怖も疲れも見えない。彼女は今、ある種の極致に達していると言えるだろう。

もちろん彼女の体力は無尽蔵ではない。いずれ必ず崩れるときは訪れる。

だがそれ以上に、おそらく萃香が崩れる方が早い。既に勝負の結末は見えたといつていいだろう。

ヴァルバトーゼは視線を切って、紫を見る。

彼らの間には、一つ消化していない問題があった。

「さて少し話を戻そうか、紫よ。改めて尋ねよう。俺がここへ来ることとなった原因に、心当たりはあるか？」

彼女が何かを知っている、という確信が既にヴァルバトーゼにはある。

だが知らないと答えるのであればそれ以上追求するつもりはなかった。

それでも、答えは聞いておきたい。

「……知っているわ。でもそれは貴方が帰還するための手がかり足りえない——と言つたら信じてくれるかしら？」

「そうか。では深くは聞くまい」

紫は事実を話した。少なくとも、ヴァルバトーゼはそう信じた。

そんな彼の態度に紫の方が納得できなかったのか、挑発するように彼女は言葉を重ねる。

「そう簡単に、諦めていいのかしら。どうしても貴方は帰らなくてはならないのでしよう？」

「だからこそだ」

「……どういう意味かしら」

「キサマは頭が良い。幻想郷の成り立ちに関わつてることといい、スペルカードとやらを作ったことといい、その頭脳はおおよそ俺の計り知れぬ領域にあるだろう。そのキサマが否と断言するのであれば、あえて聞く必要もあるまい」

知力という一点においては、間違いなく己を凌駕しているとヴァルバトーゼは確信していた。

その彼女が無為と言うのなら、彼はそれを信じるまで。

「当然、興味はあるとも。だが無理につついてキサマとの協力関係が壊れるほうが大に困る」

そもそも紫は仮にヴァルバトーゼが詰問したところで答える義務はない。もしかすれば義理はあるのかもしれないが——それこそ聞かねばわからない。

また可否はともかくとして、最終手段に力づくというモノがある。しかしそこまでの利点をヴァルバトーゼは見出せなかった。

それにいつ帰れるのか目処も立っていない現状で、安定したイワシの供給元を断たれるのは彼としては非常に困る話なのである。

「だが原因がわかっているのなら、再発だけは防止してもらいたいものだな」

もし帰れたとしても、幻想郷再びなどということになつては流石に洒落にならない。

これだけは確認しておかねばならなかった。

「それは、大丈夫よ。二度目はないわ」

「そうか。ならばいい」

話は終わりだと、ヴァルバトーゼは巫女と鬼の闘いに視線を向ける。

そこからしばらく沈黙が続いていたが、闘いも佳境に差し掛かった頃に空からの闖入者がそれを破った。

「——おっと、もう始まってたか」

聞き覚えのある声と、頂点がとんがった見覚えのある黒いシルエット。

ヴァルバトローゼは数日前に会った一人の少女を思い出し、その名を呼んだ。

「魔理沙か」

どうやら魔理沙はこちらに気づいてなかったらしい。声に振り向くと驚いたように目を丸くさせた。

「おや、アンタもいたのか。それに……紫か、なんとも面白い組み合わせだな。アンタら知り合いだったのか」

水と油が混じっているのを見たような目で魔理沙は言う。

確かに、ヴァルバトローゼと八雲紫の組み合わせは両者を知っていれば奇妙に思えるかもしれない。

「ま、そんな感じね」

「ふうん、まあいいか。しかし怪獣大決戦、って感じだなこりゃ」

「そうだな」

鬼が撒き散らす拳撃の余波と巫女が炸裂させる霊波は、もはやどうしようもないほどに森の一角を更地に変えていた。

ヴァルバトローゼとしては先の一件もあるので突っ込みたくはあったが——しかし霊夢は私はいいのよ、と言い返しそうな気もする。

そしてそれからすぐに、萃香が動きを見せた。

着実にダメージを重ねられていた萃香は、反撃も意に介さず攻撃を試みたのだ。

しかし霊夢はその萃香の右拳をくぐるようにかわして、超至近で霊撃を浴びせる。

そして吹き飛んだ萃香に対し、空中で彼女を囲むように展開させた無数の光弾を全て殺到させたという、なんともはや——

「えげつねえ……」

「うむ」

魔理沙の眩きに、ヴァルバトーゼは同意する。

だが、地面に落ちて降参を示した萃香にはまだ余裕があるように見えた。先の攻撃は全て直撃したはずなのだが、なんとも凄まじい耐久力である。

それから萃香と二、三言葉を交わした霊夢はこちらへと顔を向けて——その表情を変えた。最初は驚きに、ついで悪鬼の笑みを。こう、にたりと。

その凶悪な、神職らしからぬ意思を宿した視線は紫へと固定されている。

「あ、私そろそろ帰るわ」

焦燥の色をその声に滲ませて、紫は立ち上がった。その横顔には冷や汗も見える。

だがまあ仕方ないことに思えた。はたから見ているヴァルバトーゼですら直感が警鐘を鳴らしたのだ。直に晒されている紫は溜まったものではないだろう。

とはいえ当然、霊夢がそれを許すはずがない。

「逃がすか!」

紫がスキマへとその身を沈めるよりも早く、霊夢の結界が紫を縛る。

身動きを封じられた紫に、ゆっくりと霊夢は歩み寄った。

「随分と暇そうじゃない、紫。いい機会だから私と闘いなさい」

「あー、でもほら霊夢。貴方連戦で疲れが溜まっているでしょう? 後日にしましょう」

「あら、遠慮しないでいいわよ。というか『連戦』したことを知ってるってことは最初から見ていたのね」

「うぐ」

墓穴を掘るなどと、紫らしからぬミスといえる。

あるいはそうさせるほどに、目の前の般若の迫力が凄まじいとも言えるが。

「霊夢。とりあえず、落ち着き——」

「紫」

身振り手振りを交えてどうにか霊夢を抑えようとする紫だったが、霊夢の薄ら寒いほどの優しい声それがそれを遮った。

にこりと、彼女は可憐な笑みを浮かべる。ともすれば万人が見惚れかねないほどの綺麗な笑顔だった。

——その奥に伺える、邪悪な気配がなければの話だが。

「拒否権を与えたつもりは、ないわ」

「……うう、わかつたわよ」

諦めたようにうなだれる紫を見て、霊夢は結界をとく。

二人はルールを交わし合うと、高空へと消えた。どうやらスベルルールでやるようだ。

結局どういう経緯なのかわからなかったが、魔理沙が軽く因縁を説明してくれた。要するに霊夢のリベンジマッチということらしい。

「さて、私は神社で宴会に参加するでしょう。どうやら、一発芸もやらずに済みそうだな」

「あ、私も行くよ」

それに萃香が続くのは至極当然と言えた。

というか彼女が宴会を仕組んだのであるわけで。

そのまま去るかと思えば、ちらりと彼女はヴァルバトーゼに振り返った。

「あんたも来るかい？」

「いや、俺は行かぬ」

理由は言うに及ばず、魔理沙の誘いを断つたのと同じもの。

むしろ具体的な展望があつたあの日より、その全てを砕かれた今はことさらその気はない。

その内心を悟つたからなのか、萃香はそれ以上誘いの手を伸ばすことはなかつた。

「……そうかい。けどいずれ、酒を飲み交わそうじゃないか」

「ああ、約束しよう」

こうして、幻想郷初夏の異変は終わりを告げた。

なおこれは全くの余談であるが、後日の『文々。新聞』の一面にてボロ雑巾のような姿になった八雲紫と、それを引きずる彼女の式紙の写真が掲載されたとか。

第五話 紅き深淵の最果てで

Stage 1 満月の夜に

幻想郷におけるヴァルバトーゼの一日の行動は、さして多岐にわたるものではない。

まずは、もはや日課となったチルノとのスペルカード戦。

未だに勝ち星を拾えてないゆえに、敗北の条件である翌日の再戦を律儀に果たし続けている。

続いて幻想郷の徘徊。

とはいえ『帰るための手がかり』などという具体性のかけらもないそれが、早々見つかるはずもない。

特に萃香や霊夢と闘ってからのここ数日間ではめぼしい情報を手に入れることができなかつた。

そして最後、それ以外の時間は紅魔館にすることが多い。

レミリアのティータイムに付き合ったり、美鈴との組み手をすることもあるが、およそは地下の大図書館にすることが多い。

魔導書のみならず多種多様な書物を内包しているこの場所は、最も何らかの情報が手

に入る可能性が高いからだ。

とはいえやはり遮二無二探したところで、そう簡単に有力な情報が見つかるはずもない。

そこでヴァルバトーゼは調べる情報を限定することにした。

彼が目をつけたのはこの世界にしか存在しないモノ。すなわち『能力』についてであった。

それに関する情報文献は割と多く、中にはヴァルバトーゼの想像を大きく超える能力もいくつか存在した。

例えば『妖怪の賢者』八雲紫が持つ『境界を操る程度の能力』であったり、『冥界の亡霊』西行寺幽々子が持つ『死を操る程度の能力』など。

特に前者は運用次第ではヴァルバトーゼの帰還を実現しうるものに思える。

とはいえ、紫がそれについて今まで言及してこなかった以上はおそらく彼女の能力で帰還を実現させることはできないのだろう。そう思いつつもヴァルバトーゼは毎日のイワシ支給の際に、紫に尋ねてみた。

しかしやはりというべきか、それは無理だと断言される。

仮に空間の境界を弄つてかの世界と繋げるにしたらところで、指標が存在しない以上は全く関係ない世界と繋がる危険性もあるために試すこともしたくはないと。

ならば転移魔法の成功に必要な魔力の確保、そういった方面での境界操作は使えないのかと問いかけると、自他ともに生物への干渉はほぼできないと断られた。

それでも彼の魔界には存在しない、多様性に富んだ『能力』の存在はそれなりに希望を感じさせるものではあったのだが――

「……………うむ」

ヴァルバトーゼは悩ましげな唸り声を上げつつ、幻想郷で確認されている能力を纏めたという本を閉じた。

当然、帰還の助けになりそうな能力は見つかっていない。

この数日間でヴァルバトーゼが把握できたことは、自身が持っているツテが想像以上に優秀だったことぐらいである。

平時ならば喜ぶべきことであっても、この状況下ではそうはいかない。

それでもなお帰る手段が見つからないということは、ここ幻想郷でそれが見つかる可能性はほぼ零に等しいということであるからだ。

しかしそれならそれでやりようはある。一見手詰まりに思えるこの状況下だが、ヴァルバトーゼは一筋の光明を見出していた。

単純な答え。幻想郷ではダメだというのなら、別の場所へ行けばいい。

彼の世界ですら天界、人間界、魔界の三界構成だったのだ。

それがこちらの世界となると、前述の三界に加えて冥界や地底界など数が多い。そしてその数だけ可能性が存在するということだ。

さらに何やら天界が『欲を捨てた人間の到達点』であったり、魔界に地獄が存在しなかったりと異なる点がいくつか見受けられる。これは単純に興味深い。

しかも魔界は『魔法の効果を高める瘴気』の存在があるらしく——もし幻想郷を離れて手がかりを探すとなればここを目指すのが一番いいように思えた。

もしもう一度幻想郷を回ってみて何一つ手がかりが得られなければ、こちらの魔界に行く手段を講じるとしよう。

そう結論付けたヴァルバトーゼは、読んだ本を片付けると図書館を出た。

どこを回るかと頭の中に幻想郷の地図を浮かべて廊下を歩いていたヴァルバトーゼだったが、前方に人影を認めて思考を切る。

彼の前に立っているのは、幼い少女。

金髪紅眼、紅魔館に住む吸血鬼の片割れ。

「——久しぶりね、お兄さん」

「フン……昨日会ったはずだがな——フランドールよ」

「あれ、そうだったっけ？」

最後に会話——まともな、と言えるかどうかは怪しいが——をしたあの日以来、この

二人が顔を合わせることは何度かあった。

しかしヴァルバトーゼはもとよりフランドールにも話すことはなかったらしく、昨日までは視線を交錯させる以上のことはなかったのだが。

何やら今日の彼女は妙に機嫌が良さそうに見える。悩みが吹き飛んだときに見せるような、晴れやかな表情を浮かべているのだ。

「ちよつとお願ひがあるんだけど、着いてきて？」

フランドールは一方的に要求を告げると、こちらの同意を得ることなく背を向けて歩き出した。

遠ざかる彼女を見つめるヴァルバトーゼは迷うような素振りを見せたが、嘆息して追隨する。

短い付き合いながらも、彼女はこちらの都合を構うような相手でないことぐらいは把握していたからだ。

しばし紅魔館の地下を歩いたフランドールは、ある扉の前でその足を止めた。

「ハイ、だよ」

フランドールは簡潔に一言だけ話すと、そのまま部屋の中へと入っていく。

ヴァルバトーゼもそれに従い、彼女に続いて部屋へ足を踏み入れた。

「ハイ、は……」

広大な無。

ヴァルバトーゼがその部屋に感じた印象は、そういったものであった。

調度品とかそういう次元ではないほどに、その部屋には何も無い。ただた無骨な石造りの床と壁が延々と続いているだけであつた。

加えて一見した限りでは、端から端まで見渡せないほどに広い。それは面積だけではなく、高さも――

そこで彼は視線を上げて、その事実気づいた。

「空、だと?」

あるはずの天井がない。そこには、満天の星空と真円を描く月が存在した。

だが彼の記憶が正しければ、ここは間違いなく紅魔館地下の一室であるはずだ。

さらに言えば、紅魔館には吹き抜けになつていゝ場所など存在してはいないはずである。

「私もよく知らないんだけどね? パチュリーがうまく『繋げて』いるらしいの。月の光を浴びるためだったり、臨場感を出すためとか」

「臨場感……」

大きく空間を取り、無駄を極限まで削ぎ取つた一室。

用途など、さしてあるはずもない。

「そうか、この部屋は——」

「そう、ここは紅魔館の遊戯場だよ」

暴れてもいいように。

壊してもいいように。

紅魔館における遊戯場とは、そういう場所であるとフランドールは語った。

ならばここへヴァルバトーゼを連れてきた彼女の狙いなど、考えるまでもない。

それでも、彼はあえて問うた。

「……一応聞こう。キサマのお願いとやらは何だ」

「ええとね。ちよつと、壊れてほしいの」

「……………」

確かにそれはヴァルバトーゼの予想と合致している。

先日的一幕を思い出しても、フランドールが彼に抱いている関心などその程度しかないのだから。

だからこそ、解せない。

「何故だ」

「え？」

「何がキサマをそこまで駆り立てている——いや、どうしてそこまで俺を壊したい」

よもやレミリアが『許可』を出したわけではないだろう。

ならばこれはフランドールの独断ということになる。

その理由がただ壊したいから、では納得がいかない。

何故なら彼女はこれまでそうだったことがなかったはずだから。

そうであるというならば、既に美鈴が幾度となく壊されているだろう。

「最近、お姉様が厳しいの」

「……何？」

「あれはダメ、これもダメ。あなたを安心して外に出せるようにするために——つて、まるで昔みたい。やつと、理想の世界になったのに」

部屋の中心で、フランドールはくるくると回りながら歌うように話し続ける。

そして、彼女が話すそれにヴァルバトーゼは大きな心当たりがあった。

「だからね、私考えたの。どうしてこうなったのかなつてずーつと悩んで、ようやくわかった」

ぴたりと彼女は動きを止めると、ヴァルバトーゼをその紅い瞳で強く射抜く。

そこには紛れもない、敵意が存在した。

「全部、あなたの所為だつて。あなたを壊せば、きつと私の大好きなお姉さまに戻つてくれる。優しい笑顔で、私を甘えさせてくれる——」

その瞬間を想像したのか、うっとりとしたようにフランドール身悶えする。ただそれは一瞬のことで、すぐに彼女は口元を歪ませて晒った。

「だから、壊れて？」

小さな頼み事を告げるような軽々しきで、フランドールはヴァルバトーゼに死を宣告する。

同時に、彼女から凄絶な魔力が噴き出した。濃密な紅が空間を侵していく。

しかしヴァルバトーゼは特に動じた様子を見せない。

そして少し俯いたその顔からは、たれた前髪が彼の表情を隠していた。

「……一つだけ、問わせろ」

小さい、しかしその声は妙な鮮明さをもって空気を震わせる。

その裏には、一つの感情がちらついていた。

まるでそれは炎のような――

「キサマは、姉と約束しているはずだな。俺を壊さないと。それはどうした」

「あれ、よく知ってるね。でも約束そんなの破ったって、後でごめんなさいすればお姉様は許してくれるもの。だから、あなたは安心して壊れていいんだよ？」

「ふざけるなアツ！」

気づけば、ヴァルバトーゼは激情のままに叫んでいた。

許せるはずがない。譲れるはずもない。

それほどまでに致命的な言葉を、フランドールは口にしたのだ。

「何故そうたやすく約束を破ることができるのだ！ キサマは姉を愛しているのではないのかッ！」

「そうだよ？ だから何？ 何であなたはそんなに怒っているの？」

「キサマ——！」

妹の代わりに恨んで欲しいと、かつてレミリアはそう言った。

それは歪んだ考えであるとヴァルバトーゼは指摘したが、それでも彼女の瞳に宿っていた深く強い覚悟を知っている。

その覚悟を、彼女は妹の教育へと向けたのだろう。

例え愛する妹に嫌われても、と——そういう覚悟に。

だというのに、目の前の小娘はなんと言ったのか。

好き勝手させてくれないお姉様は嫌だと。どんなことをしても笑って許してくれる彼女がいいと。

——それは例え、約束『なんか』破ったとしても。

だけとお姉様は愛していると。

断じて、許容できることではない。

「ねえ、もういいかな？ そろそろ我慢の限界なの」

「……………ああ。そこだけは、同感だな。いい加減、キサマのその醜悪なザマは我慢ならぬ」

最初は、もし仮にフランドールに襲われるような事態に陥つたとしても、ヴァルバトーゼは離脱するつもりでいた。

レミリア・スカーレットが五百年積み上げてきたそれに、容易く踏み入るつもりはなかったゆえに。

ヴァルバトーゼは悪魔にしては可笑しいが、愛や絆のチカラを認めている。だからそれがスカーレット姉妹の間に存在する以上はいずれ必ず実を成すと確信していた。

だがいかに愛情溢れる教育であつたとしても、それが成立しないただ一つの要因が存在する。

価値観の相違。

レミリアは思うが仮に振舞つてはよくないと言い。フランドールはそれを受け入れない。

何故フランドールは愛する姉の言うことを聞かないのか。

そんなもの、考えるまでもない。

やりたいように生きて、姉からの無償の愛を受けて、そのままでも在り続けられると

思っているからだ。

これは理屈では決して解決しない。その身に刻まれない限りは。

だから、彼は剣を抜く。

ヴァルバトーゼにとつて、この闘いは幻想郷を訪れて初めて『負けられない』モノである。

これまで彼は勝負の結果にはさして拘っていなかった。何故ならこれまでの闘いはほぼ全て過程を重視するようなものであったからだ。

もちろん、敗北が致命的な結末に繋がらないという要因が大前提ではあるが。

だが今回は違う。かつて断罪者の企みに挑んだように、退くことは絶対にありえない。

「——来い、小娘」

「あまり簡単に壊れないでね？」

教えなくてはならない。

この世間知らずの小娘に。

世の中はそんなに甘くはないということを。

Stage 2 真紅の幕は上がる

「クランベリートラップ——」

まるでスペルカードの宣言のように、フランドールは謳った。

否、まさしくそれはスペルなのだろう。彼女は右手を前に突き出し、それに従うように周囲の空間から紅の暴威が放たれる。

それは確かに弾幕だった。しかし当然スペルカード戦とは異なる部分が存在する。

一つは避けなくてもいいこと。防御してもいいし、切り裂いてもいい。

そもそも回避能力で幻想郷の住人に大きく遅れをとるヴァルバトーゼには、この弾幕を避けきることができないのだが。

「ぐ、う……い！」

だがここで二つ目の違いが彼を蝕む。すなわち——この弾幕はハリボテではない、ということだ。

いくつか斬り払うだけで彼の腕は悲鳴を上げている。直撃したらどうなるかなど、考えるまでもない。

数秒その場でいなし続けていたヴァルバトーゼだが、ついに限界を迎えた。相殺の反

動に耐え切れなくなったのだ。

堪え性のない右腕に舌打ちを入れて右後方へと飛び退く。だが高々数メートルの跳躍では射線から完全に外れることができずに、着地の硬直を数発の妖弾が襲った。

それをどうにか体の捻りでかわしきると、左手へと剣を持ち替える。一瞬とはいえできたゆとりにも、ヴァルバトローゼは小さく息を吐いた。

だが当然射線から外れた的を放っておくはずがない。すぐに暴威はヴァルバトローゼを中心に据えるよう向きを変える。

そこにヴァルバトローゼは光を見出した。これはヴァルバトローゼが動いた際、それを補足して弾幕の軸を合わせるには若干のタイムラグが存在するということでもあるからだ。

つまり捉えられない速度で動き続ければ、あるいは反撃を試みる余裕もできうる。

しかしそのためには一度大きく速く動いて、この荒れ狂う弾幕から抜け出さなくてはならない。だがそうする『溜め』の時間が、彼にはなかった。

そこでヴァルバトローゼはさながら主君に忠誠を誓う騎士のように自分の前で剣を掲げると、刀身の平の部分で妖弾を一発受ける。

凄まじい衝撃が彼を襲うが、彼はそれに逆らわずむしろ利用するように大きく後ろへ踏み切った。

飛来する光弾に匹敵する速度で平行に飛んでいく彼は、当然相対的にそれらが止まつて見える。そして己が減速するまでの数瞬の間に、冷静に弾幕の隙間を見極めていく。

そして見切る。左上方。しかし地面を踏み切る余裕はない。

ならばとヴァルバトーゼはくるりと空中で一回転、両足を背面に向けるとまるでそこに壁があるように制止した。魔力固定。

そして残つた後方への運動エネルギーが膝を曲げた両足へと集中していき、彼はそれを解き放つた。

黒い光芒が、紅の弾幕に一条を描き——抜ける。ついにヴァルバトーゼは射線から完全に逃れ得た。

あわよくば狙いが定まる前にと彼はフランドール目掛けて再び踏み切つたが、遮るよりに放たれた紅弾を見て向きを変える。

それからしばし、戦況は硬直した。

まるでピンボールのように駆け巡る黒い影と、その影を追うように放たれる紅い暴威。

ヴァルバトーゼは剣の射程まで近づけず、フランドールは彼を捉え切れていない。だがいつまでも続くかと思われたその光景は、唐突に断ち切られることとなった。

「あはっ！ すげいすげい！ じゃあ……これならどう!?」

愉快交じりにフラン ドールは左手も突き出した。変化は一瞬で現れて——ヴァルバ トーゼは息を呑んだ。

周囲の空間に点在するように現れた無数の藍。これが意味することは一つ。逃げ場を塞がれた。

迂闊に動いては藍に穿たれ、留まっては紅の嵐に飲み込まれる。

もはや魔力の出し惜しみをする余裕も失ったヴァルバトーゼは即座に転移。当然、転移先はフラン ドールの背後。

隙だらけの彼女に、胴薙ぎの一閃を放つ。

「いっ……」

刀身が半分埋まった程度で彼の剣は止まった。やはり硬い。

苦悶の声を上げてフラン ドールが振り返ると同時にヴァルバトーゼは離脱した。

彼は飛び退きつつ直後に迫るであろう弾幕を覚悟していたが、全てフラン ドールが制御していたためか夢幻のように消え失せている。

彼女は傷口を左手で抑えて、顔を俯かせている。

この隙に攻撃を試みることもできたが、ただ打倒することが目的ではないゆえにヴァルバトーゼは待ちを選択した。

「……………い。いたい、痛い。お前……………よくもー」

そう言いつつフランドールが放した手の奥には、既に傷は残っていない。吸血鬼の再生力を考えれば当然である。

そもそもヴァルバトーゼが与えた傷など騒ぐほどのことではない。闘いに身を置いている者ならば、だが。

「フン……少し撫でた程度で随分と喚くではないか、小娘よ。所詮は世間知らずの箱入りか」

「うるさいっ！」

フランドールの激昂に応じるように、彼女の魔力が荒れ狂う。

蠟燭に火が灯るように、周囲の空間を紅い魔弾が満たしていく。

ヴァルバトーゼはそれを軽く一瞥するものの、他の行動を見せようとはしなかった。

その様子を打つ手なしと見たのか、フランドールの顔には次第に余裕の色が増していく。

「ぐちゃぐちゃになっちゃえ——ッ！」

その言葉を合図に、ヴァルバトーゼへと全ての紅が殺到した。

寸分違いなくフランドールの狙い通りに放たれたそれは、衝突点で紅い閃光を撒き散らす。

そして彼女はヴァルバトーゼが転移などで離脱していないことも確認していた。

「あははははっ！ ちょっと壊しすぎちゃったかな?」

「——ところで、聞いておきたいことがある」

高く笑い声を響かせたフランドールをよそに、ヴァルバトーゼは悠々と紅い光の中から現れた。

その身体には目立った外傷は見当たらない。つまり直撃は避けたということである。しかしそれはさして困難な行為ではない。既に彼はかの魔弾の特性を把握していた。直線的な攻撃かつ、全ての弾速が同じ。さらに射出のタイミングまでもが同時であり、ご丁寧はどこから放つかも教えてくれているのだ。

いかに百の弾幕であろうとも、それが全て己を目掛けて飛んでくるというのならいくらでも回避のしようはある。

もちろん万一読みが外れたときのために転移の準備はしていたが、それはないとヴァルバトーゼは確信していた。

なぜならフランドールは闘い慣れていない。それは彼女の生い立ちからも、これまでの闘い方からも伺える。

例えば今の攻撃も少し狙いを甘くして攻撃を散らしたり、射出タイミングをずらしたりすればそれだけでヴァルバトーゼは転移を選択せざるを得なかっただろう。

すなわちステータスにおいては先日の萃香と同じく、フランドールに圧倒的な軍配が上がる。

だが戦闘経験においては、先日と違ってヴァルバトーゼに圧倒的なアドバンテージが存在した。

少なくとも、勝負の形になる程度には。

「キサマの能力を使えば、俺を簡単に壊せるはずだが——やはり見えぬのか」

そしてもしそれを覆されることがあるならば、やはり『能力』に他ならない。

この世界の住人が持つ、ヴァルバトーゼに対しての絶対的なアドバンテージ。

ましてやフランドール・スカーレットが持つ『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』ともなれば、勝負にもならないだろう。

だがそのためにはいくつかの前提条件を満たす必要があること彼は聞いていた。

その情報を疑ってはいなかったが、その特殊性ゆえに情報源は全てフランドールの証言が中心となっている。

だからこそ、ヴァルバトーゼは確認しておかなければならない。今己に『目』が見えているのかを。

とはいえ見えているのなら、今のタイミングで壊してきたはずである。彼女にそこまでの自制心があるとは思えない。

つまり確認はほぼ終わっていると云っている。

それでもわざわざ口にしたのは、最後の一押しが欲しかったのとゆさぶりをかけるためであった。

しかし結果から述べるならば、それは悪手であったと言える。

「……うん、見えないよ」

その問いにフランドールはしばし沈黙を見せたが、薄く笑って問いに答えた。

——右手を掲げて。

「お前にはね！」

そしてフランドールは右手を握った。

意味があるとは思えなかったが、それでも反射的にヴァルバトーゼは身構える。

しかし身体はどこにも異常を感じない。かつてはその目で見るまで気づけなかったが、今の彼は身体中に神経を尖らせている。どこかを壊されたのであるならば間違いない気づくはず。

からん。

「そうか……！」

その乾いた金属音で、ようやくヴァルバトーゼは何が壊されたのかを知った。

右手の先に視線を向ける。彼は今そこに剣を持っていた。だが、その刃の。頑健さに

重点を置いた魔界製の刀身の。中ほどから先が存在していない。

否。その『先』は床にあった。何一つ衝撃を受けていないのに突如その刃は折れたのだ。

「ああ、なんで気づかなかつたんだろう。それさえなければあなたは私を傷つけられないんだから、さっさと壊せばよかつたんだ」

「……………」

「ふふ、凶星？」

勘違いは訂正しない。

窮地なのは事実である以上、敵に情報を与える理由は何一つとしてなかった。

とにかく剣を折られたのはマズい。これで相手の攻撃を受けることがかなり困難になった。

己は壊されない。

これはそこで思考を止めてしまったヴァルバトーゼのミスである。

状況の悪化に歯噛みするヴァルバトーゼを見て、フランドールは満足げに笑った。

「じゃあ、もつと遊ぼうっ！」

これを境に、形勢は一気に傾くことになった。

攻撃射程と防御射程を奪われたヴァルバトーゼが、すれすれのところにあつた均衡を

保てる道理はない。

それからおよそ十分。血みどろになったヴァルバトーゼと無傷のフランドールがそこにいた。

それでも彼は粘った方だろう。というよりも――

「お兄さん凄いです。まだ『目』が見えないなんてちよつと信じられないよ」

「……フ。遠間からちまちまと……やっっているからだ。俺を砕きたければ……その身で来い……！」

半死半生。

そんなザマになっても『目』が浮かび上がらないのはヴァルバトーゼの強靱な意思ゆえか。

だが意思だけで闘いが覆ることはない。これは明確な事実である。

加えてフランドールは意思の力など信じておらず、知りもしない。

「……いいよ。私の腕で、壊してあげる」

だから彼女は怯むことなく、ヴァルバトーゼに向かって飛び出した。

弱者の戯言だと、嘲笑を浮かべて。

それでも。

もしこれがフランドールでなかったのなら。

ヴァルバトローゼが幻想郷に訪れてから出会った誰であっても、決して無作為に突撃を選択することはなかっただろう。

彼の瞳に宿る何かを、必ず察しただろうから。

だから萃香には、あそこまで待つ必要があったのだから。
だが。

「……………えっ?」

「考えが温い。そして浅いな」

ヴァルバトローゼの胸から突き出た無色の針が、フランドールを出迎えるように貫いていた。

彼女から流れる血が、その針を紅く染めていく。

それは魔力で編みこんだ、今の彼の切り札である。

無論、そこに織り込まれたのは生命の略奪。

小さく、その針が脈動した。

フランドールは動かない。理解できない現象に思考が硬直しているのだろう。

それは戦闘における致命的かつ決定的な隙だった。

「う、ああ……………あの……………」

八秒。

それがフランドールが拳を握り、魔力針を壊すまでの時間だった。

当然、そんなことにうつつを抜かしている彼女を放置するヴァルバトーゼではない。渾身の蹴りを、彼女の腹に叩き込む。返る感触は硬いものの、フランドールを大きく吹き飛ばした。

「よもやこれで終わったとは思えんが」

ほぼ全快した身体を確認しつつ、ヴァルバトーゼは呟いた。

決まれば非常に強力な体力吸収だが、自分の中へと還元する以上、許容量を超える生命力は吸収できないのだ。

あの瞬間まで無傷であったフランドールの体力が、いかにポロポロであったとはいえ魔力を失ったヴァルバトーゼに劣るとは思えない。

とはいえ今のは確実にある程度以上のダメージとなったはずである。肉体的な意味はもちろん、精神的な意味であっても。

だというのに、彼の表情は硬い。

頭の奥でがなりたてる直感が、楽観を許さないのだ。

「あああああああああああああああああああああつー！」

直後、視界の先で紅の魔力が爆発した。

今のヴァルバトーゼとは比較にならないほどの強大なチカラが空間を震わせる。

「……フ」

しかしそれを目の当たりにしてなお、ヴァルバトーゼには勝算があつた。彼の狙いはフランドールの魔力枯渇。

あそこまで景気良く魔力をばら撒いている以上、必ずその時は訪れる。

問題は、それまで己が凌げるかというものであつた。

しかし彼は知らない。

もう一つ、大きな誤算が存在したことを――。

「どうしたものかしらね」

紅魔館のテラスで、レミリアはため息とともに愚痴を零した。

昼間は彼女を蝕む太陽が存在するため余り出入りすることはないが、夜となると話は変わる。

ましてや今宵は満月なのだ。月光浴をしない理由がない。

「何がよっ」

言葉を返したのはパチュリー。

余り図書館から動かない彼女だが、友人とのティータイム――それも満月の夜ともなれば腰を上げる理由には十分だつた。

「フランのことよ。いつまでもこのままではいられないでしょう？ だからあれこれ言ってみたんだけど……中々ね」

「……………」

時間と環境がそのうち解決してくれる。

一時はそうやって積極的な教育を諦めていたレミリアであったが、ある一件を境に再び彼女は妹への教育を再開した。

しかしやはり姉であるレミリアの言うことだから聞いている、といった感じで常識が根付いた感触は得られていない。

それがわかつているからこそ、パチュリーは気休めにしかならないような言葉を口にすることができなかった。レミリアの後ろで控えている咲夜もまた同じ心境である。

その沈黙を切り裂いたのは、意外な人物であった。

「まあ、それは当然でしょう」

美鈴。

こういう場に彼女が同席しているのは珍しい。

「どうどう」とよ」

そのぼつさりとした物言いに、問い返すレミリアの声は辛辣だった。

しかし美鈴は動じず、淡々と説明を始める。

「認識が違うんですよ、お嬢様と妹様では。お嬢様は妹様が心配だからこそ、ちゃんと躡けようとしているわけですよね？」

「……ええ」

「それが妹様には理解できないのではないのでしょうか。私の知る限り妹様はおおよそ脅威と呼べるものと相対したことはありません。そして自身の姉であるお嬢様以外に強いチカラを持つ存在も知らないでしょう」

「それが？」

「わかりませんか？ おそらく妹様はこう思っているはずですよ。『なぜ我慢する必要があるのか』と。仮に好き勝手暴れたとして何が問題なのか——どうせ誰にも止めることなんてできないのに、ってね」

その美鈴の言葉は正鵠を射ていた。

補足するならば、それを咎めるレミリアの考え方を誤解している。

すなわち、弱者を重んじる博愛主義であると。よもや自分がしつぺ返しを喰らうことを心配してるなどは夢にも思っていないだろう。

とはいえ仮にそう告げたとしても納得はしないだろうが。

「なのでてつとり早い方法は痛い目を見せることです。ルールを守る必要性というモノを身体で覚ええない限りは改善しないでしょう」

「……仮に、そうするとして——」

例えその指摘が正しくても。その手段しかないとしても。

一つの大きな問題が存在した。

「誰が——ツ!？」

予兆はなく、それは訪れた。

今起きたことを言葉にするならば、一言にできるほど単純なものである。

紅魔館が揺れた。

地震ではない。揺れ方がそれとは違う。

それに——

「嘘……!？」

それから遅れること数瞬。

地下から禍々しい妖気が噴き出した。

その正体を、彼女たちは知っている。

「フラン!？」

「これは——遊戯場です!」

館の空間拡張を担当している咲夜が、正確に異常が発生した場所を把握した。

紅魔館地下遊戯場。わかりやすく言えば好き勝手暴れられる場所である。

特徴は大きく二つ。

夜間における天井と紅魔館高空との擬似空間接続によって、夜間は月の光を浴びながら暴れられること。

そしてもう一つは、チカラの完全遮断。

主に紅魔館で働く妖精メイドたちを怯えさせないための術式だったのだが、それが完全に裏目に出た。

当然、何が起こっているかなど把握できてはいない。

それでも、尋常ではないことが起こっていることは掴み取れる。

そして、その術式が壊れるほどのこととなると——事が終わってしまった可能性が高い。

「全員集まりなさい！ 跳ばすわ！」

その声に応じるように三人がパチュリーに元へと駆け寄った。

そして彼女は大規模な魔法陣を展開。

間もなくして四人の姿はその場から消える。

転移先は遊戯場前。いきなり渦中に飛び込むのは危ないと判断したからである。

そして遊戯中で自動ロックがかかっている大扉をレミアは蹴り開けた。

—

はたしてそこに、二人はいた。

まず最初に目に飛び込んできたのはフランドールの後ろ姿だ。

背後の音に気づいたのか、彼女はこちらに振り返る。レミリアの姿を認めたからか、

彼女は笑った。

「あ、お姉様」

「フラン……！」

愛しげに姉を呼んだフランドールに対して、レミリアの声は苦々しい。

なぜなら。

フランドールの奥に。

彼がいたから。

ヴァルバトーゼ。

一時的な紅魔館の客人であり、自分の迷いを断ち切るきっかけをくれた奇妙な吸血鬼が。

「フラン」

その彼は今、身に纏った黒衣を己の血で紅く染めている。

「なあに、お姉様？」

そして、その胸の中心を。

「何があつたのか、説明しなさい——！」

紅い魔剣に貫かれ、微塵も動きを見せることはなかった。

Stage 3 騒々しい間奏曲

「ああ、これね」

レミリアの詰問に、フランドールはちらりと後ろを振り返った。

壁に縫い付けられたヴァルバトローゼは、胸部の剣を挿んだ姿勢のままぴくりとも動かない。

「ちよつとこのお兄さんと遊びたくなつちやつたから、付き合ってもらつたの。なのに痛いことたくさんされちやつたから、やり返したの」

「……それにしたつてやりすぎじゃないかしら」

ヴァルバトローゼを遠くから見た限りでは、生死が判別できない程度にはボロボロである。

仮に彼が生きていたとしても一刻を争う状態なのは明らかであった。

「咲夜、あいつを拾ってきて」

フランの答えに色々と思うところはあつたものの、生きているならば早急にヴァルバトローゼを回復させなくてはならない。

人間なら間違いなく致命傷とはいえ、彼はチカラを失っているが吸血鬼である。つい

先ほどまで戦闘が続いていたことを考慮すれば助かる見込みは十分にあった。だが咲夜は渋面を浮かべて首を横に振る。

「申し訳ありませんお嬢様。私ではあの剣をどうにかすることはできません」

確かにその通りである。だがなぜ妖力剣は未だ実体を保っているのか。

あの類の妖力兵装は、使い手の意思で容易に消えるはずだというのに。

そこまで考えて、レミリアはようやく気づいた。

つまり、フランドールは自らの意思で。

「フラン……あなた——！」

怒気を込めてフランドールを睨むが、彼女もまた理不尽に拗ねる子供のようにレミリアを見返した。

「別にいいじゃん！ あいつが死んだとして、だからなんなの？」

「なら別に、あいつが生き伸びたとしても何ら問題はないでしょう？」

もしフランドールがヴァルバトーゼの生死に頓着しないのであるならば、この状況はありえない。

つまりあるのだ。フランドールにはヴァルバトーゼを死なせたい理由が。

「フラン。あの剣を消しなさい」

「いや！ あいつが来てからお姉様がおかしくなったんだもん！」

「……………そういうこと」

そのフランドールの言葉に、レミリアは目を伏せて重い重い息を吐き捨てた。

同時に、レミリアは自覚した。己の甘さを。この状況を作った最大の原因は己にあるのだと。

だから彼女は、覚悟を決めた。

目を開いたレミリアは、己の妖力を活性化させた。紅い力の渦が、彼女から溢れ出す。それだけで、壊れかけの遊戯場が軋みを上げた。

そして一歩、彼女はフランドールとの距離を詰める。

「フラン？」

最後通牒の意を込めて、レミリアは問いを投げた。

彼女の本気を察したのだろう、フランドールは少し怯えた様子を見せる。

それでも、フランドールは全身で拒否を表した。

「う、うう……………いやぁ!」

「そう。あなたの気持ちはよくわかったわ。……咲夜、パチエ、美鈴。私がフランを抑えておくから、その隙にヴァルバトーゼを回収しなさい」

躊躇はある。

まさか己の手で妹を傷つけることになるなどと、レミリアは夢にも思っていないかつ

た。

それでもこれは己の責務であると、彼女は拳を握り締める。

その行為は決して無駄ではない。妹に力を向けるためには、度重なる覚悟を必要としたから。

だけど、だからこそ、遅れた。

「させない！」

悲鳴のようなフランドールの叫びとともに放たれたのは紅の波紋。

球状に放射されたそれは回避のしようもなく、レミアはその身に受けた。

しかし何の異常も起こらない。疑念が彼女を支配するが、すぐにそれは解決した。

背後で、誰かが倒れるような音がしたのだ。慌てて、レミアは振り返った。

すると咲夜とパチュリーが地に伏せており、美鈴は苦しそうに息を荒げて膝をついている。

「そんな——!?!」

駆け寄り、脈と息を確認する。問題はない。少なくとも命には別状がないように思える。

しかし一体何が起こったのか。

「大丈夫だよ、お姉様。ちょっと揺らしたただけだから。でもやっぱ美鈴は耐えちゃうか」

「揺らした……？」

「妖力を……直に叩き込んだ、のです……」

息を荒げながらも美鈴が答えを述べた。

それでも少しは回復したのか、彼女は立ち上がると呼吸を整える。

「あなたは大丈夫なの？」

「ええ、まあ……なんとか。以前遊んだときにやられましたから」

「……どういう原理なの？」

「叩き込まれた相手は妹様の妖力とチカラの波長が離れているほどに効果が増大します。ですからお嬢様にはほぼ効果がなく、私はこの程度で済み、他の二人は倒れましたのだと」

「……なるほどね」

レミリアは同族かつ姉妹。加えて血をチカラに変換するという特殊性からチカラの波長が極めて近い。

美鈴はカテゴリ的には同じ妖力という分類なため、意識を刈り取られるまではいかなかった。

そしてパチュリーは本質が魔力にあり、咲夜にいたってはただの人間である。加えて始めての経験ともなれば、抗う間もなく意識を失ってしまったのだろう。

「じゃ、美鈴はヴァルバトーゼを頼むわね。咲夜とパチュリーはこつちでカバーするか
ら」

「かしこまりました」

「——させないつたらー！」

二度目の波紋。

だがレミリアには効果がない。美鈴も耐えるはずだと、彼女は確信していた。

だから当然彼女は突っ込んだ。三度目はさせないと。

驚きに目を見開くフランシスに、一足で潜りこみ襟首を掴んで全力でぶん投げる。

そのまま彼女は投げ飛ばしたフランシスを追いかけた。ひとまずは皆から引き剥がすことを優先したのである。

空を滑るフランシスが反転してブレーキをかけるのを認めると、レミリアも数メートルの間合いをとって動きを止める。

遊戯場が広大なことが幸いした。ここまで距離を離せば波紋が向こうに届くことはないだろうとレミリアは確信する。

だから彼女は、そこで手を緩めた。後はフランシスを行かせなければいいだけだ。自分から手を出す理由はないと。

でもそれは、やはり致命的な過ちであった。

「お姉様は、甘いね」

言葉と同時に、フランドールがブレる。

「え？」

残像のようなそのブレは、フランドールと完全に乖離してもなお続いた。

だがそれは残像のように空虚なものではない。確かな実体が、そこにはあった。

そうして新たに現れた『フランドール』は三体。

「いけー」

それらは、フランドールの号令に従ってレミリアの後方へ——美鈴の方へと飛び出した。

「っ、行かせ——」

「ないよ」

振り返って追おうとしたレミリアの行く手を遮るように、妖弾が横切つて頬を掠める。

「立場が逆転したね、お姉様。後は私がお姉様を抑えてる限りはあいつは拾えない」

「……フラン」

痛ましげに、レミリアはその名を呟いた。

フランドールが笑っていたから。

楽しそうに、恍惚そうに口元を歪めて。

「でももうそんなことはどうでもいいの。ああ、こうして、お姉様と遊べる日が来るなんて——」

「フラン！」

「さあ、一緒に遊ぼう——お姉様！」

望まぬ姉と焦がれた妹が、今ここに激突した。

「……少し、まずいですかね」

上唇をなめて美鈴は小さく呟く。

レミリアがその場を離れた後、身体に残る重い痺れをどうにか美鈴は振り払ってヴァルバトーゼの回収に向かった。

だが、それを阻むように『彼女ら』が現れたのである。三つの、フランドール『もどき』が。

即座に美鈴はヴァルバトーゼの救出を一時断念した。動かない三人を巻き込まないようにと、レミリアとは反対方向へその場から離れる。

背後から追ってくる気配を感じて、美鈴は安堵した。もしこれであの場から三人が動かなければ、打つ手がなかったからである。

そうしておよそ紅魔館の敷地全てに匹敵する広大な遊戯場の端まで辿りついた美鈴は、壁を背にして『彼女ら』と相對した。

当たり前だがそれらの正体は当然フランドール本人ではない。しかし分身というには少し特殊なモノであった。

吸血鬼には悪魔を召喚する能力がある。眼前の『彼女ら』は、それを少し応用したものであった。

自身の妖力を殻にして、悪魔の魂だけを中に召喚する。

すると外見や戦闘行動のパターンが本体とほぼ類似した、悪魔の魂を動力源とした擬似分身体を生み出すことができるのだ。

とはいえそれらには術式によってその内容は異なるものの、いくつかの制限が存在する。

以前美鈴はフランドールと『遊んだ』際に相對したことがあるので、その内容をほぼ把握していた。

彼女のそれは、直接物理攻撃に限定されるというものであった。

すなわち破壊能力はもちろん、妖力を用いた特殊攻撃もされることはない。

問題は——その身体能力が、本人と匹敵することか。

一対一かつ肉弾戦に限定するならば、美鈴は幻想郷に住むあらゆる存在と打ち合っ

悪くても五分は取れる自信がある。

ましてやまともな戦闘経験がないフランドール相手なら、いかに身体能力で劣つていようともいくらでもやりようがあつた。

だが多対一、それもこの特殊な分身を相手にととなると事情が変わる。

「シッ！」

どちらにせよ、この状況で受け手に回るのはマズい。

ゆえに美鈴は先手を取り、縮地からの掌底を向かつて左の分身へと叩き込む。

声もなく——というよりは声を出す術式が組み込まれていないのだが——吹き飛ばす彼女を無視して、背後に迫つていた分身へ肘打ちのカウンター。

さらに頭上からの踵落としを受け流し、巻き取つて地面へと叩きつける。

全てまともに入つたはずだが、三体とも幽鬼のように起き上がった。

「やっぱ、堪えませんか」

無論彼女らに痛みは存在しない。さらに言う物理的なダメージは余り意味をなさないのだ。

この分身体をどうにかするには大まかに二つの方法がある。

動力源である悪魔の魂を消耗させるか、圧倒的な出力で吹き飛ばすか。

後者は美鈴の火力では不可能。よつて必然的に前者となるのだがこれも容易ではな

い。

形を維持し、行動量に応じた分だけ消費させられるとはいえそう簡単になくなるものではないからだ。

もちろんダメージを与えることでも削ることはできるが、これも渾身の全力を数発入れてようやくといったところだろう。

当然こんな状況でそれが行えるはずもない。

対してあちらは一撃入れてからの一気呵成でこちらを落としかれる。

ああそれはなんて――

「上等………」

歯を剥き出しにして美鈴は笑みを浮かべる。

求道者たる美鈴にとって、絶対的な劣勢とは興奮へのスパイスでしかない。

「せいッー」

分身らが同時に仕掛けようとするとする気配を感じた美鈴は、その初動を絡め取るように踏み込んで一体の分身を殴り飛ばした。

その瞬間を逃さず、挟み込むようにして二体の分身が美鈴へと迫る。

正面から迫るの分身は下から掬い上げるような五爪の一撃。背後より迫る分身は上方からの蹴り落としである、研ぎ澄ました感覚が告げている。

ゆえに美鈴は身体を後ろに反らして正面の一撃かわすと、顔面に迫る一撃は両腕で受けた。

「ぐ……が、っ！」

気を集中させて受けたというのに、腕の骨は軋みを上げる。

受けきれないと判断した彼女は足の力を抜いた。自然、彼女の身体はその場で回転していく。

その勢いを利用して正面で追撃を狙っていた分身の顎を蹴り抜くと、両手を床について逆立ちの姿勢に。

視界が前後上下入れ替わり、蹴りをくれた分身が着地したのを美鈴の目は捉えた。明らかに不利な体勢。

だから美鈴は両脚で分身体の首に絡みつく、あろうことかそのまま持ち上げた。

「ん……！」

ただ床についていたはずの両手は、いつの間にか床を『掴んで』いた。凄まじい負荷をかけられた床石に亀裂が走り、悲鳴が上がる。

持ち上げられた分身が、引き剥がそうと両脚を掴むが既に遅い。

「ツリヤッ！」

背面で仰け反っている分身へと、倒れこむようにして叩きつける。

ようやくゆとりを作った美鈴は身体を起こすものの、もう一体の分身が既に彼女に向かつて駆け出していた。

そう。美鈴はこれを延々と続けなくてはならない。

いつ訪れるかわからない相手のスタミナ切れを待つて。

決して直撃を貰わないように。そのためには極力相手の連携を許してはならない。

未だ終わりの見えない死のワルツを、彼女は笑って踊り続けた。

Stage 4 鮮血の上に立ちて

遊戯場の一角で、二つ紅が荒れ狂う。

しかしそこには明確な優劣が存在した。

かたや景気良く妖力を形に変えて撒き散らし、かたやそれを弾き防ぎかわしの防戦一方。

攻勢に出ているのは狂乱の吸血鬼——フランドールであった。

「あははははは！ お姉様はそんなものなの!？」

「この……！ 好き勝手言っ……！」

一応連戦であるはずのフランドールに、疲労の色が全く見えない。

これこそがヴァルバトーゼ最大の誤算であり、満月がこの世界の妖怪へと齎すチカラであった。

基本能力と回復力の向上。

これにより、事実上満月の夜はほぼ全ての妖怪が無尽蔵のスタミナを誇る状態となる。

すなわちヴァルバトーゼが削っていると思っていた魔力は、減ったそばから回復して

いたのである。

相手が己と『同じ』吸血鬼であると、そう思っていたのがヴァルバトーゼの敗因だったのだ。

ゆえにこの闘いにおいて、連戦のハンデというものは存在しないである。

しかしこれは、フランドールがレミアアを押ししているという理由にはならない。

あくまでフランドールに連戦の疲れが存在しないというだけであり、レミアアとて同じく満月の影響を受けている。

では単純にフランドールが実力で上回っているのか。それも違う。

彼女らのステータスには殆ど差が存在しておらず、むしろ経験の分レミアアの方が上手と言っているだろう。

しかし結果はこれだ。何故か。

一つはフランドールとの戦闘に専心できぬ理由があるから。

いかに距離を離れたとはいえ、遙か後方の身内とヴァルバトーゼに流れ弾がいかないように気を使う必要があったからである。

といっても無作為にばら撒かれている妖弾全てを迎撃しているわけではない。

そんなことをしなくても、彼女にはそれを阻止できる『能力』があった。

運命を操る程度の能力。

力の規模が大きすぎて非常に制限の多い能力だが、流れ弾が味方に『なぜか』当たらないようにする程度のことはできる。

とはいえ多少なりとも気を裂かねばならないため、若干ではあるがこれがレミリアにとつて不利に働いていた。

しかし問題なのはどちらかといえども一つの要因である。

レミリアは、フランドールに対してどこまで本気を出していいのかがわかっていない。

今日この日に至るまで、レミリアは己に相對してきた相手は全て殺すつもりで攻撃を加えていた。

なぜなら彼女がその力を揮うのは、紛れもない敵に対してのみだったから。

身内——ましてや妹を戦闘不能にまで持ち込むにはどれぐらい力を出していいのかわからない。

もちろんフランドールの力が己に匹敵することぐらいレミリアとて理解している。おそらく全力の一撃を加えたところで、死ぬことはないだろう。

それでも、もしかしたら——そんな思いがレミリアの攻撃から精彩を奪っていた。

「いいの？ そんな調子だと、終わっちゃうよ!？」

フランドールの嘲りの混じった叫びとともに、緑の格子が展開される。

縦横無尽に駆け巡る妖力光線。その特性上から相殺、防御が難しい。

レミリアは回避を選択して、基点であるフランドールを叩くために突撃する。

前後左右上下と器用にかわしながら、レミリアは宙に浮かぶフランドールへと距離を詰めていく。

途中何度か牽制もかねて反撃の妖力弾を放つものの、レーザーにかき消されるかすん
なり回避されてしまう。

幾度かレーザーが彼女を掠めて肌を焼くものの、どうにかレミリアは有効射程まで迫
ることに成功した。

「ひっかかったー！」

だがにやりと笑うフランドールを見て、レミリアは己の迂闊を悟る。

いつの間にかレーザーの群れは消え失せており、フランドールの周りには濃密な妖気
が漂っていた。

レミリアは放ちかけた攻撃をキャンセルして、自らの防御を固める。

直後、暴力と化した紅い渦がフランドールの周囲に顕現した。

その渦は容易くレミリアを絡め取り、妖力防護の上から彼女を削る。

「く、うっ……！」

「そお、れー！」

「——っ!？」

さらにその渦は術者の動きを制限しないのか、耐え忍ぶレミリアの上からフランドールは右腕を叩きつける。

堪らず吹き飛び、石床へと激突した。かなりの勢いだったらしく、周りが陥没して粉塵が舞う。

どうにか身体を起こしたレミリアに、それは届いた。

「あーあ。せつかくお姉様と遊べると思つたのに、期待はずれだったなー」

その砂埃の奥の影から届いた声に。

心底残念そうなその色に。

レミリアは、何かがぶちぶちと音を立てていることに気づいた。

「あー! だからお姉様は今まで私と遊んでくれなかつたんだね? 気づかなくてごめん

なさい」

そして、本当に申し訳なさそうなその声に。

理性と呼ばれたレミリアのそれは、弾けて爆ぜた。

「ハ、ハ、の——……!」

「どうしたの? お姉様」

「調子に乗るのも——」

びしびしと、周囲の小石がレミリアから漏れ出す怒気に耐え切れずに自壊していく。そして彼女は立ち上がり、それを開放した。

「いい加減にしなさいアアアい！」

まるでその咆哮が力を持ったように、レミリアから膨大な圧力が放たれる。

周囲の粉塵を一瞬で吹き飛ばしたほどのそれは、中空に立つフランドールに防御を強いるほどの圧倒的な力の奔流。

数瞬後、それは唐突に止んだ。

その根源たるレミリアは、一見何も変わっていないように見える。

しかし、ついに彼女はその眼から迷いと躊躇を完全に消した。

端然と紅い瞳がフランドールを射抜く。

突如変容したレミリアの様子に、フランドールはしばし呆然とした様子を見せたもののすぐに立ち直った。

今まで以上の愉悦を見せて、彼女はレミリアに笑いかける。

「え……あ、は、ははは！　なんだ！　お姉様全然元気じゃん！　これでまだまだ遊べ—

—

「つんけん」

だが、レミリアにとってはどうでもいいことであつた。

言葉だけではなく、肉体を以て文字通りの一蹴を成す。

反応すらできずに、フランドール吹き飛ばされた。驚愕と苦痛にか、彼女は目を白黒させている。

彼女にしてみれば、眼下にいたレミリアが消えると同時に己を衝撃が貫いたのだから仕方のないことだろう。

しかし今のレミリアは当然その程度で攻撃を緩めるような、容赦というものを持ち合わせていない。

冷たい瞳で小さくなっていくフランドールを見上げながら、彼女は右手を掲げた。

「アーモンロード」

そこから放たれたのは一条の光。

だがフランドールに届く刹那の合間に、凄まじい勢いで枝分かれしていき――

おそらくフランドールの目には、視界全てを覆うほどの光条の群れが映っていたことだろう。

「く、あ………っ」

それでもフランドールは直撃を避けたいらしい。うまく隙間に潜れたのか、それとも逸らしたのか。

だがどちらでも関係なく、興味もない。

「え——?」

いつの間に展開していたのか。

レミリアの背後から伸びた幾多の巨大な鎖がフランドールを締め上げる。

ぎちぎちと締め上げるそれに、フランドールは苦痛に喘ぐだけで動かない。

あるいは彼女の能力ならば容易に縛鎖を破壊できるのだろうが、今の彼女にそんな余裕はないのだろう。

そして突如、その表情は驚愕に変わった。

「これで少しは——」

レミリアの右手の上で膨張する『それ』を見たからだろう。

紅い妖力が渦を巻き、巨大な魔槍を形成していく。凶悪な妖気が空間を震わせた。

それはまさしく、フランドールがヴァルバトーゼを貫いた魔剣そと同質のモノであり——

「反省しなさい——!」

小さな体軀を振り絞るように放たれた紅き魔槍は、身動きの取れないフランドールをぶち抜いた。

それと時を前後して、逆位で続いていた一つの戦いが終幕を迎えようとしていた。

美鈴はフランドールの分身たちに対して、消耗戦を選択した——というよりは他に選択肢がなかったのだが。

それにしても、やはり無謀であったと言わざるを得ない。

なぜなら分身はその最期の間際まで能力が劣化しない。つまり徐々に疲労やダメージが蓄積するのは美鈴のみで、それでいて三体の分身を制圧し続けなくてはならないからだ。

しかしそれでも彼女は致命的な一撃を貰うことだけは避けていた。

終わりの見えないマラソン以上に困難な行為を、彼女は持ち前の精神力で走破し続ける。

だがいかに完璧なペース配分を保っていたとしても、限界というものは存在する。

その時は、もはや目前へと迫っていた。

「っ、ふう……！」

彼女の動きを、疲労が止める。これ以上の戦闘続行は自滅しかねない領域だったので、仕方ないものではあった。

しかし当然そのツケは痛みとともに訪れる。

三体の分身が美鈴へ飛び掛る。前左右からの同時攻撃。

正面の貫手はスウエーでかわして蹴り飛ばす。右からの蹴り上げは右手で巻き取って叩きつけた。

そしてそこまだった。

左からの薙ぎ払いは受けること叶わず、回避も防御も出来ずに貫つてしまう。

「が、は……！」

超速かつ鋭利なその一撃は、見事美鈴の脇腹を抉り取った。

口腔へ溢れ出す血を彼女は噛み切つて、己を傷つけた分身へと目を向ける。

それは超越的な殺意だったのか、追撃に腕を振りかぶっていた分身の動きが一瞬止まった。

美鈴はその隙に分身の顔面をしかと掴むと、地面に向かって投げつける。

「ぐ……」

渾身を込めた投げは、深手の美鈴の身体を蝕んだ。

それでも、ついぞこの窮地において光明が煌く。

ぴしりと、分身の頭部に亀裂が走ったのだ。

動力切れ。

途端に動きが鈍ったその分身を、美鈴は踏み潰す。すると呆気なくその分身は瓦解した。

だがその美鈴の安堵と、一体の分身に入れ込み過ぎた時間は残りの二体にとって十分過ぎる隙である。

「か——」

美鈴は攻撃を知覚することすらできなかった。

気づいた時には吹き飛ばされており、ボロ雑巾のように石床に転がっている。

それでもなお、未だ朽ちぬ武術家としての本能が次の攻撃を囁いた。

それに従い、美鈴は前方へ転がる。直後に背後へと落下した衝撃が、地面を伝わって美鈴の身体を揺らした。

そこにいるはずの分身へと駆け出そうと振り向いて、彼女は背後へと拳を振り絞る。確かな衝撃。

既にひび割れたもう一体の分身の顔へと、それは命中していた。視線を下へとずらせば、あと数センチのところまでその凶手が迫っている。

しかしそこから先それは動くことなく、分身は乾いた砂のように崩れ落ちた。残り一。

振り返り際に、背後の砂埃が裂け目を見せた。

当然姿を見せるのは最後に残った分身。

大振りが過ぎる相手の攻撃は、自身にとって容易に捌けるモノであるはずだった。

万全であれば。

「っ……っ……」

常ならば軽く流して反撃を入れられたはずなのに、その衝撃を殺すことすら完璧に行うことはできなかつた。

受けた左手から威力が全身に伝染する。それは傷だらけの彼女の動きを、さらに低下させる。

当然分身は止まらない。両手両足を凶器に変えて、美鈴へと攻撃を加え続ける。

まるで詰め将棋のように一手ずつ、己が敗北へと近づいていることを美鈴は自覚していた。

だからこそ彼女はその一手を待つことにした。

己を屠るための、王手の一撃を。

「——」

およそ十手。それを以て美鈴から抵抗の余力もないと確信したのか、まるで意思を持つたかのようにその分身は喜悦を浮かべて拳を振りかぶつた。

その瞬間、美鈴は全身の気と妖力を限界まで活性化させた。

刹那のみ、彼女は全速の行動を許される。

その猶予を逃さず、するりと彼女は攻撃の内側へと潜りこんだ。

後背で、凄絶な威力が過ぎ去るのを知覚する。

それを無視しながら、彼女は両の掌を分身体の腹部へと紙一重の隙間を空けて置く。

「破！」

美鈴は、残った全てをそこで炸裂させた。

そして、その先を見ることなく彼女は限界を迎える。

勝負に勝って試合に負けた。

視界が掠れ、倒れていく彼女の心境はおおよそそのようなものだった。

なぜなら彼女は命令を果たしていないから。

己が主に内心で謝罪しながら、紅美鈴の意識はそこで途絶えた。

「……………あ」

レミリアが我に返ったのは、フランドールに渾身に一槍を叩き込んでから十秒ほどしたときのことであった。

およそ五百年間フランドールの駄々によつて蓄積されたストレスも込めて一発かましたので、実のところかなりすつきりしたのだが冷静になるとかなりマズい。

まさか死んではないだろうが、遙か前方の壁面までぶつ飛んだフランドールの残影を追ってレミリアは飛び出した。

受身も取れずに激突したのか、その壁には大きな陥没と周囲に走った亀裂が生まれて
いる。

その、遙か下。

石造りの床に血だまりを作って、力なく横たわるフランドールの姿があった。
名前を叫びつつ、レミリアは飛び出そうとする。

「フラ——」

が、その身体は少しも動くことがなく硬直していた。

レミリアが駆け寄らなかつたのは、自分がこれを成したからという引け目などではな
い。

少し度が過ぎたとは思っているが、やはり仕置きをしなくてはならなかつたと今でも
彼女は思っている。

ではなぜ、彼女はその場から動かないのか。

「く。ふ……あは、はは」

ゆらりと、フランドールは立ち上がった。

壊れた自動人形のように、乾いた笑い声を零している。

その金髪に隠された彼女の瞳が、紅く紅く『輝いて』いた。

「——ッ！」

その瞬間、レミリアの本能は自分の肉体を後ろへと運んだ。

何のことはない。彼女が妹に近づけなかったのは、危険であると、本能が警告を発していたからであつた。

「……フラン、あなた」

フランドールの瞳が輝いたのはこれが初めてではない。

遙か昔——成つたばかりの彼女が『こう』だつた。

つまり——

「——っ、あ、あああああつ!?!」

レミリアは、突如生じた焼け付くような痛みを抗えず地面へと墜落する。

その痛みの答えは、彼女より数瞬早く地面を叩いたモノが告げていた。

陶器のような白い肌を持つ——彼女の左足が。

「あはは! ははははははははっ! あっはははははははははは!」

痛みに蹲るレミリアの様子を見て、フランドールは狂つたように笑い声を轟かせた。

苦悶の声を漏らしながら、レミリアは手をつけて起き上がろうとする。

その腕が、枯れ木のように呆気なく折れた。

「が、あああつ!?!」

正確には、その部分を破壊されたのだろう。

だがフランドールは手を握る動作をしていない。

やはり、と苦痛に乱れる思考の隅でレミリアは納得した。

すなわち、今の彼女は『目』を見るだけでそこを壊せるということに他ならない。

「ああ、ああ。痛い？ お姉様、痛い？ 私もね。痛かったの。死んじやうかと思っただよ」

服が破けて血の痕が残る腹部をさすりつつ、フランドールは滔々と語る。

その過程で、レミリアの右腕が破壊された。

絶叫にも近い悲鳴に、フランドールは笑みを深くすると再び口を開く。

「だから、私お姉様に嫌われちゃったと思っただよ」

「そ、それは……違、う……わ……」

歯を食いしばりながらも、レミリアはそれを否定する。

そんなことはないよ。

けれどか細い彼女の言葉は今のフランドールには灯火よりも儂くて。

「大丈夫だよ、お姉様。そんなこと無理して言わなくても。私ね、考えたの。お姉様が私だけを見てくれるようになるためにはどうすればいいか」

「フ、ラン……」

その先を言わせてはいけないよ。

心は叫びを上げるけれど、口から零れたのは彼女の名前だけだった。

「お姉様以外——みんなみーんな壊せばいいんだって」

「フラン……！」

このままではフランドールは文字通り全てを壊そうとするだろう。

被害は紅魔館に留まらず、幻想郷全体にまで波及する。だがおそらく、その辺りで幻想郷の重鎮が彼女を止めるだろう。おそらくは——死を以て。

止めなくてはならない。

その思いが、レミリアの身体に活力を注いだ。

千切れた手足が、血を架け橋にして繋がっていく。

「ああ、ダメだよお姉様」

だが壊される。

繋がった手足は、再びフランドールの能力に砕かれた。

「あ……ああつ！　う、ぐ……」

いかに満月の影響によって再生力が増大していようと、短期間に二度も四肢を砕かれてはその力も鈍りを見せる。

事実、再び繋げようとうごめく血の脈動が弱まっていた。

みるみる水位を増す血だまりに、レミリアは自分の意思すら沈んでいくのを自覚す

る。

そんな彼女を、フランドールは陶醉するように頬を紅潮させて見下ろしていた。

「ああ、ああ。もっとお姉様の悲鳴を聞いていたいけれど、私そろそろいかなくちや。夜が明ける前に全部壊さないといけないの」

「待、ち……なさい……！ フ、ラン……！」

ふわりと、フランドールはその身体を浮かばせる。

立ち上がることも出来ないレミリアは、それを見送ることしかできない。

「——」
だが奇妙なことにフランドールは、その動きを途中で止めた。彼女は訝しげにある一点を見つめている。

同時に背後からこつこつと、硬質な音がリズムよく己の耳を叩いていることにレミリアは気づいた。

「——どこへ往くつもりだ、フランドールよ」

「何で………お前が……」

呆然とした様子で、フランドールは掠れた声を漏らす。

しかしレミリアもまた、同じ心境であった。

彼女が聞いたその声は、それぐらいありえないものであったのだ。

だがフランドールはすぐに表情を変えた。愚者を見るような嘲りのそれに。

「あ……ハ、ハハ！ は、ははははははつ！ アハハハハツ！ 馬ツ鹿じやないのお前！ わざわざまた壊されにきたの!？」

つんぎくような哄笑を上げて、フランドールはそれに向かつて突撃した。

それは己が背後にいるために、レミリアはその先を見ることができない。

だが予想はできる。しかしレミリアにできることは何一つなく、彼女は齒噛みしてその結末を覚悟した。

「この——愚か者がッ！」

強烈な殴打音とともに、一つの影がレミリアの視界を横切った。

その影の正体を、レミリアは俄かに信じていることができない。

なぜならそれはまさしく、自分の妹だったのだから。

予想と違う映像に混乱しながらも、レミリアの目はフランドールを追っていく。

高速で空中を滑空したフランドールは、再び壁面へと衝突して崩れ落ちた。

それを成した存在が、悠然とフランドールへと近づいていく。

そしてついにそれはレミリアの視界へと入り——彼女の前で、黒衣が踊った。

血のように紅い妖気を揺らめかせて、彼は告げる。

「立て小娘。——教育してやる」

暴君が、そこにいた。

Stage 5 破壊と暴虐と

「大丈夫か」

彼は振り返ると、レミリアを気遣った。

しかしレミリアは己が知る彼との違いに、思わず名前を確認する。

「あなた……、ヴァルバ、トーゼ……なの？」

レミリアが知るヴァルバトーゼとは、少年と青年の間ぐらいの風貌だった。

だが今の彼は、どこからどうみても完成された大人にしか見えない。身長も伸び、顔つきからは幼さが消えていた。

よくよく鑑みれば声も少し低い。

だがそういう上辺だけではない。

眼前の吸血鬼はもつと決定的に、絶対的に何かが変わっていた。

「うむ、紛れもなく俺だ。……そんな疑問にかまける余裕があるのなら問題はなさそうだな。動けるようになったら下がるがいい。極力攻撃は通さぬようにするが、保障はできぬのでな」

そう言い終わると、ヴァルバトーゼはフランドールへと歩き出す。

その背中には、言いたいこと、問いたいことがいくらでもあった。

それでもレミリアの口から言葉がでなかったのは、ある一つの感情がそれを阻んだからである。

未だかつて経験したことないそれを、レミリアは言語化することができなかった。もし、ここに『あの』ヴァルバトーゼを知るものがいたらこう答えただろう。

——それは畏怖である、と。

僅かに残る痛みを顔に歪ませながら、フランドールは立ち上がった。

彼女の心中は過去に類をみないほど、複雑に渦巻いている。

それでも大雑把に纏めるならば、それは一言で表せた。

すなわち——憎悪である。

「よくも……邪魔を……！」

憎々しげに、フランドールは眼前に立つ男を睨んだ。

さつき完全に壊しておけば、という思いが首をもたげる。

だが彼女がそれに固執しなかったのは、およそ戦力という意味合いでは彼は脅威足り得ないと判断したからだ。

だからこそ、この現状はありえない。

なぜ自分は殴り飛ばされたのか——そこまで思考が動いたところで、彼女は考えを断ち切った。

意味がない。

なぜなら——今度こそ、しっかりと壊せばそれで済む話だからだ。

「もう一度、串刺しにしてやる——！」

紅き剣を右手に生み出し、彼女は宣言した。

それをヴァルバトーゼは鼻で笑う。

「フン、やれるものならやってみるがいい」

「なめるなアアア！」

身を駆る激情にしたがって、フランドールは飛び出した。

掛け値なしの全速。先の闘いではついぞ見せなかつた本気に、一瞬で距離を詰められ

たヴァルバトーゼはそのまま貫かれる。

——そう、フランドールは思っていた。

「キサマこそ、余り舐めるな」

突き出したその剣は、ヴァルバトーゼの眼前で止まっている。

どれだけ力を込めても、それ以上先へ進むことはない。

理由を求めて視線を手前に引くと、刃の根元を彼の左手が掴んでいた。

そのありえない現象に、フランドールは目を見開いた。

掴めるはずがないのだ。妖力のみで構成された紅の魔剣は、明確な実体を持っていない。

仮に何らかの方法で掴むことができたとして、その手は蝕まれているはずである。もしそれが可能であるならば――

もつとも、フランドールがそんな複雑な思考を展開しているはずもなく。

彼女はなんでなんでなんでと心中で呟き続けて、気づけば宙を舞っていた。

「――え……、あつ？」

ぐるぐると回転する視界に、フランドールは疑問の声を漏らす。

顎に残る痺れと痛みと、目まぐるしく動く視界が捉えた一つの影がその答えを教えてください。

蹴り上げられたのであると。

足を下ろしてこちらを見つめるヴァルバトーゼの手中には、彼女の魔剣が残っている。

得物を欲して奪い取ったのだろうか。だとするならば彼は愚か者と謗られても仕方がない。

妖力で形成されたエネルギー体は、その主の任意で姿を変える。

つまりフランドールの一存で消すこともできるといふことだ。

だからもしヴァルバトーゼがその剣で攻撃を仕掛けてきたのなら、その瞬間に消してやろうとフランドールはほくそ笑む。

だが彼はつまらなそうにその魔剣を一瞥すると——それは萎んで姿を消した。まるで霞か何かのように。

「……はっ。」

理解できない。フランドールは消滅の意を放つてはいないのに。

そこで彼女は一つの疑問に気づく。

そもそも、ヴァルバトーゼに突き刺していたはずの魔剣はどうして——

「呆けすぎだ、バカめ」

「えっ？」

背後からの侮蔑。

気づけば眼下にいるはずのヴァルバトーゼの姿がない。

重い衝撃が、背中を貫く。

叫び声を上げることすらできずに、彼女は地面へと叩き落された。

「……ん、の………」

身を焦がす怒りに背中を押され、すぐにフランドールは起き上がる。

煮え立つ思考をそのままに、彼女は飛び上がった。

彼女は妖力を潤沢に駆動させて、ヴァルバトーゼへの殺意を形に変えていく。

弾丸へ、光線へ、波動へ。

先程とは違い、一撃で簡単に壊すことはできないのかもしれない。

だがいかにヴァルバトーゼが強く変容したとしても、この無数の攻撃を受けて無事で済むはずがないとフランドールは確信していた。

対して彼はその紅の暴威の前に、なぜか肩をすくめるだけで動かない。

諦めたのか、呆気なく彼はそのまま紅の光に飲み込まれた。

必死に抗う様を見たかったフランドールとしては少々不満の残る幕切れだったが、それでも歓喜が勝る。

だから彼女は大きく口端を裂けさせて――

「……………ふう。いい加減少しは状況が理解できたか？」

現れたヴァルバトーゼは、微塵も痛痒を感じていないように見えた。

だが以前のように回避したわけではない。明らかにその身に受けている。

なぜなら彼の黒衣が穴だらけになっていたから。加えて僅かではあるが、血の痕が残っている。

つまり今の彼には妖力を介した攻撃が通じない、あるいは極めて通じにくいとフラン

ドールは判断した。

そう考えれば、魔剣がダメだったのも納得がいく。その原理については想像もつかないが。

じゃあどうする、と彼女は思考を回し始め——あることに気づいた。その口元が嘲弄に歪む。

「く、ふふふ。あなたこそ、状況が理解できているの？ あなたの攻撃も……全然、全然効かないよ？ やっぱ、剣がないとダメなんじゃないかな？ それでどうやって、私に勝つつもりなの？ アハハハハ！」

これまでフランドールは幾度かのヴァルバトーゼの攻撃を受けている。

それは確かにフランドールに痛痒を与えてはいたものの、それだけである。致命傷はおろか、行動を制限するレベルですらない。

ましてや満月の影響下にある今ならば、それこそ数秒で治癒する程度なのである。

だから彼女は高笑いを続け——

「バカか、キサマは。いつ俺が全力で攻撃したなどと言ったのだ」

「はは——はは？」

フランドールの眼前へと、黒の雷光が駆けた。

刹那で彼女との距離を詰めたヴァルバトーゼは、しかし何かをするような素振りを見

せない。

だからフランドールは迎撃に左腕を動かそうとして——そこが熱く疼いていることを知覚した。

自然とそこを目線が辿り——事実を認識したフランドールを、激痛が襲った。

「あ………いつ、あああああああつ?!」

腕がない。

正確には、肘から先が続いていない。そしてその続きは、ヴァルバトーゼの右手の中にあつた。

何が起こったかは、フランドールも理解している。彼が無造作に耒り取ったのだと。

だが能力による破壊ではなく鋭利な刃物による切断でもないその過程で、気づけないなどということがありえるのか。

「どうした、随分と喚くではないか。自分の腕が取れたのは初めてか? 痛いのか、辛いのか、苦しいのか? ……それを、キサマは愛する姉に行つたのだぞ! 挙句愉悅に浸るなどと——冗談ではないツ!」

ヴァルバトーゼの激昂とともに、フランドールは殴り飛ばされた。

再び、彼女は石床を転がることとなる。

力なく横たわつた彼女へと、ヴァルバトーゼは千切れた腕を投げつけた。

吸血鬼の本能が血の触手を伸ばして、徐々に腕を繋いでいく。

「それが繋がるまでの間に、キサマの勘違いを一つ正してやろう」

「う、うう……」

「今の俺に、剣など必要ない。そもそも俺は生粋の剣士ではないのだから。魔力があるならば、魔界の名剣として我が肉体には劣る」

「ぐ……あ……」

「フン、苦痛で耳を傾ける余裕もないのか？ キサマの姉は、もつと悲惨な有様でも立ち上がろうとしていたのだぞ！ 立て！ 立たぬというのなら——」

そう言つて、ヴァルバトーゼは一步一步近づいてくる。

確実に距離を詰めてくる彼に、フランドールは名状しがたい情動が高まつていくのを感じた。

その情動に彼女は抗うことができず、爆発させる。

「つ、あ、うあああああああああああ！」

背面上方へと高速で飛翔したフランドールは、およそ完璧と言つていい行動を選択した。

それを——徐々に増えるフランドールを見たヴァルバトーゼは、感心したように吐息を零す。

「ほう……ほう？」

悪魔の変則憑依召喚。質量を伴った数の暴力。遠間からの直接物理攻撃。

接近戦では勝ち目がなく、遠隔攻撃も通じないヴァルバトーゼ相手には、まさしく有効な手立てと断言してもいいだろう。

さらにこれまでヴァルバトーゼは、全て直接攻撃か、その延長しか用いていない。

ならば一体の分身体が迎撃されようとも、その背中を二体目が、それがダメなら三体目が——その戦術は、確かに最善のモノであった。

だが、彼女は忘れていた。否、理解していなかった。

今まで彼女が読み聞かされた物語において、数に恃んだ存在は総じて一蹴されていたことを。

圧倒的な個に対しては、数の多寡など意味がないことを。

「煉獄に囚われし魔神よ」

それは分身体の数が十を超え、百を超えた辺りのこと。

眼下のヴァルバトーゼは、大きく外套をはためかせると何事か呟き始めた。

するとその外套の内側から、数多のコウモリが姿を見せる。

そのコウモリたちはヴァルバトーゼの直上へと集い、一つの個を形成していく。

それは、漆黒の翼で身を包んだ何かであった。

「我が命に従い、悪辣なる異形を表せ」

それを見たフランドールを、致命的な予感が支配する。

二百を超えた分身体の形成をそこで中止して——その全てをヴァルバトーゼへと殺到させた。

英断だったと言える。だがもはや手遅れであり、無意味であった。

「いけええええええええッ！」

「フルークフーデ」

それが、翼を開いて姿を見せた。

孤を描く二本の角。黒々とした肉体。巨大な鉤爪。硬い曲線を描く尾。血に染まつたかのように紅い翼。

まさしく、それは悪魔の具現であった。

その悪魔が、凶悪な咆哮を撒き散らし——

「……うそ」

「これが、完全なる支配だ」

それだけで、全ての分身体が崩れて消えた。

Stage 6 恐怖を知ったその先に

何故ヴァルバトーゼは、こうまでフランドールを圧倒するに至ったのか。

無論結論は分かりきっている。チカラを——血の魔力を再びその身に宿したからだ。

疑問なのはその過程である。よもや吸血行為を彼が是とするとは考えられない。

ならば何か他の要因があったということだ。

その要因は、奇しくも彼のシモベであるフェンリツヒが想定していた手段と一致していた。

すなわち、外部からの魔力供給である。

言葉だけ聞けば簡単に思えるかもしれないが、実際は極めて困難と言っている。

その理由は大きく二つ。

一つは、魔力の波長が合う相手を見つけることが難しいということ。

この世界では霊力や妖力などと彼の世界よりはチカラの細分化がされているが、それでもまだまだ大雑把なのだ。

例え血を分けた家族であっても血液型が一致せぬように、自分と同質のチカラを持つ存在というのは極めて希少である。

加えて迂闊に波長がずれたチカラを注ぎ込んでしまうと、拒絶反応が起こり最悪の場合死にかねない。

ちなみにそれを極めて軽度再現させたのが、フランドールの妖力波紋である。もう一つは、魔力を吸収するという行為そのものが難しいということ。

前述の事情から、相手からチカラを吸収するという技法は遥か古に廃れてしまっているのだ。

しかしヴァルバトーゼは極めて近しい技法をその身に修めていた。

そう、生命力吸収である。

ゆえに、後者の問題点はなきに等しい。

ではフェンリツヒは何を探していたのか——などと考えるまでもない。当然、ヴァルバトーゼと同質のチカラを持つ存在である。

まるで雲を掴むような話であるが、実のところ彼に限っては対象を容易に判別できるのだ。

基本的に同族間でも魔力の波長は拒絶反応が起きる程度にはズレやすいのだが、吸血した血を魔力に転換するという特性を持つ吸血鬼に限って、同族間における魔力波長がほぼ一致する。

つまりヴァルバトーゼ以外の吸血鬼さえいけば、擬似的にはあるもののヴァルバ

トーゼにチカラを取り戻させることが可能ということだ。

だが生憎彼の魔界には彼以外の吸血鬼は存在しておらず、ゆえにフェンリツヒは別魔界へと手を伸ばすことも考えていたのだが。

この世界には、それがいた。

つまり具体的には何が起こったのか。簡単な話だ。

死に瀕したヴァルバトーゼは、己に突き刺さった『かつての己と同質の魔力を持つ』剣を吸収したのである。

だがここで新たに疑問が生じる。

ヴァルバトーゼが吸収した魔力はさして多くはない。

魔力剣が二本と、直撃した妖力弾を少々といったところだろう。

それによって活性化化した肉体がフランドールを圧倒することはありえても、最後のフルークフリーデはありえない。

放出した魔力量が、吸収した分を大きく上回っているからだ。

ならば、そこにもう一つのからくりが存在する。

畏れエネルギー。

かの世界において、悪魔たちが世界から受ける補正のことである。

その供給が減ったことによって、彼の魔界はかつてよりも大幅に悪魔全体のステータ

スが低下しているのだ。

ではこの世界には存在してしないのか。否、存在する。

そもそも何故この世界で、『幻想郷』という閉じた世界が生み出されたのか。

それは恐れエネルギーと極めて同質のエネルギーが、妖怪たちに供給されなくなつてしまつたからだ。消滅の危機に、瀕するほどに。

ゆえに狭く閉じた世界で、それを満たす必要があつた。

すなわち幻想郷の妖怪は——かつて満ち足りていたころの魔界と、同等の恐れエネルギーに満ちているのだ。

だが、つい先程までのヴァルバトーゼはその供給を受けていなかったのである。

その理由は別世界の住人であるというのが一つ、そしてもう一つ決定的なモノが存在した。

彼はこの世界において、誰にも恐れられていなかったのである。

人間を恐怖させる存在であると、世界は認識しなかった。

だが、復活したヴァルバトーゼには恐れを抱いた存在が二人いる。

レミリア・スカーレットと——フランドール・スカーレット。

幻想郷においても上位の『畏れの象徴』に恐れられたことによつて、ヴァルバトーゼは世界から『妖怪』と認められた。

げに見つめる。

だが彼女は壊れたわけでも、狂ったわけでもない。

鎌をチラつかせた死の具現に対して、彼女の生存本能が『それ』を見せたのだ。その紅い瞳を爛々と輝かせて、彼女は嗤う。

「——壊れちゃえ」

破壊の宣告者によって、至極あつさりと暴君の腕が落ちた。

前触れもなく己の腕が落ちたことに、ヴァルバトーゼは眉を顰める。

しかし思い当たるところがあつたのか、すぐに納得したように頷いた。

「そうか、確かレミリアが語っていたな」

フランドールは勝利を確信している。

彼女の瞳は比較的壊れやすい部位である手足からしか『目』を捉えていないものの、それを壊し続ければヴァルバトーゼに打つ手はない。

だから、だというのに。

何故目の前の男は、悠然とした態度を崩さないのか。

それどころか、冷笑を浮かべてフランドールを見つめている。

「どうした？　もう壊せる場所はないのか？」

「っ、っ、っ——！」

音もなく、フランドールの意によって彼に残った三肢が壊れた。壊した——はず、なのに。

平然と、ヴァルバトーゼは立っていた。

右腕も、右脚も、左脚も、壊れていない。

「なん、で……！」

「そう驚くことでもなからう。壊された瞬間に繋げただけだ」

落ちた腕を拾って繋げながら、ヴァルバトーゼはそう答えた。

確かに、フランドールの破壊能力はあくまで『砕く』のみ。

決して消滅はしないのだから、道理としては正しい。

しかしそれを成し遂げるにはいかな超速再生能力を必要とするのか。

とはいえその再生には相当の魔力が用いられているはずである。自然と備わっているレベルのそれならば、最初の左腕が落ちるはずがない。

「……じゃあ！ お前が再生できなくなるまで——」

壊し続けてやると、フランドールは続けることができなかつた。

何故なら、彼女の瞳は今壊したばかりの『目』を捉えていない。

そんなはずはない。例え再生したとしても、壊れやすさが変わるはずがないのだ。

だが彼女の瞳が捉える『目』は、間違いなく四つ減っていた。

「……その反応を見る限り、どうやら成功しているようだな」

「何を……？」

「他愛のない話だ。そこが脆いというならば、治すときに補強すればいい」

もちろんヴァルバトーゼの肉体は『完全』ではないため、『目』は紛れもなく存在しているはずである。

ただフランドールの瞳では見抜けない程に覆い隠されてしまったと、ただそれだけのことであった。

「とはいえ魔力切れを狙うという発想は悪くない。試してみるか？」

己の破壊能力に屈しないヴァルバトーゼを、フランドールは理解できない。

敬愛する姉ですら、この能力の前には成す術もなかったのだ。

だからこれは何かの間違いであると、彼女は限界まで目を見開いた。

「う、あ……あああああああああ……」

壊す。壊す。壊す。

右上腕を。左大腿を。左前腕を。右脛脛を。手首を。足首を。

その度に見える『目』が減っていくが、フランドールは構わず壊し続ける。

そしてついに、壊した箇所から一瞬血が漏れたのを彼女は見た。再生能力が追いつかなくなってきた証拠である。

だから彼女はますます目に力を込めて――

「――無論、俺とて何もせぬわけではないがな」

「!?!」

闇が、フランドールを覆い隠した。

しかしその瞬間こそ彼女は驚いたが、別段気にするほどのことではない。

何故ならその闇にも『目』が見えているから。むしろこんな小細工をするほどにヴァルバトーゼは追いつめられているのだと。

再び彼女の口が孤を描き始めたその瞬間――

「か……、あ?」

鋭い痛みが走った。その発生源へとフランドールは目を向ける。

そこには紅い針があつた。彼女の腹を突き破るように。

一瞬遅れて、右腕にも痛みが走る。さらに左脚。左手。

そして、虚脱感。

気を抜けば意識ごと断ち切られそうなそれに、しかし彼女は耐え切った。

全ての根源である闇の『目』を射抜き、破壊する。

だが。

「さて、続けぬのか?」

再び活力を取り戻して、ヴァルバトーゼが淡々と問いかける。折角削った体力と妖力を吸収された実感がフランドールにはあった。

だというのに、彼の身体にはもはや『目』が殆ど残っていない。

「あ、あ……うあ……！」

そして、ついにフランドールは折れた。

ぺたんと情けなく座り込み、掠れた呻き声を漏らす。

己が絶対と確信していた破壊能力をも攻略された彼女に、抵抗する気力は残っていない。

だからそれが近づいてきていると分かっているにもかかわらず、彼女は動くことができなかった。

「覚悟はいいか。フランドールよ」

既にフランドールには見返す気概も残っていない。

弱々しい小動物のように震え、固く目を閉じながらそのときを拒む。

そこに。

「……何のつもりだ？」

ヴァルバトーゼが疑念を投げる。

だが当然フランドールは何もしていない。

さらに己の前に影が落ちた。何が起こったのかと、フランドールは恐る恐る目を開

く。

そこには――

「レミアア・スカーレットよ」

ちっぽけで、大きな背中があった。

まるで庇うように、レミアアがフランドールの前に立っている。

「この辺で勘弁して貰えないかしら。虫のいい、話だとは思うけどね」

フランドールは、目の前の光景が理解できない。

あんなに痛いこと怖いことしたのに、どうしてお姉様はそこにいるのだろうか。

「……断る、と言ったなら？」

「私が相手になるわ」

その声に怯えはない。

それでも、勝算があるとは思えなかった。

アレは格が違う。術が違う。

フランドールが完膚なきまでに敗北した以上、レミアアが勝てる道理などどこにも存在しないはずなのに。

「な……なんで……？」

だからフランドールは問いかけた。

どうして、そんな無謀をするのかと。

するとレミリアは振り返って、薄く笑う。

「バカね。姉が妹を守るなんて、当然のことでしょう?」

その笑みは、本当に柔らかくて。

それはフランドールが欲してやまないもので。

途端に、彼女の目の奥から熱い何かが零れ出した。

「だって、だってえ……! 私、いっぱいいっぱいお姉様を傷つけた! 痛かったでしょ!

!? 怖かったでしょ!? なのに、なのに……!」

泣きじやくって、見かけ相応にろれつが回らない言葉をフランドールは零し続ける。

そんな彼女をレミリアは優しく抱き寄せた。

「それがわかったのなら、いいのよ」

「う、うう……あああ……ごめんなさい……ごめんなさい……!」

泣きながら謝り続けるフランドールを、レミリアはただただ抱きしめ続けた。

しばらくして、フランドールが落ち着いたのを確認したレミリアは彼女を置いて立ち

上がる。

そして最強の吸血鬼と、相対した。

「……待たせたわね」

だからフランドールも立ち上がって、レミリアの横に並んだ。

涙を拭いて、前を見る。その瞳にはもはや恐怖はない。

「私も、闘う。私のせいだもん」

「フランドール……。そうね、そうしましょうか」

「ごめんなさい、ヴァルバトール。いまさら謝っても許してもらえないと思うけど、私はまだ死にたくないの」

戦意を滾らせる二人に対して、ヴァルバトールは困ったように笑みを浮かべた。

その表情は、敵対する相手に向けるようなものではなくて。

「決意に水を差すようで悪いのだが、もはや俺に闘うつもりはないぞ」

「……え？」

驚きの声が重なる。

いや、重要なのはそこではない。そこではなくて——

「目的は既に果たした。それに——」

口を開いたヴァルバトールの目には敵意も戦意も残っていない。完全に弛緩していた。

それどころか、何故か彼は満足げに笑っている。

「今のキサマらに勝つのは、かなり骨が折れそうなのでな」

こうして、事態は終局を迎えた。

意識を取り戻した三人にフランドールが謝罪して、彼女らが目を白黒させていたのは余談である。

むしろ重要なのは、その際にパチュリーがヴァルバトーゼに零したある一言であった。

「ねえ、ヴァルバトーゼ」

「む？」

「貴方、帰れるんじゃない？」

「……おお。言われてみれば確かにそうだな」

転移の問題点であった魔力量が一気に増大した以上、その公算は極めて高い。

現状で魔力が足りずとも、スカレット姉妹に頼めば魔力を供給させてもらえるだろう。

「問題は、こちらへ戻れるかどうかだな」

ヴァルバトーゼはいくつかの約束を果たすために、再び幻想郷へ戻らなくてはならない。ただし当然吸血行為が解禁されていない以上、使った魔力が回復することはなく、向

こうでは外部供給する当てもない。

まあどちらにせよ約束を果たして血を吸えるようになればいい、とヴァルバトーゼは楽観していた。

それに、あちらに帰った以上はどの道しばらくは戻ってこれないだろう。

「まあ期限付きとは言わないから、ちゃんとあつちの魔導書持ってきてきなさいよね」

「うむ。それは約束しよう」

「——なら、まずやらなくちやいけないことが一つあるわよ」

レミリアが、くすりと笑ってそう言った。

ヴァルバトーゼは疑問符を浮かべて続きを待つ。

「何をだ？」

「決まってるじゃない——パーティよ！」

最終話 エンディング 最初の、最後の

驚くべきことに、それから数時間——日付が変わる頃にはパーティが始まった。

紅魔館大広間が広く感じない程度には人影で埋まっており、おそらくは咲夜が時間を止めて幻想郷を駆け回ったのだらう。

とはいえこんな夜更け、それも突発的に開催されることになったパーティでここまで人数が集まるのは幻想郷ならではだらう。この住人がこの手のイベントに慣れており、そして好んでいるからこそ成り立っているのである。

しかしこのパーティの一角では、普段とは異なる奇妙な光景が存在した。

それはあるテーブルのこと。

その白いテーブルクロスの上には、いくつもの料理が彩っていた。それは問題ない。肝心なのは、それらの料理が全て魚料理——それも全て一種類の魚で調理されている、ということであつた。加えて何故か頭の部位がない。

しかも他のテーブルでは全て洋風料理で統一されているのに対して、何故かそのテーブルだけは刺身、蒲焼、天ぷらなど数多くの和風料理が顔を並べている。

挙句に異常なほどに妖力が高く黒衣に身を包んだ男が、一心不乱にそれらの料理を食べているともなれば、周囲から人影が消えるのは必然のことであった。

そんな彼に、一つの影が近づいていく。

だが彼は気づいていないのかそれとも気にもしていないのか、ひたすらにその魚——イワシ料理を食べ続けている。

そしてついにその影は彼の隣まで歩み寄り、ため息を吐きながら呼びかけた。

「……貴方って、本当にイワシ好きよねえ」

「むっ」

黒衣の彼——ヴァルバトーゼはようやく食べる手を止めて、声の主に振り返った。

パープルドレスを着た、金の長髪を持つ女性。

その正体はこの大量にあるイワシの提供者であり、今までも割と世話になった妖怪であつた。

「……おお、紫か。うむ。イワシはそのままでも十二分に美味であるが、調理をしたものとなるとまた格別だな」

「聞いたわ。チカラを取り戻せたんですって？ まあ、見ればわかるけれど。随分な変わりようじゃない。イワシを食べていなかったら貴方だって気づけなかったかもしれないわ」

ヴァルバトーゼのイワシ談義に取り合わず、紫は彼の変化に触れる。

確かに一見した程度では違う人物に見えるかもしれない。些か風貌が変化した上に、妖力が桁違いに増加しているのだから。

「とはいえ、完全にとはいつておらぬのだがな」

「……それはまた、恐ろしい話ね」

確かにヴァルバトーゼは血の魔力を己に浸したことで、ほぼ暴君時代の己に立ち返ったといえるだろう。

それでも足りない。彼の体内に残っている血の魔力は、全盛期の一割にも届いていないのだから。

「何にせよ、キサマには世話になったな。この借りは必ず返そう」

「……そうね。何かあったら貴方の力を貸してもらおうわ」

それからいくか他愛のない雑談を交わすと、紫は軽く別れの挨拶を告げてどこかへ歩いていった。

それを見送り、ヴァルバトーゼは再びイワシ料理を食べようとしてあることに気づく。

「……そういえば、この機会に世話になった相手へと挨拶をするつもりであったな」

それはヴァルバトーゼがパーティへの参加を承諾した理由の一つであった。イワシを食べることに夢中で忘れていたのだが。

顔を顰めつつも、どうにかヴァルバトーゼは眼前のイワシたちの誘惑を振り切った。イワシの串焼きを一本手に取って、彼は知り合いを探して大広間を歩き始める。

といつても広間にいる半分は妖精メイドであった。彼女らは服装が統一されているので、外から来た客は結構目立つ。

そのため一人目の知り合いは呆気なく見つかった。その視線を感じたのか、その相手もヴァルバトーゼの方へと顔を向ける。

すると途端に彼女は表情を笑顔に変えて、こちらに近づいてきた。ペこりと一礼して彼女は自己紹介を始める。

「どうも、初めまして。わたくし、文々。新聞の記者を務めております射命丸文と——」
「おい」

「あ、なんですか？ 私何か気に障ることも言いました？ ……んん？ あれ、貴方どこかで見たような……」

冗談かとも思ったが、どうやら本気でわかっていないらしい。

よくよく考えれば最初の笑顔もどちらかといえ、営業スマイルなどと呼ばれるようなものだった。

ヴァルバトローゼはため息を漏らしながら訂正する。

「……俺だ。ヴァルバトローゼだ」

すると文はぽかんと大口を開けて硬直した。

そして口をぱくぱく動かして、ヴァルバトローゼを指差すと、叫んだ。

「……………はい？ え？ あああああああああつ!？」

「そこまで驚くことか」

「いや、だつて、え？ いや、ええー……」

どうにか落ち着きを見せ始めた文に、ヴァルバトローゼは軽く事情を説明した。といってもチカラを取り戻したということだけであったが。

とりあえずそれで彼女は事態を理解できたらしく、納得したように頷いた。

「なるほど、帰れるようになったとは聞きましたが……そういうことでしたか」

「まあ、確定したわけではないがな」

これでもなお魔力が足りない、という可能性がある。

しかしこういう場に参加していることからわかるように、ヴァルバトローゼ自身帰れるだろうと楽観していた。

「あ、そういうえば椀から一つ伝言を預かってますよ」

「この場に来てはおらぬのか」

「ええ、まあ。あの子は哨戒部隊ですから、中々気軽に山から離れられないんですよ。とはいえ上に言えば許可はすぐ降りるんですけどね。融通のきかない真面目さんですから」

そう言って、文は肩をすくめた。

おそらくそういうところが合わないのだろう。明らかに目の前の天狗はそういう束縛とは無縁そうである。

「まあともあれ、『何か暇つぶしになりそうなテーブルゲームでも持ってきて下さい』と椀は言っていましたよ」

「テーブルゲーム？」

「まあ山に引きこもっているとやっぱ退屈なようでした。よく河童の友人と大将棋というゲームをして暇を潰しているようなのですが——流石に同じゲームばかりだと飽きにくるらしく。異世界ともなれば全く新しいゲームがあるのではないかと」

確かに長い年月をあつた山で過ごすには、刺激が足りないように思える。

少なくともヴァルバトーゼには耐えられなさそうだった。

「よかろう。覚えておこう」

「ではまたいつか」

「うむ。今度こちらへ来る時は、でかい異変とともに訪れることを約束しよう」

「ああ、覚えていたんですね」

「無論だ」

かつて大結界から出る際に交わした約束。

文からしてみれば遊び半分の戯言だったのかもしれないが、ヴァルバトーゼはしかと刻んでいた。

勿論、時を同じくして交わした巫女との約束も。

「では、お待ちしています」

「ああ、任せておけ」

それからヴァルバトーゼは幻想郷で世話になった相手を探して声をかけ続けた。

そしておおよそそれが終わり、ふとヴァルバトーゼはそれに気づく。

ぼつかりと、不自然に開けた空間。その中心。

見覚えのある姿がそこにあつた。

「フランドール」

「あ、ヴァルバトーゼ」

フランドールは薄く笑って彼を迎える。

「そんな場所ですごしたのだ？」

「んーとね、今日はお姉様が大丈夫だつてパーティに参加させてくれたんだけど……」
今まで、フランドールは紅魔館のパーティにも参加させてもらったことはなかったらしい。

けれど今の彼女ならば、とレミリアは参加を許した——というよりも参加すべき、というような態度だったのだが。

「みんな怖がつて近づいてきてくれないの」

仕方なさそうにフランドールは儂げな笑みを浮かべる。

確かにそれは道理だ。かつての彼女と相對する、というのは彼女の気まぐれに生殺与奪を委ねることに近い。

あるいはそうなったものもいるのだろう。それが急に大丈夫だといって安心できるはずがない。

「フランドール——」

「でも！ 続けていけば、いつかみんなわかってくれるはずだから！」

「……そうか」

不屈の意思をその目に湛えて、フランドールは強く語った。

いい目をするようになったと、ヴァルトバーゼは小さく笑う。

「あと……さつきはほんとにごめんなさい」

急にしゅんとした様子で謝り始めたフランドールに、ヴァルバトーゼは苦笑した。

いい傾向なのだが、どうにも先程までの彼女と違いすぎて対応に困る。

「いや、俺がやられたことに關しては気にしておらぬ。所詮俺が未熟者だったというだけだ。何よりも、無意味ではなかったのだから」

結果として、フランドールは良い方向に変化した。

なればこそいちいち過去に拘る必要はなどないと、ヴァルバトーゼは思う。

「ヴァルバトーゼ……」

「だが、そうだな……フランドールよ。一つ、俺と約束しろ」

「やくそく？」

これが、初めてのことだった。

ヴァルバトーゼが幻想郷で、自分から約束を持ち出したのは。

貸し借りを果たすためでもなく、勝負の結果に殉じるわけでもない約束というものは。

「そうだ。『姉を大切にしろ』——できるか？」

凄絶とも言えるほどの意思を宿したヴァルバトーゼの瞳が、フランドールを射抜く。

先の一見とは似て非なる強烈な威圧感。

しかし彼女は、それに怯むことはなく——

「うん！ 約束する！」

無垢な笑顔を見せて、それに強く応じてみせた。

E x t r a

それから。

長い長い満月の夜が終わって。

太陽が今か今かと顔を出すのを待っている頃。

ヴァルバトーゼは一人、湖の畔に立っていた。

彼は帰る前に、一つだけ果たしておかねばならぬ約束がある。

そのために、彼は視線を湖上へと彷徨させた。

「……………フ」

見つけた。

氷を浮かべて、その上で彼女は寝息を立てている。

だからヴァルバトーゼはいつかのように水面を歩いて、彼女に近づいた。

「起きろ、チルノ」

「ん……………うー、うー……………う？」

眠たげに目尻をこすって、チルノは身体を起こす。

そして数秒間、ヴァルバトーゼの方をじっと見つめると——飛び上がった。

「う、わわわ!! 敵か! ついにあたいを始末しようとするいんぼーが! ……つて、あれ。ヴァルバトーゼ?」

「うむ。よくわかったな」

こうなつてからは、一見でそうとわかる相手は少なかったのだが。

幼子のほうが相手の本質を見抜きやすい、ということなのだろう。とはいえ彼女の年齢が人間のそれと同じはずもないが。

「ふふん。そんなんであたいをだまそうなんて百万年早い!」

「フ、そうか。それは失礼したな」

「……でもヴァルバトーゼ、今日はずいぶん早いね。なんかいつもと違うし」

「うむ。まあ色々合つてな」

チカラを取り戻したこと。故郷へ帰ることができるようになったこと。

それはつまり、チルノとのスペルカード戦が出来なくなることと同じ意味を持つ。

それを口にするには簡単だが、彼は言葉にしなかった。

話してしまえば彼女はヴァルバトーゼに氣遣つて敗北を選択するかもしれない。あるいは翌日以降のスペルカード戦の約束をしないかもしれない。

だから今はまだ、語らない。

己が勝利したその時のみ、彼はこのことを話して帰るのだと決めていた。

「ふーん。ま、いつか。じゃあ勝負だ！」

「フ。今日の俺は、一味違うぞ。そろそろ勝たせてもらおうか！」
こうして。

「ふふん。勝てるものなら勝ってみな！ このチルノから！ さいきよーの座を！
奪ってみせろっ！」

「よかろう！ ならば活目して見よ！ このヴァルバトーゼの弾幕をッ！」
ヴァルバトーゼの、幻想郷最後の闘いが幕を開けた。

文々。新聞

星月覆う鉄の箱舟

○月○日、突如空に現れた巨大な箱舟が幻想郷の月夜に暗い影を落としたのは、本記事を読んでいる方々もご存知のことだろう。

この奇怪な異変には、巫女だけではなく多くの妖怪（妖獣、魔法使い、幽霊——さらには名高い妖怪に吸血鬼、鬼までも）も動いた。本紙もまた真実究明のためにその場へと向かったのだが、そこには驚くべき光景が存在したのである。

その場にいたのは、魚の頭を模した珍妙な被り物をした、艦長と自称するたった一人の男（妖怪）であつた。そしてその艦長に、その場に現れた全ての妖怪が敗北していたのである（それも純粋な力比べで）。

となれば彼は恐るべき強さの妖怪であり、目的如何では幻想郷の危機すら考えられるものであつた。

無論まだ異変解決の専門家である博麗の巫女は敗北してはいなかつたが、外部の妖怪相手にはスペルカードルールでの決着を望めないため、事態が容易に終結するとは思えなかつた。

しかしそこで思わぬ方向に事態が進展する。巫女の姿を認めた艦長は、なんとスペルカードルールでの勝負を提案したのだ。

結果は空を見れば分かる通り、巫女の勝利で幕を閉じた（ちなみに完封であった）。
そして敗北した艦長は、被り物を脱ぐと改めて名乗ったのである。

魔界のプリニー教育係、ヴァルバトーゼと――。